井上頼圀先生校閲

小森甚作
上地信成
合編

女流文學史 全

東京
東洋社

自序

我國文學の中にても、取りわきて和歌和文こそ、女子には適すべきものなれ。女子はよろづ優美なるを尚びて、輕慄浮華なるは好ましからず。されば容裝も華麗ならんよりは、優美なるべし。言行も輕薄ならむよりは、優美なるべし。而して紅閨の裡、翠帳の下、花を偲び、月に唧ち、螢に思ひを焦がし、雪を松が枝にめづるにも、また優美なる思想を選ばむことを要す。和歌和文は、これ優美なる思想を顯はさむには、最も適するものなれば、女子たるもの、内治の餘暇には、これを弄ばむ事こそ望ましけれ。

抑女子の文學は、男子の文學と異なり、勇壯活潑なるを避け、溫順優雅なるべきは、其性質自らこれを示せり。彼の日月の明なる、一は陽にして、その光赫烈たり、一は陰にして、その光鮮妍愛すべし。

而して、日月並び運行して萬物を化育し、天地間自然の美を呈す。文學に於ても亦然り。男子は日光の如く、强かるべく、女子は月光の如く、やさしかるべし。もし、これに違はんか、各その本色にあらず。

眞淵翁、曾て奈良朝を男子の國といひ、平安朝を女子の國といはれけるが、げに雄渾壯大なる奈良時代の文學は男らしく、優美濃艶なる平安朝の文學は女らしくして、明らかにその相違を見るなり。次に鎌倉時代の文學は、武家思想の入りたるがため、勇壯活潑となり。室町時代は、僧侶隱士の手に移りたるがため、悲哀寂寞に傾き、德川時代に至りては、よく和漢文の調和を得たるがため、平易流暢となり、大に俗文學の流行を來せり。いづれも各時代に於て一得一失あれば讀者は宜しくその長所を學ぶべし。これ即

ち文學史を繙くの必要なる所以なり。然るに、世にいまだ女子文學の歴史を叙したる書なし。豈遺憾ならずや。著者はこゝに鑒みる所ありて、此編を爲す。素より匆卒の際になりしものなれば、誤謬なきを保せず。將來識者の指示を得て、益完全ならしめんことを切望す。

萩の雫を硯に受けて

月影清き窓の下に

明治三十四年九月中澣　著　者　識

凡例

一本書は我國女流社會の文學を叙して、なるべく作例の範圍を廣め、其材料豊富ならしめたり。これ讀者をして、各時代文體の變遷を知らしめんとの素志より、その煩を顧みず、かくは編纂したるものなり。

一本書中上古時代に於て、作者の傳記と作例とを別ちたるは、古事記萬葉集中に詠歌の僅に一二首を認むるのみにて、傳の如きも極めて簡單なれば、和歌など一所に記して、互にその優劣を比較する便宜を與へたるなり。

一本書は匆々の際になりし者なれば文字の誤植及び脱落せる所なきを保せず。そは再版の折を待ちて改むべし。

女流文學史上卷目次

女流文學史下卷目次

第三期　武家時代の上

第三章　作者傳及び作例

第四期　武家時代の下

女流文學史上卷

井上頼圀先生校閲
小森甚作
上地信成　合編

總論

文學とは西洋の所謂リテラツトールの義にして、其意義甚だ廣く、之が定義を下さんは古來學者の難しとする所なり。故に從來文學を解せし人は、各その見解を異にし、文章そのものを以て文學とするあり、或は文字によりて言語を表出せるものを凡て文學なりと説くあり、或は人意を智識感情の二つに別ち、智識によりて表はるゝものを科學とし、感情によりて表はるゝものを文學として説けるあり、又文學は一の技術品にして、繪畫、彫刻などゝ同性質の物なりと云へるありて、未だ一定の定義を下したる人あるを聞かず。

要するに、文學は强て定義を附せずして可ならん。然れども、余輩は今本書を編するに當り、假に左の定義を下せり。即ち文學とは、各自の思想感情を文字に表出し、人々に快樂を與ふるを以て目的とするものにして、散文、韻文の二つより成れるものなり。

文學は最もよく、人の思想感情に伴ふものなれば、其時代の政治、宗敎或は人情、風俗の變遷により

て、常に動搖せらるゝものなり。されば之によりて、各時代に於ける當時の人情は更なり、風俗、嗜好等に至るまで、其蹤蹟を探り、或は人智の盛衰を悟り、而して自己の思想感情をして、優美高尙ならしむる等、皆文學の効なり。

今左の四期に分ちて、我國に於ける文學の大勢を略記せん。

上古　既に記せしが如く、文學は各自の思想感情の文字に現はれたるものなりとすれば、其始め不文時代に於ては、文學なかりしかと云ふに然らず。文字こそなけれ、上古に於て吟誦せし和歌の類は、もとよりこれ文學の實質たりし也。然れども、上古は頗る文學幼稚の時代にして、只古事記、日本紀等に載せたる和歌によりて、其痕跡を認むるのみなりしが、奈良朝に至りては、文字の使用もやゝ自由になり、加ふるに片假名の發明などありければ、一層自己の思想を記す事に便を得、玆に始めて散文なるもの現はれたり。又韻文に至りては、萬葉集の撰さへありし程なれば、歌人數多輩出し、盛に之を研究したるより、遂に韻文上に於て、一種萬葉調なるものを構成したり。而して此時代には、漢學及び佛教の流行すると共に、漸く支那思想、印度思想の國内に傳播せし爲め、和歌の發達上少しく妨害せられし傾向ありたり。然れども、平安朝の如き急劇なる變化はなくして、尙ほ古代淳樸の風を存したり。

中古　平安時代に至りては、散文最も隆盛を極めし時代にして、上下三千載嘗て其比を見ざるなり。

抑當時は、藤原氏の豪奢、佛敎の迷信等盛に人心を支配したりしかば、事皆優麗艶弱に流れしが、却て女子の性情にや適したりけむ、女流作者盛に輩出して、堂々たる大宮人を凌駕せり。後世國文學の至寶なりとて賞讃せらるゝ、源氏物語を初め枕草子などの書は、皆女子の手になれり。また當時代に至りては、散文の隆盛なるに伴ひて、奈良朝後歌界の寂寞たらんとせしを、幸に和泉式部、赤染衛門以下の女流によりて、其光輝を放つに至れり。要するに、當時の文學は、女流の專有物なりし、といふも敢て過言にあらざるなり。

近古　鎌倉時代となりては、爾來大宮人に排斥せられたりし武家勃興して、封建の風を構成し、武人の天下を支配するに至りしより、王政頓に廢頽し、爲めに文學は一時暗黑時代となりたり。然れども、細かに觀察を下す時は、殿上人の手を離れて、隱士の間に潜めるもの〻如く、且當時は佛敎を崇拜するもの多かりしかば、其影響として文學は一に僧侶の手に歸し、平安の艶麗優雅なる散文體は一變して、厭世的文學となり、又一方には漢文脈を有する戰記類など顯はれ、所謂鎌倉文學なるもの起りしより、散文韻文共に全く女子の手をはなれたり。故に當時に於て、阿佛尼の作を除くの外は、散文として見るべきものなし。室町時代に至りては、矢叫びの聲、弓弦の音の絶間なく、人々日々干戈を事として、文學を講究するの暇なく、爲めにさしも盛なりし鎌倉文學は、退步して宮廷の一部及び五山の僧徒間に於て、漸く其命脈を保持せしのみなりき。倘此時代の末期に至り、僧侶の手によりて、

謠曲、連歌など現はれたれども、女流の作者としては一人も出でざりき。

近世　江戸時代は、始め漢學盛に流行して、國文學は微々として振はざりき。中頃に至りて、荷田春滿、加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤などの國學者續々現はれ、一時埋伏せし平安文學の復興を計りしかば、其門下に秀才雲の如く起り、或は古代の風俗を討査し、或は古文辭の研究に力を盡せり。加之、各藩又競ひて斯學を奬勵せしかば、元祿以來の國文學は大に見るべきものあり。されども當時代は、平安時代と異り、研究時代なれば、其著書には、源氏物語枕草子に次ぐべきもの出でざりしこそいと遺憾なれ。されど女流の作者はなか〳〵に多し。中にも麗女の文章、蓮月の和歌、千代の俳句などは、よく當時代を、代表すべきものなり。尚小說の現はれしが如きは、一層文學の進步したるなり。

以上各時代に於ける文學は、其時代を形成し、又その時代の人物を養成したるが故に、文學史に就きて各時代の人物を觀察する事の必要なるは論を俟たず。

要するに、我邦の文學は所謂樂天主義にして、希臘の天地開豁にして、天氣晴朗、山水美麗なるを以て、國人その天地を愛するが如く、我國人も亦、仰では芙蓉峰の美觀を賞し俯しては琵琶湖の清徹に掬び、或は花鳥に謠ひ、風月を親しむ等、天地自然の美を愛するに於ては、各國異ならざるなり。されば彼の街塵を避けて山中に美觀を貪らんとし、或は罪なくして配所の月を見んとする類は、皆是自然を樂しむものにして、全く厭世主義にはあらざるなり。

かくの如くにして、我國の文學は、上下三千年來の人心を支配したりき。今之を神武帝以降、左の四期に分ちて、古來女性の思想感情が、散文、韻文上に現はれて、如何に變化發達し來れるかを記さん。

第一期　王朝時代の上（上古より奈良朝迄）
第二期　王朝時代の下（平安時代）
第三期　武家時代の上（鎌倉室町時代）
第四期　武家時代の下（徳川時代）

第一期（自紀元元年 至紀元千四百四十四年）

王朝時代の上

總論

我國上古文學の實ありしと雖も、いまだ之を表はすの具なかりき。されば、言語を以て相互に自己の思想を通じたるのみにして、今の世にありて、文章を綴りて各自の意思を述ぶるが如き便利は無かりしなり。故に之を不文時代と名づく。かくの如き、上古の文章は傳はらざれども、和歌は口々に誦歌して、今日に傳はるもの多し。さて此和歌は、即ち不文時代に於ける一の文學にして、若し之を除かんか、上古の眞正なる文學は、他に求むること能はざるべし。

かくの如く、我國の文學は、その始め韻文より發達したるものにして、古事記神代の卷を見ても、素盞嗚尊の御歌を始めとして、八千矛神、沼河姫、須世理比賣など、何れも御歌のみ傳はれり。然るに神武帝以後に至りては、歷代の天皇、后妃その他貴紳の作など多く見ゆ。降て奈良朝に及びては、文字の使用自由になりければ、和歌に志すもの次第に多くなり行き、遂に萬葉集の如き歌集さへあらはれて、益々韻文學の隆盛を來せり。

散文の始めて現はれしは、奈良朝にして、即ち古事記、祝詞、宣命及び風土記等是なり。然れども是等は、皆韻文と其命脉を共にし、互に相混和したるものなれば、平安朝の如く純然たる散文にてはあらざりき。而して當時の散文たるや、概ね公卿の手になりしものにして、女流の徒に至りては少しもこれにあづからざりしもの丶如し。されば當時代に於ては、散文に就きては云ふ所少なく、韻文の方は記す所多かるべし。

第一章　文字の發達

我邦の神代文字の有無に就ては、古來學者間に議論多くして、本居翁は無とし、平田翁は有とし、其他甲論、乙駁、其何れなるかは今猶詳かならず。

然らば、始めて文字の表はれしは、何れの時代なりしかと云ふに、崇神帝の朝、即ち紀元六百年代に漢字始めて渡來したるに起因せり。然れども當時は、只國內一部分にのみ通用して、一般には及ばざりしなり。其後應神帝の朝、百濟より阿知伎、王仁、の來朝して、以來漢學は漸次國內に廣まるに至れり。此兩氏は河內、大和、二ヶ國を賜ひ、世々此國に住して、文書を掌る、これを東西史部と云ふ。降て履仲帝の朝には、詔して諸國に史部を置き、雄畧帝の朝には、東西の史部に命じて、出納を掛錄せしめ、欽明帝の朝には、船賦を記さしめ給ひしが如きは、大に漢字奬勵の源となり、遂には漢

字の用法も進歩し、漸次之を使用して我國語を寫すに至れり。然れども尚不便の事もありしにや、天武帝の時に至り、境部石積(さかひべのいしづみ)に命じて、我國に適用すべき新字四十四卷を作らしめ給ふ。此後にも屢々作るものありき。然れども、漸次漢學の進歩するに從ひ、其用法も自由になり、歌謠の如きも、之によりて寫し得るに至り、遂に古事記、日本紀、萬葉集、などの大著述あらはれたり。こは實に、我國文學に長足の進歩を與へし原因にして、假名文學の發生又これに起因せり。

奈良朝に至りて、片假名なるものあらはれたり。此に就ては、種々說ありといへども、要するに、漢字の複雜を避けむが爲めに、例へば僧侶等が菩薩を丼と書き、菩提を卉など書きしが如く、世人其便を計り、いつしか畧字を作り出だしたるものならん。

此名義に就ては、二說あり。一は漢字の傍に附する假名とし、一は漢字の傍を取りし故なりとせり。思ふに、既に先輩も云へるが如く此假名は、佛徒間に早く發達せしものならん。

世に此作者を、吉備眞備とすれども、こはさにあらず、前述の如く、佛徒間に誰れ作るとなく、簡を計りて使用せしが、遂に一種の字體を構成したるならん。明魏の作なる反切義解に、吉備公の作とせるも、恐らくは作にはあらで、散在せる假名を五十音に排列せしならん。黑川博士は、片假名は平假名製作と同時代なり、との說なれども、余は暫く從來の說に從ひ此處に記す。

第二章　散文學

散文は文字によりて、初めて其形體をあらはすものなれば、我邦上古不文時代には、散文として見るべきものなし。

散文の初めて發生せしは、漢字傳來後にして、やゝ光輝を放つに至りしは、千三百五十年代なり。散文の骨髓たる祝詞は、漢字傳來後三百八十年後にあらはれ、古事記は、四百二十七年の後にあらはる。其他宣命、風土記、皆四百年代にあらはれ、韻文の發達に伴ひて、頗る發達したり。されども、前述の如く、當時代の散文は未だ韻文めきて、平安時代の如く純然たるものならず。今之を左の二節に分類して、畧記せん。

第一節　古事記及び日本紀

古事記　三巻　古事記は、我が散文界の祖にして、和銅六年五月成れり。初め漢學渡來し、韓人歸化する者多きに至り、古傳説の混亂を恐れ、天武帝、舍人稗田阿禮をして、舊辭即本辭を暗誦せしめ、更に材料を集めて、國史を編せむの御心なりしも、中途にして崩じ給ひければ、元明天皇其志をつぎ給ひ、太安麻呂をして、阿禮の諳誦せる舊辭を筆記せしめらる。和銅六年三巻の書成る、これ今に傳ふる古事記なり。此書、天地開闢より筆を起し、推古帝にて終を結べり。其文章は漢學の音訓を

使用して、言辭を筆記したるものにて、其體裁に至ては、日本紀の如く、華麗なる文字を使用せずと雖も、純粹なる國語を寫したるものなれば、我邦上古の言辭、風俗、を知るには、實に唯一の寶典なり。本書を研究せんには、（神代は古史傳を見るべし）

古事記傳　四十八冊　本居宣長著

古事記標註　五冊　敷田年治著

日本紀　三十卷　古事記修撰後八年、元明帝の養老四年成る。本書は古事記の撰定と其趣を異にし、歷史の爲めに編みたるものなれば、更に廣く材料を集め、事柄を詳細に記さんとしたるより、往々世の俗說をも取りたるなり。天皇これを、舍人親王、及び太安萬呂、紀淸人、に勅して、撰ばしめ給ふ。今世に存する日本書紀三十卷これなり。本書は專ら漢書に準じて、編年體に書紀し、往々華麗なる漢文を使用して、修飾を施したれど、歌謠に至りては、純粹の國語を以て寫せり。本書記する處、上は開闢より下は持統帝に至る迄、細大漏らす處なし。本書の註解としては、

日本紀通解　三十五冊　谷川士淸著

書紀集解　十卷　河村秀根著

第二節　祝詞宣命及び風土記

右三種は當表題の下に必要なけれど、これ又當時、散文の首位を占めしものなれば其概畧を記さん。

一、祝詞　其文字こそ漢字なれ、文章は純然たる國語を以て、寫したるものにして、殊に優美嚴肅なる語を用ゐ、又聲調の佳ならんを欲し、對句を設け、句節を正し、神明も感賞し給はんばかりに作れり。此起原に就ては不詳なれども、加茂眞淵翁は、出雲國造神賀壽詞（いづものくにつこかむほぎのことば）は、舒明帝の御代に、大祓詞（おほはらひのことば）は、天智天武帝の御代に作られたり云々。本居宣長翁は此説に從はずして、大祓、大殿（おほとの）、御門祭（みかどまつり）などの詞は、既に神武帝の朝にありたり云々。余按ずるに、本居翁の言は云ひ足らざれども信に近きが如し。古語拾遺に中臣祓詞は、神武天皇の時、天種子命が作られしとあり。又大殿祭は、延喜式にありて時代は詳ならざるも、いと古き者なるべし。平田篤胤翁も本居翁と殆んど同説なり。

祝詞考　三冊　加茂眞淵著

二、宣命　とは國語を以て作れる、國風の詔にして、名稱は王命を傳宣するとの謂にして、皇室の典禮、祭祀、叙任、等に關する詔に用ふ。これに對して事、國家に關する事件は漢文に書し、之を詔勅と云ふ。宣命は高橋氏文に見えたるが最も古く、續日本紀中にあるもの之に次ぐ。其註釋書は、

歴朝詔詞解　六冊　本居宣長著

三、風土記　地理書なり。初め和銅六年五月、元明帝五畿七道に勅して、土地の名稱、及び風土、産物、古傳説を録し奉らしめ給ふ。されど其中には、奉らざりしもあらん。又中途にして散逸せしもあ

らん。今傳はるは、常陸、播磨、出雲、豐後、肥前、等にして、常陸出雲の外は皆古書に引用せられて存するのみ。全文を見る能はざるは遺憾の極なり。

標注古風土記　一冊　栗田寛著
古風土記逸文　二冊　同

第二章　韻文學

抑も詩歌は、折にふれ物に感じて、己れが思想を云ひあらはしたるものなれば、聽者をして同感を起さしめざる可らず。古人の、歌謠は言語の音樂なりと許せしもことわりなり。當時の和歌は實に言語の音調の佳なるを尙びて、後世の如く、一定の規矩を設けて製作したるものとは、大に其趣を異にして、句毎に天眞爛熳たる情を具へたるは、蓋し後世に見る能はざる處にして、これ和歌の本髓なり。然るに、萬葉集時代に至りては、單に性情をのみ詠ずるに止まらず、一歩思想を進めて、詠天、詠地、寄山、寄海、などの歌を詠出するに至り、古代純樸の風を脫し、漸く詞華を弄ぶに至れり。さればにや、和歌は沖天の勢を以て、京中京外の別なく隆盛を極めしかば、遂に文學史をして、萬葉時代てふ表目を作らしむるに至りぬ。

今之を、歌體、紀記中の歌、及び萬葉集、の三つに別ち、いさゝか詳記せん。

第一節　上古の歌體

上古の歌體は一定せず。一句、三言、四言、六言、八言、九言、十言、十一言、の多きさへあり。句數又一定せず。要するに當時の和歌は、多く男女の愛情を主として、詠出したるものなれば、之をして巧妙ならしめむとせば、必ずや自然物に托して、譬喩し、或は自然物を借りて、之を語の修飾に用ゐざる可らず。さなくば、和歌は決して優艶なるものにあらず。之れ即ち自然なり。後世上古の歌なる二言三言を合し、或は四言三言を合して、一句と成し、以て三十一言に制限したるは、やゝ人工的に失し、大に歌たるの意にもとりしならん。

記紀に載せたる和歌は、必ずしも奈良時代にあらはれて、萬葉集なる和歌の、根底となりしや疑ひなし。そは萬葉集の歌に枕辭を用ゐ、或は句中に同父音を重用し、或は對句を使用せるなど、能く注目せば其痕跡數多殘れり。尙委しく當時の歌體を研究せんと欲せば、日本紀歌解、稜威言別などによるべし。

萬葉集時代に至りては、漢詩の流行に伴ひ、其歌體にも影響して、風調內容共に變化し、句數もほゞ一定して、五七調となり、同時に其內容富贍となり、事蹟によりて歌を傳へし、記紀時代進化して、當時は歌によりて事蹟を傳ふるに至り、後世人爲的和歌の根源を創始せり。

第二節　記紀の歌

前述の如く我邦は、上古より非常に韻文發達したれば、詠歌の如きも、神代より傳はれるもの少なからず。神武帝以降に至りては、甚だ盛にして、彼の帝の歌謠を作りて、士氣を鼓舞し給ひし以來、日本武尊、應神、仁德、繼體、雄略の諸帝を始めとして、伊須計依姫、神功皇后、磐之媛、八田皇女、黑媛、衣通姬、等の女流の歌、古事記、日本紀二書によりて傳はれり。

兩書載する處の歌二百三十四首、（古事記百七首 日本紀百二十七首）これが註解をなしたるものは

稜威の言別　十一冊　　橘守部著

日本紀歌の解　三冊　　荒木田久老著

第三節　萬葉集

上古の尤も純粹なる韻文學として、見る可きものは萬葉集なり。此集の作者に就ては、古來其說一定せず、仙覺の萬葉抄に、孝謙天皇の御時、橘諸兄勅を奉じて撰びしも、中途にして薨ぜしかば、其後大伴家持之を增訂して編成したるなりと云ふは、一般の說なり。釋契冲は、此集勅撰にあらず、大伴家持若年より、種々の歌集家集中より拔萃し、天平寶字三年頃迄は分類したりしも、其後は分類などもせず、只書き置きたるまゝ、今日に傳はりしならんといへるは、信ずべきなれども、やゝ時代の相違などもあれば、此說もいかゞあらん。要するに、諸兄公の集め置かれしを基として、家持卿受けつぎて撰集せられしものならん。此集勅撰にあらざる由は、體裁の不完全なると、同一の歌、重出せる

こと、巻末は家持の家集の如きとにても明かなり。尙委しくは契沖の代匠記、安藤爲章の年山打聞に論ぜり。

歌數は、種々說あれ共、今本には四千五百首ばかりなり。こを雜歌、相聞、四季雜歌、挽歌、譬喩歌、四季、相聞、の六種二十巻となす。集中仁德天皇の后の歌四種、雄略帝の歌一首を除くの外は、舒明天皇より淳仁天皇に至る、百三十餘年間に輩出せる、五百六十餘人の金聲玉響を採集せり。

歌は皆漢字を借りて、國音を寫せしものにして、或は訓を取り、或は音を取り、音の內にも、正音あり、略音あり、訓の中にも、正訓、音訓、義訓あり、略訓、約訓、戯訓、借訓、等種々の體に使用し、また漢字を玩弄物の如く、使用せる塲合さへあるは、蓋し漢字の使用巧になりし故なるべし。之より進みて音標文字、即假名あらはるゝに至る。片假名平假名は要するに、萬葉假名に萠芽せしなり。

僅々百三十餘年の短期間に於て、五百六十餘人と云ふ大多數の作者を出せり。今之を分類せば、男女合せて、皇族百二十人。群臣三百五十七人。僧尼十三人。その他の女流七十一人。

其隆盛思ふべし。斯てころ奈良の都は、咲く花の匂ふが如く、盛りきほひて、今日九重に匂ひぬるこそ、ことわりなれ。

而して集中、金聲玉音を奏し、芳名を今日に殘せるもの多きが中に、此集を代表すべき女流は、大伴坂

上郎女、額田女王にして、これにつゞくは、鏡女王、石川郎女、同女郎、田村大孃、同少孃、安曇外命婦、粟田郎子、大葉子、依羅娘子、等白眉なり。

本集は源氏物語と相並て世に喧傳せられしものなれば、註釋書として表はれし者實に夥し。余一日此集に關係せる書を檢せしに、大凡四十六種、四百九十餘冊の多きに及べり。余の見ざる尚幾何ぞや。今研究者の爲め一二の註釋書を紹介せん。

萬葉代匠記　二十二冊　契沖阿闍梨著

本書は、水戸光圀公の請によりて書きしものにして、普く諸書を集めて校正し、尚精密に註釋を加へ、總釋二卷に於て、部類の事、文字に正義の二訓ある事、假名遣の事、枕詞の事など委しく論ぜり。近頃木村正辭先生の校訂を經て改刊せるは、活字洋本二十五冊にして甚だ便なり。

萬葉集略解　二十卷　橘千蔭著

萬葉註釋書として、今日尤も流布せるは本書なり。元來千蔭は眞淵翁の門弟なれば、其說萬葉考と大同小異なり。註釋は簡なれども、要を書したり。近年洋本八冊に縮刊したれば大に便なり。

萬葉集古義　百四十一冊　鹿持眞澄著

こはあらゆる萬葉註釋書を參考として、尤も詳細に註釋せるものにして、先づ完全なるものなり。こも又讀者の便を計り活字本卅一冊に縮刊せるものあり。

此他一部の事を書せし
萬葉集玉の小琴　一卷　本居宣長著
萬葉集佳調　二卷　長瀬眞幸著
萬葉集答問書　二卷　本居宣長著
萬葉集作者履歷　五卷　撰者未詳
萬葉集書目提要　一冊　本村正辭著
などは必ず見るべきものなり。

第四章　作者略傳

一、伊須計依姫

又の御名を媛蹈鞴五十鈴姫と云ふ。大物主命の女にして、神武帝の后なり。母を玉櫛媛と云ふ。庚申歲八月神武帝正妃を立てんとして廣く之を求め給ふ。大久米奏するに后の姿色を以てす。帝喜び迎へて妃となし給ふ。即位の元年正月、皇后となし、やがて御腹に、神八井耳命、神沼河命など生れ給ふ。綏靖天皇御即位に及び尊みて皇太后と申す。一說に神八井耳命、神沼河命の外に、彥八井耳命御座しましきとあれど、今姓氏錄によりてこれを省きつ。

二、橘姫

日本武尊の寵姫にして、東夷征伐の時從ひて往く。相模を歴て將に上總に赴かんとする折しも、海上波荒く御船甚だ危かりければ、橘姫曰く、是れ海神の祟なり。妾請ふこれに當らんとて、即ち自ら身を海に投じ給ふ。かくて風やみ波靜まりて安く岸に着くことを得たり。日本武尊上陸の後碓日峠に至り東望して姫を懷ひ歎じて、吾嬬はやとの給へり。是より東國を稱して、吾嬬國と云ふに至れり。

三、神功皇后

仲哀天皇の后なり。名は息長足姫と申奉る。開化帝五世の孫、息長足宿禰王の女にして、母を葛城高顙姫と曰ふ。皇后は性質聰叡容貌美麗自ら神德犯すべからざるものあり。仲哀帝の崩ずるに及び親ら師を率ゐて三韓を征し給ひしこと、普く世人の知る所なり。大和國十市郡磐余の稚櫻宮にましまして天下を治め給ふ。己丑の年崩御あり、狹城盾列池上陵に葬る。後神功皇后と謚す。

四、磐之姫

磐之姫は葛城襲津彦の女なり。仁德天皇二年三月立てゝ皇后となす。詠歌に巧にして其詠、記紀萬葉集に散見せり。二十二年帝八田皇女を納れて妃となさんとし、歌を以て意を皇后に諭し給ふ。皇后歌

を詠じて之を沮み給ふ。三十年九月、后紀州熊野に幸し給ふを機とし、八田姫を宮中に召し給ふ。后之をきゝて大に怒り、宮に還らずして、山背に入り給ふ。天皇屡々使を遣はし、還御を請ひ給ふと雖も聞かず。親しく山背に幸し、皇后を迎へ給ふと雖も、又參見せず。人をして奏せしめて曰く、陛下八田皇女を納れ皇后となす。我れ夫れに副ひて后たらんを欲せずと。帝已むことを得ず還行し給ふ。かくて皇后は幾くもなくして、筒城宮に薨ず。

○和歌（日本紀）

○陛下と贈答の歌に曰く

天皇皇后に乞て曰く

うま人の　たつることだて　うさゆづる　たゆまづかむに　ならべてもがも

皇后答て曰く

衣こそ　二重もよき　さなどこを　ならべん君は　かしこきろかも

天皇又うたひて曰く

おしてる　難波のさきの　ならび濱　ならべんとこそ　そのこはありけめ

皇后答て曰く

夏蟲の　ひむしの衣　二重きて　かくみやたりは　あによくもあらず

○山背河をのぼります時

つぎねふや　山代河を川上り　吾が上れば　河の邊に　生ひたてる
さしぶを　さしぶの樹　しが下に　生ひたてる　はびろ
ゆつまつばき　しが花の　照りいまし　しが葉の　ひろり坐すは
大君ろかも

○那良の山口に到りまして、

つぎねふや　山代川を　みやのぼり　吾がのぼれば　あをによし
奈良をすぎ　をだて　やまとを過ぎ　吾が見がほし　國は
葛城高宮　わぎへのあたり

○短歌三首

○天皇を忍び奉る歌

斯くばかり　戀ひつゝあらば　高山の　岩根しまきて　死なましものを

○同

ありつゝも　君をば待たむ　打なびく　我が黑髮に　霜のおくまでに

○同

秋の田の　穗の上にきらふ　朝かすみ　いづべの方に　我が戀やまむ

五、八田郎女

仁德帝の妃にして、御母は宮主宅姬と申す。初め姬の同母兄、皇太子菟道稚郎子薨ずるに及びて、仁德帝に托し宮に納れしむ。帝の二十二年これを納れて、太子の志をなさんと欲し、后磐之姬に計り給ひしも皇后懌びず。三十年皇后紀州に行啓あるに乘じ、納れて妃となす。三十五年磐之姬崩ず。三十八年八田郎女を立てゝ皇后となす。帝皇后に子なきを以て侍臣物部大別連に詔して、御子代として八田部を定め給ふ。

六、推古天皇

天皇御名は額田部皇女と申し、炊屋姬天皇と稱す。欽明帝の皇女、御年十八にして敏達帝の皇后に立ち給ふ。三十四歲にして、天皇崩じ給ひければ、馬子等の勸めによりて、皇后踐祚し給ひ、大和高知なる、小墾田宮にて天下を治め給ふ。帝、廐戶皇子を立てゝ太子となし、萬機を攝せしむ。馬子大臣たり。天下を治め給ふ事三十六年、御年七十にて崩じ給ふ。越智の陵に葬る。

七、衣通姫

衣通郎女は、稚野毛二派皇子の女にして、允恭天皇の皇后、忍坂大中姫皇后の妹なり。名は弟姫といふ。姿容世に並びなく美はしく、光艶衣を徹するばかりなりければ、人名づけて衣通姫とぞいひける。允恭帝その美を聞き、使を遣して召し給ふ。時に母と共に、近江國坂田に在り。使の人七度までも來れど、いまだ參らざりしかば、更に舍人中臣烏賊津に勅して、強ひて携へ來らしめ給ふ。

さてその容易に召に應ぜざりしは故あるなり。即ち衣通郎女は皇后の妹なりければ、詔は畏けれど、皇后の心を傷ましめんことを恐れてなり。

烏賊津勅を奉じて、衣通姫の家に至るや、天皇より必ず汝を迎へ來れとの仰せなり。若し然らずんば、我は歸りて罪を得ん。さあらんよりは、寧、茲にて死すべしとて、七日の間庭に伏して去らず。食を與ふれども食はず。以てひたすらに姫の意を得んことを望めるのみ。

烏賊津初め朝廷を出づるとき、ひそかに乾飯を裹み持ち行き、これによりて其命を繫ぎ居たりとか。こゝに於いて衣通姫、心に思ふやう、既に天皇の詔に從はざるは罪輕からず。なほ忠臣烏賊津を殺すは、わが罪を重ぬるなりと、姫は遂に志を枉げて都に上ることとはなりぬ。

柳姿の若櫻、色に榮えある桃の花、衣袖を飜へす風の匂ひゆかしく、姫を携へて都に上る道すがら、春日の社に至り、櫟井のあたりに旅の疲れを癒やさんとて、筵を設け、姫は烏賊津を勞ひもてなす心

いと懇なり。かくてこの日直に京師に入る。
烏賊津、姫をしてまづ藤原宮に居らしめ、此由を天皇に奏す。天皇大に喜び特に之を賞し給ふ。姫は皇后を憚りて敢て宮に入れ給はず。翌年二月、帝潜に藤原に御幸しこれを窺ひ給ふ時、姫はそれとは知らずして、天皇を慕ひけるに、偶〻蜘蛛の軒端より下るを見て、歌ひて曰く、

吾がせこが來べき宵なりさゝがにの
くものふるまひかねてしるしも

天皇これを聞き、大に感賞し給ひて、

さゝらがた錦の紐を解きさけて
あまたは寢ずと唯一夜のみ

と歌ひ給ふ。

皇后之を聞き大に怨み給ひければ、姫は帝に向ひて、宮を離れ遠居せんことを請ふ。依て帝更に宮を河內國茅渟の里に作り、姫をしてこゝに移し居らしめ、屢遊獵に託して御幸し給ひしとか。
紀州名草郡和歌浦に、玉津島明神あり、これ衣通姫を祀れるなり。世に國詩の神となして、尊崇す。
傳へ云ふ、

夜や寒き衣や薄き片そぎの

　　行あひの隙に霜やおくらむ

の歌はこの神の詠なりと。

允恭帝七十八年正月十四日に崩御あり、其後衣通姫も身まかりしかど、年月日詳ならず。

八　大伴坂上郎女（おほとものさかのうへのいらつめ）

萬葉集中、女流作者にして傑出せるは、如何なる人なるか。曰はく、坂上郎女、額田女王の二人なり。げにこの二人こそ奈良朝時代に於ける女性詠吟家の代表者なりけれ。

坂上郎女は、大納言大伴安麿の二女にして、母の石川命婦と共に、大和の坂上の里に居たり。故に坂上郎女とは呼ばはれたるなり。

始め穗積皇子に召されて寵を受けしが、皇子薨去の後は、藤原麿にとつぎ給へり。麿は不幸にして短命なりしかば、更に大伴宿奈麿に嫁ぎて、田村大孃、坂上大孃の二人を生む。後宿奈麿とは離縁となりしかば、大伴駿河麿に通じけるが、後坂上少娘を駿河麿に嫁して自らは絶念したりとか。

神龜五年、兄旅人に從ひて筑紫に下り、天平二年、京に歸る。生死年月は知る事能はざれども、察するに、天平十一年以後ならん。

○和歌　（萬葉集）

○春の歌

○柳歌二首

吾せこがみらむさほぢの青柳を手折てだにも見んよしもがな

打あぐる佐保の河原の青柳は今ははるべとなりにけるかも

○

世の常に聞はくるしき呼子鳥聲なつかしき時にはなりぬ

○

風まじり雪は降るとも實にならぬ我家の梅を花に散すな

○夏の歌

霍公鳥歌

何しかもこゝばく戀ふる郭公鳴聲きけばこひこそまされ

○思₂筑紫大城山₁歌

今もかも大城の山に郭公鳴とよむらんわれなけれども

○

郭公いたくな鳴きそ一人居ていのねられぬに聞けば苦しも

○

原の野のしげみに咲ける姫ゆりのしらえぬ戀は苦しきものを

○

五月の花橘を君がため玉にこそぬけおちまくをしみ

○秋の歌

○晩芽子歌

咲花もうつろふは憂しおくてなる長き心になほしかずけり

○跡見田庄作歌二首

よなばりの猪養の山に伏鹿の妻呼ぶ聲をきくがともしさ

妹が目を跡見の丘邊の秋萩はこの月頃はちりこすなゆめ

○竹田庄作歌二首

こもりくの初瀬の山は色づきぬしぐれの雨は降にけらしも

志かとあらぬいほしろ小田を刈り亂り田ぶせに居れば都戀しも

○秋稼蘰贈大伴家持歌

我が蒔ける早田の穗だち造りたるかづらぞ見つゝしぬばせ我が背

○冬の歌

○雪歌

沫雪のこの頃つぎてかく降れば梅の初花散りか過ぎなん

松影の淺茅の上の白雪をけたずて置かんことはかもなき

○

盃に梅の花うけて思ふどち飮ての後は散りぬともよし

○雜歌

○宴二親族一之日吟歌

山守の有けるしらに其山にしめ結ひたてゝゆひのはぢしつ

○海路見二濱貝一作歌

吾せこに戀ふれば苦し暇あらば拾ひて行かん戀忘れ貝

○月歌

烏羽玉の夜霧の立ちておほゝしく照れる月夜の見れば悲しも

○詠二元興寺里一

古鄕の飛鳥はあれど靑によし奈良の明日香を見らくしよしも

○相　聞

○

千鳥なく佐保の川戸の瀨を廣み打橋渡すながくと思へば

○

黑髮に白髮まじり老ゆるまでかゝる戀には未だあはなくに

○

山菅の實ならぬ事を我によせ云はれし君は誰とかぬらん

○

出でゝいなん時しはあらんを殊更に妻戀しつゝ立ていぬべしや

○

心には忘るゝひまなく思へども人の事こそ繁き君にあれ

久方の天の露霜置にけり家なる人も待ち戀ひぬらむ

○長　歌

○祭神歌

久堅の天の原より　あれ來たる神の命　奧山の榊が枝に　しらがつく木綿とりつけて　いはひべを祝ひほりすゑ　竹玉をしゞにぬきたり　しゝじもの膝折伏せ　手弱女のおすひとりかけ　かくだにも我

は戀ひなむ　君にあはじかも

反歌

木綿たゝみ手に取持てかくだにも吾は戀なん君に逢はじかも

○怨恨歌

押照る難波の菅の　ねもごろに君がきこして　年深く長くし云へば　まそ鏡とぎし心を　ゆるしてし其日の君は　涙のむた靡く玉藻の　かにかくに心は持たず　大船のたのめる時に　千早振神やさけゝん　空蟬の人かさふらん　通はせる君も來まさず　玉章の使も見えず　なりぬればいたもすべなみ烏羽玉の夜はすがらに　赤らひく　日も暮るゝまで　嘆けどもしるしをなみ　思へどもたづきをしらに　手弱女と　云はくもしるく　た童の音のみ泣きつゝ　たもとほり君が使を　待ちやかねてん

反歌

初めより長く云ひつゝ賴めずばかゝる思ひにあはまし物か

九、額田王(ぬかたの)

天智天皇の御代にて、女流中、最も歌道に名高かりしは、鏡女王の妹額田王なりき。王は、容貌絕美にして、詞藻優艷、當時、鏡皇女、大伴坂上郎女等と互に歌才を競へり。姉鏡女王も

亦歌をよくせしまゝ、後世の人、兩女を同人とするもあれど、こは全く誤なり。そは萬葉集の二巻、或は四巻を見ば姉妹共に天智帝に仕へしことは詳に知らる。また集中に、額田王は、天武帝とも親めりとあり。思ふに、品行の上の缺點は免れざるものの如し。されど文學上に於て、價値あるものを、玆に掲げずして、止むべけんや。その歌は、いづれとなく、いさめでたし。

○和歌（万葉集）

○思近江天皇歌

君待と吾が戀居れば我宿のすだれ動かし秋の風ふく

○

秋の野のみ草刈りふき宿れりし菟道の都のかりほしも見ゆ

○

にぎたづに船のりせんと月待てば汐もかなひぬ今はこぎこな

○天皇遊獵蒲生野時歌

あかねさす紫野ゆきしめ野行き野守は見ずや君が袖ふる

○弓削皇子に答ふる歌

古に戀ふらむ鳥は郭公けだしやなきしわが戀ふるごと

○長　歌

○天皇詔二内大臣藤原朝臣一競二憐春山万花之艶秋山千葉之彩一時以レ歌判レ之歌

冬ごもり春去來れば　鳴かざりし鳥も來なきぬ　咲かざりし花も咲けれど　山をしみ入りても取らず　草深み手打りても見ず　秋山の木の葉を見ては　紅葉をば取りてぞ忍ぶ　青きをば置てぞなげく　そこし恨めし秋山われは

○從二山科御陵一退散之時作歌

やすみしゝ我が大君　かしこきや御陵つかふる　山科の鏡の山に　夜はも夜のあくるまで　晝はも日のくるゝまで　ねのみを　泣きつゝありてや　百敷の大宮人は　行き別れなん

○下二近江國一時作歌

うま酒三輪の山　青によし奈良の山の　山の間にいかくるまで　道のくまいつもるまでに　つばらにも見つゝ行かむを　しば〳〵も見さけむ山を　心なく雲のかくさふべしや

十、鏡王女（かゞみのわうによ）

鏡王女は、奈良朝時代に於ける、女性歌人の一人にして、その歌多く萬葉集に載せたり。書紀などによれば、鏡王の女なりとあれども、これは誤りにして、その實は大和國平群郡大昌嶺の近

傍に、住み給ひけるが、後天武帝に召されて、十市皇女を生み奉れり。ある時天智帝の、齊明天皇に從ひて伊豫の國に御幸したまふ事あり。この時王女も從ひ給ひて、ひそかに天智天皇に通じ給ひしが、帝の崩じ給ふに及びて、再び天武帝と配し給ふ。白鳳十二年、鏡王女病み給ふ。七月天皇親しくその家に御幸ありて、病を訪ひ給ひしが、後數日ならずして遂に浮世の嵐に誘はれ、はかなくも世を去りましぬ。

○和。歌。

○秋相聞

風をだに戀ふるはともし風をだにこんとしまさばいかゞ嘆かん

○奉天皇歌

秋山の木の下がくり行水の吾こそまさめ御思ひよりは

○

神なびのいはせの森の呼子鳥いたくな鳴そ我戀ひまさる

○贈內大臣歌

玉匣（たまくしげ）おほふをやすみあけていなば君が名はあれど我が名しをしも

十一、陸奥（むつ）の采女（うねめ）

葛城王、勅使となりて陸奥の國に下り給へる時、國司の所爲甚だ疎畧なりとて、腹立ちし給ひ、その怒、顔色にあらはれて、國司の饗應申し上ぐるをも、あへてとりあひ給はねば、興さめて、困じ果てたる折節、此所に、采女とて、いとみやびにやさしき女ありけるが、盃を捧げ侍りて、

淺香山かげさへみゆる山の井の
　あさき心はわがおもはなくに

と詠み出でける。

國司、おろそかに思ひまゐらする事はあらねど、いかに御機嫌に違ひ侍るらんといへる心を申しければ、王の御氣色ために柔ぎて、酒宴したのしみ給へりと、萬葉に見ゆ。これを以て和歌の才に富めることを推知すべきなり。この淺香山の歌、かゝる徳あるゆゑに、かの王仁が、仁徳天皇を歌ひ奉りたり、と傳ふる、

難波津に咲くやこの花冬ごもり
　今を春べと咲くやこの花

とよめる歌と共に、難波津、淺香山とて、歌の父母として、昔は手習ふ人の始にもしたりきとぞ。

十二、笠女郎（かさのいらつめ）

笠女郎は、筑紫觀音寺の別當、沙彌滿誓（しやみまんせい）が女なり。筑紫に於て、大伴家持と通じ遂に妾となる。家持京にかへるに及び後を慕ひて上る。和歌に巧にして、萬葉集中に家持と贈答の歌多くのせたり。天平十二年沒す。

十三、粟田娘子（あはたのいらつこ）

性質和歌を好みて、深くその蘊奥を究む。寶字八年、外從五位下を授けられ、寶龜六年、從五位下に叙せらる。詠歌は萬葉集にあるのみならず、その他の諸書にも散見せり。

十四、縣犬養娘子（あがたいぬかひのいらつこ）

葛城王の母なり。和歌をよくせしを以て、世にその名をしられたるなり。養老元年、從四位上を授けられ、三年從三位に累進し、五年正三位に叙せられ、食封資人を賜はる。天平五年薨ず。從一位を贈られたり。性質聰敏にして温雅なり。詞優しくしていやしからず。詠歌は萬葉集第八卷に載せられたり。

十五、丹生女王

女王の御傳は詳かならず。續日本紀によれば、天平の十一年從四位上を授けられ、天平勝寶二年正四位上を授けられし事見ゆるのみ。一書に、雨の神罔象女神なり。大和國吉野郡丹生川上に祀る二十二社の内にして、白鳳四年に鎮座し給ふとぞ。

十六、石川女郎

遊女なり。字名を大名兒といふ。容貌艶麗にして、和歌の才に富めるを以て、その名大に世に知られたり。久米禪師と親しみ、後大津皇子に召されて、内命婦となり、甚だしく寵愛を蒙る。詠歌は多く萬葉集中に入れり。

第五章　女流作例

一、古事記中の歌

○　　　　伊須氣余理比賣

さゐ河よ　雲立ちわたり　畝火山　木の葉さやぎぬ　風吹かむとす

○　　　　同

畝火山　ひるは雲と居　夕されば　風吹かむとぞ　木の葉さやげる

○　　　　橘比賣

さねさし　相模の小野に　もゆる火の　火中に立ちて　とひし君はも

○　　　　美夜受比賣

高光る　日の御子　やすみしゝ　吾が大君　新玉の　年が來ふれば　新玉の　月はきへ行く　うべな〳〵　君待ちがたに　吾がけせる　おすひの裾に　月たゝなむよ

○命のかくりませし時　　　　倭建命の后御子等

なづきの　田の稻がらに　いながらに　はひもとほろふ　ところづら

○白智鳥を追ひて　　　　同

淺茅ぬ原　こしなづむ　空は行かず　足よゆくな

○同　　　　同

海が行けば　腰なづむ　大河原の　植草　海がは　いざよふ

○同　　　　同

濱つ千鳥　濱よは行かず　磯づたふ

○酒　　　　息長帶日賣

此御酒は　我が御酒ならず　くしの神　常世にいます　いは立たす　少名御神の　神ほぎ　ほぎくるほし　とよほぎ　ほぎもとほし　まつりこし　御酒ぞ　あさずをせさゝ

○　黑日賣

大和べに　西吹きあげて　雲ばなれ　そきをりとも　我れ忘れめや

○　同

大和べに　往くはたが夫　こもりづの　したよはへつゝ　往くはたが夫

○仁德天皇に答へ奉る歌　八田若郎女

八田の　ひともと菅は　ひとり居りとも　大君し　よしときこさば　ひとりをりとも

○隼別王の來ませる時　女鳥王

ひばりは　天にかける　高ゆくや　はやぶさわけ　さゝぎとらさね

○雄略天皇の御歌に答へ奉る歌　赤猪子

御室に　つくや玉垣　築きあまし　たにかもよらむ　神の宮人

○同　同

日下えの　入江のはちす　花ばちす　みのさかり人　ともしきろかも

○　三重の采女

まき向の　日代の宮は　朝日の　ひでる宮　夕日の　ひがける宮　たけの根の　根だる宮　木の根の
根ばふ宮　やほによし　いきづきの宮　まきさく　ひの御門　新嘗やに　生ひだてる　百足る　槻
が枝は　ほづゑは　天をおへり　中つ枝は　吾妻をおへり　下づ枝は　鄙をおへり　ほづ枝の　枝の
うら葉は　中つ枝に　落ち觸らばへ　中つ枝の　枝のうら葉は　下つ枝に　落ちふらばへ　しづ枝の
枝のうら葉は　あり衣の　三重の子が　さゝがせる　みづ玉うきに　うきしあぶら　落ちなづさひ
みなこをろ　こをろに　こしも　あやにかしこし　高光る　日の御子　ことのかたりごとも　こをば

○　　　　　　　　若日下王

倭の　この高市に　小高る　いちのつかさ　新嘗屋に　生ひだてる　葉廣　ゆつまつばき　そが葉の
ひろりいまし　其花の　てりいます　高光る　日の御子に　とよみき　たてまつらせ　ことのかた
りごとも　こをば

○　　　　　　　　袁杼姫

やすみしゝ　我か大君の　朝戸には　いより立たし　夕戸には　いよりだゝす　わきづきが　下の枝
にもが　吾夫を

二、日本紀中の歌

○　口持臣の妹

山背の　筒城の宮に　もの申す　我兄を見れば　涙ぐましも

○　圓大臣の妻

おみの子は　たへのはかまを　なゝへをし　庭にたゝして　あよひなだすも

○　影比賣

青によし　ならのはざまに　しゝじもの　みづくべこもり　みなそゝぐ　鮪の稚子を　あさりつな猪の子

○鮪の臣の殺されたる時に追行きて　同

石の上　布留をすぎて　こもまくら　高橋すぎ　物さはに　大宅すぎ　春日の　春日をすぎ　つまごもる　小佐保をすぎ　たまけには　飯さへ盛り　玉もひには　水さへ盛り　泣きそぼち行くも　影比賣あはれ

○　伊企灘妻大葉子

唐國の　きのへに立ちて　大葉子は　ひれふらすも　やまとへむきて

○　繼體帝の妃

こもりくの　初瀬の河ゆ　流れ來る　竹のいくみ竹よ竹　もとゝへをば　琴につくり　末へをば　笛

につくり　吹きなす　みもろが上に　のぼり立ち　我が見せば　つぬざはふ　いはれの池の　みなしたふ魚も　上にでゝなげく　やすみしゝ　わが大君の　おはせる　さゝらのみれびの　むすびたれたれやしひとも　上にでゝなげく

○　　毛野臣妻

久方ゆ　ふえ吹きのぼる　あふみのや　けなのわく子は　ふえ吹きのぼる

○　　推古天皇

まろがよ　蘇我の子らは　うまならば　日向の駒　太刀ならば　くれのまさひ　うべしかも　蘇我の子等を　大君の　つかはすらしき

○　　齊明天皇

山こえて　海わたるとも　面白き　今城の內は　忘らゆまじに

水門の　汐のくだり　海くだり　うしろもくれに　置きてか行かむ

うつくしき　あが若き子を　置きてか行かむ、

三、萬葉集中の歌

○春の部　雜歌、相聞、　　駿河采女

沫雪かはだれに降るとみる迄にながらへ散は何の花ぞも

○　高田女王

山吹の咲たる野邊のつぼすみれ此春の雨に盛りなりけり

贈大伴家持歌　笠女郎

水鳥の鴨の羽色の春の山たぼつかなくも思ほゆるかな

○　紀女郎

やみならばうべも來まさじ梅の花咲ける月夜にいでまさじとや

○厚見王報贈歌　久米女郎

世の中も常にしあらねば宿にある櫻の花のうつる頃かも

○贈大伴家持歌　紀女郎

晝は咲き夜はこひぬるねむの花我のみ見んやわけさへに見よ

○夏の部　雜歌、相聞、

○　藤原夫人

郭公いたくな鳴きそ汝が聲を五月の玉にあへぬくまでに

○橘歌一首　遊行女婦

君が家の花橘はなりにけり花なる時にあはましものを

○贈大伴家持歌　大神女郎

郭公鳴きしすなはち君が家に往けと追ひしはいたりけむかも

○與妹坂上大孃歌　田村大孃

古里のならしの岡の郭公言告やりしいかに告げきや

○秋の部　雜歌、相聞、

○　但馬皇女

事繁き里に住まずばけさ鳴きし雁にたぐひていなましものを

○雁の歌　巫部麻蘇娘子

誰きゝつこゆ鳴渡る雁が音の妻よぶ聲のゆくをしらさず

○　日置長枝娘子

秋づけば尾花が上に置露の消ぬべくも吾は思ほゆるかな

○　久米女王

もみぢ葉を散らす時雨にぬれて來て君が紅葉をかざしつるかも

○　長忌寸娘

珍らしと我思ふ君は秋山の初もみぢ葉に似てこそありけれ

○贈二大伴卿一歌　丹生女王

たかまどの秋野の上の撫子の花うらわかみ人のかざせしなでしこの花

○　笠縫女王

足引の山下とよみ鳴く鹿のことともしかもわが心づま

○　石川賀係女郎

神さぶといなにはあらず秋草の結びし紐をとかばかなしも

○　賀茂女王

秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君にあへることよひか

○贈二大伴宿禰家持一歌　笠女郎

朝毎に吾見る宿のなでしこの花にも君はありこせぬかも

同　山口女王

秋萩に置たる露の風吹きて落つる涙はとゞめかねつも

○　巫部麻蘇娘子

我宿の萩の花咲けり見に來ませ今二日ばかりあらば散りなむ

○與二坂上大孃一　田村大孃

吾宿の秋の萩咲くゆふかげに今も見てしが妹がすがたを

○冬の部　雜歌、相聞、

○雪の歌　舍人娘子

大口の眞神の原に降る雪はいたくな降そ家もあらなくに

○梅　歌　紀少鹿女郎

師走には沫雪ふると知らぬかも梅の花咲くふくめらずして

○依二梅發一思歌　縣犬養郎女

今のごと心を常に思へらばまづ咲花のつちに落ちめや

○奉二天皇一御歌　光明皇后

我がせこと二人見ませばいくばくかこの降雪の嬉しからまし

○　池田廣津娘子

まきの上に降り置ける雪のしく〳〵も思ほゆるかも小夜とへ我がせ　紀少鹿女郎

○

久方のつく夜を清み梅の花心ひらけて吾がもへる君

○與妹坂上大娘歌　田村大孃

沫雪のけぬべきものを今までにながらへぬるは妹に逢んとぞ

○挽歌

○河内王葬豊前國鏡山之時歌三首　手持女王

大君のむつ魂あへや豊國の鏡の山を宮とさだむる

豊國の鏡の山の岩戸たてかくりにけらし待てど來まさず

岩戸わる手力もがなたよわき女にしあれば術のしらなくに

○天皇崩御之時御作歌　倭太后

人はよし思ひやむとも玉かづら影に見えつゝ忘らえぬかも

○　石川夫人

小浪の大山守は誰が爲に山にしめ結ふ君もまさなくに

○大津皇子薨之後從伊勢齋宮上京之時　大來皇女

神風の伊勢の國にもあらましをなにしか來けん君もあらなくに

見まくほり我する君もあらなくになにしか來けん馬疲るゝに

○移葬大津皇子屍於葛城二上山之時　大來皇女

磯の上に生るあしびを手折らめど見すべき君が有と云はなくに

空そみの人なる我や明日よりは二上の山をいもせと我が見ん

○柿本人麿死時作歌二首　依羅娘子

今日〱と吾待つ君は石河の貝にまじりて有と云はずやも

たゞに逢はゞ逢ひもかねてむ石川に雲立渡れ見つゝ忍ばん

○石田王卒之時作歌　丹生女王

石の上ふるの山なる杉むらの思ひすぐべき君ならなくに

○長屋王賜死之後　倉橋部女王

天皇の命かしこみおほあらぎの時にはあらねど雲隱ります

○雜歌

○越勢能山時　　阿閉皇女

これやこの倭にしては我戀ふる木路にありといふ名に負ふ勢能山

○　　當麻眞人麿妻

吾せこは何處行くらんおきつもの名張の山を今日かこゆらん

○從駕作歌　　舍人娘

丈夫がさつ矢たばさみ立向ひ射るまとかたは見るにさやけし

○　　與謝女王

ながらふるつま吹く風の寒き夜に我がせの君は獨りかぬらむ

○　　清江娘子

草枕旅行く君としらませば岸のはにふににほはさましを

○奉天皇歌　　御名所皇女

吾大君物な思ほし皇神のつぎて賜へる吾ならなくに

○屋部坂歌　　阿倍女郎

人見ずば我袖もちてかくさんを燒けつゝかあらんきずて來にけり

○　　石川少郎

志かの海人はめ刈り鹽やき暇なみくしげの小櫛取りも見なくに

○贈₂行旅₁歌　筑紫娘子

家もふとさかしらなせそ風まもりよくしていませ荒き其路

○　紀皇女

輕の池浦わ行めぐる鴨すらに玉藻の上にひとり寐なくに

○月歌　豐前娘子

雲がくり行くへをなみと我こふる月をや君が見まくほりする

○智努女王卒後悲傷歌　圓方女王

夕霧に千鳥の鳴きしさほぢをばあらしやしてむみる由をなみ

○　藤原夫人

朝宵にねのみしなければやき太刀のとごゝろもあれば思兼つも

かしこきや天の帝をかけつればねのみしなかゆ朝宵にして

○　河内女王

橘の下照るにはに殿たてゝさかみづきいます吾大君かも

○　粟田女王

月待ちて家には行かむ我がさせる赤ら橘かげに見えつゝ

○相聞

○大伴宿禰報贈歌　　巨勢郎女

玉葛花のみ咲きてならざるはたが戀ならめわは戀ひもふを

○御製奉和歌　　藤原夫人

吾岡のおかみに云ひて降せたる雪の碎けしそこにちりけむ

○大津皇子奉和歌　　石川郎女

あを待つと君がぬれけむ足引の山の雫にならましものを

○在高市皇子宮時思穂積皇子歌　　但馬皇女

秋の田の穂向のよれるかたよりに君によりなゝこちたかりとも

○　　舍人娘子

歎きつゝ丈夫の戀亂れこそ我が元結のひぢてぬれけれ

○贈大伴田主歌　　石川女郎

みやび男と我は聞るを宿かさず我を歸せりおぞのみやび男

○與二人麿一相別歌　依羅娘子

なもひそと君は云へども逢はん時いつと知りてか我がこひざらん

○　人麿の妻

君が家にわれ住坂の家路をも我は忘れじいのちしなずば

○　安倍女郎

今更に何をか思はん打靡き心は君によりにしものを

我せこは物な思ひそ事しあれば火にも水にも我なけなくに

○　駿河采女

敷妙の枕ゆくゝる涙にぞ浮寐をしけるこひのしげきに

○　安倍女郎

我せこがけせる衣の針目おちず入にけらしも我が心さへ

○　石川郎女

春日野の山邊の道をよそりなく通ひし君が見えぬころかも

○　大伴女郎

雨ざはり常する君は久方のきのふの雨にこりにけむかも

○天皇奉答歌　　海上女王

梓弓つま引よどの遠音にも君が御幸をきくはしよしも

○贈今城王歌二首　　高田女王

事清くいとゝな云ひそ一日だに君いしなくば痛ききずぞも

此世には人事しげし來ん世にも逢ん我がせこ今ならずとも

○贈太宰帥大伴卿歌　　丹生女王

天雲のそきへの極みとほけども心し行けば戀ふるもの哉

○贈大伴宿禰三依歌　　賀茂女王

筑紫船未だも來ねばあらかじめ荒ぶる君を見るが悲しさ

○　　同

大伴のみつとは云はじ茜さし照れる月夜にたゞにあへりとも

○贈大伴宿禰家持歌三首　　笠女郎

白鳥の鳥羽山松のまちつゝぞ我が戀ひ渡る此月ごろを

闇き夜になくなる鶴のよそのみに聞きつゝかあらん逢とはなしに

空蟬の人目をしげみ岩橋のまゝ近き君にこひわたるかも

〇贈₂大伴宿禰₁歌二首　山口女王

劒太刀名の惜けくも我はなし君に逢はずて年の經ぬれば

芦邊より滿來る汐のいやましに思へか君が忘れかねつる

〇贈₂大伴宿禰₁歌　大神女郎

小夜中に友呼ぶ千鳥物もふとわび居る時になきつゝもとな

〇獻₂天皇₁歌　八代王

君により言のしげきを古鄕のあすかの河にみそぎしに行

〇怨恨歌　紀女郎

世中の女にしあらば吾渡るあなせの河をわたりかねめや

白妙の袖別るべき日を近み心にむせびねのみしなかゆ

〇　廣河女王

戀草を力車に七くるま積みて戀ふらく我がこゝろから

戀は今あらじと我は思ひしを何處の戀ぞつかみかゝれる

〇贈₂大伴宿禰₁歌二首　河内百枝娘子

はつ〳〵に人を相見ていかならん何れの日にか又よそに見ん

烏羽玉の其夜の月夜今日迄に我れは忘れずまなくし思へば

○　巫部（かんなべ）麻蘇娘子

たく繩の永き命をほしけくば絶えずて人を見まほしみこそ

○贈大伴宿禰歌　粟田娘子

思ひやるすべの知らねば片もひの底にぞ我はこひなりにける

○大宅女歌　豊前國娘子

夕闇は道たづ〱し月待ちていませ我がせこ其まにも見む

○　安都扉（あとべ）娘子

み空行月の光りにたゞ一目あひ見し人の夢にし見ゆる

○　丹波大娘子（たにはのおほいらつこ）

鴨鳥の遊ぶ此池に木の葉落ちて浮べるこゝろ吾がもはなくに

垣穂なす人言きゝて吾せこが心たゆたひあはぬこの頃

○　上丁那珂郡檜前舍人石前之妻（なかのこほり・ひのまへのとねりいしさきのつま）

枕太刀腰に取佩きまかなしきせろがまきこんつくのしらなく

○　椋椅部刀自賣

草枕旅行くせながまるいせば家なる我も紐とかずねん

○　豐島郡上丁椋椅部荒蟲之妻宇遲部黑女

我かどのかた山椿まことなれ我手ふれなゝつちに落ちむかも

○　椋椅部弟女

草枕旅のまる寐のひもたえばあがてとつけろこれのはるしも

○　都筑郡上丁服部於由妻呰女

我せなを筑紫へやりてうつくしみ帶はとかなゝあやにかもねも

○　物部刀自賣

色深くせなが衣は染めましをみさかたはらばまさやかに見む

○長歌

○　倭太后

いさなとり　淡海のうみを　漕ぎ來る船　へつきて　漕ぎ來る船　おきつかい　いたくなはねそ　へつかい　いたくなはねそ　若草の　つまの　思ふ鳥たつ

○石田王卒之時作歌　　　　　　　　　　丹生女王

なゆ竹の　とをよるみこ　さにづらふ　我が大君は　こもりくの　初瀨の山に　かむさびに　齋きいますと　玉梓の　人ぞ云ひつる　をよづれか　吾がきゝつる　まが言か　我が聞つるも　あめつちに　悔しきとの　世のなかの　悔しき事は　天ぐもの　そくへの極み　天地の　至れるまでに　つゑつきも　つかずも行て　夕けとひ　石うらもちて　わがやどに　御室をたてゝ　まくらべに　齋ひべをすゑ　たかだまを　間なく貫たれ　木綿襷　かひなに掛て　あめなる　さゝらの小野の　なゝふ菅手に取り持て　ひさかたの　天のかはらに　いでたちて　みそぎてましを　たかやまの　いはほの上にいませつるかも

反　歌

をよづれのまが言とかも高山の巖の上に君がこやせる

第二期　王朝時代の下（自紀元一千四百四十五年 至紀元一千八百四十九年）

總論

平安文學とは、今を去ること千餘年前、桓武帝の始めて都を平安に移されしより、鎌倉幕府創立に至るまで、凡そ四百年間の文學を云ふ。

當時代に至りては、文字の使用自由になり、加ふるに平假名の發明さへありければ、人々大に之に便を得、萬葉假名の煩をすて、此假名によりて、始めて眞正の散文を見るに至れり。後世國文學の至寶なりとて人々の賞讃する、源氏物語、枕草子は此時代に表はれたり。實に當時散文の發達は其頂點に達したりといふべし。

元來當時代の文學は、藤原氏と其盛衰を共にしたれば、文徳以前、後三條以後は、藤原氏の勢微々たりしかば、文學また見るべきものなし。當時文學として誇稱すべきは、彼の望月のかけたる事もなき、藤原氏の全盛時代、即ち道長關白の前後にして、僅々百年未滿の間なりしなり。物語、紀行、日記など、特種の點を有してあらはれしも此時代なり。才媛文壇に雄飛せしも此時代なり。實に當時は

文華爛熳たるの時代なりき。斯く競ひ咲きたる千紫萬紅の裡、殊に異彩を放ちたるものあり。曰く紫式部、清少納言なり。而して紫女は艶麗無双と稱せられ、清女は清楚絶倫と唱へらる。彼の寶典たる源氏物語、枕草子は此二女の手によりてなれり。當時の文壇は實に女流の支配する所なりしなり。試に當時の散文界より女流を削除せんか。其形勢實に寂寞たるものならん。

更に立かへりて韻文界の情況を窺はんか。當時は外交頻繁を極めし爲、人々古來純樸なる和歌をすてゝ、外來の唐詩を吟誦するに至り、嵯峨淳和両帝の朝には文華秀麗集、經國集などの詩選さへありしかば、朝官は更なり、地方官吏に至るまで、盛に唐詩を吟誦せり。之に反して和歌は大に衰へ、一人として萬葉集の遺響をつぐものなかりしも、貞觀年中に至り、再び和歌の開運に接し、延喜中古今集の選ありてよりは、漸次隆盛を來したり。次で一條帝前後に至りては、斯道の名匠も多く現はれ一時大に勃興したり。されど奈良朝の面かげは見るよしなく、人々古風を嫌ひて、言辭も風調も大に改まり、あまつさへ、堀河帝前後に至りては、歌合など大に流行せし結果、題詠のみ盛にして、優に平安朝和歌なるものを構成せり。

斯く文學は、散文韻文共に一時隆盛を極めたれども、其極人心の優柔懦弱をかもす原因となり、遂に武門政治の源を開くに至れり。

今之を、散文學韻文學の二種に大別して、聊か詳述する所あらん。

第一章　散文學

平假名製作以來、自由に己れの思想感情を發表するの便を得たりしかば、公卿閨媛など、之を一の消閑的の具に利用して、世々の榮華凋落を記し、又一の趣向を構へて社會の人情を寫し、或は日々の出來事より神社佛閣へ物せし等の事までも、態と艶麗なる詞語を以て記載するに至り、其嚆矢として、竹取物語、伊勢物語、表はれたり。然れども未だ隆盛の域に至らずして、漢學の爲に壓倒せられんとせしを、紀貫之出でゝ土佐日記、古今集序などを書してよりは、一時衰頽せし散文復勃興し、源氏物語を初として、狹衣、榮花、などの物語あらはれ、日記紀行には、土佐日記に次で蜻蛉日記、和泉式部日記、紫式部日記出で、次で更科日記、讃岐典侍日記などあらはれたり。かくの如く散文の發達頂點に達し、文人は互に美麗なる詞花を咲かしめんとをつとめたるなど、我國文學史上尤も著明なる時代なり。今之を物語及び日記紀行、草子、に區分して其梗概を叙述せん。

第一節　物語

物語には作者の想像よりなりし事、些細の事實を敷衍したる事、事實を美文に書したる事の三種ある由は、先輩既に之を云へり。げに此三種に外ならず。當時の物語は、皆公卿の手に弄ばれしものなれば、書する處の材料、亦公卿間の艶話を寫したるものなり。故に之に依て、當時一般の社會觀こそ能

はざれ、京師に於て、詩歌管絃を弄し、表面驕奢泰平を粉飾せる大宮人の、其裏面に於て、果して如何なる行爲ありしかといふに至りては、是非是等の物語日記より外に知る事能はざるなり。

物語の中にて尤も古きは、竹取、伊勢物語なるべし。之に次ぎて住吉物語、宇津保物語あらはれ、次で濱松中納言物語、落窪物語あらはれたり。以上は何れも公卿間の艶話ならざるはなし。中には女流の手になれるものありしならんも、作者の傳はらざるこそ遺憾なれ。

此他短篇小說の祖たる堤中納言物語（作者不詳一說日藤原兼輔）出で、源隆國又傳說を集めて今昔物語、宇治拾遺物語の著あり。其他朝倉物語、交野少將物語、など種々あれども今に傳はるもの少なければ省きて、散文界の寶典たる源氏物語に就て聊か記さん。

源氏物語五十四帖　本書は我が文學界の寶典として、千餘年後の今日迄喧傳せらるゝ處にして、紫式部が村上帝の皇女、選子內親王の爲に、石山寺に閉居して、此物語五十四帖を書したり、とは古來よりの傳說にして人の普く知る處なり。されども石山寺云々の事は誤傳なり。思ふに紫女七論に、河海抄の說を引きて、寛弘の初めに書きてとあれば、いかにも長保の末、寛弘の初め、式部やもめ住にて、里亭に侍りけるつれ／＼に作りたるかとあるは正說ならん。又其年齡の程も同書に諸書を考證して、二十七八乃至三十歲頃なるべし、とあり。此說信に近からん。

源語の文章は、今更ら余が語を俟たずして讀者皆知らん。その艶麗緻密の筆に萬象を描寫して殘すな

く、又高遠微妙の思想を寫して、明快なる、實に我邦著作の上乘寶典たる事言を俟たず。一部五十四帖より成る。其目次は、

桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、
紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、
明石、澪標、蓬生、關屋、繪合、松風、
薄雲、朝顔、乙女、玉鬘、初子、胡蝶、
螢、常夏、篝火、野分、御幸、藤袴、
槇柱、梅枝、藤裏葉、若菜、柏木、横笛、
鈴蟲、夕霧、御法、まぼろし、雲隱、匂ふ兵部卿、
紅梅、竹河、橋姫、椎が本、總角、早蕨、
宿木、東屋、浮舟、かげろふ、手習、夢の浮橋、

此物語は古來より、我國文學の至寶として貴ばれしにより、之が註釋書又評論を下したるもの大凡六十三四種の多きが中より、參考となるべき書二三を記さば、

文學全書本活字洋本　五册

こは萩野由之、小中村義象、落合直文の三氏校正頭註して出版せられしものにして、文學全書の八編

より十二編迄の五編に納めたり。

河海抄　二十卷　四辻善成著

源語一部の註にして、第一卷は物語の起り、時代の事、題名の事、式部の傳など書し、以下桐壺より順次註せり。

花鳥餘情　二十卷　一條兼良著

河海抄の誤れる處を正し漏れたるを補ひ加へたるものなり。

源氏湖月抄　六十卷　北村季吟著

源氏註釋として尤も廣く行はるゝは本書なり。本書は細流抄、孟津抄、の説を本とし、河海抄、花鳥餘情の要を取り、弄花抄、明星抄の説を交へ、且つ自説をも加へて明瞭に解せり。源氏一部の註釋としては完全なるものなり。

同　活字洋本　八冊　小田清雄校正增補

同　同　猪熊夏樹校正增補

玉の小櫛　九卷　本居宣長著

本書は種々の異本と校正し、湖月抄の誤を正したれば、湖月抄と共に見るべきものなり。

源氏評釋　十三卷　萩原廣道著

これは未完の書なれども、其評論解釋の周密なる、本書の右に出るものなし。本書の解釋は八冊、花宴迄にして、餘の五冊、惣論、餘釋語釋を記せり。

紫女七論　一冊　安藤爲章著

本書は源語の註ならざるも、紫女の研究上缺く可らざるものなり。

狹衣物語　八卷　本書は源氏物語なりて、四十餘年後、其女、大貳三位の書せしものにして、其體裁は源氏物語にならひ、設くるに狹衣大將を以てして、其主人公となせしなど、全く源氏と同じけれども、其文章源氏に比較せば、甚だ幼稚なるものにして、其及ばざる處遠し。僻案抄には、本書を以て大貳三位の作にあらざる由記せども、余は從來の說に從ひ、三位の著として暫く此處に記せり。本書の參考ともなるべきもの殆どなし。今傳はるは左の二種とす。

狹衣系圖　一卷　四三條實隆著

こは源氏物語の系圖にならひて作りしものなるべし。今は本書に附刻せり。

下紐　四卷　作者不詳

こは狹衣物語の抄なり。

第二節　日記紀行及び草子

物語に次で見るべきは、日記及び紀行の文なり。日記の尤も古きは散文學埋伏時代にあらはれたる、

土佐日記を以て始めとす。本書は貫之が土佐の國府より歸る道すがらの事を記せるものにして、名は日記と云へど、全く紀行なり。元來日記と紀行とは、其別辨じ難きふし多ければ、今之を混合して記さん。扨て土佐日記に次であらはれしは、蜻蛉日記を始として、和泉式部日記、紫式部日記次で、いほぬし、更科日記、讃岐典侍日記等續々あらはれたり。而して土佐日記、盧主を除くの外は、皆女流の手によりて表はれたり。

元來日記、紀行は、先輩既に云へる如く、共に實用に供するよりは、寧ろ娯樂の爲に作りし物なれば、過去に於ける人情風俗を知らんと欲する者、必ず一讀すべきものなり。草子類に至ては、枕草子を除くの外は見るべきものなし。今左に數種の解題を記し、併て其參考書を紹介せん。

紫式部日記　一卷　本書は、紫式部が、夫宣孝に別れて後、寡居せる時の作にして、其はじめ、上東門院へ奉仕せし折に起りし事實、大小となく記せるものにして、中にも後一條帝及び後朱雀帝誕生の事、道長式部に懸想せし事、日本紀局の名を取りし事など、委しく書せり。文章は源氏の如く緻密濃艶なるにあらで、尤も簡に尤も輕快に記せり。本書の註釋としては、

紫式部日記傍註　二册　壺井義知著

紫式部日記講義　一册　三木五百枝著

卷首に式部の系圖を附し、本文に傍註、頭註を施こし、尤も見易く書せり。

諸書を參考して、尤も詳かに解釋をなしたるものにして、初學者の研究には、大に便利なるものなり。

更科日記　一卷　本書は、菅原孝標の女の書きたるものにして、書中康平元年の出來事など書きたれば、思ふに後冷泉帝の末年頃に出來しならん。さすれば、今を去る八百四十餘年前なり。載する處紀行あり、日記あり、隨筆あり、緣起ありて、純然たる隨筆體を具へたり。本書の註釋としては、甚だ少なし。漸く近年に至りて、二三種あらはれたるのみ。

更科日記畧解　一冊　關根正直著
更科日記講義　一冊　大塚誠太郎著

中にも更科日記講義は初學者に便なり。

和泉式部日記　一卷　一名和泉式部物語と云ひて扶桑拾葉集にも納めたり。こは冷泉帝第四の皇子敦道親王が式部の許に通ひ給ひし事の始終を書し、數多贈答の歌をのせたり。本書は文章を賞せんよりは和歌を賞せよと古人の云へる如く、實に其歌はめでたし。本書の註釋としては未だ世になし。只文學全書第二編に納めしのみ。

蜻蛉日記　八卷　本書は攝政兼家の夫人の日記にして、其初め兼家の通ひ初めしより筆を起し、其翌天暦九年道綱誕生の事、應和三年道綱殿上の事、天祿元年元服の事など書し、天延二年に至る凡二十

一年間の事を記せり。されども今傳はる書には天德三年より應和元年に至る三年の記事を脱せり。本書の註解としては、

蜻蛉日記解環十八册　坂徵仲文著

こは種々の本によりて校正し、凡例に於て、題號の事、文字轉訛の事、假名遣の事、大鏡、榮華物語附合の事など書し、餘卷にて解釋せり。こは尤もよき書なれども、今は容易に得難し。

讃岐典侍日記　一卷　堀河天皇に奉仕せし讃岐典侍の日記にして、嘉承二年五月同天皇御惱より筆を起し、明年鳥羽天皇御即位より、大嘗會の事に至る迄の概畧を記せるものにして、歴史の一部として大に見るべきものなり。本書の註釋書としては、只一の文學全書本あるのみ。

枕草子　三卷　我が文學界に於て源氏物語と併稱せられ、千餘年後の今日に至る迄、千古の寶典と仰がるゝは即ち、清少納言の著、枕草子なり。此書は元、清少納言記と云へり。本書は清少納言、後一條帝の后宮へ宮仕せし程に、后兄伊周公、皇后へ料紙を獻ぜられし時、皇后、清少納言に、つれ〴〵慰むる物かけと仰せられしかば、清少納言これを受けて書きたる由、奧書に見えたり。本書は唐の李義山の雜纂にならひて、記せしものにして、我邦隨筆文の嚆矢なり。其載する處、四季の風景、殿上の儀式を始めとして、人物事件、動植物に至る迄、凡そ興あるものは漏らすなく、

取りて之を評し、又は大宮人、諸姫嬪の一擧一動、直接に間接に、鋭利なる筆鋒を以て、利害得失を描寫したるは、實に輕快豪放、寸鐵人を殺すの力ありて、千歳の下眼前に之を見るが如き思ひあらしむるは、蓋し雅文中之に及ぶものなかるべし。今其註釋書の重なるものを列記し以て其參考の資となさん。

枕草子春曙抄　十三冊　北村季吟著

枕草子註釋書として殆ど完全なるものなり。卷首に淸少納言の傳系、草子の題號、異本、稱美の事など書し、終りに本書を註釋したり。

同　三卷　鈴木弘恭校訂增補

枕草子裝束抄　一册　壺井義知著

本書は草子中にあらはれたる、男女裝束を集め、諸書を引用して、解釋せるものなり。

枕草子詳解　洋本三册　松平靜著

本書は後に出來たる丈ありて諸書を參考し、幷に黑川眞賴博士、飯田武鄕翁の說など加へ、又自のも加へて、一字一句註解したれば、尤も詳密なるものにして、初學者の爲めには大に便なり。

第二章　韻文學

桓武帝より淸和帝に至る間は、殆ど漢詩の全盛なる時代にして、和歌は大に衰頽し、萬葉集以來其面かげだに見る能はざるの悲運に接したりき。

然るに延喜前後に至りては、在原業平、僧遍昭、小野小町などの歌聖出で、次で紀貫之、凡河内躬恒、などの如き名匠顯出し、漸く和歌の繁榮すべき氣運に向ひたり。此時に至りて、醍醐帝、貫之等に仰せて、萬葉集以來古今の歌を撰ばしめ給ふ。これ即ち當朝に於て歌の勃興せし、原動力となれり。貫之これを撰するに當り、其範圍を廣め、上は主上より下は賤男賤女に至るまでの秀歌を撰定し、延喜五年に上奏す。これ後世歌人の寶典たる古今和歌集なり。爰に於て、身は下賤ながら言の葉を天津空まで聞え上ぐるを無二の名譽として、此次なる選集には必ず選入せられん事を希望し、津々浦々の人に至る迄、これを詠ずるに至りしかば、久しからずして、猖獗を極めし漢詩を壓倒し、遂に和歌の全盛時代とはなりぬ。

爰に於て村上天皇の時には、和歌所さへ設けられ、天暦五年には梨壺五歌仙に勅して、後撰集の撰あり、次で一條帝の朝には拾遺集を撰ばせ給ひ、九十年後、白河帝又藤原通俊に命じて、後拾遺集を撰ばしめ給ひ、又近衞帝の時に至り顯輔詞花集を撰びたり。此間ひきもきらず輩出せる歌仙、各自に私撰集、私家集、など編纂する事流行し、又寛平以來、禁中及び縉紳の間に於て、歌會、歌合會など盛に流行し、以て當時の和歌壇に一種の異光を放ちたり。今之を略記するに當り、便宜上左の四節に類別

　

せん。

一、當時の歌體　二、勅撰歌集　三、私撰集及家集　四、歌合

第一節　當時の歌體

當時代の和歌は、或る方面に向ひて、非常に發達して優に萬葉時代に匹敵せり。されども其結果、萬葉集時代とは非常なる變化を來し、口語と歌調と全く分離するに至れり。これ他なし。當時和歌は公卿間の專有物となりて、之を玩具視せらるゝに至り、口に謠ふを去て筆紙に上せ、其體調の巧緻を賞玩する事となりしかば、其中典と共に全く古代純樸の風一變し、婉麗優美の風と變じたればなり。且つ當時は漢學の餘炎によりて、巧に外國の事物を取りて、故事など讀み入れ、或は物名など讀み入るゝ事流行し、同時に歌會歌合會など盛に流行し、題を設けて其優劣を爭ふに至り、各自歌枕を携へ、之によりて其地理風土を察し、一字一句靈妙ならんことを欲し、競ひて題詠を勵みしかば、歌人は居ながら名所を知るの弊風さへ起り、言辭も語調も大に改まり、全く自然を離れて作爲的の物となれり。されば萬葉時代に於て、韻文の骨髓たりし五七調の長歌も、全く跡を絶ちて、其作の見るべきものなし。若し和歌をして作爲的の者とせば、實に當時は短歌の黃金時代なりしならん。

歌體の變遷に就いては、小中村博士の論、簡にして要を盡したれば、今之を載せて參考に資せん。

八代集に就て、其歌體を論ぜんに、後撰集（村上天皇の朝）は風調と姿とを撰ばず、心志を先として撰びたる集

なり。拾遺集（一條天皇の朝）の頃より、後世の人情に近くなりて、趣旨隈なく顯れ、高遠ならざるを可とす。其弊は餘韵うすきにあり。（中畧）後拾遺集（白河天皇の朝）に撰ばれたる歌は、稍々智巧に近くなりて、古風を失ひしに似たり。之を譬へば花も錦も共に美麗なれど、天造と人造との差別あるが如し。金葉詞花（崇德近衛天皇の朝）に至りては、又求めて興あらんとして、詞の云ひかけを好み、少しく俳諧歌に類せるもあり。是は當時名匠と呼ばるゝ輩、漸く古今以來の風に飽きて、新奇を求むるより、醸し來れるにて、源俊賴、藤原基俊を其魁首とし、數名の歌人皆此風に靡きしものなり。然れども勅撰の集は、さすがに、姿の平穩なるをのみ撰びたれば、異樣なる歌の少なきを、百首、歌合、家集に至りては、達人の所爲として、心に求め得たる所を、泉の湧くが如く憚らず云ひ下し、或は方言俗言を用ひて、人の耳目を驚かせり。云々。千載集（安德天皇の朝）の撰者、藤原俊成卿は、右の姿可ならずと思ひけん。殊に優美なる體をのみ撰びたれば、古今集の歌の細小になれる狀にて、其大畧は後拾遺の風の、少し實をおびたる者なり。然れ共爾後歌體大に變じ、高致幽艶の風となるべき漸とはなれり。云々。

第二節　勅撰歌集

勅撰集は務めて、優調なるもののみを撰びたるものなれば、之を以て當時の歌體は推知す可からず。されば終りに私撰集及び、家集をのせたれば、之に依て知るべし。今は只前章に記せし古今集を始めとして、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集の七代集を、順次解題し併て其註釋書を紹介

せん。

古今和歌集　二十卷二本　醍醐天皇の延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑、四人命を受けて、萬葉集に入らぬ歌、及び撰者の自詠をも網羅して、奉りしものなり。類別は四季、賀、離別、羈旅、物名、戀、雜、俳諧、旋頭歌の十種とし、歌數一千百首あり。本集は、後世大に貴ばれ、必ず和歌を學ぶものは、之を讀まざる可らざるに至り、人々大に此の研究をはかりしかば、從て註釋書數多あらはれたり。今重なる者二三を記さん。

古今餘材抄　寫本　三十冊　釋契沖著

古今集打聽　二十冊　加茂眞淵著

古今集遠鏡　六冊　本居宣長著

本書は、尤も廣く行はれたるものにして、極めて簡單に、俗言を以て解釋したるものなり。初學者必ず見るべし。

古今集正義　洋本　一冊　香川景樹著

本書は、景樹の尤も力をこめて註釋したるものにして、中々創見多し。

古今集講義　本居豐頴著

こは近年大八洲學會にて講義せられしを、出版したるものにして、近來の好著なり。

後撰和歌集　二十卷二本　村上天皇の天暦五年に、源順、大中臣能宣、淸原元輔、紀時文、坂上望城、の五人勅を奉じて、古今集以後殆ど五十年間の歌を撰集せり。世此五人を稱して、梨壺五歌仙と云ふ。類別は、四季、戀、雜、別、旅、賀、哀傷の七種となし、歌數千四百二十首。

本集通解未だあらはれず。只一部解釋せしものは、

後撰集考　一册　契沖阿闍梨著

後撰集新抄　十五册　中山美石著

拾遺和歌集　二十卷二本　本集の撰者に就ては、花山院の御撰とも云ひ、或は一條帝の長德年中、大納言公任の撰とも云ひて、定說なし。然れ共、後拾遺の序、及び定家の說と合せ考ふるに、本集は公任撰定して、奉れるものにして、花山院の撰と云へるは、此中より秀歌數句を撰出し、之を拾遺抄と名け給ひしものゝ傳はれるより、かゝる疑も出來しならん。

類別は、四季、賀、別、物名、雜、神祇、戀、哀傷、歌數、千三百五十一首。

本書の註釋としては、

拾遺抄註　群書類從の中にあり　顯昭法師著

以上古今、後撰、拾遺、をば三代集と稱し、後世歌人の重寶たり。

三代集通じて解釋せるものは、

これ只其一部分のみを注したるものなり。

僻案抄　三卷　藤原定家著

後拾遺和歌集　二十卷二本　拾遺集撰定後、九十年、白河帝の應德三年に、中納言藤原通俊、撰定して奉れるものにして、澄源法師、大江佐國、之を扶助したりと。類別は四季、賀、別離、羇旅、哀傷、戀、雜、神祇、釋敎、俳諧の十種とし、歌數一千二百十八首あり。

金葉和歌集　十卷一本　白河院の宣旨により、崇德天皇の天治元年、源俊賴に命じて撰ばせられたるものにして、二年なりて上奏す。後拾遺撰定後、四十年なり。

類別は四季、賀、別、戀、雜、連歌、

歌數、六百四十九首

勅撰集に連歌を入れたるは、之を以て嚆矢とす。

詞花和歌集　十卷一本　金葉集撰定後、七十年、近衛帝の仁平年中、藤原顯輔撰定せり。こは崇德院の叡慮に出でしなりと。

類別は四季、賀、別、戀、雜、連歌

歌數、四百九首

詞花集解　能代瑞穗著

千載和歌集　二十卷二本　詞花集後四十二年にして、後白河院の宣により、後鳥羽帝の文治四年に、藤原俊成之を撰集せり。此集元、頼朝幕府創立後になりしものなれば、無論武家時代に入る可きなれども、作者皆平安時代のものなれば、此處に載せつ。

類別は四季、別、旅、哀傷、賀、戀、雜、旋頭歌、物名、歌數一千二百八十四首。

以上の集に新古今集を加へて、八代集と云ふ。本書通じての註釋書は、

八代集抄　百八册　北村季吟著

八代集增抄　五十册　岸本由豆流著

等によりて研究せば明かなり。

第三節　私撰集及び家集

勅撰集の盛なるによりても推知すべく、當時は和歌極盛時代にして、公卿間の專有文學とさへ、呼ばれし程なれば、如何でか勅撰のみに飽かんや。各自思ひ〳〵に秀歌を撰集し、或は各々の歌を取り集めたる者、續々あらはれ、今に傳はるもの、一部の群書類從にすら、六百餘種を收めたり。他は推して知るべし。

元勅撰集は、歌體つとめて優麗ならんを欲し、撰者の好惡によりて、取捨したるものなれば、眞に歌體の沿革を知らんと欲せば、必ず私撰集、及び家集によらざる可らず。今一々記するの煩を避け、只時代

を代表すべき私撰集、及び女流家集を四つ五つ紹介せん。

新撰和歌集　四巻二本　本書は、醍醐帝、古今集の撰後、再び此集より尤も秀でたる歌を撰べと、貫之に仰せありしかば、貫之土佐國府にて之を撰びたるに、帝崩じ給ひければ、奏覽を經ずして止みたりと。

續詞花和歌集　二十巻二本　こも亦二條院の仰によりて、藤原清輔、詞花集中の秀歌を拔載せしも、院崩御により勅撰に准ぜられざりしと、拾芥抄にあり。

四季、賀、神祇、釋敎、哀傷、戀、別、旅、雜、物名、戲笑の十一に別ち、九百八十八首の歌をのせたり。

金玉集　一巻　大納言公任卿の撰にして、四季、戀、雜の四種に分類し、七十八首の歌をのせたり。

玄々集　一巻　こは能因法師、一條帝以降、後朱雀帝に至る、四代間に輩出せる、歌人の、粹を拔載せるものにして、寫本一冊傳はれり。

三十六歌仙家集　十五巻　こは大納言公任卿の撰にして、歌仙三十六人の家集なり。此中女流家集を列擧せば、

齋宮女御集　一巻　小大君集　一巻　伊勢集　一巻　小町集　一巻
中務集　一巻

この解釋としては、

歌仙解難抄　三冊　細川幽齋著

三十六人歌仙傳　群書類從に收む　作者不詳

此他群書類從和歌部より列擧せば、

嘉喜門院御集　經信卿母集　檜墻嫗集　本院侍從集

小馬命婦集　馬内侍集　中務集　加茂保憲女集

二條院讃岐集　淸少納言集　紫式部集　和泉式部集

相模集　赤染衛門集　伊勢大輔集　康資王母集

辨乳母集　出羽辨集　紀伊集　待賢門院堀川集

二條太皇太后大貳集

等主なるものなり。

第四節　歌合

村上帝の天德中に至りては、和歌冲天の勢を以て、宮中に跋扈せしかば、滿廷の公卿之に心醉せし餘り、一の消閑的の慰物となし、遂には歌合と云ふ事起れり。

歌合と云ふは、二人或は左右と別ち、四季折々の歌、或は調度の品につきて歌を合せ、互に其技を比

較し、判者自己の意見を兩者に告げ、以て其優劣を決するなり。又衆議判とて、一同にて勝敗を定むるもあり。

降て堀河帝の時代に至りては、帝殊更に男女を番せて、互に戀歌を贈答し、其優劣を定められてより、此事次第に流行し、遂には變じて艶書合せ、根合せ、前栽合せなど起るに至り、其元たる歌合盛に流行し、宮廷は更なり、貴紳の家にても日夜歌合會を催し、其優劣を決し、遂には熱心の極、病氣などかもし、甚だしきは生命を損じたるものさへあるに至る、實に其流行甚だしきものなり。

其式に至りては、くだ〳〵しければ載せず。又當時歌合に次で、百首千首の事など流行したれ共、そは省きて、只、今に殘れる歌合の著しきもの二三を記さん。

寛平歌合　寫本　一卷

寛平の御時の歌合にして題は菊名所なり。

寛平后宮歌合　寫本　一卷

春歌、夏歌、秋歌、冬歌、戀歌、各々二十番の歌合なり。

禖子內親王家歌合　寫本　一卷

題は春夜月、歸雁、蛙、吳竹、早蕨、菫、躑躅、にして作者は女房九人なり。

高陽院歌合　群書類從中に收む

長久弘徽殿女御歌合　同

永承祐子內親王家歌合　同

天喜后宮春歌合　同

堀河院艶書合　同　一卷

本書は、堀河帝の勅にて、興行したるものにして、作者は女房方にて周防の內侍、康資王の母、院の大進、前齋院の紀伊、四條の宮の甲斐、中宮の上總、一の宮の紀伊、女院の安藝、小大進等なり。

尙此他、群書類從に收むる三十餘種の多きに及べり。又百首千首など數多あれども省きつ。

第三章　作者略傳及び作例

一、小野小町

小町の系圖につきては、種々の說ありて詳ならず。或は參議小野篁の孫なりといひ、或は小野良眞の女なりといひ、又は出羽郡司の女なりなどいへり。今いづれとも定め難し。

小町は仁明天皇の頃の人にして、和歌に巧なると、容貌の美麗なるとを以て、世に名高し。紀貫之、古今和歌集の中に、小町の歌を評して曰はく、

小町の歌は、古への衣通姬の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはゞよき女の、なやめ

る所あるに似たり。

と。これによりてその歌風を知るを得べし。さて、怪むべきは、この歌仙の行狀につきて、未だ一定の論なき事なり。新井白蛾は、その牛馬問に論じて曰はく、

古代には、一國より一人づゝ、采女を内裏へ獻ぜしめ、これを后町の内に居らしめ給ふめれば、皆々小町と呼びたり。既に仁明帝の前後に、小町とて名ざゝれたる者、六十餘名ありしとあり。其人々の宮仕を止めて故鄕へ歸り、身まかりたるを埋めし墓を、大方小町塚と云ふ。さてこそ、國々に小町塚といふもの多き故よしなれ。云々。

あまり名高かりしため、其傳記に樣々の奇談ありて、七小町などいふものさへ出で來て、謠曲にも作られ、畫にも寫されたり。乃ち、雨乞小町、鸚鵡小町、卒都婆小町、通小町、草子洗小町、關寺小町、玉造小町などありて、名高けれども、いづれも小說家の作り話に過ぎざるなり。

僧正遍昭、出家して後、淸水の觀音に通夜して、經を讀むことありしに、その聲の唯人ならず聞えしかば、小町その人ならんと怪しみて、

岩の上に旅寐をすればいと寒し
苔のころもを我にかさなむ

といひ送りけるに、直に返歌あり。

世をそむく苔の衣は唯ひとへ

重ねば疎しいざ二人ねん

さればこそ、遍昭よと思ひて、その讀經の聲をしるべに尋ね行きしに、かきけすやうに失せて、一寺を求むれども、遂に行方を知らずといふ事の、大和物語に出でたるは事實なりや。世に玉造小町壯衰書といふものありて、群書類從に收めたり。中に小町年老いて、道路に乞食することを載す。以て小野小町となし、十訓鈔、著聞集皆ろの事を載せ、玉造小町と小野小町とを一人となす。然れども小野と玉造とは異姓なり。故に今その説は取らず。

小町は、當時、文屋康秀、大友黒主、僧正遍昭、喜撰法師、在原業平等と並び稱せられて、六歌仙の一人なり。小野小町の事蹟を記せるものに、小町考といふ書あり。

○和歌（小町家集）

○花をながめて

花の色はうつりにけりな徒らに我身世に經るながめせしまに

○或る人心がはりて見えしに

心から浮きたる舟に乘りそめて一日も涙にぬれぬ日ぞなき

○女郎花いと多くをりて見るに

名にし負はばなをなつかしみ女郎花折られにけりな我名だてに

○

やよや待て山ほとゝぎす言傳てん我世の中に住みわびぬとよ

○怪しき事云ひける人に

結びきと云ひける物を結び松いかでか君に解けて見ゆべき

○山里にて秋の月を

山里のあれたる宿を照らしつゝ幾夜へぬらん秋の月かげ

秋の月いかなるものぞ我が心何ともなきにいねがてにする

○やむごとなき人の忍び給ふに

現(うつゝ)にはさもこそあらめ夢にさへ人目つゝむと見るが侘しき

○夢に人の見えしかば

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせば覺めざらましを

○人の心かはりたるに

色見えてうつろふ物は世の中の人の心の花にぞありける

○忘れぬめりと見えし人に

今はとて我身しぐれとふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

○定まらずあはれなる身を嘆きて

蜑の住む浦こぐ舟の楫をなみ世をうみ渡る我ぞかなしき

○康秀が三河守になりて、縣見には出でたゝじやと云へる返り言に

侘ぬれば身を浮草のねを絶えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ

五月五日菖蒲にさして人に

あやめ草人にねたゆと思ひしは我身のうきに生ふるなりけり

○

木枯の風にも散らで人知れず憂き言の葉の積るころかな

○四のみこ、うせ給へる、つとめて風吹に

今朝よりは悲しき宮の秋風や又逢ふ事もあらじと思へば

○井手の山吹を

色も香もなつかしき哉蛙なく井手のわたりの山吹の花

○長歌一首

○うせたる人のあはれなる頃

久方の　空に棚引く　浮雲の　うける我身は　露草の　露の命も　まだ消えで　思ふ事のみ　まろ小すげ　茂さぞまさる　新玉の　行く年月は　春の日の　花の匂ひも　夏の日の　木の下かげも　秋の夜の　月の光も　冬の夜の　時雨の音も　世の中に　戀も別れも　憂き事も　つらきも知れる　我身こそ　心にしみて　袖の浦の　ひる時もなく　哀れなれ　斯のみ常に　思ひつゝ　生の松原　いきたるに　長柄の橋の　ながらへて　瀨に居る鶴の　しま渡り　浦漕ぐ船の　ぬれわたり　いつか浮世のくにさみの　我身かけつゝ　かけはなれ　いつか戀しき　雲の上の　人に逢見て　此世には　思ふ事なき　身とはなるべき

二、伊勢の御

藤原繼蔭の女にして、三十六歌仙の一人なり。容姿美しく心ざま優なる上、歌文の道に堪能なると當代の名匠たる貫之躬恒にもをさ〳〵劣らざりき。

父は其官伊勢守なりしかば、呼名を伊勢といへり。一時藤原仲平に通じたりけるが、後に宇多天皇の御寵愛を受け、寛平の年の末つ方、行明親王を生み奉れり。これより人貴びて伊勢の御、また伊勢の御息所などゝ稱へたり。

宇多天皇御讓位の後、世を遁れ大內山に入りて、專ら佛道を修行せさせ給ひしかば、伊勢もまた、浮世のはかなきをかこちて、心靜に五條なる家に籠居し、獨風月に思を馳せたり。庭は苔砂青みわたり、諸々の木立をかしく、くさ〳〵の幽草を植ゑたり。春は柳櫻を眺むるに適し、秋は草花を賞するによろし。家居の樣は今昔物語に「母屋の簾にそひて、高麗緣の疊を敷き、其上に唐錦の褥しきたり。板敷のみがゝれたる事、鏡の如く、影殘りなくうつりて見ゆ」など、頗る風流に住ひ居たりけりとぞ見ゆる。

かねて中務卿敦慶親王に通じて、女中務を生む。中務また母につぎて詠歌に巧にして、其歌は、古今集、後撰集等に多く見ゆ。殊に、承平四年、皇后宮の五十の賀、同七年、陽成院の七十の賀に獻せし和歌の、屛風に記されたるなどは、いともめでたき事なりかし。盛者必衰の理は免れずして、伊勢はかく風流に暮しけるが、やがてその家も人手にわたりけるにや、飛鳥川云々の歌あり。

○伊勢家集の一節

斯く帝ながら居させ給ひて、二年と云ふに御髮下させ給ひて、仁和寺と云ふ處に住み給うて、時々ぞ后の宮におはしましける。后の宮も仕うまつる人も限りなう悲しと見奉る。元住み給ひし處に、帝おはしまして、御とき、きこしめさず。仕うまつりし人など召しいでゝ、御おろし給ふ。后の宮の御かた

よりよみて出し給へる。

言の葉にたえせぬ露はおくらんや
　　昔しおぼゆる圓居したれば

御かへし、

海とのみまとゐの中はなりぬなり
　　そながらあらぬ君が見ゆれば

となん。

この帝に仕うまつりて、子生みたりし人は、世に幸なきものなりければ、うみたてまつりし君は、八つにて失せ給ひにける。いみじく悲しと思へどかひなし。死なんと思へど死なれねば、夜ひるなげきわたるに、此みこに名けたりし人の云へりける、

思ふよりいふは愚になりぬれば
　　たとへて云はん言の葉もなし

と云へど、更にものもおぼえねば、返事もせずなりにけり。歸りける年の五月に、時鳥のなくをきゝて、獨りかこちける、

しでの山こえてきつらん時鳥

　　　　こひしき人のうへ語らなん

今は心うがりて、もとの宮仕をなんしける。后の御心は、限りなくめでたくなまめきて、世にたぐひなくおはしましける。此程曹司には、前栽など、いとをかしう植ゑてなん住みける。秋の頃里に出でたるに、宮より、などか今迄は參らぬ。おそく參れば、花の盛も皆すぎぬべし。松蟲も啼きやみぬべかめりとなん、のたまはせける。御返事に、

　松蟲もなきやみぬなり秋の野に
　　　たれよぶとてか花見にもこん

御かへし、

　呼ぶとしも聲はきこえで花すゝき
　　　しのびに招く袖も見ゆめり

又かくきこえさせたり。

　人もきぬ尾花が袖に招かれて
　　　いとゞ仇なる名をやたてなん

御かへし、

　我まねく袖ともしらで花すゝき

色かはるとぞ思ひわびける

れめず奥に書きてまゐらす。

山川の音にのみきくもゝしきを

みをはやながら見るよしもがな

帝もなやましうせさせ給ける。遂に六月に隱れさせ給にける。あさましくいみじく悲くて、仕うまつりし人、さながら集まり、夜晝たきこひたてまつるに、帝の御わざの折にやう〳〵なりぬ。

○和。歌。（古今集）

○歸鴈をよめる

春霞たつを見すてゝ行鴈は花なき里に住みやならへる

○水のほとりに梅花の咲けるを

春毎に流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん

○亭子院歌合に

見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなむ後に咲かまし

○

五月こは鳴きもふりなむ郭公まだしき程の聲をきかばや

○物名カラサキ

浪の花おきからさきて散り來めり水の春とは風やなすらん

○戀

まると云へば枕だにせで寐しものをちりならぬ名の空に立らん

○

夢にだにみゆとはみにし朝な／＼我面影にはづる身なれば

○

わだつ海のあれにしとこを今更にはらはゞ袖や泡と散りなん

○

冬枯の野邊と我身を思ひせばもえても春を待たまし物を

○中務のみこの家の池に船をつくりて下し初て遊びける日

水の上に浮べる船の君ならばこゝぞとまりと云はまし物を

○龍門にまうでゝ

たちぬはぬ衣きし人もなきものを何山姫の布さらすらん

色かはるとぞ思ひわびける

れめず奥に書きてまゐらす。

山川の音にのみきくもゝしきを

みをはやながら見るよしもがな

帝もなやましうせさせ給ける。遂に六月に隠れさせ給にける。あさましくいみじく悲くて、仕うまつりし人、さながら集まり、夜晝たきこひたてまつるに、帝の御わざの折にやう〳〵なりぬ。

○和歌（古今集）

○歸鴈をよめる

春霞たつを見すてゝ行鴈は花なき里に住みやならへる

○水のほとりに梅花の咲きけるを

春毎に流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん

○亭子院歌合に

見る人もなき山里の櫻花ほかの散りなむ後に咲かまし

○

五月こは鳴きもふりなむ郭公まだしき程の聲をきかばや

○物名カラサキ

涙の花おきからさきて散り來めり水の春とは風やなすらん

○戀

まると云へば枕だにせで寐しものをちりならぬ名の空に立らん

○

夢にだにみゆとはみねし朝な〳〵我面影にはづる身なれば

○

わだつ海のあれにしとこを今更にはらはゝ袖や泡と散りなん

○

冬枯の野邊と我身を思ひせばもねても春を待たまし物を

○中務のみこの家の池に船をつくりて下し初て遊びける日

水の上に浮べる船の君ならばこゝぞとまりと云はまし物を

○龍門にまうでゝ

たちぬはぬ衣きし人もなきものを何山姫の布さらすらん

○桂に侍ける時に七條中宮のとはせ給へりける御返事に奉りける
久方の中におひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる
○家を賣りてよめる
飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせにかはり行く物にぞ有ける

○長歌

○七條の后うせ給ひにける後によめる
沖つなみ　荒れのみまさる　宮のうちは　年へて住し　伊勢の蜑も　船ながしたる　心地して　よらん方なく　悲しきに　涙の色の　くれなゐは　我等が中の　時雨にて　秋の紅葉と　人々は　己が散り〳〵　別れなば　頼むかげなく　なりはてゝ　止まる物とは　花すゝき　君なき庭に　群れ立ちてそらを招かば　初かりの　鳴き渡りつゝ　よそにこそ見め

三、右大將道綱母

東三條攝政兼家の妻にして、藤原倫寧の女なり。天暦の末年、兼家いまだ兵衛佐にてありし時、この倫寧の女に通ひて、折々和歌の贈答などしけるが、やがてその腹に道綱の生れしより、程なく北の方

とはなりしなり。

大鏡、道綱の事をいふ條に

御母は極めて歌の上手におはしければ、此殿（兼家）の通ひ給ひけるほどの事、歌など書き集めて蜻蛉日記と名づけて、世にひろめ給へり。

とある如く、天暦八年より、天延二年まで、即村上、冷泉、圓融の、三朝二十餘年間の事を物せり。これによりてその人の平生と文才とを知ることを得べし。

蜻蛉日記、天暦九年の條、兼家と贈答の歌に、

なげきつゝ獨ぬる夜の明くるまは
いかにひさしきものとかはしる

とよみてつかはしければ、兼家

げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸も
おそくあくるはわびしかりけり

又拾遺集なる、郭公名歌の一首に、

都人ねて待つらめや時鳥
今は野山を鳴きて出づなり

○蜻蛉日記の一節

申の終ばかりに、寺(石山寺)の中に着きぬ。浴屋に物などしきたれば、いきて臥しぬ。心地せん方しらず苦しきまゝに、臥しまろびでて泣かるゝ。夜になりて湯などものして、御堂に上る。身のあるやうを佛に申すにも、涙に咽ぶ。とかく云ひもやられず。夜うち更て、外の方を見出したれば、堂は高くて下は谷と見えたり。片岸に木ども生ひこりて、いと暗がりたる、二十日(七月)の月、夜更けていと明るければ、木影にもりて、所々に前の方ぞ見えわたりたる。見下したれば、麓にある泉は鏡の如く見えたり。高欄に押しかゝりて、とばかり守り居たれば、片岸の草の中に、そよ〳〵しならしたるもの、怪しき聲するを、こは何ぞと問ひたれば、鹿と云ふなりと答ふ。などか例の聲には鳴かざらんと思ふ程にさしはなれたる谷の方より、いとうら若き聲に、遙かにながめ鳴きたんなり。きく心地空なりと云へば、おろかなり。思ひ入りて行ふ心地、もの覺えで尙あれば、見遣りなる山のあなたばかりに、田守の物追ひたる聲、いふがひなく情なげに打ち呼びたり。かうしも取り進めて、肝を碎くこと多からんと思ふぞ、はてはあきれてぞ居たる。さて後夜行ひつればおりぬ

○同

前栽の花いろ〳〵に咲き亂れたるを見やりて、臥しながら、かくぞ云はるゝ。互に恨むる樣のことゞもあるべし。

百草に亂れて見ゆる花の色は
　おく白露のおくにやあるらん
とうち云ひければ、かく云ふ。
　身のあきを思ひみだるゝ花の上に
　　うちの心は云へばさらなり
など云ひて、例のつれなう夜更けて、寐待の月の山の端出る程に、出でんとする氣色あり。さらでありぬべき夜かなと、思ふ氣色や見えけん。宿りぬべき事あらばなど云へど、さしも覺えねば。
　いかゞせん山の端だにとゞまらで
　　こゝろの空にいでん月をば
かへし、
　久方の空に心の出づと云へば
　　かげは底にもとまるべきかな
とて止りにけり。扨て又、のわきの樣なることとして、二日ばかりありて來たり。一日の風はいかにせん。例の人は問ひてまし。と云へば、實にとや思ひけん。
　言の葉は散りもやするととめ置て

けふはみづからも問ふにやはあらぬ

と云へば、

散りきても問ひぞしてまし言の葉を
東風はさばかり吹きしたよりに

かく云ふ。

こちと云へば大空なりし風にいで
つけては問はんあたらなだてに

まけじ心にて又、

散らさじと惜みおきける言の葉を
きながらだにぞ今朝はとはまし

これはさも云ふべしとや、人ことわりけん。

四、馬内侍

内侍は、右馬權頭源時明の女なり。一說に赤染衛門の妹なりといふ。
一條院皇后にめし仕はれて、女房となれり。立后の時、本宮掌侍となる。性質温雅にして、幼き時よ

り風流の志あり。好みて和歌を詠みたり。
中古和歌に堪能なる人々を撰びて、三十六歌仙と云ふ名起りけるが、內侍は即ちその中の一人なり。
歌集あり。その中に、藤原道隆兵衛佐たりし時、內侍と契りて、和歌を贈答したることなども見ゆ。

○和歌（內侍家集）

○三月、中宮の御方に花を壺に挿させ給ひて
これが散る心よめと、仰せられしかば
散らじとや頼め初めけんはかなくもとまらぬ花に添ふ心哉
○つれ〳〵なる日人の文おこせるに
春日野に誰か待つとはつげつらん今日の子の日に鶯の鳴く
○或人、昔に似たる梅の花哉と云たりしかば
梅の花むかしのとをうたがへど空の氣色のかはれるやなぞ
○昔見し所の花を、或る處に植ゑさせ給ひたりければ
宿かへて匂ひ劣るな梅の花昔し忘れぬ今日に逢ふらん
○たのむべくもあらぬ人の許に
散る花に枕さだむと見し夢は明る夜頃を幾夜かぞへん

○夜更けて郭公の聲一度鳴きて止みぬれば
宿々に鳴く音は夢かほとゝぎす寐ぬ我ばかり聞よしもがな
○御文一度ありて又れとづれなければ
とぶ螢まとの戀にあらねども光ゆゝしき夕やみの空
○語ふ人のあはぬ頃郭公の鳴きつれば
心のみ空になりつる郭公人の爲なる音ころなかるれ
○昔の友達の許より文の中へ橘を入れてお
こせし歌のかへし
思ひきや花橘の香ばかりも戀しき人にならんものとは
○たび寐のところより
獨りぬる宿にふすぶる蚊遣火の小夜更け方にもはかはりつゝ

○
色々の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまるらん
○

秋風の吹けば亂るゝ花すゝき結びし心われに告げなん

○いたく荒れたる人の家に菊面白く咲けり

木枯のしげる紅葉に跡たえて人も見え來ぬ宿の白ぎく

○七日今日の空の氣色いかゞと云ひければ

嘆きつゝ天の川波ながむれば絶間がちなる雲ぞわたれる

○

君をのみまつ蟲の音のある物を何れの野邊の露にぬるらん

○思へるとよめと宮より仰せられしかば

寐覺して誰か聞くらん此頃の木の葉にかゝる夜半の時雨を

○山里なる人に雪の降る日

降ればかつ消ぬる雪と知りながら何山里の强て戀しき

○人の小松と云ふ處に侍りしに、つかはしける

朝ぼらけ思ひやる哉程もなき小松は雪に埋もれぬらん

○つゝむとある人に

峯の雪谷の氷にとぢられて跡見え難き三輪の山もと

〇あからさまに來る人の返りなんとするに時雨の少しすれば

かき曇れしぐるとならば神無月けしき空なる人やとまると

五、檜垣

檜垣は、肥後の國の遊女なり。容貌美はしく、敷島の道にも暗からざるを以て、都の空までも其名を知られたり。天慶中藤原の純友謀反して、民家を燒き土地を荒らし、其資財を奪ひなどしけるより、檜垣はこれが爲めに大に零落を極めたり。

太宰大貳、小野好古、勅を奉じて純友をうち、肥後の白河を過ぐるや、從者を顧みて、われ檜垣の和歌を能くすることを聞くこゝに年あり。されどかつて見たることなし。今幸ひにこゝに來れば、いで一たび見まほしきものなりといふ。時に老嫗の弊衣を付け、跣足にて水を汲むあり。從者指して、彼ころ即檜垣女に侍れといへば、好古いたく老衰せるに驚き、その故を問はんとしけるに、檜垣耻ぢて至らず、歌を送りける、

うばたまの我黑髮もしら川の
　みづはくむまで老いにける哉

好古感じ且憐み、袙一襲(アコメヒトカサ子)を脱ぎて與へたりとか。家集あり。後世中島廣足が其落ちたるを補ひ、檜垣女家集補註として二冊世に出されたり。

○家集の内

筑紫から牽てのぼりてある男、もとのめのもとにすゑたる、心いとよくて、うち語らひ居たるに、男はこゝかしこ、人の國にのみありきければ、二人のみなん居たりける。筑紫より來りたる女、いと忍びて、男をかたらひたりけるに、いとかう云ひける、

夜半にいでゝ月だに見ずばあふことを
しらず顔にもいはましものを

このもとの女、心いとよき人にて、男にも、かゝる事なむあると云はざりけれど、男外の方より、人語ふなりときゝて、思ひたりけれど、心にもいれで、なほ、さるものにてなむ置きたりける。さて此男、女のこと人に物云ふをきゝて、其人と我と何れをか思ふと、問ひければ、

花すゝき君が方にぞなびくめる
おもはぬ山の風は吹けども

となん云ひける。又よばふ男もありけり。世の中心憂し、斯ることきゝ入れじなど云ひけるものなむ。此男をやう／＼思ひつきやしにけむ、かへりごとなどして、もとのめのもとに文を引結びて、お

こせたるを見れば、斯くかいたり。

身をうしと思ふ心にこりねばや
　人をあはれと思ひそむらむ

と、こりずまに讀たりける。斯て心のへだてたる事もなく、あはれなれば、いとあはれと、思ふほどに、男は心かはりにければ、ありしこともあらねば、かの筑紫に、親兄弟などありければ、男も心かはりにければ、とゞめでなんやりける。もとのめなん、もろ共にありならひにければ、かくて行く事を、いとかなしと思ひける。山崎に諸共に行て、舟にのせなどする程に、男も來り、このうはなりこなみ、一日一夜、萬の事を語らひて、つとめて舟にのりぬ。今は男どもの女は、かへりなんとて車にのりぬ。これもかれもいとかなしと思ひけるに、舟にのりたまひぬる人のとて、文をなん持て來り、たゞかくありける。

ふたりこし道とも見えぬ波のうへを
　思ひかけてもかへすめるかな

とありければ、男も、もとの女も、いといたうあはれがり、泣きにけり。漕ぎ出でぬれど、え返しをもせず。車は舟の行くを見てえ行かず。舟にのりたる人は、車を見るとて、面をさし出て漕ぎ行けば、遠くなるまゝに、顔はいとちひさくなるまで、見おこせければ、いと悲しかりける。

相知りたりける人の、忍びて男あるに、逢はんと云へば、家の垣を夜更けて叩け。さらば起きてあらんと云ふに、逢ひたる程、五六日程男の音もせねば云ひやりし、

さゞれ石のれと絶えにけり逢ふとの
かたき巖となりやしぬらん

六、紫式部

紫式部は、藤原冬嗣の後裔、越前守爲時卿の女にて、母は常陸介爲信の女なり。

式部天性慧智、幼にしてよく學を家庭に學び、一を聞き十を悟るの英才ありしかば、父爲時卿はいたく感ぜられて、その男子たらざるを惜しみけりとぞ。長じて藤原宣孝に嫁ぎけるが、程なく宣孝は病にかゝりて、長保二年四月二十五日にみまかりぬれば、式部ははかなくも寡婦となりぬ。

我國文學中に一大貢献をなしたるものは、げに式部その人にあり。彼の和文の至寶とも稱せらるゝ源氏物語は、寡居の中に筆を染めて作れる者なりといふ。外に日記あり、即ち紫式部日記といふ。これは上東門院に仕へ奉りてよりの事を、見たるまゝ、聞きたるまゝ、さては思ふまゝを書きうつしたるものなれば、よく當時の儀式、風俗を知り、兼ねてまたその人となりをも推知せらるゝ良書なり。

源氏物語は、古來未曾有の大著述にして、人或は一女子の手になれるを信せず、或は父爲時の意匠に

なれりといひ、或は道長の加筆ありしなど云へど、文章の優美、物語の非凡なるより、とやかくと說を唱ふるまでにて、紫式部ならでは、いかで之をよくすべからん。紫式部日記に比し、その筆法の同一なるを見ても知るべし。

後式部が才德世にあまねく知られ、遂に上東門院に召し出されぬ。こは寛弘二三年頃の事なり。その見參のさまを今昔物語に曰はく、

　式部がありさま、かゝるめでたき事ども作り出したる人とも見えず、裝唐衣きたる姿容體もてなしなど、いとあやしう心もなげにてぞ侍りける云々。

才德雲井にまでひゞきたれども、式部は敢て高慢の心なく、上東門院に史記の講義を聞えまつる折しも、いとつゝましうしたりけりとぞ。

一說に、源氏物語は村上天皇第十の宮選子內親王より、上東門院に何か珍しき物語は無きかと問はせ給ひしかば、門院式部に仰せ書かせて奉り給ふ。式部は仰を蒙るや、石山の觀音に通夜して加護を祈願せしに、折しも八月十五夜、明月の湖上に浮びしかば、物語の趣向たちまち心中に躍り出でたり。よりて佛前の大般若經書寫する料紙を取りて、まづ須磨明石の二卷より、筆を起したりと。然れどもこれは學者の取らざる所にして、全く俗說といふべし。

一條天皇、この物語をよませ給ひて、この人は日本紀をこそ讀みたまへけれ、誠に才あるべし、との

給はせけるより、日本紀の局などとも呼ばれたりとか。
式部はもと藤原氏なれば、始は藤の式部と呼ばれけるを、源氏物語の中にて紫の上の事をすぐれて面白く書きたるより、紫々とよばれて、いつしか紫式部の名を得たるなりといふ。この說信に近し。
貞操の正しかりし事は、日記の中に、道長の戯れいひかけたる歌の返しに、

人にまだ折られぬものを誰か此
すきものぞとは口ならしけん

と言ひたちたるにても知られ、又管絃の道にさへ達せし事は、人の琴敎へてといひけるに答へて、

露しげき蓬がもとの蟲の音を
おぼろげにてや人の尋ねん

と詠みたる歌の千載集に入りたるを見ても知らるべし。
二女あり、姉を賢子と云へり。大宰大貳高階成章に嫁し、後一條天皇の御乳母に召されて、三位を賜はりしかば、大貳三位と呼ばる。母の敎育を受けて歌文をよくし、狹衣物語を作りたり。妹は辨の局とて、左衛門督兼盛に嫁しけるが、後に後冷泉院の御乳母となりぬ。

○蓬生の宿　（源氏物語）

野分たちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思ぼし出づる事多くて、靫負の命婦と云ふを遣はす。夕

月夜の、をかしき程に、出し立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうの折りは、御遊などせさせ給ひしに、心ことなる物の音をかきならし、はかなく聞え出る言の葉も、人よりは異なりしけはひかたちの、面影につとそひて思さるゝも、闇のうつゝには何劣りけり。命婦かしこにまかでつきて、門引き入るゝより、けはひあはれなり。やもめ住なれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立てゝ、めやすき程にて、過し給ひつるを、やみにくれて、伏し沈み給へるほどに、草も高くなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらず、さしいりたる。南面におろして、母君、とみにえものもの給はず、今までとまりぬるが、いと憂きを、かゝる御使の、蓬生の露分け入り給ふにつけても、いと耻しうなむとて、實に堪ふまじく泣い給ふ。乘りてはいとゞ心苦しう、心肝もつくる樣になむと、内侍のすけの奏し給ひしを、もの思ひ給へ、知らぬ地にも、實にこそいと忍びがたう侍りけれとて、やゝためらひて、仰せ言傳へきこゆ。暫しは夢かとのみたどられしを、やう／＼思ひ鎭まるにしも、覺むべき方なく堪へ難きは、いかにすべきわざにかとも、問合すべき人だになきを、忍びては參り給ひなむや。若宮のいと覺束なく、露けき中に過し給ふも、心苦しう思さるゝを、とく參り給へ。など、はか／＼しうものの給せやらず、咽せかへらせ給ひつゝ、且は心もよわく見奉るらむと、思ぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの、心苦しさに、承はりもはてぬやうにてなむ、まかで侍りぬるとて、御文たてまつる。目も見に侍らぬに、かくかしこき仰言を光にて

なむとて見給ふ。程經ば打まぎるゝ事もやと、待ち過す月日に添へて、いと忍び難きは、わりなき業になむ。幼なき人もいかに思ひやりつゝ、諸共に育(はぐ)くまぬ覺束なさを、今は尙昔のかたみに准へて、ものし給へなど、細やかに書かせ給へり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に
　小萩がもとを思ひこそやれ

とあれど、え見給ひはてず。命長さの、いとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の思はむとだに、恥しう思ひ給へ侍れば、百敷に行きかよひ侍らむことは、ましていと憚多くなむ。かしこき仰言を度々承りながら、自らは、えなむ思ひ給へたつまじき。若宮はいかに思ほし知るにか。參り給はむことをのみなむ思し急ぐめれば、ことわりに悲う見奉り侍るなど、うち〳〵に思ひ給へる樣を奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、いま〳〵しうかたじけなく、などの給ふ。

宮は大殿ごもりにけり。見奉りて、くはしく御有樣も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべしとていそぐ。くれ惑ふ心の闇も、堪へ難き片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、私(ひそか)にも心のどかにまかんで給へ。年比おもたゞしき序(ついで)にのみ、立寄り給ひしものを、かゝる御消息にて見奉る、かへす〳〵つれなき命にも侍るかな。生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとなる迄、只この人の宮仕の本意必ずとげさせ奉れ。我れなくなりぬとて、口惜う思ひく

づほるなど、かへす〳〵戒め置かれ、侍りしかば、はか〳〵しう後見思ふ人なきまじらひは、中々なるべき事と、思ひ給へながら、只彼の遺言をたがへじとばかりに、出し立て侍りしを、身に餘るまでの御志の、萬にかたじけなきに、人氣なき耻を隱しつゝ、交らひ給ふめりつるを、人のそねみ深く積り、やすからぬ事多くなり添ひ侍るに、よこさまなるやうにて、つひに斯くなり侍りぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ侍る。これもわりなき心の闇と、云ひもやらず咽せかへらせ給ふ程に、夜も更けぬ。うべもしかなむ。我御心ながら、あながちに人目驚くばかり、おぼされしも、ながゝるまじきなりけりと、今はつらかりける人のちぎりになむ。世にいさゝかも人の心をまげたる事はあらじと思ふを、只この人故にて、數多さるまじき人の、恨を負ひしはて〳〵は、かう打すてられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人惡く、かたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ、と打かへしつゝ、御しほたれがちにてのみ座すと、語りてつきせず、泣く〳〵夜いたう更けぬれば、今夜過さず御返事奏せむとて、いそぎまゐる。月は入方の空淸うすみ渡れるに、風いと涼しく吹きて、草むらの蟲の聲々催しがほなるも、立はなれにくき、草のもとなり。

　鈴蟲の聲の限をつくしても
　　長き夜あかずふる涙かな

えも乘りやらず。

いとゞしく蟲の音繁き淺茅生に

露置そふる雲の上人

かごとも聞えつべくなむと云はせ給ふ。

○紫式部日記の一節

十一日のあかつき御堂へ渡らせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟にのりてさしわたりけり。それには後れてようさりまゐる。敎化を行ふ處、山寺の作法うつして大懺悔す。しらい塔など多う繪にかいて興じ遊び給ふ。上達部多くはまうで給ひて、少しぞとまり給へる。後夜の御導師敎化ども說相皆心々廿人ながら、宮のかくておはしますよしを、こぢかひきしなことは、たえて笑はるゝ事も數多あり。ことはてゝ殿上人舟にのりて、皆漕ぎつゞきて遊ぶ。御堂の東のつま、北向におしあけたる戶の前、池につくりおろしたる、橋の高欄を押へて、宮の大夫は居給へり。殿あからさまにまゐらせ給へる程、宰相の君など物語りして、お前なれば、うちとけぬようい、內も外もをかしきほどなり。月おぼろにさし出でゝ、若やかなる公達今樣歌うたふも舟にのりおほせたるを、わかうをかしく聞ゆるに、大藏卿のあふな〳〵まじりて、さすがに、こゑ打そへんもつゝましきにや、しのびやかにて居たるうしろでのをかしう見ゆれば、御簾の內の人も、みそかに笑ふ。舟の內にや老をばかこつらむ、と云ひたるを、きゝつけ給へるにや、太夫、徐福、文成誑誕おほし、と打ち誦し給ふ聲も樣も、こよなう今めかし

く見ゆ。池のうき草と謡ひて笛など吹き合せたる、曉方の風のけはひさへぞ心ことなる。はかないこ
とも所がらをりからなりけり。

○同

源氏物語お前にあるを、殿の御らんじて、例のすゞろ言もいで來るついでに、梅の枝に、しかれたる
紙に書かせ給へる、

すき物となにしたてれば見る人の
　　をらですぐるはあらじとぞ思ふ

たまはせたれば、

人にまだ折られぬ物を誰かこの
　　すきものぞとは口ならしけん

めざましうときこゆ。

渡殿に寐たる夜、戸をたゝく人ありときけど、恐ろしさに音もせであかしたるつとめて、

よもすがら水鷄よりけになく〳〵ぞ
　　まきの戸口にたゝきわびつる

返し、

たゞならじとばかり叩く水鷄ゆゑ
あけてはいかにくやしからまし

○和歌（紫式部家集）

○櫻を瓶にさして見るに、とりもあへず散りければ、桃の花を見やりて
春なれど白ねのみ雪いや積りとくべき程のいつとなき哉
○ほとゝぎす鳴かんといふ曙に片岡の梢をかしければ
折て見ばちかまさりせよ桃の花思ひくらして櫻をしまじ
○
郭公聲まつほどは片岡の森のしづくに立ちやぬれまし
○六月ばかりなでしこの花を見て
神代にはありもやしけん山櫻けふのかざしに折れるためしは
○久しく訪れせぬ人に
かきねあれさびしさ勝る常夏に露れきそはん秋迄は見じ
○七夕
たが里もとひもや來ると郭公心の限り待ちぞわびにし

大方を思へばゆかし天の河けふの逢瀨はうらやまれけり

○童萩の花に立寄て折り取る所の繪に

さを鹿のしかならはせる萩なれや立よるからに己れ折れ伏す

○女郎花を殿のもて來給へば

女郎花さかりの色を見るからに露のわきける身こそしらるれ

○菊綿を上の御方より賜へるに

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代は讓らん

○初雪ふりたる夕ぐれに

荒ればかく憂さのみまさる世をしらで荒たる庭に積る初雪

○

水海に友呼ぶ千鳥ことならばやすの港を聲絕えなせそ

○

めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲隱れにし夜半の月哉

○

世の中をなになげかまし山櫻花見る程の心なりせば

○
春の夜の闇のまよひに色ならぬ心に花の香をぞしめつる
○
打はらふ友なき頃の寐覺にはつがひし鴛ぞ夜半に戀しき
○
暮ぬ間の身をは思はで人の世の哀れを知るぞかつは悲しき

七、清少納言

舍人親王の十代の孫に當る、淸原元輔卿の女なり。一條天皇の皇后、定子に仕へ奉りて、かの紫式部と並び稱へられし、和文の大家なり。淸原氏の女といふ故を以て、淸少納言とは呼ばれたるなり。少納言とはもと太政官の判官にて、常に天皇の傍に侍りて、官印を鑑み掌る男子の官名なるを、こゝに女子にして少納言と云へるは、如何なればか。當時は皇后宮の御方にもさる同じ官のありしにや。淸女が天才慧智萬人にすぐれたる事は、たゞかりそめに記せし文章の、あかも國文の至寶なりと稱せらるゝ枕草子につきても知るべし。

げに春は曙、ほの〴〵と筆そめ出せし句ひなど、いひあらずめでたく、文の林の奧ふかく分け入れば

ろの響、天籟か、人籟か、或は金石の自ら聲あるが如く、忽然として筆を止めたる、調も妙にかなづる琴の糸切れたるが如し。所謂寸鐵人を殺すの筆法は、實に淸女が特筆といふべし。

淸女が歌は、僅に數十首に過ぎず。その故は父元輔卿は、村上天皇の朝に、勅を奉じて後撰集を撰びし、梨壺の一人にて名高き歌人なりければ、己はその娘ゆゑ、なまじひに詠みて、親の名をも穢さんは本意なきわざなりとて、詠まざりしとか。

されどその詠める歌はめでたく、當時の人々も大に賞讃したり。淸原家の聲名は、げに淸女の才學によりて、いよ／＼高まりたりといふべきなり。

淸女は零落の女子なり。紫式部に比べては品行の落ちたる方もあらんが、なべて平安の朝は、淫風の吹きすさびたる時代にて、大内の女房たちの中にも、屢よからぬ風說ありき。紫式部が著はせる源氏物語などの、淫靡なる小說が、大に世に愛讀せられしを見ても、よく當時の風俗の一斑を推知するに足るべし。

ある時雪の降りけるに、皇后の御前に侍りしかば、皇后は女房たちに向ひ、香爐峯の雪は如何にと仰せらるゝに、淸女直に立ちて御簾を捲きたるは、世に有名なる事實にして、又以てその才の鋭敏なるを見るべし。これ白氏文集、白樂天の詩に、

遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峯雪撥簾看

とある句を即坐に思ひ浮びたるなり。誠に驚くべき慧智機才ならずや。

かばかりに英才なりければ、内侍にもなすべき沙汰などの事なりけるを、口惜しや、皇后の御父道隆公のかくれ給ひて、道長公關白となり、上東門院入内ありて中宮に立たせ給ひ、後には伊周公隆家卿など流され給ひ、皇后の宮も御子生ませ給ひければかくれまし、御妹の淑景舍も次で失せ給へれば、清少納言もよろづものわびしく、さては昔住みける草庵に歸りて、さびしく世をすぐしけるとかや。

一日殿上人あまた清女の家の前を通り給ふことありけるに、家のあれたる樣、垣のくづれたるなどを見て、少納言は無下にこそなりにたれと車のうちにて云ひ給ふを聞きて、少納言忽ち簾をかきあげ、駿馬の骨をば買はずやあると譏りかへせし言葉、貧窮に屈せざるその氣慨の程を見るべし。

○鳥は（枕草子）

こと所の物なれども、鸚鵡いとあはれなり。人の云ふらん事をまねぶらんよ。郭公。水鷄。鴫。みこ鳥。ひわ。山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば、なぐさむらん、いとあはれなり。谷へだてたる程などいと心苦し。鶴はこちたき樣なれども、鳴く聲雲井まできこゆらん、いとめでたし。頭赤き雀。いかるがのを鳥。たくみ鳥。鷺はいと見る目も見苦し。眼ゐなども、うたて、よろづになつかしからねど、ゆるぎの森に獨りは寐じと爭ふらんこそをかしけれ。はこ鳥。水鳥はをし、いとあはれな

り。かたみにゐかはりて、羽根の上の霜を拂ふらんなどいとをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらんこそ。鴈の聲は遠くきこえたるあはれなり。鴫は羽根の霜打拂ふらんと思ふにをかし。鶯は文などにも、めでたきものに作り、聲より始て、樣かたちも、さばかりあてに、うつくしき程よりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。人のさなんあると云ひしを、さしもあらじと思ひしに、十とせばかり侍らひてきゝしに、まことに更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよくかよひぬべきたよりなりかし。まかでゝきけば、怪しの家の見所もなき梅などには花やかにぞなく。夜なかぬもいぎたなき心地すれども、今はいかゞせん。夏秋の末まで老聲になきて、蟲食など、ようもあらぬものは、名をつけかへて云ふぞ、口惜しくすごき心地する。それも雀などやうに、常にある鳥ならば、さも覺ゆまじ。春なく故こそはあらめ。年立ちかへるなど、をかしき事に、歌にも文にも作るなるは、猶春の内ならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世の覺えあなづらはしうなりそめにたるをば、そしりやはする。鳶鳥などのうへは見入れ聞入れなどする人、世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり。祭のかへさ見るとて、雲林院知足院などの前に、車をたてたれば、郭公も忍ばぬにやあらん鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どもの中に、諸聲に鳴きたるこそ、さすがにをかしけれ。郭公はなほ更に云ふべき方なし。いつしかしたり顏にもきこえ、歌に、卯の花、花橘、などにやどりをして、はたかくれたるも、ねげなる心ばえな

り。五月雨のみじか夜に寐ざめをして、いかで人より先に聞かんと待たれて、夜ふかく打出でたる聲のらう〳〵しう、愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せん方なし。水無月になりぬれば、音もせずなりぬる、凡て云ふも愚かなり。夜鳴くもののすべて、何れも〳〵めでたし。ちごどものみぞさしもなき。

○すさまじき物　一節（枕草紙）

人の許にわざと淸げに書きたてゝ、やりつる文の返事見ん、今は來ぬらんかしと、あやしくれそしと待つ程に、ありつる文の結びたるも、たて文も、いときたなげに持なしふくだめて、上に引きたりつる墨さへ消えたるを、おこせたりける、おはしまさゞりけりとも、若しは物忌とて取り出でず、などもてかへりたる、いとわびしくすさまじ。

又必ず來べき人の許に、車をやりて待つに、入りくる音すれば、さなゝりと、人々出で見るに、車やどりに入りて、轅ほうと打おろすを、いかなるぞと問へば、今日はおはしまさず、わたり給はずとて、牛のかぎり引出でていぬる。（中略）

待つ人ある所に、夜すこし更けて、忍びやかに戸を叩けば、むねすこしつぶれて、人出して問はするに、あらぬよしなき者の名乘して來たるこそ、すさまじと云ふ中にも、かへす〳〵すさまじけれ。

けんざの物の怪調ずとて、いみじうしたり顔に、どこやずゝ、など持たせて、せみ聲にしぼり出し讀み居たれど、いさゝかさりげもなく、ごほうもつかねば、あつめて念じ居たるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみこうじて「さらにつかず、立ちね」とてずゝとりかへしてあれど「げんなしや」と打云ひて、ひたひより上ざまに、かしらさぐり上げて、あくびを己れうちしてよりふしぬる。

除目に司得ぬ人の家。ことしは必ずときゝて、はやうありし者どもの外々なりつる。片田舍に住む者など、皆集り來て、出で入る車の轅もひまなく見え、物詣する供にも、我も／＼と參り仕ふまつり、物食ひ酒飲みのゝしりあへるに、果つる曉迄、門たゝく音もせず。怪しなど耳たてゝきけば、先追ふ聲々して、上達部など皆出で給ふ。ものきゝに宵より寒がりわなゝき居りつる下衆男など、いと物うげに歩み來るを、居るものどもは、問ひだにもえ問はず。外より來たる物どもなどぞ「殿はなにゝかならせ給へる」など問ふ。いらへには何の前司にこそは、と必ずいらふる。まことに賴みけるものは、いみじうなげかしと思ひたり、つとめてになりて、ひまなく居りつる者も、やう／＼一人二人づゝすべり出でぬ。ふるき者の、さもえ行きはなるまじきは、來年の國々を、手を折り數へなどして、ゆるぎありきたるも、いみじういとほしうすさまじげなり。

よろしうよみたりと思ふ歌を、人の許にやりたるに、返しせぬ。けそう文はいかゞせん。それだに、折をかしうなどある返事せぬは、心おとりす。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人

の、己がつれ〲といとまあるまゝに、昔ればにて、ことなる事なき歌よみしておこせたる。物の折の扇いみじと思ひて、心ありと知りたる人に、云ひつけたるに、其日になりて、思はずなる畫などかきてゐたる。(下略)

○家集の内

○宮の粟田殿におはします比、實方の中將まゐり給ひて大かたに物などの給ふに、さしよりて忘れ給ひにけりなどゝ云へど、いらへもせで立にける、即ち云ひ送りける。

忘れずや又忘れずよ瓦屋の下やく煙下むせびつゝ

○住吉に詣でゝ、いととく歸りきなん、その程ゆめ忘れ給ふなと、云ひたるに、

何方かしげりまさると忘れ草よし住吉にながらへてみよ

○人の許にはじめてつかはす

たよりある風もや吹くと松島によせて久しきあまの釣船

○ぼたいと云ふ處に、說敎きくとて、人の許よりとく歸りね、おぼつかなきにとあるに、

求めてもかゝる蓮の露をゝきてうき世に我は何か歸らん

○みのゝ五節出させ給ひし年、辰の日の夕さり、女房も童もゝしなべて、青摺の裳、唐衣に、

山藍してゐかきて、赤紐など結びかけたれば、殿上の人々など珍しかりて、をみの女房とつけて、立まじりたり、人よりも頭中將よういし、けうらし給ふ右兵衛など、かたぬぎ、ひきくつろひなどするに、紐とくれば

足引の山井の水の氷れるをいかでか紐のとくるなるらん

八、和泉式部

平安朝に於ける女流歌人の一人なり、越前守大江雅致の女なるが、和泉守橘道貞の妻となりたるを以て、其夫の官によりて和泉式部と呼ばれたり。夫道貞歿して後は、一條天皇の中宮上東門院に仕へて才女の名知られしが、のち又丹後守藤原保昌に嫁して、任國の丹後に下れり。かつて京都に居ける頃、下賀茂の社に參詣せしに、履きたる藁靴に足をくはれて紙を巻き居たりしかば、神主忠賴これを見て、

千早振かみ(紙、上、神)を足にまく者か

と戯れしに、式部直に下の句をつぎて、

これをぞ下の社とはいふ

と答へしとぞ。以て和歌の力に滑稽の才を兼ねたるを見るべし。

式部佛法に歸依する心深く、法華經の從冥入冥永不聞佛名といふ文句を用ゐつゝ、播州書寫山の性空上人に贈るとて、

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき
　　はるかに照らせ山の端の月

とよみたるは拾遺集にも入りて名高き歌なり。式部始め橘道貞に嫁せし時一女を生めり、小式部といふ。後に保昌に嫁するや携へゆきけるが、詠歌の法を母に習ひて、やがて譽高く世に聞え、めされて上東門院の官女となりぬ。母は保昌と共に丹後に下りし後、歌合の催しあるとて小式部も讀みての數に入りたりしが、中納言定頼小式部に向ひて、歌はいかゞせさせ給ふ、丹後へは人をつかはされしや、使はまだ參らずや、いかに心もとなく思すらんなど戯れ譏りたるに、小式部ろの袖をとらへつゝ

大江山いくのゝ道の遠ければ
　　まだふみ(略。文)も見ず天の橋立

とよみて舌を捲かしめたる物語あり。

和泉式部は晩年に尼になりて、御堂關白より贈られし小御堂といふ寺に住み、專ら佛道修行にのみ身を委ねたり。遺稿は和泉式部日記と和泉式部集とあり。

○和泉式部日記の一節

かく云ふ程に、十月にもなりぬ十日の程おはしましけり。奥は暗う恐ろしければ、端近う打ふさせ給ひて、哀れなる事の限を、のたまはするに、かひなくはあらず。見れば月の曇りてしぐるゝ程なり。わざとあはれなる樣を、作り出でたる樣なり。思ひ亂るゝ程の心地は、いとそゞろ寒きや。宮御らんじて、人の便なきにのみ云ふめる、怪しきわざかな、こゝに斯くてあるよと、哀に思ぼされて、女の寐たる樣にて、思ひ亂れ臥したるを、やゝ驚かし給ひて、

時雨にも露にもあらで寐たる夜は怪しくぬるゝ手枕の袖

との給はすれど、萬に物のみわりなく、おぼゆるに、御答きこゆべき心ちもせねば、物も聞えさせで、唯月の影に、淚の落つるを、哀と御らんじて、など答はし給はぬ。はかなき事申し侍るも、心づきなしと思しけるにこそとあれば、いかに侍るにか、心地のかき亂る樣にし侍る。耳にはとまらぬにも侍らずとて、よみ試みさせ給へ。手枕の袖と云ふ事、忘るゝ折や侍りけると、戯れ言に云ひなして、あはれなりつる夜の氣色も、かくのみ云ふ程に、殊にたのもしき人などもなきなゝめりかしと、心苦しう思して、今の間いかゞとの給はせたる、返事

今朝のまに今はひぬらん夢ばかり寐ると見えつる手枕の袖

ときこえたり。

○紅葉の歌

この頃の山の紅葉、いかにをかしからん、いざさせ給へ、見んと、のたまはすれば、いとよく侍るなりと聞こえて、その日になりて、今日は物忌に、とぢこめられてあればなん、いと口惜しう、これ過していかならずと、のたまはせたるに、其夜しぐれ、常よりも木々の木の葉、殘りありげなくきこゆるに、目をさまして、風の前なると、ひとりごちて、皆散りぬらむかし。昨日見でと、口惜う思ひ明したる翌朝、かれより、

神無月世にふりにたる時雨とや今日のながめを飽ず見るらん

さては口惜しうこそと、の給せたれば、

時雨かも何にぬれたる袂ぞと定めかねてぞわれもながむる

とて、まことや

紅葉ばゝ夜半のしぐれにあらじかし昨日山邊を見たらましかば

とありけるを、御覽じて、

ろよやそよなどて山邊を見ざりけむ今朝は悔れど何のかひなし

とて、はしに

あらじとは思ふものから紅葉の散りや殘れるいざ尋ね見む

との給はせたれば、

うつろはぬ常磐の山も紅葉せばいざかし行きてのどのどと見む

愚ならむ方にぞ、侍らむとて、一日おはしましたりしに、障る事ありて、聞えさせぬぞと申しゝを、思ぼしいでゝ、

高瀬船早やこぎ出でよさはることさしかへりにし蘆間分けたり

と聞えさせたるを、思ぼし忘れたるにや、

山邊には車にのりて行べきを高瀬の船はいかゞよるべき

とあれば、

もみぢ葉の見に來るまでは散らざらば高瀬の船のいかゞこがれん

とて、其日も暮れぬ。

和。歌。（家集）

○春

○

春霞たつやおそきと山河の岩間をくゞる音きこゆなり

○
我宿の櫻はかひもなかりけりあるじからこそ人も見に來れ
○
河邊なる處は更に多かるを井手にしも咲く山吹の花
○
花は皆散りはてぬめり春深きふぢだに散るな今暫し見ん

○夏

○
夏の日の足にあたればさしながらはかなく消る道芝の露
○
かざゝじと誰か思はん千早振神のまれ〲ゆるすあふひを
○
手に結ぶ水さへぬるき夏の日は凉しき風もかひなかりけり
○
螢火はこの下草も暗からずさ月の闇は名のみなりけり

○聲きけば暑さもまさる蟬の羽のうすき衣は身に着たれ共

○秋

○朝風にけふ驚きて數ふれば一夜の程に秋は來にけり

○うしと思ふ我身の秋にあらねども萬につけて物ぞ悲しき

○根ごしにもほらば堀らなん女郞花人に後るゝ名をば殘さむ

○鈴蟲の聲ふり立つる秋の夜は哀に物のなりまさるかな

○とも角も散らさぬわざはしてましを一夜ばかりの紅葉なりせば

○冬

○

秋はてゝ今はと枯るゝ淺茅生は人の心に似たりける哉

○

ぬる人を起すともなき埋火を見つゝはかなく明かす夜な〳〵

○

見渡せばまきの炭燒きひをぬるみ大原山の雪のむらぎえ

○

さびしさに煙をだにもたゝしとて柴折りたける冬の山里

○

數ふれば年の殘りもなかりけり老ぬる計り悲しきはなし

九、赤染衛門

母は平兼盛の妻なりしが、衛門を懐胎せしまゝ離縁となり、歸りてこれを生み、後携へて再び撿非違使右衛門尉、赤染時用方に嫁ぎしに、時用これをおのれが子として養ひしかば、その姓をとりて赤染衛門とは呼べるなり。

衛門はじめ攝政關白道長公の妻倫子に仕へしが、後に大江匡衡に嫁ぎたれば、匡衡衛門なども呼ば

れたりとか。

和歌の才に富み、當時和泉式部と名を等くす。後世には赤染衛門の方を却て褒むる人多くある程なれども、衛門の曾てほこりたる色のなき事は、紫式部日記にも云はれたり。

丹波の守の北の方とは、宮、殿などのわたりに、匡衡衛門とぞいひ侍る。ことにやんごとなき程ならねど、誠にゆゑ〳〵しき歌よみにて、萬の事につけてよみちらさねど、聞えたる限は、はかなき折ふしの事も、それこそはづかしき口つきに侍れ。

この一節を見ても、衛門の人となりは知らるるなり。

ある時夫匡衡官よりかへりて、何事か物思はしげなる顔付なりければ、衛門怪みて、何をかさは思ひに沈み給ふると問ふに、この頃藤原公任、中納言を辭せんとして、表文の草稿を當時の名儒、紀齊名、大江以言などに賴みしに晉意にあはずとて、更に我に依賴したり。されど齊名、以言等の能はざる處を、我が駑才いかでか彼の心に叶ふやう書き得べけむ。筆とる身の耻辱げに口惜しく思ひて、かくは心を痛ますぞと答へけるに、衛門暫らく考へていひけるやう、公任卿は、人に誇る性質なれば、祖先の歷々なるに、近年官位停滯して、不平甚しきよしを書き給へ、彼の卿必ず喜ばんと、此に於て匡衡は筆を下しものしけるに、公任果して大に滿足し、直に之を用ゐたり。衛門が才多くは此類也。

傳へいふ、其子擧周曾て重病にかゝり、久しく癒えず。衛門これを憂ひて、住吉神社に祈り、おのが

命を以て代らんことを請ひ、三本の幣を奉りて、之に各和歌一首を附しぬ。其歌の一に曰く、

代らんと祈る命はをしからで

さても別れん事ぞかなしき

其夜白髪の老翁出て來りて、此幣を社内に納むと夢み、後幾もなくして病癒えたりと。至誠よく神を動かしけるにや。

子擧周これを聞きて、いたく驚き、我が病癒えたりとも、二人となき母を殺して何かはせん、とて泣きて住吉の社に母の壽を祈りけるに、神もあはれとや思しけむ、母子ともに、恙なかりしとぞ。

和歌をあつめて赤染衛門集といふ。榮花物語も此の人の作なりと雖も、詳ならず。女あり、江侍従といふ。また和歌を以て知らる。

和　歌（赤染家集）

○春

○長谷に詣でし道にて子日して

思事皆みちすがら子日してみのゝを山の松を引かなん

○

來て鳴かば哀ならまし鶯の花によそなる春もありけり

○

雪をのみ花とは見しか打かへし花も雪かと見ゆる春かな

○

花の色は散るをだに見て散にけり慰めに見ん春の夜の月

○花盛に雨いみじく降し頃

散りやすき雨にやうつる櫻花見るまの色を誰にとはまし

○庭に積もる花の風の吹散すに

散てだに見るべきものを櫻花庭をもさはぐ風のこゝろよ

○

○三月三十日花の散を

惜みにし花の散らずは今日もたゞ春行とところよそに見ましを

○夏

○

珍しく今日聞く聲を時鳥遠山里はみゝなれぬらん

○月のあかき夜

五月雨の空だにすめる月かげに涙の雨は晴るゝ夜もなし

○草の繁きが中に山吹の咲きたりしを

我宿は八重葎かと見し程に八重山吹の花ぞにほへる

○朝顔夕顔植ゑて見し頃

ひる間こそ慰む方はなかりけれ朝夕がほの花もなきまは

○山家卯花

山里の卯の花がくれ時鳥うしろめたきをしかや鳴くらん

○あやめ

五月雨のいつか過ても菖蒲草軒のしづくは玉と見えけり

○六月晦日庚申なりしに

夜もすがら置きける露の涼さは秋のとなりや近くなるらん

○秋

○秋雨の降る日萩の花につけて

妻乞に鹿はしからん秋はぎを雨さへしぼる惜き頃かな

○すゝき多かる野にて

何方に行止らまし花すゝきをちにも招くこちかとも見ゆ

○

花と見て野邊に心をやりつれば宿にて千代の秋は經ぬべし

○嵯峨の花おかしかりけるを見て

秋の野の花見る程の心をば行とや云はん止るとや云はん

○御障子の繪に

堀り植うる草葉に蟲の音を添へて千代の秋まで聲をきかなん

○

起て見る菊のま垣の露の上にこがねの浪の影ぞ移れる

○前女院菊合に

露よりも玉のうてなに菊の花うつろひてこそ色まさりけれ

○

誰にかは告げにやるべき紅葉ばを思ふばかりに見ん人もがな

○

つとにとて折るもみぢ葉も枯にけり嵐のいたく吹きしまきれに

○冬

○

竹の葉に結べる霜のとけぬればもとの露ともなりにける哉

○

霜枯の野邊に朝吹く風の音の身にしむばかり物をこそ思へ

○

神無月有明の空のしぐるゝも又我ならぬ人や見るらん

○打出の濱に雪深く積りたりしに

關越にてあふみ路ところ思ひつれ雪の白濱こゝは何處ぞ

○

あともなく雪降里の荒れたるを何れ昔の垣根とか見る

○戀

○國より云ひおこせし返し

逢見ても別の後のつらさをば只我のみや思ひしらまし

○たのめてれはせずなりにし人に
安らはで寢なましものを小夜更て傾くまでの月を見し哉
○心にもあらぬ事ありて久しう訪れで
跡たにて忘れはつるをつらしとも思はぬ程になりにける哉
○津の國に行て
戀しさに難波のことも思ほにずたれ住吉のまつと云ひけん
○常に逢ふ事も難ければ
我戀は逆さまにこそなりにけれ昔を今になして思へば
○花を見て
去年の春散にし花は咲にけりあふも別るもかゝらましかば

○雜

○雨ふりもの心ぼそし
さらでだに訪ふ人もなき山里に雨にや言をつてんとすらん
○火ともして經よみけるを
消にぬべき法の末にや成りぬらん火をともしてぞ聞べかりける

○大井川に舟こぎ渡るを見て

雨やまぬかげをし渡る高瀬舟をち方人の來るかとぞ待つ

○入相の鐘に心細かりければ

はかなくて來る入相の聲きけど我世つくとは覺にやはする

十、伊勢大輔

大輔は、大中臣能宣の孫にして、父は輔親とて伊勢神宮の祭主なり。よりて伊勢大輔とはいへるなり一條院の御時、中宮彰子(上東門院)に仕へ奉れり。和歌に巧にして、殊に機敏の才に富む。紫式部、和泉式部、小式部等と齊しく數へられぬ。大輔の始めて宮に仕へ奉るや、未だ若かりけるが、關白道長公傍にあり、たまく櫻花を奉るものありけるに、公、筆硯をとりて、大輔に和歌を題せしめたり。大輔筆を取りて直に、

古への奈良の都の八重櫻

今日九重に匂ひぬるかな

と書きたり。公を始め、人々大きにめでたりとぞ。

大輔、後に越前守高階成順の妻となり、いとむつましく、世を過ごしたり。

六條の大貳、堀河の大貳などいふ人は、大輔の孫に當れるよし、宇治大納言物語に見えたり。

みるめこそ近江の海のかたからめ
吹きだにかよへ滋賀の浦風

この歌は、大輔の始めて成順に嫁せしをり、夫、石山にこもりて、音信の無かりし程に、よみやりしが、この歌によりて、益情交こまやかになりけるよし、同物語に見えたり。

○和歌（家集）

○春

○正月一日

蘆もゆる沼の氷はとけたれど行くかたもなき谷の下水

○子日に雪ふる

人は皆野邊の小松を引きに行け今朝の若菜は雪やつむらん

○雲林院の櫻を都のに比べよと人の云へりしかば

白雲のかゝる山邊の櫻花これはこれぞと君に折りける

○夏

○時鳥

聞つとも聞かずともなき時鳥心まとはす小夜の一聲

○卯の花

卯の花の咲ける垣根は白波のたつたの川のゐ關とぞ見る

○さみだれ

いかばかりたこの裳もそぼつらん雲間も見えぬ頃の五月雨

○六月はらひ

水上もあらぶる心あらじかし波も夏越のみそぎしつれば

○秋

○駒むかへ

引つれて來る秋毎に逢坂の山の端出づる望月の駒

○靜かなる有明の月

有明の月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭には

○七月七日

七夕の夜の衣をきたる夜はかへすうらをも知らせずもがな

○鹿

夕霧に妻まどはせる鹿の音や夜寢る時も驚かるらん

○古き家に紅葉散りたりたり

古里はしぐれの木間もるとてや散る紅葉ばを風の吹らん

○冬

○千　鳥

行方は小夜深けれど千鳥鳴く佐保の河原は過きうかりけり

○雪中竹

枝たわみ雪ふりつめばなよ竹の末葉も見えずふしかへりつゝ

○山里の時雨

訪ふ人もなき山里のむら時雨二より三より驚かすかな

○雜

○火佛日同人

諸共にむすびし水はたゝにしを何をかそゝぐ今日の佛に

○あしまの池

うら若き芦まの池の水の色は淺みどりにぞ波は立ける

○笠取山

降らば降れ笠取山の木の下は秋の時雨ももらじとぞ思ふ

○松

昔より名にたかさごの松なれば雲の上まで枝ぞさしける

○池　水

池水の世々に久しく澄ぬれば底の玉藻も光見えけり

○戀

○音せぬ人に冬の末つ方

忘られて年暮れはつる冬草の枯葉は人も尋ねざりけり

○伏見の里の戀

つきもせず戀する人は寐もいらで伏見の里の夜こそ長けれ

○戀

塵つもり床の枕もさびにけり戀する人の寐る夜なければ

○秋來る人に

煙こそたつとも見ゐね人しれず戀に焦がるゝ秋と知らなん

○世の中さわがしき頃久しく音せぬに
なき數に思ひなしてやとはざらんまた有明の月まつ物を

十一、大貳三位

名は賢子（カタコ）、父は左衛門佐藤原宣孝、母は紫式部なり。太宰大貳高階成章に嫁し、後一條院の御乳母となり、三位に叙せられたるを以て、大貳三位とはよべるなり。

三位母に似て詞章艶麗なり。かの狹衣物語は即ち此女の作にして、假に狹衣の大將といふ人を主人公にたてゝものしたるは、母の源氏物語にならひたるなるべし。故にその體裁は略ぼ同じけれども、意匠に至りては、源語に及ばざること遠し。

狹衣は源氏に四十年ばかりおくれて世に出でしが、當時は人々母のおもかげありとて、稱贊かぎりなかりきとぞ。今の世にありても、源氏につぎて人々のもてはやす所なり。

ありま山いなのさゝ原風ふけば
いでそよ人をわすれやはする

こは世に知られたる三位の歌なり。

○龜山の麓（狹衣物語）

龜山の麓に、慈心寺など云ふわたりに、故宮のいかめしき寺建て給ひて、ともすればこもりゐて、不斷の念佛など行ひ給ふを、此秋は御心苦しうて、え渡り給はざりつれば、長月にだに、まぎれなく念佛もして、やがて消え果てんと思ぼしてわたり給ふなり。

葛はひかるゝ松かげの景色も久しう見給はざりつる程に、いとゞさびしさまさりけり。いとゞ枯れはてなん頃ほひ、いかやうにながめ暮し給はんと、見ずなりなん世の事のみ、心にかゝり給ひて、うしろめたう、いみじく思ぼさるゝに、いかでかくしも思はじ、さりともむげに徒らになり給ふべき、御有り樣にあらぬものを、我身の行きまとはん道のほだしは、いといみじかるべきをと、かつは思し慰めつゝ、四十九日初め給ひて、日々に尊くあはれなる事どもを、きゝ給ふまゝに、などて年頃もたゞとくかやうになりて、罪を少し失はざりつらんと、くやしければ、苦しきもせちに念じつゝ、行ひ給へど、露よりも先にやと見ゆる折がちになりまさり給ふ。大將は日毎に、いと懇にとぶらひきこえ給ふを、ありがたき嬉しき御心と、喜びきこえさせ給ふに、みづからも忍びて渡り給へり。宰相もあからさまに京に出で給ひけり。

廿日なれば月さへ遲く出る頃にて、ことゝふべき垣根の覺束なければ、こゝかしこと佇みつゝ、見めぐり給ふに、いと大なる堂ども、あまたありて、三昧つとめ行ふけしき尊げにて、僧坊ども數多續き

などはせで、こゝかしこ竹の林ばかり、をぐらうなしつゝ、長き世の住居と思ひたるも、目とまりてあはれに、うらやましくぞ思ぼさる。山より僅かに落ちくる水を、ほの〴〵竹の樋どもを、蜘蛛手にまかせやりつゝ、待ちうけたる樣も、氷のくさび固めたらん頃ほひは、いかゞと心細げなるさま限りなし。居給へる處と見ゆるは、寺よりは少しのきてぞありける。帶にせる細谷川の音さやかに流れて同じき岩のたゝずまひも、心あるけしきしるく、時をりふしの花紅葉の木々ども、數をつくしたると見えて、見どころ多くぞなされたりける。されど淺茅が原も、殊に尋ぬる人もなかりけると見えて、心のまゝに色をつくして、亂れあひたる草前栽どもに、露の白玉と心得て、蟲の音も外よりは耳のいとまなかりけり。軒を爭ふ八重葎も、げに人こそ見えね秋來しけしきは、とく知られぬべかりけり。稻葉の風も耳近くは聞習ひ給はぬに、稻負鳥さへれとなふに、さま〴〵に樣かはりたる心地して、物れぼろげなり。

されど此處には、人あるけしきもせで、九躰の阿彌陀おはする御堂に、やがておはするなりけり。堂のかざりなど、極樂もかくやと思ひやられて、いときらゝかに、貴かりけるを、など今迄見ざりつらんと口惜し、坊どもに小法師ばらの、物ずんじなどする聲ばかりは、ほのかにきこえて、例ならずわづらふ人のあたりとも覺えず。靜に心細げなり。懺法阿彌陀經などの聲ばかりぞきこゆる。人のこゝろする處によりて、通季かくなんと、きこえさすれば驚き給ひて、やがて臥し給へる母屋の御

簾のまへに、しとね打しきて入れ奉り給へり。月はなけれども、星の光ばかりさやかなるに、軒近ういたくたど〳〵しき程にもあらねば、大方御容体うちふるまひ給へるさまなど、あなめでたと見ゐ給へるに、風に從ひくゆり入たる匂ひさへ、げにこそなべての人にはまさりけり。よろづ思ひやり聞ゆるよりも、今少しめでたくはづかしげなる、御ありさまをもやなど、思ひよりけるに、れほけなくいとつゝましく覺ゐらるゝものから、又かゝらん人をこそ年に一夜のわたりにても、待ちつけ見るべかりけれ。見つる世になどで、はか〳〵しき御ありさまに、もてなしきこえずなりぬらんと、苦しき御心地にも、いとゞ胸さわぎまさりて、せちに頭もたげて尓見やり給ふ。

十二、相模

相模は、源賴光の女なり。後冷泉天皇の時、入道一品の宮の女房にて、名を乙侍從といへり。相模守公資と深く語らひて、終にその妻となれり。歌人として世にその名高し。

順德院の八雲御抄に、

女の歌にては、赤染衛門、紫式部、相模などは、昔にも耻ぢざる歌人なり云々

又十訓抄に

大江公資、大外記を所望しける時、僉議ありて、拜任よろしかるべきよし、諸卿定め申されけるに、彼のおとゞの意見に曰く（彼のおとゞとは、小野宮右大臣實資をいふ）公資は相摸を懷抱して秀歌案せん程に、公事を闕如云々。

とあるにても、相摸の有名なる歌人なりし事は知り得べきなり。

一説に、相摸は大江公資の女にて、從三位濟政の室となれりといへるは、いかゞあらん。

○家の集の内

いと我ればかりとのみおぼゆる、あつさのろまに朽ちはてける深山木を、いかばかりこ高き影もやとたのみし折りは、殘りゆかしう、花紅葉雨風につけても、おのづから散る言の葉を、書き置きたらば、みくづによらんながれ成とも、あさき方にやと、せきとゞめてしを、あいなう袖に、涙のかゝりける身にと、思ひしられはてぬるを、さしもおもなき事を、いまさらに心もなき、水ぐきの、あとにまかして、あらはしてむも、いとうしろめたけれど、けふや我がよとのみ、物あはれなる、露の命にもおくれ、世の中に、若し思ひ出でん人もあらば、人しれぬ形見ともなれかしとて、しのびもはてずなりにける、昔のことをば、忘れはてにければ、今からのをだにもと、思ふほどもなほ古めかしき。

和。歌。

○春

○

鶯の鳴く音の空になかりせば都の人をいかで見ましや

○

其方と行末しらるゝ春ならば關すゑてまし春日野の原

○

霜かれん程も遠げに見ゆる哉今もえいづるにはの若草

○

外よりはのどけき宿の庭櫻風のこゝろも空によくらし

○

澤水に蛙なくらん山吹の花の盛りはつきせざらなん

○夏

○

綠なる松にかゝれる藤浪はむらごの糸と見ゆるなるべし

〇
下にのみくゆる我身は蚊遣火の煙ばかりを事とやは見る

〇
涼しさを尋ね來つれば蟬の聲きくに木影のありがたき哉

〇
うくて世にふる野の沼の菖蒲草ねかくる袖は乾くまもなし

〇
みたらしに夏越の秡する人を見るに我さへ賴もしき哉

〇秋

〇
一重だにあつかりつるを夏衣重ね着るまで秋風ぞ吹く

〇
野邊毎に折りこそつくせ女郞花伏見の里はむぐらはふまで

〇
淺茅原野分にあへる露よりも尙ありがたき身はいかにせん

○
雲井まで故里こふる秋の夜は𠂉の涙やつゆけかるらん

○
赤かりし紅葉の色も散りぬれば秋の別ぞ悲しかりけり

○冬

○
蟲の音も秋すぎぬれば草むらにこり居る露の霜結ぶころ

○
初霜は處わかずや置つらん移ろひろむる菊のまがきに

○
都にも初雪ふれば小野山のまきの炭がまたきまさるらん

○
冬河のをしの浮寐やいかならん常の床だに冴ゆる霜夜に

○
煙たつ富士の高嶺に見る雪は思ひの外に消えずぞありける

○
埋火をよそに見るこそ悲しけれ消ゆれば我も灰となる身を
○
數ふれば年の終りになりにけり我身の果ぞいとゞ悲しき

○戀

○
かきすつる蜑のたく繩打はへて物なげかしく思ほゆる哉
○
思ふこと鳴門の浦に拾ひつゝかひありけりと知らせてしがな
○
日のもとの山となる迄積るとも言の葉見れば誰かいとはん
○
波のこす松は色こそまさりけれ淺く賴むな思ひそめてき
○
まどろめばさめぬる夢の世なれども嬉しき事を見るよしもがな

清めつゝ書きこそ流せ水莖のしるしも早くあらはれよとて

○

十三、菅原孝標女

菅原道眞公六世の孫なる、右中辨菅原孝標朝臣の女、母は陸奥守藤原倫寧朝臣の女、右大將道綱の母の妹なり。はじめは祐子内親王家の女房にして、後に信濃守橘俊通の妻になり、肥後守仲俊を生めり。

兄あり和泉守定義といふ。紀傳の道を業とし、令聞父祖に耻ぢざる人にして、北野本殿七座の内の和泉殿といふは、この人の事なりとぞ。更科日記はこの女の手になりしものなるが、書中、康平元年にありし事どもを載せたれば、後冷泉天皇の末つ方に、筆を起しゝものなるべし。即ち紀元一千七百十餘年にして、今を距る八百四十餘年前の頃なり。

更科日記と名つけしは、夫俊通、天喜五年信濃守となりて任國に赴き、其後康平元年、京師に歸りて身まかりしに、ある夜、甥のきたりしかば、

月もいでゝ闇にくれたる姨捨に

何とてこよひ尋ねきつらん

と詠めりし事、終のかたに見ゆ。この歌などよりや、負せつらんといふ説あり　更科姨捨は、ともに信濃の地名にして、月の名所なれば、或はそのちなみにて、かくは名付けしならん。

孝標女、幼き時より好みて物語類を繙き、片田舍に生ひ立ち、書を得る事、容易ならざりしかば、藥師佛を作りて、物語の世にあるかぎりを見せ給へと祈りしとぞ。叉伯母なる人の田舍より都に上りたる所にわたりて、こゝかしこにて物語書を買ひあつめ、何くれの物語をやがて、一ふくろ得て歸り、ひるは日ぐらし、夜は夢のさめたるをり〳〵讀みたりしなど其の心掛の深かりし程知るべし。

此日記の外に、

夜半の寐覺、三津の濱松、みづからくゆる、朝倉、

などの著述あり、されど今の世に傳はれるは、夜半の寐覺五卷、三津の濱松四卷、の寫本あるのみ、そのよみたる歌、新古今集より後新拾遺集までに、十四首入りたり。いづれもすぐれてめでたし。

更科日記の一節

其春いみじう、さわがしうて、まづ里の渡りの月かげ、あはれに見し乳母も、三月朔日になくなりぬ。せん方なく思ひなげくに、物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく泣きくらして、見いだしたれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花殘りなく散りみだる。

散る花も又こん春は見もやせん
　やがて別れし人ぞこひしき

又きけば、侍從の大納言の御女、なくなり給ひぬなり。殿の中將のおぼしなげくなる樣、我れものゝ悲しき折なれば、いみじく哀なりと聞く。のぼりつきたりし時、これ手本にせよとて、此姬君の御手を取らせたりしを、さよ更けて寐ざめざりせばなど書きて「鳥部山谷に煙のもえたゝばはかなく見えし我と知らなん」と、云ひしらずをかしげに、めでたく書き給へるを見て、いとゞ淚をそへまさる。かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めんと、心ぐるしがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰み行く。紫のゆかりを見て、つゞきの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。されど未だ都なれぬ程にて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく覺ゆるまゝに、此源氏物語一の卷よりして、皆見せ給へと、心の內に祈る。親の太秦にこもり給へるにも、こと事なく、この事を申して、いでんまゝに、此物語見はてんと思へど見えず。いと口惜しく思ひなげかるゝに、叔母なる人の、田舍よりのぼりたる處に、わたりたれば、いとうつくしうおひなりにけりなど、あはれがり珍らしがりて、歸るに、何をか奉らん、まめ〳〵しきものは、まさなかりなん、ゆかしくし給ふなる物を奉らんとて、源氏の五十餘卷、櫃に入りながら、在中將、とほ君、せり川、しらゝ、あさうづ、など云ふ物語ども、一袋とり入れて、得てかへる心地の、うれしさぞいみじきや。はしる〳〵僅かに見

つゝ心もえず、心もとなく思ひし源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内に打臥して、ひき出でつゝ見る心地、きさきの位は何かはせん、ひるは日くらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、是を見るより、外の事なければ、おのづから、名などは、そらにおぼえうかぶを、いみじき事に思ふに、いと情げなる僧の、黄なる地の袈裟きたるが來て、法華經五巻を、とく習へと云ふを見れど、人にも語らず。ならはんとも思ひかけず。物語の事をのみ、心にしめて、我はこのごろわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじう長くなりなん。光源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそ、あらめと思ひけるこゝろ、まづいとはかなく淺まし。

五月朔日ごろ、つま近き花橘の、いと白く散りたるを眺て、

時ならず降る雪かとぞながめまし
花橘の薫らざりせば

足柄と云ひし山の麓に、くらがり渡りたりし木のやうに、繁れる所なれば、十月ばかりの紅葉、四方の山邊よりもげに、いみじく面白く、錦をひける樣なるに、外より來る人の、今まゐりつる道に、紅葉のいと面白き所のありつると云ふに、ふと、

何處にも劣らじ物を我宿の
世をあきはつる景色ばかりは

十四、待賢門院加賀

ならびなき歌よみにして、秀歌をよみて「ふし柴の加賀」と呼ばれたる人なり。あるとき、

かねてより思ひしことよふし柴の
こるばかりなるなげきせんとは

とよみて年比もちたりけるが、あはれにやさしき歌なり。同じくは、さるべき人に、わりなく契りて、それに忘られたらん時によみてこそと思ひ居たりけるに、折しも、花園の大臣に思はれて、さしも睦まじかりけるを、程なく忘られてたゞ〳〵になりしかば、いざこの時よとて、この歌かきて贈りければ、大臣限りなく、感じ喜びあはれがり給へりとぞ。藤原の俊成卿、この歌を撰びて千載集の中に入れられたり。これより世の人、待賢門院の加賀を、「ふし柴の加賀」とぞ云ひける。

○和歌

○春

○なほ寒き

山陰の伏屋は春もしらねばや軒端の垂氷とくる間もなき

○若菜

山賤の柴の垣根のうちはせみ摘る若菜のほともなきかな

○柳

山賤の園生にかこふうきしはの絕間に見ゆる青柳の糸

○垣へだてたる花

飽ず見る梢の花し中垣のこなたに散らす風も吹かなん

○すみれ

行きやらで心のとまる春の野に暫し菫の花やつまゝし

まど近きま垣の中に咲をころつぼ菫とは云ふべかりけれ

○霞

霜枯てあらはに見えし芦の屋の小屋のへだては霞なりけり

○夏

○時鳥

時鳥雲井に過る一聲は空耳かとぞあやまたれける

○山吹

咲にけり苗代水にかけ見えて田中の里の山ふきの花

○五月雨

瀨を早み駒ひきなへし安河に船渡りするさみだれの頃

○あやめ

こやの池に生ふる菖蒲の長き根は引く白糸の心地こそすれ

○苗代

苗代はおのがひき〳〵急ぐとも秋のたのみの定めなき哉

○

何とかは急ぎもたゝむ夏衣うき身をかふる今日にしあらねば

○秋

○鹿

さを鹿の妻こふる音におぢきなく我さへ袖をぬらしつる哉

さらぬだに夕べさびしき山里の霧のまがきに小鹿なくなり

○萩

露しげき花色衣かへるとも又も來て見ん野邊の秋はぎ

○虫

露しげき野邊にならひてきり〴〵す我が手枕の下に鳴くなり

○月

長き夜の月を思へば月影の傾ふく方にすむ心かな

住むかひのなき世の中の思出は浮雲かけぬ秋の夜の月

○露

はかなさを我身の上によそふれは袂にかゝる秋の夕露

○

立田姫唐（もろこし）までも通へばや秋の梢のからにしきなる

○冬

○時雨

かき曇り時雨は音もなけれども名殘にふるは木の葉なりけり

人も來ぬ深山の里に音するはたそがれ時のしぐれなりけり

○千鳥

あみかくる佐保の川瀬に立つ千鳥又いづ方へ鳴渡るらん

汐のみつ磯邊の千鳥涙なれて共に立ちぬる聲ぞきこゆる

○

芦そよく汐風寒みかたしきの入江を傳ふあぢのむら鳥

○雪

降雪に園のなよ竹折れふして今朝は隣のへだてなきかな

○

昔など年の終りを急ぎけむ積もれは老となりぬるものを

○

世を怨み身をなげきつゝ明暮にとしも心もつきはてにけり

○戀

斯くとたに云はぬに茂き亂れ芦の如何なるふしに知らせそめまし

○

荒磯の岩に碎くる涙なれやつれなき人にかくる心は

夢の事見しは人にも語らぬに如何に違へて逢はぬなるらん

○

見るめなみ懸ける間もなき袖の浦に忘貝をばねこそ拾はね

浦かへり岩間の水のいはゞやと思ふ心をいかでもらさん

〇

深くのみ契りし事を思ひ出では音はしてまし山河の水

〇神

頼めずはうき身のとがと歎きつゝ人の心を怨みざらまし

〇佛

色々にうき身を祈る幣なれば手向る神もいかゞ見るべき

〇無常

長き代に迷ふさはりの雲晴て月の御顏を見るよしもがな

夢の世を驚きながら見る程は只まぼろしの心地こそすれ

十五、源經信母

經信の母は、權中納言道方卿の室なり、子經信はよく世人の知れる所にして、和歌に巧みなり。承暦の初め、正二位に進み、永承の初め、民部卿を兼ね、尋で權大納言兼皇后宮大夫に轉ず、嘉保元年太宰權帥と爲り、二年府に趣く、路に筑前莚田驛に宿す、折しも八月十五夜にて空清く澄み渡れり。驛

邸に大なる槻樹の月を蔽ふありければ、經信人をして之を伐らしめ、終夜琵琶を彈じて朗吟したりし事、よく人口に膾炙せり。凡そ經信の風致かくの如し。朝廷の和歌會には、經信與からざる事なく、或は判者となり、或は序者となれり。かゝる子を擧げたる母の喜びやいかなりけん。經信が琵琶に巧みなりしは、母より傳へられしにや。母は琴琵琶の妙手にして、多くの弟子を持ちたる人なりき。その歌集を、經信卿母集といふ。群書類從の中に入れられたり。

和。歌。（家集）

○石山にて夜一夜水鷄なく

暗くとも心易くもあけじかしいかに岩戸を叩くくひなぞ

○近き處の花散るを惜しむ

梢ゆゑとなりの花を折らん哉さかしらなりと風や思はん

○時鳥の鳴かぬと人の云ふに

衣ころかたらひしはや時鳥よに我宿はすぎしとぞ思ふ

○彌生三日、小さき家に桃の花を見て居る、

馬にのれる人。

賤の女の園生にたてる桃の花すけるなこれを植てみけるは

○清水にこもりて、時鳥の鳴く

いかでこの山時鳥語らはん尙我が宿に尋ねてもこと

○朝まだき人の行きかふを見て

あけぬるか川瀨の露の絕間よりをち方人の袖の見ゆるは

○秋のくれ方、すゝきの招く

我宿のまへわたりする秋ならば垣根のすゝき招き止めよ

○師走のつごもりに、箱のふたに、雪山

をつくりて、つもりけりと云ふに

降りおほふ箱根の山の白雪も春のあけばやいかゞとぞ思ふ

○霜月神まつる處に、榊さす、

常盤なる山の榊を折りとりてかはらぬ宿のしるしにはさす

十六　讃岐典侍

傳詳ならず、たゞ一冊讃岐典侍日記といふがあり。この書は、紀元一千七百四十年代、堀河天皇に奉仕せし時の記なり。

嘉承二年五月、堀河天皇御惱の事より筆をおろして、遂に其崩御の事に及び、翌年鳥羽天皇の御即位より、大嘗會の事までの概略を記せるなり。
文中、堀河院病重らせ給ひて、しば〳〵苦ませ給ひし事など、細々とかきたるは、現に見奉るが如く、いと悲しともかなし。また崩御の際まで、遂に醫師をめし給はず、僧徒のみをして、祈らせたまひたりし當時のさま、及び鳥羽天皇の幼少にして、御位に上り給ひし事など、正史と互に見くらべたらんには、大に發明する事あるべきなり。

御神樂のさま　(典侍日記)

御神樂の夜になりぬれば事の樣、内侍所の神樂に違ふことなし。これは今少し今めかしく見ゆる。皆人たち小忌の姿にて、赤紐かけ、日かげの糸など、なまめかしく見ゆるに、挿頭の花のありさま見るに、臨時の祭見る心地する。皆座につきて、れの〳〵すべき事ども、とり〳〵にせらるゝに、殿も本末の拍子とり給ふぞうるはしき。緋の裝束なる殿は、今すこし人だちの座よりは、あがりて御さじきなれば、それに居させ給ひたり。使のかざしの花、さゝせ給ひたる見るに、さま變りてめでたき。本の拍子、按察中納言の子の、中將のぶみち、琴、そのれとゝの、備中の守これみち、篳篥、安藝の前司つねたゞ、數多居たれども事長ければかゝず。斯くて御神樂初まりぬれば、本末の拍子の音、さば

かり多きに、高き處にひゞきあひたり。聲きゝしらぬ耳にもめでたし。御神樂やう〳〵はで方になると聞ゆ。千歳々々萬歳々々と謠ふこそ、天照神の岩戸にこもらせ給はざりけむも、理ときこゆ。我君のかくいはけなき御齢に、世を保たせ給ふ、伊勢御神も、守りはぐゝみ奉らせ給ふらんと、位保たせ給はん年の數そひ、末は長井の浦のはる〳〵と、濱の眞砂の數つきぬべく、みもすそ川の流れ、いよ〳〵久しく、位の山の年へさせ給はん、誠に白玉椿、八千世に千代を添ふる春秋まで、四方の海の浪の音靜かに見えたり。かくて、御遊びはてがたになりぬれば、殿御琴、治部卿もとつな、琵琶法師もとの如く宗忠中納言、笙の笛内大臣の御子の少將、まさたゞ、笛、篳篥、もとの人々御つかひにて、殿の御聲にて、萬歳樂いだせと、我打ちそひさせ給ひ、ふたかへりばかりにて、あなたふと、伊勢の悔など、みだれ遊ばせ給ふ。宗忠の中納言拍子とりて出だす。事はてぬれば、皆裝束ぬぎかへさせ給ふ。殿の御琴の音、つま音なべてならずめでたし。皆人々祿肩にかけて立つに、殿は入には、今一きは增り參らせて、御下襲、褐御衣かたにいだかせ給ひたるを、見まゐらすれば、三笠の山にさし出づる、望月の世々を經て、すみのぼらん樣に見ゆ。

女流作歌（三代集）

春の部

○題しらず　　典侍洽子

散るはなのなくにしとまるものなれば我鶯に劣らましやは

○春の初の歌　二條后

雪の内に春は來にけり鶯の氷れる涙今日やとくらん

○心地そこなひて、風にあたらじとて、おろしこめて侍りける間に、折れる櫻の散り方になりけるを見て讀る、　よるか

たれこめて春の行末も知らぬ間に待し櫻もうつろひにけり

○戯れにける男の許に、庭の木の枯れたりける枝を折て遣はしける　兼覧王の母

萠え出る木の芽を見てもねをぞなく枯にし枝の春を知らねば

○朱雀院の櫻の面白き事を延光朝臣の語り侍ければ昔を思ひ出で　大將御息所

咲さかす我にな告そ櫻花人づてにやは聞かんと思ひし

○贈太政大臣相別て後、或る處にてものこゑを聞て遣はしける　顯忠朝臣母

鶯のなくなる聲は昔にて我身ひとつのあすも有かな

○あがたの井と云ふ家より　橘公平女

都人きても折らなん蛙鳴くあかたの井どの山吹の花

○女とも花見んとて野邊に出てゝ　因香

○子にまかり後れて侍ける頃東山にこもりて　中務

咲ば散る咲ねば戀し山櫻おもひたえせぬ花のうへかな

○承平四年中宮賀し給ひける時の屛風に　齋宮内侍

春の田を人にまかせて我はたゞ花に心をつくるころかな

○天暦御時歌合に　小貳命婦

足引の山かくれなる櫻花散りのこれりと風にしらるな

夏の部

○題しらず　更衣三條町

ややや待て山郭公ことづてむ我れ世の中に住みわびぬとよ

○　某女

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えず雲隱れつゝ

○五月長雨の頃久しくたえ侍りにける

女のもとにまかりたりければ　某女

つれ〳〵とながむる空のほとゝぎすとふにつけてぞねはなかれける

○寛和二年内裏歌合に　道綱の母

都人ねてまつらめや郭公いまぞ山邊を鳴ていづなる

○題しらず　中務

夏の夜の心をしれる郭公はやも鳴かなん明もこそすれ

秋の部

○母の服にて里に侍りけるに先帝の

御文賜ひける御返事に　　近衛更衣

五月雨にぬれにし袖にいとゞしく露置そふる秋の侘しさ

○相しりて侍ける男の久しうとはず

侍ければ長月ばかりに遣はしける　　右近

大方の秋の空だに侘しきに物思ひそふる君にもあるかな

○　　平伊望朝臣女

秋ふかみよそにのみ聞く白露のたが言の葉にかゝるなるらん

○かれりける男の秋とへりけるに　　あこぎ

とふことの秋しもまれに聞ゆるはかゝりにや我を人の頼めし

○長月のつごもりの日、紅葉をおこせ

て侍りければ　　ちかぬが女

宇治山の紅葉を見ずば長月の過ぎ行く日をも知ずぞあらまし

冬の部

○親の他へまかりてをそくかへり

ければ遣はしける　某　女

神無月時雨ふるにも暮るゝ日を君待つ程はながしとぞ思ふ

○式部卿敦實のみこに忍びて通ふ所侍けるを後々たかくになり侍ければ妹の前齋宮のみこの許より此頃は如何そとありければ其返事に　某　女

白山に雪ふりぬれば跡たえて今は越路に人も通はじ

賀の部

○東宮の生れ給へりける時まゐりてよめる　典侍因香

峯高き春日の山に出る日は曇る時なく照らすべらなり

○父の宰相の爲に賀し侍りけるに、玄朝法師のもから衣くつかはしければ　典侍明子

雲分る天の羽衣打きては君が千とせにあはざらめやも

○院の殿上にて宮の御方より碁盤い
だきせ給ひける　命婦清子

斧の柄の朽ちんもしらず君が代の盡ん限りは打心せよ

○承平四年中宮の賀し侍りける時の
御屏風に　齋宮内侍

色かへぬ松と竹との末の世を何れ久しと君のみぞ見ん

羇旅離別の部

○東の方より京にまうで來とて道にて　益成の女

山かくす春の霞ぞうらめしき何れ都のさかひなるらん

○小野千古が陸奥の介にまかりける時
に　千古が母

たらちねの親のまもりと相そふる心ばかりはせきな止めそ

○常陸へまかりける時、藤原のきみとしに讀みて遣はしける　寵

朝なげに見べき君とし賴まねば思ひ立ちぬる草枕なり

○源實が筑紫へ湯あみむとて、まかりける時、山崎に別を惜みて　筑紫遊女白女

命だに心に叶ふものならば何か別のかなしからまし

○信濃へまかりける人にたきもの遣はすとて　するが

信濃なる淺間の山ももゆなればふしの煙のかひやなからん

○京に侍ける女因幡國へまかりければ　某女

打すぞく君もいなばの露の身は浮ぬばかりぞありと賴むな

○　同

唐衣たつ日をよそに聞入はかへすばかりの程も戀しき

○丈則か女の陸奥國へまかりけるに遣

はしける　　藤原滋輔女

君をみの忍ぶの里へ行ものをあひづの山のはるけきやなぞ

○天暦の御時御めのと備後が出羽の國

にまかり下りける贐に　　御めのと少納言

惜むともたしや別心なる泪をだにもいやはとゞむる

○同　　女藏人三河

東路の草葉をわけん人よりもおくるゝ袖ぞまづは露けき

○源弘景ものへまかりけるにさうぞく

給ふとて　　三條太皇大后宮

旅人の露拂ふべき唐衣まだきも袖のぬれにけるかな

○題しらず　　源兼澄女

命をもいかならんとは思ひこし生て別るゝ世にこそ有けれ

○物へまかる道にて厂の鳴ければ　　しのぶ

草枕我のみならず雁金も旅の空には鳴き渡りけり

哀傷の部

○藤原忠房が昔し相知りたる人のみまかりける時に　閑院

さきたゝぬ海の八千度かなしきは流るゝ水の返り來ぬなり

○時望の朝臣みまかりて後、はての比近く成て、人の許より如何に思ふらんと云ひおこせたれば、　時望朝臣の妻

別にし程をはてとも思ほえず戀しき事のかぎりなければ

○右大臣とのへ返し　內侍のかみ

結び置したねならねども見るからにいとゞ忍の草を摘む哉

○法皇の御服なりける時に緋色のさいてに書て人に送り侍る　京極御息所

白波のこきもうすきも見る時はかさねて物ぞ悲かりける

○先坊失せ給ひての春、大輔につかは

しける、　玄上朝臣女

新玉の年こはつらし常もなき初鶯の音にぞなかるゝ

〇同し年の秋　同　女

諸共になきゐし秋の露ばかり語らん物と思ひかけしや

〇人をなくなして限なく戀ひて、思ひいりて寐たる夜の夢に見えければ、思ひける人にかくなん　同　女

時の間も慰めつらん覺ぬまは夢にだに見ぬ我ぞかなしき

〇天暦御門かくれ給て、又の年五月五日に、宮内卿かねみちが許に遣はしける　女藏人俑庫

さ月きてながめまされば菖蒲草思ひ絕にし音こそ鳴かるれ

〇大納言朝光が女の女、みまかりかくれにける事をきゝ侍りて　共政朝臣の女

我のみや此世は憂しと思へども君を歎くと聞そ悲しき

○むすめに後れて　　　　中務

忘られてしばしまどろむ程もなくいつかは君を夢ならでみん

○御八講捧物にかねして龜の歌を作てよみ侍りける。　　　　女院

ごうつくす御手洗川の龜なれば法の浮木にあはぬなりけり

○性空上人のもとによみてつかはしける　　　　雅致女式部

暗きより暗き道にぞ入ぬべきはるかに照らせ山のはの月

雜の部

○田村の帝の御時に齋院に侍ける、明子のみこを、母過ちありと云ひて、齋院をかへられむとしけるを、やみにければよめる　　　　尼敬信

大空をてり行く月の清ければ雲かくせとも光り消なくに

○業平の久しく訪れざりければ　業平の母

老ぬればさらぬ別のありと云へばいよ〳〵見まくほしき君哉

○御屏風の瀧落ちたる圖を題にてよめる　三條の町

思ひせく心の內の瀧なれや落つとは見れど音のきこえぬ

○奈良の都に宿れりける時　二條

人ふるす里をいとひて來しかども奈良の都も憂名なりけり

○女どもと物語して別れし後につかはしける　陸奥

あかざりし袖の中にや入にけん我が魂のなき心地する

○帝へ奉りける　嵯峨の后

ことしげし暫しは立てれ宵の間におけらん露は出でゝ拂はん

○　右衛門

我のみは立もかへらぬ曉にわきても置ける袖の露かな

○法皇初て御ぐし下し給ひて山ぶみし給ふ間后を初め奉て女御更衣など一つ院に侍ひ給ひける三年と云ふになん、みと歸りおはしましたりける、昔の事同じ處にて御れくしなふけるついでに

七條の后

言の葉に絶にせぬ露はおくらんや昔覺ゆかまとゐしたれば

○五節の舞姫にても、しめし止めらるゝ事やあると、思侍りけるをさもあらざりければ、

藤原滋包が女

悔しくぞ天津乙女と成にける雲路尋ぬる人もなきよに

○女友達の許に筑紫よりさし櫛を心ざすとて

大江玉淵女

難波潟なにゝもあらずみをつくし深き心のしるしばかりぞ

○女御左大臣にあひにけりときゝて

つかはしける　　　齋宮のみこ

春毎に行てのみ見ん年切もせずと云ふ種は生ぬとかきく

○法皇みぐしれろし給ひての頃　　　七條の后

人渡す事だになきをなにしかも長頁の橋と身の成ぬらん

○里の女の文をかくしけるを見てゑ　　　四條御息所女
のめの書付け侍りける

なたてつる人の心の浮橋を危きまでもふみ見つるかな

○いたく事好むよしを時の人云ふを　　　高津內親王
きゝて

直き木に曲れる枝もあるものをけをふききずと云がはかなき

○御門に奉り給ひける　　　嵯峨の后

うつろはぬ心の深くありければこゝら散花春にあへること

○陽成院の帝時々殿居侍らはせ給け
るを久しう召なかりければ奉ける　　　むさし

數ならぬ身にれく宵の白玉は光のみます物にぞ有ける

○男など侍らずして年比山里にこもり侍ける女を、昔相知りて侍ける人みちまかりける序に、久しうきこゝざりけるを、こゝになりけりと云入れて侍ければ、

土佐

あさなげに世の憂事を忍びつゝ詠めせし間に年は經にけり

○山里に侍けるに、昔相知れる人の、何日より此處には住むと問ければ

閑院

春やこし秋や行けんおぼつかな影の朽木と世を過す身は

○兼忠朝臣母身まかりにければ、兼忠をば故枇杷左大臣の家に、女をば后の宮に侍らはせんと相定めて、二人ながら先づ枇杷の家に渡し送るとて、加へ侍ける

兼忠が母の乳母

結びおきし形見の子だになかりせばなにに忍の草を摘まゝし

○心にもあらぬ事を云ふ頃、男の扇に書

きつけ侍りける　　土佐

身に寒くあらぬものから佗しきは人の心のあらし成けり

ながらへば人の心も見るべきを露の命ぞ悲しかりける

○野宮に齋宮の庚申に侍ける、松風入夜琴と云ふ題をよみ侍ける　　齋宮女御

琴の音に峯の松風通ふらし何れの緒よりしらべ初めけん

○圓融院御時齋宮下に侍けるに母の前齋宮諸共に越に侍りて　　同

世にふれば又も越にけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん

○左大臣の、土御門左大臣の聟になりての後、襪の形を取におこせて侍ければ、　　九條右大臣五女

年を經て立ならしつゝ芦田鶴のいかなる方に跡止むらん

○地獄のかたを書きたるを見て　　藤原道雅女

みつせ川渡るみさほもなかりけり何に衣を脱てかくらん

○伊勢の御息所生み奉りたりけるみこのなくなりにけるが、書を置たりける繪を、藤壺より麗景殿の女御の方に遣はしければ、此繪を返すとて、

麗景殿宮の君

無き人の形見と思ふに怪しきは笑みても袖の濡るゝなりけり

○屏風に法師の舟にのりて漕ぎ出でたる所、

道綱母

渡津海はあまの舟こそ有と聞く乘りたがへても漕出る哉

女流文學史上卷　終

女流文學史下卷

第三期（自紀元千八百五十一年 至紀元二千二百九十年）

武家時代の上

井上頼圀先生校閲　小森甚作 上地信成 合著

總論

かの月卿雲客が、晨に嵐山の花に吟じ、夕に加茂川の月に詠じて、政務の何たるを顧みず、唯榮華驕侈に日を暮したりし平安時代は、一新して玆に源頼朝公の伊豆に起りて、天下の大權を掌握せしより、遂に武家の世とはなりぬ。されば、文學大にその影響を蒙りて、散文、韻文上に著しき變化を見るに至れり。而して、其隆盛の點より言はば、此時代の文學は、遠く前時代に及ばずと雖も、飜つて之を內容より察する時は、漸く全成の功をなさんとしたるが如し。即ち前時代の國文は、恰かも草木の春に逢ひて、花咲きたらんが如く、此時代の文學は、果實のまさに結ばんとするが如し。前者は艶麗にして優雅に、後者は濃褡にして雅美なり。尙ほ前時代と當時代とを比較對照するに、前時代の文學は、貴族の所有物の觀ありしも、當時代に至りては、その區域聊廣大となり、貴族にあらざるものまでも、

また之に與かるに至れり。和文は、前時代は優美愛すべかりしも、此時代は豪强敬すべきの風あり。又物語の文はすたれて、軍記雜史の文起れり。尙ほ注意すべきは、和文中に漢語及び佛語を混交したる文體の益〻時を得し事なり。かゝる有様なれば、平安時代に於て隆盛を極めたりし女流文學は此時に至りて頓に衰へ、たゞ宮中奉仕の女官などによりて、漸く其命脉を保ちたり。

前述の如く、平安時代の文學は、艶麗柔弱なる所謂婦女文學なりしも、當時代の文學は、全く反對にして、戰亂殺伐の風に化せられ、其作れる所皆厭世的ならざるはなし。故に表面は雄健豪爽を扮飾すれども、裏面に於ては悲哀悽愴にして、外形内容共に平安時代と同じからず。其文體に至りては、前にも言ひし如く、優美なる和文に剛壯なる漢語を交へ、巧みに佛語を挿入して、悲愴慘憺の感あらしめ、又同時に切齒の嘆あらしむ。これ全く武人の嗜好に適せんが爲に、なれるものなればなり。此種類の著しきものは、平家物語、源平盛衰記、太平記、謠曲などにして、純然たる和漢混淆文なり。

また浮世の塵に汚れずとて、獨雲水に心をやりたる、隱學者の手に成りて、自から厭世主義に出でたるものは、方丈記、徒然草等なり。これ當時武人は、出陣すれば再び生還を期せざるが故に、無常を感ずる事深く、厭世の情亦厚し。されば、當時武人の意を慰ましむるものには、この種の文學ならざるべからざりしなり。作者茲に意を注ぎ、筆を執りては、天變地妖を記し、佛語を引用しては、無常の哀情を說きしかば、大に時代に適合し、盛に社會に歡迎せられたり。思ふに、武人間に於ては、平

易にして、氣慨あり、流暢にして悲愴なる文體を好めるは、其性質として、素より當然の理と云ふべし。

また足利時代に至りては、草子類盛に流行したり。即ち御伽草子にして、多少滑稽の意を含み、極めて簡單に、昔の勇者の事蹟及び當時の奇談等を記したるものなり。鉢かつき、御曹子島渡り、文正草子、唐糸草子などの類是なり。

和歌は、其體裁は異なりと雖も、政權武門に移りてよりは、大宮人いよ〳〵閑を得、其隆盛却て平安時代に劣らず。勅撰私撰は更なり、百首、千首、歌合など頻りに行はれ、其結果遂に歌學といふ事さへ起りぬ。定家卿の如きその專門家にして、祕傳口授などと稱するより、人々其門に入りて之を學ぶもの多かりき。さて此祕傳口授なるものは、或る方面に於ては、大に發達を妨害せられたれども、又一方に於ては、歌道奬勵の一機關と成りしことも疑ふべくもあらず。

こゝに於て、公卿武家の別なく、歌人の名を得るものは、大抵定家卿の流を汲みて輩出せり。而して、世は戰亂打つゞき、所謂闇黑時代にして、悲慘絶苦の境に呻吟しつゝも、之を蔑視せず、研究志たる爲めに、我國文學上に一光彩を放ち、よく之を德川時代に傳へたるは、豈慶賀すべき事ならずや。

また當時に於ては、短歌の外に七五調を以ていと優美なる、今樣歌盛に流行し、足利時代となりては、室町の特有文學として、今日に傳はれる、謠曲なるもの現はれ、盛に無常觀を謠歌せり。末期に至り

ては、宗祇、宗長の手によりて連歌復興し、和歌と共に公卿及び武人の間にもてはやされたり。さしも悲風慘憺たる、闇黑時代に發生して、將に後世に一道の異光を放つに至らんとするは、實にこの連歌なり。今章を逐うて、いさゝか當時代の文學を詳述せん。

第一章　散文

既に總論にも記せしが如く、平安朝の文學と鎌倉以降の文學とは、性質に於て大なる相違あり。從て散文に於ても、彼は華奢風流の時代なれば、艶麗華美なるを好み、是は幽欝沈痛の時代なれば、悲哀悽捨なるを嗜みたるは、これ當然の理なり。

當時の散文は、軍記物類、物語類、日記及紀行文、又は隨筆等によりて、各其文體を異にし、以て特色を現はせり。思ふに當時社會一般が、彼の難澁なる漢文は避けてこれを顧みず、平易にして流暢に、且つ裝飾せる一種の文を好むに至りしが、これ我國散文の一大變遷時代ともいふべきなり。散文の代表者ともいふべき、平家物語太平記を見るに、巧みに漢語と佛語とを混和して、慷慨悲愴ならざるはなし。而して此文體を以て後世、和漢混淆文の起原となす、此和漢混淆文が漸次調和して德川時代に至り、遂に今日の所謂、普通文なるものゝ基礎を形成したり。以て後世に及ぼせる影響の甚しきを知るべし。

軍記物の平家物語、盛衰記、太平記等は、當時戰爭の有樣を知るの外、事實を敷衍して、花を惜しみ、雨を痛むにも、胸中限りなきの詩想を寄せむとつとめたるより、往々虚飾に流るゝの恐あり。隨筆文なる方丈記、徒然草は、能く鎌倉時代の思想を代表して、悲慘の涙に袖を濡さしむ。是等の文體は、和漢混淆文の上乘なるものなり、又此種の歴史文にして神皇正統記の如き、議論卓絶公明正大なる所、其學ぶべきもの少なからず。然れども、之れ等の著者は皆男子のみにして、全く女流の手をはなれたり。されば今こゝにことぐしく記すは却て煩はしければ、別に節を設けて其概略を記すことゝせり。

第一節　雜史類

此時代に至りて、和文を以て詞語優麗に、歴史を書くこと盛なりき。今世に至るまで、人の多く歡迎するものは、凡そ左の五種なり。

水鏡	三卷	中山忠親
增鏡	十卷	作者未詳
今鏡	十卷	權大納言通親
神皇正統記	六卷	北畠親房
吉野拾遺	四卷	侍從忠房

第二節　軍記物類

當時尤も武人社會に歡迎せられたるは、和漢混交體なる軍記物の類なり。既に記せし如く、軍記物類は、詞調共に佳ならんことを欲し、優麗なる和文に、剛健なる漢語を交へ、加ふるに、處々七五調を以て流麗に文章をあやなし、讀む者をして、悲愴切齒の感あらしむ。されば、武人の嗜好には尤も適したりけん、此類の著書甚だ多し。然れども、これ等は女流文學に直接の關係を有せざれば、只其主要なるもの十種を記さん。

保元物語	三卷	一説ニ葉室時長
平語物語	三卷	一説ニ葉室時長
平家物語	十二卷	一説ニ信濃前司行長
源平盛衰記	四十八卷	一説ニ葉室時長
太平記	四十卷	一説ニ玄慧法師
義經記	八卷	作者未詳
櫻雲記	一卷	作者未詳
曾我物語	二卷	作者未詳
船上記	一卷	作者未詳

應仁記　二卷　　作者未詳

第三節　物語類及び隨筆類

前記の如く、當時の社會は軍記物類を愛讀したりしが、これにつぎて歡迎せられたるは、物語隨筆、草子類なり。中には雜駁なるあり、優艶なるあり、訓誡的なるあり、滑稽的なるあり、何れも柔和なる和文に、剛壯なる漢語を挾みて書けるは、武人社會の嗜好に任せたるなり、今左にその重なる著書を擧ぐ。

古今著聞集　　橘成季
鳴門中納言物語　　作者未詳
四季物語　　鴨長明
十訓抄　　作者未詳
秋夜長物語　　作者未詳
烏鷺合戰記　　作者未詳
庭の訓　　阿佛尼
夜の鶴　　阿佛尼
方丈記　　鴨長明

徒然草	卜部兼好
東齋隨筆	一條兼良
壒囊抄	行譽上人
五月雨記	作者未詳
嵯峨野物語	二條良基
六くさの記	作者未詳
物臭太郎	作者未詳
御曹子島渡り	作者未詳
唐糸草子	作者未詳

等其主なるものなり。

第四節　日記及び紀行

日記及び紀行文の女子の手によりて、表はれたるは、極めて稀に見る處なれども、要するに此種の文體を形成したるは當時の特色にして、平安時代に讓らず、優に新體を開けり。日記の中、殊に名高きは、十六夜日記にして、これに次ぐは、辨內侍日記、中務內侍日記、を初とし、源光行の海道記、同親行の東關紀行、一條禪閤の藤川記、今川了俊の道行ぶり等にして、其他に男子の作として數多あり。

こは皆群書類從及び扶桑拾葉集、詞林意行集、などに納めたれば就て見るべし。今前者に就て聊か其解題を記さん。

十六夜日記　一卷　阿佛尼

こは有名なる爲家卿の後室、安嘉門院四條（後ニ阿佛尼トテフ）の作なる事は、世人の能く知る處なり。此日記は爲家の歿後、播摩國細千莊を、庶兄爲氏押領せしを、四條は嫡子爲相に與へんとて、訴訟を起し、鎌倉へ下る旅行日記なり。其文又平安の域を脱して、鎌倉文學の性質を表示せり。本書の註釋書として完全なるは、

十六夜日記殘月抄　三冊　小山田與淸

初學の人にも、極めて了解し易く說けるは、

十六夜日記講義　一冊　三木五百枝

等あり。

辨内侍日記　二卷　中務内侍

中務大輔信實の女、辨内侍の日記にして上下二卷あり。上卷は後嵯峨帝、寬元四年正月廿九日、富小路殿にて御讓位の事より書き初め、寳治三年建長と改元ありし迄の事を記し、下卷には同年十一月より、四年十月迄の事を記せり。近年博文館より出せし、文學全書中には之を納め且つ頭註をもほどこ

して世人に閱讀の便を與へたり。

中務內侍日記　一卷　中務內侍

本書は宮內卿永經の女、中務內侍の日記にして、其初め後深草帝を忍び奉ることより書き初めて、伏見帝の正應五年迄の間、自身の禁中にありて、所々の御幸に供奉せし時の樣など詳しく記せり。中にも、伏見帝御即位の次第など書せるいと珍らし。本書も文學全書中に納めたれば閱讀の便あり。

うたゝねの記　一卷　阿佛尼

以上女流の手になりしものなるが、男子の手になりしものに至りては、其數甚だ多く、殆ど枚擧するに遑あらず。

第二章　韻文

鎌倉の初期に至りては、一種奇拔なる和歌發生せんとせり。そは實朝卿の「武士の矢なみつくろふ小手の上に霰たばしる那須の篠原」てふ歌の類なり。こゝに於て、平安朝の如く華麗なる女流の詞花は遠ざけられたれども、歌を尊む風は益々隆盛を來せり。然るに間もなく、定家、家鄉など勅を奉じて、新古今集を撰むや、大方奇拔なる調を避け、詞調の優麗にして、思想の幽遠なるをのみ取りしかば、全く新古今集は虛飾なる歌のみを以て充たされたり。然して、定家流の和歌勢を得るや、大に新古今

を崇拜するもの出で、當時盛に歡迎せられしかば、人々競ひて古今集を捨て、新古今集を學ぶもの多きに至り、一時發生せんとせし、奇拔なる和歌は全く跡を絶ち、毫も氣力なき歌風を構成したり。故に次で出でし續拾遺、新後撰、玉葉、續千載等又見るべき歌なきは、ことわりなり。

足利時代に至りては、二條、京極、冷泉家、など歌界を掌握し、これを以て職を世々にするに至り、秘傳口授てふ事出で、一定の範圍を設けしかば、人々これが爲に束縛せられて、爲めに自由の研究をなす能はず、只徒らに古人の糟粕を嘗めて、趣向も調も新古今集以外に出づるを厭ひしかば、益々氣力なきものとなりたり。然れども此の如き模倣歌は益々流行し、光明帝の貞和中、風雅集の撰定ありし以來、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、など續々あらはれ。又私撰集、家集の如きも盛に世にあらはれて、殆ど二百餘種に達す、此他百首、千首類又少なからず、豈盛なりと云ふべし。

爰に一の注意すべきは歌學なり。定家卿以來一種の學問となりし爲め、如何に秀歌を詠ずとも、一定の法則を脱したるものは和歌にあらず、など云ふ弊風起れり。之が爲め、作家は一字一句、此法則に背かざらん事を計りし結果、歌學書なるもののあらはれたり。其主なるは定家卿の詠歌大概を始として二條良基の近來風體、鴨長明の無名抄、頓阿の井蛙抄、一條兼良の歌林良材集、今川了俊の言塵集等にして、今に至るまで、歌人の座右に供ふるに至れり。

又和歌の外に、謠曲あり。即ち今日云ふ能謠にして、芝居の淨瑠璃などゝ同じく、能を舞ふ時に使用

する一種の章曲なり。これの盛なるに從ひてまた狂言なるもの發生し、以て德川時代をして、紛々爛熳たる文學の美花を咲かしめたり。尙一言すべきは、當時代の末にあらはれし連歌なり。鎌倉以後和歌が定家卿の手に歸して、規則を守らざれば歌にあらずなど、頗る窮屈なることゝなりたる、その反動として現らはれたるが、即此連歌なり。玆に於て歌人は爭うて連歌の道に趨り、詞も思想も自由を貴ぶに至れり。

第一節　當時の歌體

鎌倉時代は、平安朝の如く華麗なる女流歌人に乏しかりしも、歌道は益隆盛に趣きたり。散文は朝廷の雲客を離れて、山野の隱遁文學者の手に移り、厭世的に流れたりしが、韻文は依然として、雲の上人の手に弄ばれ、代々の天皇亦大に斯道に熱心にして、勅撰の歌集など續々世に出でたり。當時の歌體は如何といふに、詞調整然流暢にして、而かも華美なるは喜ぶべしと雖も、思想に至りては古來千篇一律、他に新想を以て謠はんともせざりしは遺憾とする所なり。蓋し之を上古の質朴單純なる思想に比すれば、歌の體形に潤色を加ふる事に注目するに至れるや明らかなり。概してこの頃の歌人は、或は詩句を譯し、或は佛語を題として、詠出する事をつとめ、或は萬葉集古今集中の歌を作り代へ、或は二首の意を調和して一首に讀みなす事などを頻に試みたり。但し武人にして文學を兼ねたるものには、氣骨ある歌少なからず、即ち源實朝公の如きは其一例なり。

新古今集の歌は、古來風雅優艶を以て賞讃せられ、苟くも和歌に志あるものは必ず一冊を座右におかれくといふ程なるが、思ふに之は當時歌人社會に於て愛讀せられしものなれば、之によりて嗜好の歌風を知るべきなり。又漢文漢詩を本として、之を飜詠し、佛語を譯して歌ひし証據などをも、明らかに認むる事を得べし。新古今以下の集に至りても、其詞調千篇一律にして、新古今集以外に進歩を見ざるは、吾人の以て遺憾とする處なり。

第二節　勅撰集

前述の如く當期は、定家以來一定の模型に箝束せられ、歌道遲滯したりと雖も、公卿文學として因襲の久しき、尚其遺風を守りて、之が奬勵をつとめしかば、女流作家は平安の比にあらねど、男子に在ては、名家續々あらはれ、遙に平安時代を凌駕せり。さればにや、土御門帝の建仁以後、二百年の間に於て、新古今集以降、十三代集の撰さへありたり。今順次に其解題を記さん。

新古今和歌集　二十卷四本　本書は土御門帝元久二年三月、後鳥羽院の宣によりて、參議通具、大藏卿有定、右近中將定家前の上總介家隆、右少將雅經の五人鳥羽の離宮に侍りて撰進せしものなり。本集四季、賀、哀傷、別離、羇旅、戀、雜、神祇、釋敎、に區分し千九百八十八首の歌をのせたり。本書は、古今集時代と全く其趣を異にし、詞遣は益々華美となり、躰形は益々潤色を事とするに至て全く製作物となれり。併し句を轉用し、助辭を省けるなどは、本書の特色ならん。後世歌人の寳典と

なれるもかゝる點にやあるならん。

美濃の家裹　五卷　本居宣長

元來本居翁は、古今集崇拜者なれば、新古今には余り力を入れざりしにや。往々說明の誤れる所なきにしもあられど、先づ本書通解としては寶典なりと云ふべし。

美濃の家裹折そへ　同

尾張の家苞　五卷　石原正明

此書は美濃の家つとを駁したるものにして、共に合せ見るべきものなり。

新古今集詳解　塩井正男

新勅撰和歌集　二十卷二本　後堀河院の宣により、貞永元年十二月藤原定家の撰進せるものなり。部類を別つ事、前代の集に異ならず。歌數は拾芥抄に、千三百七十一首と記せり。註釋書としては、二十一代集抄の他に、

未完の書なれども、初學者の爲めには、いと便なるものなり。

新勅撰集抄　八卷　神田正業

續後撰和歌集　二十卷四本　後深草帝の寶治二年七月、後嵯峨院の宣によりて、民部卿爲家撰進し、建長三年十月上奏せし由、拾芥抄に記せり。部類は前集に同じ。歌數は拾芥抄に、千三百六十八

首なりとあり。

續古今和歌集　二十卷三本　龜山帝の文永二年十二月、後嵯峨院の宣により、前內大臣基通、藤原定家、侍從行家、右大辨光俊等、万葉集の內、十代集の外の歌を撰すと、部類上に同じ。歌數千九百七十二首云々と、拾芥抄に記せり。

續拾遺和歌集　二十卷二本　龜山院の宣によりて、文永十一年、前の權大納言爲氏撰す、部類は上に同じ。以下此體なり。歌數は拾芥抄に千六百首なりと。

新後撰和歌集　二十卷三本　伏見院の承安三年、後宇多院の宣によりて、大納言爲世之を撰し、嘉元二年十二月なりて奏上す。歌數拾芥抄に千九百七十首なりと。

玉葉和歌集　二十卷四本　花園院正和二年八月、伏見院の勅によりて、上古以來十三代の外の歌、二千八百三十首(拾芥抄)を撰定して奉れり。撰者は爲家卿の孫にて爲相の子、前大納言爲兼卿なり。

續千載和歌集　二十卷四本　花園院の文保三年四月、後宇多院の宣によりて、權大納言爲世(爲氏の子)これを撰す。歌數は拾芥抄に、二千百二十首とあり。

續後拾遺集　二十卷二本　後醍醐帝の元亨三年七月、綸旨を奉じて、民部卿爲藤(爲家の孫)之を撰せしも、中途にして薨ぜしかば、(元中元年七月十日薨ず)其子爲定後を次ぎ、正中二年十二月之を奏覽に供す。歌數千三百四十三首ををさめたり。

風雅和歌集　二十卷四本　光明天皇の貞和二年、花園帝の親しく撰び給ふ處なり。眞名の序、假名序ともに法皇の御作なりとか、歌數二千二百十首を納めたりと、拾芥抄に見ゆ。

新千載和歌集　二十卷四本　後光嚴帝の延文三年六月、勅を奉じ、同四年四月なりて奏覽す。撰者は大納言爲定なり。本書は二千三百五十首の歌を納めたり。

新拾遺和歌集　二十卷四本　後光嚴天皇貞治二年二月、民部卿爲明綸旨を奉じて撰す。中途にして爲明薨じ、（貞治二年十月廿七日）門弟頓阿法師戀雜の部を撰したりと、本集納むる處の歌數千七百五十八首。

新後拾遺和歌集　二十卷二本　後圓融帝の永和元年六月、中納言爲遠、綸旨を奉じてこれを撰す。これまた中途にして薨ぜしかば、（永德元年八月）十一月爲重、選進すべきの命を持し永德二年三月これを撰進せしも、至德二年二月、爲重敵の爲めに害せられ、再校を得ずして終る。本書集むる處の歌數千五百五十四首。

新續古今和歌集　二十卷四本　本書は最終の勅撰歌集にして、後花園帝永亨の初年、飛鳥井雅親に勅してこれを撰ましめ給ふ、永亨十年八月なりて奉覽せし由、假名の序に見えたり、本書載する所の歌數、二千百四十首。

第三節　私撰集及び家集附百首千首類歌合

和歌全盛を極めし當期の事とて、歌學家なるもの起り、（二條、冷泉、京極、）共に定家の流れをくみて、

斯道に盡せしかば、此の流をくみし歌人に西行、慈圓、家隆あり。兼好、頓阿、淨辨、慶運の四天王あり。二條、京極、冷泉家には、爲氏、爲相、爲世、爲明、爲定などありて世々撰集に預り、飛鳥井家には、雅世、雅康あり。將軍家には、實朝を始めとして義政、義尙あり。武士には今川了俊、東常緣、細川幽齋、木下長嘯子などあらはれ、各々私撰集或は家集あり。或は百首千首聯合など數多あれども、さすが武人の跋扈せし時代なれば、女子の作として見るべきもののなきは遺憾なり。今その重なる書名を左に示さん。

一、私撰集

玄玉和歌集	撰者未詳
柳風和歌集	撰者未詳
夫木和歌抄	連紹撰
藤葉和歌集	撰者未詳
温知和歌集	撰者未詳

二、家集

後鳥羽院御集　三卷
土御門院御集　一卷

順徳院御集	三卷	
柏玉集	十卷	後柏原院集
長秋詠藻	二卷	藤原俊成
拾玉集	七卷	慈鎮和尚
山家集	六卷	西行法師
壬二集	三卷	源家隆
長明家集	一卷	鴨長明
李花和歌集	一卷	宗良親王
兼好法師家集	一卷	卜部兼好
草庵和歌集	四卷	頓阿法師
亞槐和歌集	三卷	飛鳥井雅親
雪玉集	十八卷	西三條實隆
慕景集	一卷	太田道灌
金槐和歌集	三卷	源實朝
義政公集	一卷	足利義政

義尚公集　一卷　足利義尚

常緣集　一卷　東常緣

細川幽齋家集　五卷

擧白集　十卷　豐臣勝俊

俊成卿女集　一卷

建禮門院右京太夫集　二卷

三、百首千首

百人一首　一卷　定家卿撰

新百人一首　一卷　義尚公撰

女房百人一首　一卷　撰者未詳

武家百人一首　一卷　式部大輔忠次撰

藤川百首　一卷　定家卿撰

順德院御百首　一卷

朗詠百首　一卷　未詳

南都百首　一卷　一條兼良

爲家卿千首　一卷

文明千首　一卷　實隆公以下十人

牡丹花千首　一卷　肖柏

四、歌合

六百番歌合　十卷（一云左大將家歌合）

作者は家隆定家以下十人、

南朝五百番歌合　二卷

天授元年内裏の歌合なり、判者は宗良親王にして、作者は辨内侍、長親、賴氏以下十七人、

年中行事歌合　三卷（一云關白家五十番歌合）

貞治五年十二月二十日、當座の歌合にて、年中行事百首の題なり、作者は二條良基、頓阿法師等廿三人也、判者は爲家。

職人盡歌合　二卷（一云七十一番歌合）

月と戀とを題にて、番匠鍛冶より諸職人の歌を番はせ、判詞の次には繪を以て之を示す、作者は詳かならず。

歌合部類　二十卷

天德の頃より永祿に至る迄の歌合三十六種を集めたるものなり、撰者詳かならず、貞享二年刊行す。

四、歌合

此他百首、千首類、及び、歌合類、群書類從和歌の部に數多納めたり、

第四節　今樣及び連歌

一、今樣

今樣は郢曲の一種にして、神樂催馬樂などに比して、今めかしければ今樣とは云へるなり。

其發達せしは、古く、平安朝の中頃にして、初めは我邦持有なる短歌にあらはれ、次で長歌に移り、遂に單獨に表はるゝに至る、これ即ち七五調を有せる今樣歌なり。

然れども、上古今樣と稱するは、今日の如く單に七五調のみに限らざりき。今日の如く七五四句を今樣歌と云へるは、空海の色葉歌を以て始めとす。

源平時代に至りてはこの今樣、大に流行し、遂に其歌をして、唐樂に合奏するに至り、上は公家より下は白拍子等の無二の樂となり、祇王は西八條殿にて清盛を祝ひ、佛御前又姬小松に例へて清盛が繁榮を賀せり。靜はこれを以て夫を慕ひ、康賴は權現に法樂し、遂には神佛の示現さへ、今樣を以てし給ふに至りしかば、催馬樂、朗詠などの歌謠を壓倒し、やがて我歌界の覇王となり、一時隆盛を極めんとせしも、足利時代に至りては、天下兵亂の爲め、其發達を沮害せられ、辛うじて其命脈を保つの

みに止れり。

二、連歌

連歌はもと短歌と其趣を異にし、互に相敵視せるより、正平、文中年間、二條良基出で、筑波集、愚問題註、筑波問答、を著はし、以て之を調和せしめんとつとめけれども、程なく良基一派の連歌は歌界より排斥せらるゝ所となりぬ。かくて連歌は一時地下の専有物となりたりしが、明應以降宗祇宗長など輩出して斯道を極め、公武の間に出入して黽勉普及を計りしかば、漸次隆盛を來し、將軍家に於ては、遂に式日を定めて之を興行さるゝに至れり。即ち朝廷に於ては、亦毎月連歌の式日を定め、親しく御製を下し給ふに至りしかば、公卿間に於ても、亦大に之をもてはやし、各所に集合して相唱和する事屢なり。かゝる有様なれば連歌は日に月に益々隆盛に趣き、德川時代を經て明治の今日に至るも、尙衰へずして其命脉を維持せり。

前述の如く、當時連歌の流行は實に盛にして、公家、武家、神官、僧侶、の別なく、各所に會し相唱和して、無上の樂みとしたるなり。かく上下共に斯道に熱心にして、これが達人も多く現はれたり。即ち貴顯には　後柏原帝あり。公卿には二條良基、一條兼良、同冬良、三條西實隆等あり。地下の士に至りては、紀州より出でゝ、花の本の號を賜はり、無上の榮譽を負ひて海內を風靡したりし宗祇あり。駿河より出でゝ、宗祇に亞で花の本の號を賜はりし宗長あり。其他山崎宗鑑、牡丹花肖柏、里村

紹巴、など有名なり。而して其著書としては、

筑波集　二條良基著
新菟玖波集　宗祇法師著
犬菟玖波集　山崎宗鑑著
新式今按　牡丹花肖柏著

等尤も名高し。斯く盛に流行したれども、全く男子のみのわざにして、女流にてはこれを弄びしもの甚だ少なければ、今は只其例一二を記すことゝせん。

例

木更衣の花に染めぬる木の葉哉　後柏原天皇
しぐるゝ雲に雁のなく山　前内大臣
月殘る峯より白む夜のあけて　大納言宣胤
花の後遺る詞のたむけかな
松風かすむみづがきの春
月の行く雲井のどかに鶴なきて

第三章　作者傳及作例

一、俊成の女

千載集の撰者、藤原俊成に女あり。姿色艶に美はしく、和歌は父の流を汲みていと勝れたりき。最勝光院、新に梅數株を栽ゑられしが、花開きて色香愛すべし。一日俊成の女、賤しき婢の姿に裝ひ、窃に釣段の下に到りて花を觀しに、少年輩、その着たる白衣の垢つきて、半ば黃ばみたるを見、あざけりて、

　花を見すてゝ歸る猿丸

といひければ、女は直樣その聲に應じて、

　ほしまもる狗の吠ゆるに驚きて

と答へたり。

彼の輩、旣に俊成の女なることをさとり、大に恥ぢて、皆逃げかくれしとぞ。その頓才驚くべきなり。

○和歌（新古今和歌集）

○春の歌

○
梅の花あかぬ色香も昔にて同じかたみの春の夜の月
○千五百番歌合に
風通ふねざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜のゆめ
○題しらず
怨みずや浮世を花のいとひつゝさそふ風あらばと思ひけるをば
○
いそのかみふるの早田を打かへし恨みかねたる春の暮哉

○夏の歌

○初夏
折ふしもうつればかへす世の中の人の心の花ぞめの袖
○題しらず
橘のにほふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香ぞする

○秋の歌

○杜間月

大あら木の森の木の間をもりかねて人たのめなる秋の夜の月

○題しらず

ことわりか秋にはあえぬ涙哉月のかつらもかはる光りに

○同

稻葉吹く風にまかせて住む庵は月ぞまことにもり明しける

○同

吹き迷ふ雲井を渡る初雁のつばさにならすよもの秋風

○同

あだに散る露の枕にふしわびて鶉なくなり床の山風

○冬の歌

○千五百番歌合の中

さへわびてさむる枕にかげ見れば霜深き夜の有明の月

○題しらず

霜かれてそことも見えぬ草の原誰に問はまし秋の名殘を

○年のくれに

へだて行よゝの面かげかきくらし雪とふりぬる年の暮哉

○雜の歌

○女のみまかりけるを、さがのほとりにをさめ侍りける夜、よみける、

今はさは浮世のさがの野邊をこそ露消えはてし跡と忍ばめ

○旅の歌　千五百番歌合に

かくてしも明かせば幾夜過ぎぬらん山路の苔の露のむしろに

○

葛の葉のうらみにかへる夢の世を忘れがたみの野邊の秋風

○戀の歌

○寄雲戀

したもえに思ひ消なむ煙だにあとなき雲のはてぞかなしき

○水無瀨戀十五首歌合

面かげのかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に

○千五百番歌合に

ならひこしたが僞もまだしらでまつとせしまの庭の蓬生

○

露はらふ寐覺は秋の昔にて見はてぬ夢に殘るおもかげ

二、式子內親王

式子內親王は、後白河帝の女にして、殷富門院の母妹なり、性質頴敏にましまして、ひとり和歌に巧みなるのみか、繪畫をもよくし給へり。平治元年賀茂齋院となり、次て三宮に准ず、嘉應元年病を以て、職を辭し給ふ。建久八年、藏人橘兼仲及び僧觀心の事に與かりて、罪を得、京外に擯けられ給へり。後髮を剃りて出家し給ひ、法名を如法とぞ申ける、大炊御門齋院、また高倉宮とも申し奉る。

○和歌（新古今和歌集）

○春の歌

○百首の歌奉りし時

山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪の下水

○

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな

○

今櫻咲きぬと見えてうす曇り春にかすめる世のけしき哉

○

花は散り其色となくながむれば空しきそらに春雨ぞ降る

○夏の歌

○齋院に侍りける時

忘れめやあふひを草に引き結びかりねの野邊の露のあけぼの

○百首歌奉りし時

聲はして雲路にむせぶ郭公涙やそゝぐよひのむら雨

○
返りこぬ昔を今と思ひ寐の夢の枕ににほふたち花

○
まど近き竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢

○
夕立の雲もとまらぬ夏の日の傾く山に日ぐらしの聲

○秋の歌

○百首歌の中に
うたゝねの朝げの風にかはるなるならす扇の秋の初風

○
秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なるゝ閨の月影

○
眺めわび秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん

○

道もなき庭の淺茅にむすぼゝれ露のそこなる松虫の聲

○

千度うつきぬたの音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる

○冬の歌

○百首歌の中に

見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江の水際うす氷つゝ

○

さむしろの夜半の衣手さえ〳〵て初雪白し岡の邊の松

○

日數ふる雪けにまさる炭がまの煙もさびし大原の里

○雜の歌

○羈旅

行末は今いく夜とか岩代の岡のかねやに枕むすばむ

○いつきの昔を思ひ出でゝ

郭公その神山の旅まくらほの語らひし空ぞ忘れぬ

○山　家

今はわれ松の柱の杉の庵にとづべきものを苔ふかき袖

○後白河院かくれさせ給ひて後

斧の柄の朽ちし昔はとほけれど有りしにもあらぬ世をもふる哉

○百首歌に

曉のゆふつけ鳥ぞあはれなる長き眠りを思ふ枕に

くるゝ間も待べき世かはあだし野の末葉の露に嵐たつなり

○百首歌の中に

靜かなる曉ごとに見渡せばまだ深き夜の夢ぞかなしき

○戀の歌

○忍　戀

玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

○題しらず

しるべせよ跡なき浪にこぐ船の行末もしらぬ八重の潮風

○

夢にても見ゆらん物を嘆きつゝうちぬる宵の袖のけしきは

○

逢ふ事をけふ松か枝の手向草いくよしをるゝ袖とかはしる

○待戀

君待つと閨へもいらぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月

○百首歌の中

さりともと待ちし月日ぞうつり行心の花の色にまかせん

三 阿佛尼

阿佛尼は、平度繁(のりしげ)の妹にして、始め順德天皇の后、安嘉門院に仕へまつり、四條また右衛門佐と號せしが、後、藤原爲家に嫁ぎて、爲相等五人の子を生めり。阿佛尼は夫にわくれて、後に剃髮しての名なり、世に北林禪尼と稱す。

藤原爲家の家は、世々歌を以て聞え、俊成、定家、爲家と三代打續きて、勅を奉じて集を撰びし程なれば、祖父俊成の時より、和歌所の采邑として、播摩國細川庄、近江國小野庄を下し給はり、世襲し來りしが、爲家に至り細川庄を子の爲氏に讓れり、然るに爲氏不孝の行爲ありしかば、奪ひて更に之を爲相に與へぬ。爲氏いとも口惜しく、父死去の後、爲相の幼きを利とし、その所領を奪ひ返せり。阿佛尼思ひけるやう、亡夫の采邑を爲相に讓りしは、あだなる事にしもあらず、道を助けよ、子を育てよ、後の世を弔へとてなり、さるに今故なく之を庶兄に奪はれては、其遺命に背くのみならず、大君に仕へ奉らむ便宜も絕え、和歌の道も是より廢れ、家の業も從て衰へむ。いでや、我子に傳へられし由の正しき證文もて、鎌倉に訴へ、亡夫の志を達してむんさなり〳〵と、遂に建治三年十月十六日の曉に都の空を立ち出てたり。旅とし云へば物うきに、ましてもの思ひある身は、亦一入なりしなるべし。

或は霜になやめる路邊の楓樹、夕を告ぐる遠寺の鐘、或は有明の月に出立ちては都の方を忍び、或は濱邊に宿りては、磯づたひなく千鳥かへる白波に思を寄せ、長亭短驛、幾夜の草枕に旅衣の袖を濡して、遙々と東に下りけるが、同じ月の二十九日、やう〳〵鎌倉にこそ着きにけれ。

さて尼の住みし所は、月影が谷とて、海濱近き山寺のほとりなりしときくからに、松の響、濤の音、共にすさまじくて、草枕旅寐の床もいと安からざりつらんなど、今より思ひやるだになか〳〵あはれな

り。

かくて事を鎌倉に訴へけれど、はか〳〵しからで、空しく四年の春秋を費し、遂に弘安六年九月、尼はこの所にて身まかりき。されどその志は遂に届きて、采邑は爲相に返されたり。これをこそ尼のまだ世にある程に、聞かせまほしかりけれ。

尼は歌文をよくせり、その歌は多く勅撰集に載せられたり。十六夜日記、うたゝねの記、庭の訓（をしへ）、夜の鶴などの著あり。

○勅撰集を論ず（夜の鶴）

歌の本體には、古今の歌を見覺えて、本歌にもすべし。三代集いづれも同じことなれど、後撰にはやさしき歌も多く、又みだりがはしき歌も、多くまじりたり。梨壺の五人、心々やかはりけん。拾遺の歌は、又拾遺抄に、よき歌は皆撰り出でられためり。後拾遺、又歌よみも多く集へたる頃なれば、面しろき歌も、おほげに候を、難後拾遺と云ふものにぞ、みぎはもに出るなど、云ふ歌をはじめて、さま〳〵そしりたるとも候やらん。金華詞花などは歌姿もかはりて、一ふし面白きところ有る歌のみ多く、俳諧めきたる事がちに候やらむ。夫れより後の集とも、撰者の心得々々にて、様々すて難く見え候めり。新古今、むかしの歌のやさしきすがたに、たちかへりて、折らば落ぬべき萩の露、拾はゞ消

になんとする、玉ざゝの霰など、申すべきを、あまりに戯れ過ごして、歌の様、又ありざまになりぬべしとぞ。新勅は、撰者思ふところありて、まことある歌を撰ばれけり、などぞうけたまはりし。其後續後撰たちかへり、道をしろしめす御代にあひて、常磐井のおほきおとゞを始め奉り、衣笠の内大臣信實、ともいへなど、道にたへたる人、家の風、吹きたゆぬ人々多く、君も臣も身を合せ、時をえたりける撰者なれば、さすが見どころ侯らん。それにも時による作者おほくなど、うちかたぶく人もありけるを、まして其後の事は、いかゞ侯らん、心も及ぶまじければ、おしこめぬ。昔今の、代々の集共の作者も、世々にきこえ、歌の姿もたけ高くやさしからんを、しだいに御目をとゞめて、事の序に題の心を御らんじ、わきてかしこきを見ては、ひとしからん、と御心をかけ侯べし。當時の人々の歌をば、夢々まよひ好む御事侯まじく侯。又とりあへぬとにときもかはさず、讀み出づる歌の返事、立ながら云出だする事は、さしあたりて、只今云ひたき事を、さまよくつゞけ侯ひぬれば、何の風情も過ぎて侯。小式部内侍、定賴中納言を引とゞめて、また文も見ず天の橋立、と申けるとかや。周防内侍、忠家大納言と、かひなくたゝむ名こそ惜しけれと申しかはしける心どちなどは、只人の魂魄により、歌の道にしほたれぬる位のあらはるゝにて侯へば、昔今申すにも及び侯はず。今はかゝる谷の朽木となりはてゝ侯とも、さるやさしき人々だに侯はゞ、などかは口とくあひしらふ事もさぶらはざらんと、おぼえて、其世の人々、うらやましくこそ。

○うたゝねの記一節

三河の國八つ橋と云ふ所を見れば、これも昔にはあらずなりぬるにや、橋もたゞ一つぞ見ゆる、かきつばた多かる所ときゝしかども、あたりの草も皆枯れたる比なればにや、それかと見ゆる草も木もなし。業平の朝臣のはる〴〵來ぬと歎きけんも思ひ出らるれど、つましあればにや、さればさらんと、すこしをかしくなりぬ。都出でて遙かになりぬれば、かの國の中にもなりぬ。濱名の浦ぞ面白き處なりける。波荒き汐の海路、のどかなる水海の、をちいたるけぢめに、はる〴〵と追ひつゞきたる松の木立など、繪に、かゝまほしくぞ見ゆる。

おちつき處の樣を見れば、こゝかしこにすこし愚かなる家居どもの中には、同じかや屋どもなど、さすがにせばからねど、はかなげなるあしばかりにて、結びおけるへだてども、かげとまるべくもあらず、かりそめなれど、げにみやもわらやもと思ふには、かくてしも、中々に、しもあらぬさまなり。

後は松原にて、前には大なる河のどかに流れたり。海いと近ければ、港の浪こゝもとにきこえて、汐のさす時は、此河の水逆さまに流るゝ樣に見ゆるなど、さまかはりていとをかしき樣なれど、いかなるにか心とゞまらず、日數ふるまゝに都の方のみ戀しく、晝はひめもすにながめ、夜はよもすがら物を

のみ思ひつゞくる、荒磯の浪の音も、枕のもとに落ちくる轟には心ならずも、夢の通路たゆ果てぬべし。

心からかゝる旅寐に歎くとも夢だに許せ奥津白浪

○和。歌。（十六夜日記の中）

○安川渡る程に、先立て行く旅人の、駒の足音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人は皆もろ共に朝たちて駒うちわたすやすの川霧

○醒が井と云ふ水、徒人立ちよりてくむめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば浮世の夢やさめが井の水

○せきの藤川渡るほどに、先づ思ひつゞけゝる。

我こども君に仕へん爲ならで渡らましやはせきの藤川

○不破の關屋の板びさしは、今もかはらざりけり。

ひま多き不破の關屋はこの程の時雨も月もいかにもるらん

○關よりかきくらしつる雨、しぐれに過ぎてふりくらせば、道もいと悪しく、心より外に笠縫の驛と云ふに宿る。

旅人はみの打はらふ夕ぐれの雨に宿借るかさぬひの里
○熱田の宮に詣で、書きつけて奉れる歌四首、
祈るぞよ我か思ふことなる海潟かたひく汐も神のまに〳〵
鳴海潟和歌の浦風へだてずば同じ心に神もうくらん
滿汐のさしてうきつる鳥海潟神やあはれとみるめ尋ねて
雨風も神の心にまかすらん我か行先のさはりあらすな
○濱千鳥いと多く先立て行くも、しるべ顏なる心地して。
濱千鳥鳴きてぞさそふ世の中の趾とめんとは思はざりしを
○二村山を越て行くに、山も野もいと遠くて日も暮れぬ。
はる〳〵と二村山を行き過ぎてなほ末たどる野邊の夕やみ
○青地の錦を見る心地す、人に問へば宮地山と云ふ。
時雨けり染むるちしほのはてはまた紅葉の錦色かはるまで
○暮かゝる程淸見か關をすぐ、岩こす波の面白し。
淸見潟年ふる岩に言訪はん波のぬれ衣いく重ねきつ
○富士の山を見れば、烟も立たず。

たか方に靡きはてゝか富士の嶺の烟の末の見えずなるらん
　○田子の浦に打出づ、海士のいざりするを見ても。
心からをり立つ田子の海士衣ほさぬ怨と人にかたるな
　○箱根路にかゝりて。
ゆかしさよろなたの雲をろば立てゝよろになし居る足柄の山

四　辨内侍

内侍は、中務大輔藤原信實の女なり。性質穎悟にして、和歌に巧なるのみならず、文章をもよくせり。ろの日記は、文辭流暢妙麗大に世人の好評を得たり。
ある時内侍、紫宸殿の賢聖障子とて、有名なる唐人の肖像を畫けるを見、嘆じて、
此畫は世道に益あれども、唐人ならで、我が朝の賢人を撰びて、畫きたらんには、世道人心を益することも、此比にあらざるべし。何故に當時の學者たるものは、その事に志を用ゐざりしか、實に惜むべし。
といひしを、天皇聞き給ひて、叡感斜ならず、其位を昇ほさんとまでなし給ひしかど、固辭して肯はざりきといふ。

思ふに内侍の詞は、當時の世態につきて感じたるものならん。その昇位の榮を辭せしなどは、誠に氣慨ある女子といふべし。

抑、白河帝以降は、朝廷の學問大に衰へ、後鳥羽帝を經て、後嵯峨帝の頃に至りては、公卿優柔にして往々婦人に輕侮せらるゝの傾きあり。盖し内侍は當時にありて、よく文藝を以て男子に抗したるものといふべし。

○雪の夜（辨内侍日記）

十一月十四日の夜、雪いと面白く、道絶えてけり。夜番にて華山院宰相中將、頭中將など候ひけるも、院の御所へ參りにければ、人々清涼殿へ立ち出でゝ見れば、竹にさえたる風の音までも、身にしみて面白き、月はなほ雪氣にくもりたりしも、なか〳〵見どころあり。

大宮大納言、万里小路大納言など參らせ給ひて、南殿にてよもすがらながめ給けるが、曉方ことにさえたりければ、うへの男ども、殿上のをりまつ召しけれど、盡きたる由申しければ、廣御所の北向にて、枯れたる萩の枝など、をりまつにせられけると聞きし、いとやさしくて、

霜がれの古枝の萩のをりまつは

もえ出る春のためとこそみれ

有明の月くまなかりしに、雪の光さへとほりて、おもしろく、見え侍りしかば、硯はこばせ、給ふとて、持ちて參りしも、いづくの御文ならんと、ゆかしくて、

明けやらでまだ夜はふかき雪のうちに
ふみ見る道はあとやなからん

十四日の夜、少將內侍、女の處へわたり居て、心地なほわびしく侍けれ。何事も知らず臥したるに、あけ方、はるかに雪深きを、分け入る履の音のきこゆるに驚きて、心地をためらひ、やをら起きあがりて聞けば、大宮大納言殿よりと云ふ聲につきて、妻戶をおしあけたれば、未だ夜はあけぬものから、雪にしらみたる、內野の景色、いつの世にも忘れがたく、おもしろくと云へば、なべてなり。御文を開きて見れば。

九重や大內山のいかならん
かぎりもしらず積る白雪

かへし、少將內侍、

九重のうち野の雪にあとつけて
はるかに千代の道を見るかな

其の雪のあした、少將內侍のもとより、

九重に千代をかさねて見ゆるかな
大内山のけさのしらゆき

かへし、

道しあらん千代のみ雪を思ふには
ふるとも野邊のあとは見えなん

十七日雪いと深う積りしに、吉田の使に立ち、かへさに、主基かたの女供所の事がらゆかしくて、そなたざまやれと申し侍しかば、六位の車の供の者なども、夜更けて、遙かにめぐらんこと、かなふまじき由申し侍りしかども、せめて尋ねまほしさに、吉田の使のかへりには、必ず女供所へ立入る式にてあるぞ、と申し侍しかば、實に先例さるならばとて、はる〴〵とたづね行きたりしに、衛士が門遲く開け侍りしに、今に始めたる事か、吉田の使のかへさに、內侍の入らせ給ふに、こと新らしくあけもまうけぬかと、荒らかに諫め申し侍りしも、かやうの事や、先例にもなり侍らんと、をかしくて、

問はましや積れる雪の深き夜に
これも昔のあとゝ云はずば

五　建禮門院

名は平德子といふ、高倉帝の中宮なり、太政大臣清盛の女にして、後白河法皇これを子として養ひ給へり。承安元年從三位に敍せられて女御となり、明年中宮と爲る。清盛安藝嚴島に詣でゝ、后の皇子を生まむことを禱る、治承四年后身むあり、出でゝ清盛の第に居給ふ、高倉帝使を四十一社七十四寺に遣し、僧及び陰陽博士等を禁中に召して安產を禱り給ひぬ、かくて生れ給ひし皇子は即ち安德帝なり。養和元年號を上りて、建禮門院と申す。壽永二年平家の一族、西海に陷るに及びて、后遂に安德帝を抱きて、身を海中に投じ給ひき、源氏の兵鐵搭を以て之を引き上げ京師に奉還す。乃ち吉田の僧房に寓し、薙髮して戒を受け、眞如覺と號し給ふ。一族悉く滅びしときゝ、自ら輦下に近きを嫌ひ、大原寂光院の傍に移り給ふ。草廬竹牀僅に風雨を蔽ふのみ。帥典侍、阿波内侍等皆尼となり、薪水を供したりとかや、法皇徃てこれを訪はんと欲し、源賴朝を憚りて果し給はざりしが、文治二年補陀洛寺に行幸するに託し其居に至り給ひ、相泣きて往事を語り給ひきとぞ。

后は建保元年十二月大原に身まかり給へり。御年五十七、后親ら安德帝の宸翰及び、手書する所の故紙を糊してその像を造る、現に寂光院にありとか。

家集を建禮門院右京太夫集といふ、壽永元曆の平家の零落、心に映じて哀に、その文意も亦自ら味あり。

今よりそのかみを追想するも、徐に涙溢れて袖を濡すばかりなり。平家の一門花の如き女房等身を西海の波に漂はしたるその苦痛やいかなりけん。平家物語に晴嵐膚を侵して、翠黛紅顔の色やう〳〵衰へ、翠帳紅閨に代れるは、埴生の小屋の葦すたれ、薫爐の烟に異なる、海士の藻塩火たく賤しきにつきても、紅の涙袖を濡し、緑の黛乱れつゝ、其人とも見え給はざりしとなん。聞えけるこそいとあはれなれ。

○荒れたる宿（家集の内）

北山のほとりに、よしある處のありしを、はかなくなりにし人の領せし處にて、花の盛、秋の野邊など見には常に通ひしかば、誰も見し折もありしを、或る聖の物になりてと聞きしを、ゆかりある事ありしかば、せめての事に、忍び渡りて見れば、面顔は先立ちて、またかきくらさるゝ樣ぞ云ふ方なき。みがきつくろはれし庭も、淺茅が原は、蓬が杣になりて、葎も苔もしげりつゝ、有りし景色には、あらぬに、植ゑし小萩も繁りあひて、北南の庭に乱れ伏したり。藤袴うちかをり、一むらすゝきまことに虫の音しげき野邊と見えしに、車寄せおりし妻戸のもとにて、たゞ一人ながむるに、さま〳〵思ひ出づる事など、云ふもなか〳〵なり。例の物も覺えぬ樣にかき乱る心のうちながめ、

露きえしあとは野原となりはてゝ

ありしにも似ず荒れはてにけり
あとをだに形見にせむと思ひしを
　さてしもいとゞかなしさぞそふ

○和歌（家集）

○春の歌

○春立つ日
いつしかと氷とけゆくみかは水行く末とほきけさの初春
○花にそへて
さろはれぬうさも忘れて一枝の花にそめつる雲の上人
○深夜春雨
ふくる夜の寐覺さびしき袖の上を音にもぬらす春の雨かな
○山吹
我宿の八重山吹の夕ばへに井手のわたりも見る心地して

○夏の歌

○山田の苗代

山里は門田の小田の苗代にやがてかけひの水まかせつゝ

○山里にて時鳥のなきしに

都人待つらんものを時鳥なきふるしつる深山邊の里

○花橘

橘の花こそいとゞ薫るなれ風まぜにふる雨の夕ぐれ

○夕の夏草

夕されば夏野の草のかたなびき涼みがてらに休む旅人

○連夜の水鷄

荒れはてゝさす事もなき槇の戶を何とよかれず叩く水鷄ぞ

○秋の歌

○初秋

山里は玉まく葛のうらみにて小しのが原に秋の初風

○秋山里

椎ひろふ賤も道にや迷ふらん霧立ちこむる秋の山里

○同

眞柴ふくねやの板間にもる月を霜とやはらふ秋の山里

○同

鶉ふす門田の鳴子ひきなれてかへらまうきや秋の山里

○七　夕

鐘の音もやこゑの鳥も心あれなこよひばかりは物忘して

○寐覺擣衣

打つ音に寐覺の袖ぞぬれまさる衣はなにのゆゑと知らねど

○冬の部

○初　冬

霜さゆる枯野の萩の露の色秋の名殘をともに忍ぶや

○山家初雪

春の花秋の月にも劣らぬは深山の里の雪のあけぼの

〇冬の月夜加茂にて

神垣や松の嵐も音さえて霜にしもおく冬の夜の月

〇氷

谷川の木の葉とすませ氷れども下には絶えぬ水の音哉

〇深山の雪

いかばかり山路の雪の深からん都の空もかきくらすころ

〇戀の部

〇片思をはづる戀

奥津波岩うつ磯の鮑貝ひろひわびぬる名こそ惜しけれ

〇枯れたる花を見て訪れせざりし人を思ひ

とはれねばいくかぞとだに數へぬに花の姿ぞしらせ顏なる

〇同

關こえてゆく雲井までへだてねど都にはにぬ山颪かな

○雜の部

○

春の花秋の月夜をおなじをり見る心地する雲のうへかな

○內裏にて御八講ありし時

九重に御法の花の匂ふけふや消えにし露も光そふらん

○失せにし兄の爲に、阿彌陀經書きて、

迷ふべき闇もやかねて晴ぬらん書置く文字の法の光りに

六、二條院讃岐

二條院讃岐は、源三位賴政の孫にて、和泉守仲綱の女なり、後白河の院第一の皇子二條院に仕奉りて、才女の名を得たり。故に二條院讃岐といふ。幼より才智の譽ありて、歌には佳麗なるものいと多し。

ある時、寄石戀といふ題にて、

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
　　人こそしらねかわくまもなし

といふ歌をよみて「沖の石のさぬき」と呼ばれ、この歌大に世にもてはやされて、千載集にも入れら

れたり。

讃岐が從妹、宣秋門院丹後は、賴政の弟賴行の娘にして、同じく和歌に名高し、名歌をよみて「異浦の丹後」とよばれたるはこの女なり。その歌は

忘れじな難波の秋の夜半の空
こと浦にすむ月はみるとも

女房の秀歌よみて名のつきたるは、下﨟の少將、浦わの內侍、待宵の侍從、ふし柴の加賀、若艸の宮內卿、岩もる少將、讃岐、丹後の輩なり。何れも名譽の女房ならずや。

○和。歌。

○春の部

○賀茂の歌合に

春霞分け行くまゝに尾上なる松の綠ぞ色まさりける

○關路霞

我はさぞしらせて過ぎば見えざらん霞にまがふ不破の關守

○

常よりも山のはしろき曙は夜の間に咲ける櫻なりけり

○內裏に柳垂と云ふことを

青柳のなびく下枝にはきてけり吹春風やとものみやつこ

○呼子鳥

來る人もなき物ゆゑに呼子鳥なれとならしの山に鳴くらん

○夏の部

○時鳥

鳴き捨てゝ雲路すぎ行く時鳥今一聲は遠ざかるなり

○遠村卯花

里遠みまだ咲きやらぬ卯の花やさらしもやらぬ布と見ゆらん

○かやり火つきぬ

さもこそは短き夜半の友ならめ臥すかともなく消ゆる蚊遣火

○夏のくれ

風そよぐ楢の木かげに立よれば薄き衣ぞ先つしられけり

○秋の部

○萩花露重し

秋萩にこぼるゝ露のしげゝれば折伏す枝をおく迄ぞ見る

○庭前刈萱

契あれや野邊の刈萱うつし植ゑて思ひ亂るゝ友となしつる

○靜寺虫聲

鐘をだに打ち忘れにし山寺に入相は虫の聲のみぞきく

○雲間月

定まらぬ雲の絶間の月かげは消ねて叉ふる雪かとぞ見る

○薄の風になびくを見て

吹きぬるは靡かぬにこそ花すゝき風に隨ふ心とは見れ

○冬の部

○時雨

音ばかり夜半の木の葉にたぐへども時雨は庭に積らざりけり

○十日ばかり終夜木の葉散りければ

明はてばさてだにも見ん木葉散る庭をば霜の置きなかくしそ

○霜かれ

難波潟水際の蘆は霜かれてなだの捨舟あらはれにけり

○氷

水鳥の上毛の霜は拂へども下の氷やとくる間ぞなき

○戀の部

○寄石戀

我か袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

○あかつきの別れを

明けぬればまたきぬ〳〵になりやらで人の袖をもぬらしける哉

○

今更に戀しと云ふも頼まれずこれも心のかはると思へば

○雨中歸戀

徒に歸る空より降る雨はわけて袖こそぬれまさりけれ

○歌によりてまさる戀

うしと思ふ人の心を種とする言の葉をしも見るぞ戀しき

○雜の部

○三河內侍の歌をよしなど人々申合たりしかば遣はしける。

花の香の身にしむばかり思ふ哉如何なる家の風とかは見る

○雨中の遠き草と云ふ事を

雨降ば思ひこそやれ和泉なる信田の杜の下のかげ草

○淺茅原となりける處に花咲けるを見て

思ひきや花も我身も後れ居てありし昔を忍ぶべしとは

○壽量品の心を

今日聞は光もふるき月かげを出づる初と思ひけるかな

七、中務內侍

宮内卿永經卿の女にて、その傳明らかならねど、大方、龜山、後宇多の兩朝より、伏見天皇の御代かけて、仕へまつりしが如し。

中務内侍日記は、故後深草天皇を忍び奉る事よりかきはじめて、伏見天皇の正應五年までの間、おのが禁中にありて、所々の御幸などに供奉せし時のさまなど、隱なく記せり。中にも、伏見天皇御即位の次第、及び大嘗會の事をかけるは、いと珍し。

そもそも當時は、鎌倉の執權の代にて、朝廷の政權は皆武門に歸し、天下の政治は悉く幕府の掌る處となれり。されば朝廷はいたく衰へさせ給ひ、古來の大禮さへ、叡慮のまゝならぬが多かりしことは史家の常に慨くところなり。

内侍、文体は、古の女流の日記をまなびたりと見ゆれど、詞づかひ稍新しく、紫式部日記などに比べては、大に讀みやすかるは、今を距ること、程遠からねばなり。

中務内侍日記を讀むに、その御即位のさま、徹々たりとはいへ、猶舊態を存じ、大嘗會の如きも、ろの式ころ古のまゝならね。かつがつ行はれたることの知らるゝは、得がたき賜ならずや。

○伏見院御即位次第（中務内侍日記）

三月（正應元年）十五日、御即位行幸の儀式、關白殿、左大將以下、供奉の人々、めづらしく面白し。髮上の

内侍、此御所より、少將內侍、少輔の內侍なり。御所裝束めされぬ。殿入らせ給ふ。めし仰せはてぬるよし、奉行の職事申せば、南殿へならせ給ふ。御輿にめされぬれば、官の廳へいそぎ勾當まゐる。髮上の得選設けたれば、車の尻にのせて、官の廳の北向きよりまゐりて、髮上したゝめて、朝所の南向きに、勾當侍らへば、漸々行幸近づかせおはしますとて、供奉の公卿、次第に列に立ちたり、御輿よらせ給ひぬ。關白殿、御下襲、引直衣、まゐらせらる。公卿のすけまゐりて、劒璽とりて、內侍に傳へて後、御輿につきて、御綱のすけそうぞきぬ。奏はてゝ、主上いらへ給へば、殿御れんにまゐらせ給ふ、廂の簾あらはより志きし、あれよ、たれ〳〵は、御母屋の御簾上げられて、主上大床子にわたらせ給ふ。劒璽を大床子に置き奉りて、內侍朝所の北向に出でゝ、侍ふ。其後大床子の東に、平敷の御座に、縹繝二疊の上に、御しとね裝ひて、この上にて、わきの御膳などまゐらす。御配膳は女房、役送の女房は、小上﨟、朝所の北向きに、北に候ふ。奉行の職事を召して、高御座の事は具したるかと仰せ下さるれば、職事かへりまゐりて、具したる由奏す。平敷の御座にて、御束帶ときくつらげさせおはしまして、玉の御冠めさる。禮服めされて、大床子の主上わたらせおはします。玉の御冠に、緋の緒をつく、赤の御袍に、左右の御肩は、月と日とを出し、御直衣には、北斗七星をあらはし奉る。御胸御袖には、龍の上りたるを縫ひたり。䌫地の御表服袴の上に、禮服の御裳めす。其上に御大袖の御袍をめす。このいろ〳〵の御紋は、御小袖の御袍にあらはして、上にめし

たり。赤地の錦の御襪、花形のからの御靴、赤地の錦にてつゝみたり、御腰には、御綬とて、平緒の白きを引かせ給ひたり。左右の御後の、御脇の通りに、短綬とて二筋、御胭のほどに下げられたり。御前の左右の御脇に、玉佩とて、玉を貫きて着けられたり。御裾には、火打形の唐金をつけられたれば、ふけんの如くに、りやらめきならせ給ふ、御前には大綬を結びさげられたり。太刀の平緒の如く、結び垂れたり。高御座の事、具したる由、職事申せば、やがて行幸あり。

御劒は、勾當給はる、璽はこれの役なり、右の御脇にまゐる。殿下の仰せに、その璽の御箱の上に、かけたる綱を、指にかけつれば、取りはづして、過ちはせぬぞ、と仰せあるに、御情のありがたく、心もつよ〳〵しく覺えて、あやまちなし。高御座へ、事故なくまゐりつきぬ。帳褰の役は、伯の三位の女なり。命婦、藏人、四人、役の內侍六人、うら濃きすはう、こきものゝぐ、行幸高御座へなれば、御前の命婦四人、御前に立つ。其後殿上の內侍二人、二行にならびてまゐる。高御座の御はしの左右に、內侍立とまれば、殿下御すの役にまゐり給ひぬ。左の內侍まづのぼりて、左の脇より御劒をまゐらせ置く、御はしを退きて、右の下に內侍の座につきぬ。(中畧)

行列の間の事、

御先に、威儀(ゐぎ)の命婦四人、莚道の左右につくなり、正廳(しやうちやう)の左につく、

次に劒、璽の內侍二人右勾當左はこれなり

扈從の女房、御後に、歩みつゞきてまゐる。事靜まりて、南を遙に見やれば、節下の旗とて、風にひらめき立てり。大なる香盤に、名香や匂ふらんと見えたり。こがねの咫烏とて、足の三ある烏見ゆ。しんこんたけうの中には、日の中に、三足の烏あり。月の中には、六足の兎ありと、聞きしも、本說ありける事なりけりと、信起りて覺えて、唐人の姿ども、なみ立て、拜し奉るに、身の毛も立ち、淚ぐましく、めでたく嬉し。右大臣殿、からめかしき御姿にて、幕の中よりねり出で給へば、玉佩の音や、道にりやらめきて、美々しく、御たけの高き、御天の高きにも、たち劣り給はず。高御座に向きて、拜し給ふを見るにも、めでたく侍る。

ためしなき心地こそすれ君が世の

かゝる御幸にけふ仕へつる

と、思ひつゞけたれども、打まぎれぬ。漸々大禮の儀ども、果てぬれば、殿高御座へのぼり給ふ。朝所へかへり入らせたはします。御劔璽の箱など、もとの如くつとむ。主上御裝束めし改めて、還御の儀になる程に、此御休幕へいらせ給ひぬ。花山院、西園寺殿待らはせ給ふ。還御の御儀式供せらるゝ程、大床子の東、平敷にぞまゐる。御配膳は、女房もとの如し、又大床子の西に、唐繪の御屛風立てられたり。其西にて、兩大納言殿、御割籠開き給ふにや。其役送には、五位の職事、よりふぢ、あきよ、など見え侍りつ。御膳はてぬれば還御なる。

八、千代能

千代能は北條顯時の女なり。幼にして聰明、學を好み、又頗る文才に富めり、常に風雅なる心を抱きて、俗人と交り事をさけたりしが、長ずるに及びて足利貞氏に嫁したり。女は素より佛道を好み、此處彼處の寺に詣つるを常とせり、その初め夢想國師につきて禪學を修め、研勵の功をつみて、遂に彼岸に達し一生を安樂にすぐしたりとぞ、其他の傳なきは遺憾とする處なり。

嘗て千代能は、夢想につきて修業中、悟道の境に達せざるを憂ひ、一夜窖に桶を携へて井邊に至り、水を汲みて頭に頂き、かへる途にして、桶の底ぬけて水、面に灌ぐ、爰に於て始めて禪味を悟りしとかや。此時口すさみて曰く、

千代能がいたゞく桶の底ぬけて
　水たまらねば月もやどらず

と、以て其頓才卓越の婦人なりしを思ふべし。その歌文の如きも、實に才氣漫々として、遙かに男子を凌駕せり。中にも地獄極樂論の如きは、尤も勝れたるものとなす。

○地獄極樂論

夫れ地獄遠きにあらず、極樂亦眼前なり。人壽百歳古來稀なるに秦皇、漢武、長生を求めんとするも徒らに、千歳の笑をのこし、彭祖が一掬の菊水に、八百歳を露の間に保ち、東方朔が一枝の桃、三千年を瞬息に過ごす、短しとやいはん。盧生が邯鄲一睡の夢、五十年の盛衰長しとや云はん。鉄拐、琴高、今何地にありや。

人間愛別の歎き、四大離散のかなしみは、誰とても遁れがたく、一朝無常の風、荒く吹けば、有待の花しぼみ落ち、一夕鼎湖の雲収り、盡きて、蒼梧の霞へだゝるこそ、有爲轉變の習ひなれ。定めなき世にいつまでか生を貪らん。吾も亦眼前の極樂に移住せんことを冀ふ。されども因縁つたなく女人に生れ、罪障さこそ深からめ、いとけなきより、敷島の道のみ好み、植ゑ置ける善根もなき身の宿業を滅せんには、何にたよらまし、覺にて辛科犯さゞれば、今將た慚愧懺悔の由も有らず。

恭しく思へば、大乘小乘異なりと雖も、固より釋尊一世の説法、顯密一致、權實不二なるべし。持律の二百五十戒天臺の煩惱即菩提生死即涅槃、密宗は大覺位より大日如來に至らんと求め、禪には見性成佛の悟道あれども、後世凡夫の企て及ぶ可きに非ず、在俗の身には、世の羈束ありて、一日一夜八億四千念の一念も、道に渉らず、昨日も徒らに暮らし、今日も虚しく明かし、適々心を靜めんとすれば意馬荒れて、六塵の境にはせ、心猿飛んで五欲の枝に移る、是を修めんとすれども止まらず。彼れを鎭めんとすれども治まらず、七字の題目を唱へ、大乘妙典の功力に依て、女人成佛の素願を果さん

にも、いまだ二十八品の會得無し。つら〳〵思へば易行難行の淨土門には、一念十念、念佛さへ唱ふれば、戒もなく學もなく、決定して樂土に、至ると有れど、一文不知の尼入道も、念佛衆生の群に加はり、一枚起請を目的に、忽ち業障の雲をはらし、攝取不捨にもるゝことなく、實相眞如の月をながめんと、是ぞしきりに願はしく候かしこ。

九、嘉喜門院

嘉喜門院は、後村上天皇の女御、後龜山帝の御母なり、天皇崩じて後、落髮し給ふ、性質敏悟琵琶を能くし給へり。天授三年七月七日樂を吉野行宮に張りければ門院も亦入りて、之を觀給ふ。後龜山帝、門院に樂を奏せんことを乞給ふことと、極めて切なりしかば、門院爲に、一度琵琶を彈じ給へり。時に後村上帝感じて御製あり、

かくてのみ絶えずきかばや其上の
　なきなおもぼゆるみわの松風

門院和して歌ひ給ふ、

哀とも君が聽きけるいまははや
　ふきたえぬべきみねの松風

宗尊親王、新葉集を撰び給ひし時、門院に和歌を請給ひしに、門院大納言實爲をして百餘首を記さしめて贈給へり。親王、集に載すべきものを批評し書を送りて之を謝し、且、七夕松風の唱和、人をして目驚き神奪はしめ、感愴咏嘆の至に堪へざらしむ。歷朝の撰集に愧ぢざるべしといへり。

○和歌

○春の部

白雪の猶かきくらしふる里の吉野の奥も春は來にけり

○

物毎にあらたまれども春をへし同じ音にのみ鶯のなく

○

きえやらぬ野原の雪をふみ分けて若菜つみにと出る里人

○

花と見る待つ日數をや慰めんさくらにかゝる峯の白雲

○

尋ねつゝ分け入るまゝに咲花の匂ひも深しみよし野の奥

○

物思ひなき世の春もおのづから神にかすめる春の夜の月

○

住の江の松はふりぬる色なれど若紫に咲けるふぢ波

○

暮て行く春の名殘と云はねどもまま垣にしるき山吹の花

○夏の部

なれだにも暫し語らへ時鳥世の人ごとは憂き身なりとも

○

足引の山立ちはなれ時鳥おのが五月は里なれて鳴く

○

あまの住む里のしるべの煙だに絶えて程ふる五月雨の空

○

難波潟あしのしのびの數そひてもゆつゝ飛ぶや螢なるらん

○
蟬の羽の只一重なる衣手のもりて涼しき月のかげかな

○
みそぎする涙の白ゆふ秋かけて川風涼し水無月の空

○秋の部

○
唐衣たもと涼しく秋風のたつ日よりこそ露も置きけれ

○
七夕の暮るゝ待つ間にさきだちて秋風わたる天の川波

○
をしなべて秋の夕は露ぞ置く哀れしるべき草葉ならねど

○
萩が枝に置けらん露の白玉をはらひて見せよ野邊の秋風

○
せきあへぬ涙の程も思ひしれ同じながめの秋の夕ぐれ

○
思ひやる都の空の面かげもれなじながめの秋の夜の月
○
行秋や道まとふらん紅葉の散りかひ曇る山のあらしに

○冬の部

足引の山かきくもり神無月今日もいくたび時雨ふるらん
○
難波江や水際の芦の夜もすがら結べる霜をはらふ浦風
○
片しきの袖にたまらぬ白玉はねやもる夜半の霰なりけり
○
降り積る程もしられてはらはねどれのれと落つる松の白雪
○
惜しと思ふ今年も早くくれ竹の一夜のほどになれる春哉

○戀の部

行末をなほや頼まん涙川ながれて後の逢ふ瀬ありやと

○

思ひ川涙の淵に沈む身はあふ瀬もしらぬものにぞありける

○

あふまでと思ひし物を曉の又きぬ／＼にぬるゝ袖かな

○

かくしつゝ憂に堪へで戀ひ死なば後の世迄や苦しからまし

○

折々のつらさを何か嘆きけん忘られてだにあられける哉

○雜の部

難波江や芦邊をさして行舟のいや遠ざかる波のをちかた

○

雲かゝる山の幾重をわけ捨てゝ都をよそに隔て來ぬらん

○

淋しさはまだなれざりし昔にて松の嵐にすむ心かな

○

夢とだに思ひもはてゝ悲しきはさむるうつゝの別なりけり

○

仇し世の習ひはさぞと知りながらなほそむかれぬ身を嘆きつゝ

○

山蔭の柴の庵のさびしさをうき世にかへて誰か住むらん

十、小野菊女

菊女は肥前の士、瀬川采女の妻なり。采女、文祿二年、大閤秀吉の征韓の役、彼國に渡航せしことあり。時に菊女獨、深閨を守りては悲みに堪へず。日夜、夫の無難を祈りしが、一日つぶさに夫を思の情を書き、之を小函に緘して、便船に托し遙に其夫の許に送りぬ。しかるに、逆風の爲に其船碎けて、小函は博多浦に漂着せり。浦頭の漁夫、之を獲たれども讀む能は

ず、即津吏に達せしに吏はまたこれを軍營に送りぬ。秀吉、山中山城守をして之を讀ましめしに乃菊女が夫に寄するの書なりけり。秀吉、其切情に感じて、人を肥前の城主龍造寺政家に遣し、命じて釆女を呼還さしむ。一枚の筆よく萬里の客を呼ぶ、めでたき才といふべし。これより菊女の名香しく千代かけて匂ふころゆかしけれ。

○夫に贈る文

そこほどは、世わたる業のことしげきに取まぎれ、もはやこゝ程の事は、思ぼし出さるゝ事も、波の音すさまじき、御心とやなりぬらむ、と思ひのたね、心の内にしげりあひぬるまゝ、硯に向ひ、ひとり煩ふ事の、すみも涙の海となる。

行く水に數かくよりもはかなきは

思はぬ人を思ふなりけり。

と讀み置く、和歌のふる言までも、吾身の上に覺えて、其人の心の内推しはかり、少しは慰みぬ。思へば〳〵、添ひまゐらせぬ昔もありつるに、こは何のむくいにて、おはしますぞや、淺ましかりつる我心かな、そは思へども、よきに止まらぬ、心のくせとして、又戀しう思ひまゐらせ、ものゝけも有やうに、人云ひなし、我も又心の正しからぬ事を知れり。抑も心は身にそふものなれば、身のまゝ

になるべき物なるか、されば心のまゝに、身はなるものとこそ見え侍れ。まことに、心は身の主ならじ、と古き文に多く見えしが、げにさも覺えぬ。いかなる神のむすび合せにや、あさはかなる契りとはなりぬらむ、ある人、深う悲しびあへりしことありしを、いや、それは、はかなきことにて侍るなり、只思ひすてさせ給へ、と諫めつることもありしが、斯く我身の上になりぬれば、其しるしなく、らうして、あやなきことをなむ、思ひこがるゝも女の身なればとて、又、口をしからざらめや、心を心のまゝにせざらんも、尙あきらかならず、覺え侍りぬ。たゞずの神の御慮には、違ふことにて侍れども、これより後は、戀せじ、とこそはいのり申べけれ。古へより今に、ためし少なき、こまもろこしとやらんへ渡り給ふ。限りなき海山を隔て、互に風のたよりをさへ、聞きかねまゐらせ候へば、斯く思ひたえんとせしも、又むべならざらんや。天正十八年の秋より、翌年の春こまの國へ、御陣あるべきむね仰ありしかども、更に實とも覺え侍らで、多くの月日を過し侍りしが、いつの間にやあらん、文祿初の年の三月にも移り來て、明日はこまの國へ船出し給ふなり、と何方もこと〳〵しうのゝしりあへりぬ。大方夜も半近う更けしかば、行末のことなどかはらじ、とのみ語りつゝ、賴めおきつる、に早や明方の空に成りて、別を急ぐ鳥の聲々、打しきりしかば。

身はかくてさすらへぬとも君があたり
　さらぬ鏡のかげははなれじ

とよみおく和歌の如く、是をかたみに、とたゝう紙ながら殘しおき給ひしを、まことに、袖より外に、もらすかたもなく、恨みてはよみ、よみてはかこち、朝な夕な、詠めくらし侍りぬ。

思ひつゝぬればや人の見えつらむ
ゆめとしりせばさめざらましを

と小町がよみしことの葉も、げにさることぞかし。

十一、小野通子

通子は、水戶の城主武田常陸介信吉の子にして、小野和泉の女なり。初め信長に仕へ、信長亡ぶるに及び隱退して田舍に閑居す、後豐臣秀吉の室淀君之を聞き召して侍女となす。博學多藝にして文筆に達し、殊に能書の聞えありて、當時ろの手跡を學ぶもの多かりきといふ、又畫を能くして、常に天神の像を畫けり、彩色の畫に至りては、粗ならずして上工のわざとやいはむ、人物多くして花鳥は少なし、遺跡稀にありて人愛玩す。筆法狩野光信に出るといふ、嘗て淀君、通子を召して曰く、古へ女子にして才藝あるものは、其名を末世に殘す、汝文を善くし、才亦人に過ぐ、何ぞ奮ひてその名を後世に殘さんと欲せざる、通子は是に於て、源義經(幼名云云舍那王)と矢矧驛の長者の女淨瑠璃姬との交情を十二段の物語に作れり。是れ後世の所謂淨瑠璃といふものゝ起源なりといふ。後塩川志摩守に嫁ぎて男女

二人を生めり、夫身まかりて後德川千姫に仕へ、又東福門院に仕ふ。娘は阿圓とて(一に淨閑に作る)容顏美しく、信濃の領主に召されて寵せられければ、母を呼び養はんとて信州に迎へける、其途すがら姨捨山の麓を通りけるに、供人こは名高き所なれば、立寄りて見給はんやといふに、お通、曾參が車を勝母の里よりかへしゝ故事を思ひ出でゝ、

　姨捨の山には入らじ名をきゝて
　　車かへせし人もありしを

とよみて行かざりきとなむ。

又荒井の宿に泊りしとき、

　萬里へて君命に走り、末まことに妙年、長袖の別むなしく旅に止まりて心を苦しむ、

とかきて末に、

　旅衣荒井の關もへだてしに
　　袖に波よる身をぞうらむる

と記しけりとかや。此女の傳説につきては、古來種々ありて、詳なる事知りがたし。元和二年三月五日、年五十八にして歿す。

△

○淨瑠璃物語（吹上の段）

夜もほの〴〵と明けゝれば、二人の人は、立ちいでゝ後の濱の松原を、こゝかしこと尋ね給へば、いたはしや御曹子、荒き濱邊の汐風に、塚の如くに吹上げたる眞砂の下に埋もれて、姿かたちも見え給はず。こゝに眞砂の中よりも、黄金づくりの御佩刀の石づき少し見えたりける。淨瑠璃これを頼み思し召て、れんぜい殿と只二人、楓のやうなる御手にて、泣くなく眞砂を堀り給へば、藁や塙の中よりも桶と柄杓を堀り出す。いよ〳〵これに力を得て、なほ〳〵堀りて見給へば、さも淺ましき姿なる御曹子を引出し給ひける。

いと美くしかりける御姿、凋める花の如くにて、見るに涙も止まらず。うづもれたる砂土を衣の袂にて打はらひ、御膝にかきのせ奉り、天に仰ぎ地に俯し、さうたうごんげん三島のさうたう大明神、御あはれみを垂れ給ひて、此殿を今一度甦らせたまふものならば、矢矧に持ちたる、七の寶を一つ〳〵たび〳〵に參らすべし（中畧）と深く祈誓を中されければ諸神も哀と思し召し、何處よりとも知らず、十六人の山伏の通り合せ給ひて、いざ〳〵我等の行力の功德あらはさんとて、さま〴〵に加持し給ふぞ不思議なる、まことに御有樣見るに哀れは增りけり。

如何に中さん都の殿、一夜の契に馴れ染めし、淨瑠璃、これ迄參りたり。如何なる宿業にてましますとも、自らこれ迄參りたる志の程を受け給ひて、今一度甦らせ給へと、胸にあて顏にあて流涕こがれ

給へども、其甲斐さらになかりけり。姫君あまりの悲しさに打しほれ、てうづうがひをして天に仰ぎ願はくば、日本六十六ヶ國の大小の御ん神、其他諸神諸佛あいみんめうじよを垂れ給ひて　此冠者定業なりとも、今一度片時の程なりとも、此世へ返し給へと、肝膽を碎き祈り給へば、不思議や諸神諸佛の御はからひにや、淨瑠璃御前の泣かせ給ふ御涙、御曹子の口の中へ流れ入り、不老不死の藥となり、少し活き出でさせ給ひける。淨瑠璃御前はこれに願をかけ給ひ、處々に願をぞ立てられける。

一〇千代女の夫に送る文

久しくよすがもなく、音信もきかまほしき折から、千代方より、あらましの事ども、文して聞ゝ侍ふに、さゝがにの糸たゝはつるものとは見つゝ、とふることとなど、くれ〳〵歎きこし侍ふまゝに、このかへりことに、

とに角に折節ごとの違ひめを
怨むる中ぞ契りなりける

と申し遣し候、さなきだに、女は心淺くて、何くれの事を、狹き胸に保ち侍らふは、闇にもさめられがちにて侍らんずれども、もとの淸水、忘れ難き御心を、吾しも頼み入り候、所がらの御住居、夕顔の垣根もまばらに、人目もつらく思召し侍らはゞ、東山ゆうかん房へ御たより候はゞ、宜しく計らひ申

さるべく候。法師は取り付荒々しく候へども、底意なくて、山の井を結びわけても悪しからず、はからひ給ひたり〳〵、折から所々のさわがしき、うへにも御けしき穩かならず。次々の人も心ならず候故、うれしき便までに、あらまし、しどけなう候。かしこ。

○勅撰歌集

一、新古今和歌集

○題しらず　　宜秋門院丹後

忘れじな難波の秋のよその空こと浦にすむ月を見るとも

○同　　同

吹きはらふ嵐の後の高根より木の葉くもらで月や出づらん

○西行法師へかへし　　遊女妙

世を厭ふ人としきけば假の宿心とむなと思ふばかりぞ

○　　小侍從

しきみ摘む山路の露にぬれにけり曉起のすみ染の袖

○　　同

○　殷富門院大輔

つらきをも怨みぬ我にならふなよ憂き身をしらぬ人もこそあれ

○　同

もらさばや思ふ心をさてのみはえぞやましろの井手のしがらみ

○　高松院右衛門佐

あす知らぬ命をぞ思ふ己からあらば逢ふ夜を待つにつけても

○　八條院高倉

よそながら怪しとだにも思へかし戀せぬ人の袖の色かは

曇れかしながむるからに悲しきは月におぼゆる人の面影

二、新勅撰和歌集

○　二條院常陸

けふはまづいつしか來鳴け時鳥春のわかれも忘るばかりに

○題しらず

月の色もさえ行く窓の秋風に我身一つと衣うつなり

○關白左大臣の家に百首の歌よみ侍りけるに　中宮但馬

いく年かふるの神杉時雨つゝよもの紅葉にのこりそめけん

○百首歌の中に　八條院六條

月ならでながむるものは山の端に横雲わたる春の曙

○題しらず　侍從具定の母

流れての名をさへ忍ぶ思川あはでも消えぬ瀬々のうたかた

○今朝かふると云ふ歌のかへし　從一位倫子

まだしらぬ衣の色もたちかへて君がためとて見るぞかなしき

○源氏物語をかきて、奧に書きつけられて侍りける　從一位麗子

はかもなき鳥の跡とは思ふとも我が末々はあはれとも見よ

三、續後撰和歌集

○題しらず　郁芳門院安藝

水の上に櫻散るらし吉野川岩こす波の花と見えつゝ

○入道前攝政家の歌合に　民部省典侍

いくかへりすまの浦人我がための秋とはなしに月を見るらん

○題しらず　荒木田成長女

物思ふ袂に似たる紅葉かな時雨やなにか涙なるらん

○清愼公少將に侍りける時つかはしける　式部卿敦慶親王家大和

人知れぬ心の内にもゆる火は煙はたえてくゆりこそすれ

○兵部卿敦因親王身まかりにける秋九月つごもりはてに當りけるに、かのあとに申し贈りける　としこ

大方の秋のはてだに悲しきに今日はいかでか君くらすらん

四、續古今和歌集

○建長六年三首歌合に梅を　院大納言典侍

とはるべき宿とはなしに梅の花ひとだのめなる香に匂ふらん

○　鷹司院按察

吹風のさらぬならひも忘られてよゝもとなげく花のかげ哉

○題しらず　平親清女

しほ風の音もたかしの濱松にかすみてかゝる春の夕浪　九條左大臣女

○同

今はたゞもらしやせまし涙川誰故しのぶ浮名ならねば　九條左大臣女

○父みまかりて後よめる

今日迄もながらふべしと思ひきや別れしまゝの心なりせば　平親清妹

五、續拾遺和歌集

○建長六年三首歌合に鶯

白雪はふる巣ながらも鶯のなく音に春や改まるらん　院少將內侍

○寶治百首奉りける時夏月

手にならす扇の風も忘られて閨もる月のかげぞ涼しき　藻壁門院但馬

○見て侍りけるをみて次の日申し遣しける

昔より賴むみぎはの松なれば波もあはれをかくと知らずや　兵衞

六、新後撰和歌集

○題しらず　式乾門院御匣
高砂の尾山のかすみ立ぬれどなほふりつもる松のしら雪
○題しらず　正三位經朝女
春毎に誘はれて行く花なれば櫻やかぜの宿りなるらん
○大納言經信たのめて侍りける夕暮郭公の鳴くをきゝて　小左近
きかましや山ほとゝぎす一聲もまことたのむる人なかりせば
○題しらず　女御徽子女王
秋の夜のあやしき程のたそがれに荻吹く風の音をきくかな
○題しらず　小辨
なきぬとも人にかたらむ時鳥たゞ忍音は我にきかせよ
○菖蒲の根にそへて奉りける　永福門院
かけて見よ君に心の深き江にひける甲斐なきうき根なれども
○秋歌の中に　月花門院
いかなればいつとも分かぬ夕暮の風さへ秋はかなしかるらん
○堀河中宮おはしまさで後圓融院に申されける　二品尊子內親王

龜の上の山を尋ねし人よりも空にこふらん君をこそ思へ

七、玉葉和歌集

○早春霞と云ふことを　　從三位爲子

春霞かすみなれたるけしき哉睦月も淺き日數と思ふに

○題しらず　　從一位敎良女

霞たち鳴く鶯の聲きけば今より咲かん花ぞまたるゝ

○夏風　　昭慶門院一條

山風の吹くとしもなき夕暮も木の下かげは倘ぞ涼しき

○月御歌の中に　　朔平門院

しらみ行く空の光に影きえてすがたばかりの有明の月

○冬の歌の中に　　永陽門院少將

時雨つる空は雪氣にさえなりてはげしくかはる四方の木枯

八、續千載和歌集

○題しらず　万秋門院
咲にけりと山の峯の櫻花たなびく雲の色ぞうつろふ

○歸雁の心を　中宮
吉野山峯とびこえて行く雁の翼にかゝる花のしら雲

○秋歌の中に　前大納言經長女
物思はぬ人はよそにや眺むらんうき身一つの秋の夕ぐれ

○題しらず　大江政周女
山深かみ煙をだにと思ひしを柴とる道も雪にたえつゝ

○皇后宮、齋宮と申しける時奉られける　談天門院
思ふとも云はて程へん月日にも心のくまもあらじとぞしれ

九、續後拾遺和歌集

○題しらず　達智門院
ほのかなる雲間ばかりの忍び音は向たどらるゝ時鳥かな

○題しらず　爲道朝臣母

何故かきつゝなれ來し秋風に衣かりがね音のみ鳴くらん　遊義門院

○御かへし

君が代のためしなるまで長き根に深き心の程ぞ見えける　典侍光子

○題しらず

あはれなり我身に近き鳥邊野の烟をよそにいつまでか見む　三河

○中務卿宗尊親王の許に申しつかはしける

思ひやれいくへの雲のへだてども知らぬ心にはれぬ涙を

十、新千載和歌集

○伏見院位におはしましける時、上の男なども庭花盛久と云ふ心をつかうまつりける、　從二位爲子

九重に匂ひ重なる櫻花めかれぬ色の幾世へぬらん

○硯の蓋に散りたる花を入れて、櫻の扇にかきて、瑒子內親王に遣はしける　瑒子內親王

一人のみながむる宿に散る花をあふぎの風のつでだにも見よ

○返し、山吹の扇にかきて　瑒子内親王
吹きまよふ扇の風のつでにこそいはでかひある色も見えけり
○病、かぎりに侍りける春三月の廿日餘り迄庭の花
遅く咲き侍りけるによめる　從三位藤子
折しもあれ心づくしに待れずばことしばかりの花は見てまじ

十一、新拾遺和歌集

○永仁二年三月内裏三首歌合に山路落花を　伏見院新宰相
梢より散りかふ花を先だてゝ風の下行くしがの山道
○題しらず　梅壺女御
行かへり故郷人に身をなしてひとり眺むる秋の夕暮
○百首歌奉りし時　徽安門院一條
あふことは波路はるかに漕ぐ舟のほの見し人に戀ひやわたらん
○題しらず
よる舟のたよりはなくて徒に我身こがるゝ床のうらなみ

○百首歌奉りし時、田家　　大納言顯實女

世の中は秋の山田のかりの庵住みこしとてもよしやいつ迄

十二、風雅和歌集

○春の歌の中に　　徽子内親王

つくづくと永き春日に鶯の同じ音をのみ鳴きくらす哉

○百首歌の中に　　進子内親王

窓あけて月のかげしく手枕に梅が香あまる軒の春風

○柳をよみ侍りける　　西園寺前内大臣女

霞みわたる岡の柳の一本にのどかにさそふ春の夕風

○秋歌とて　　藤原爲守女

秋ぞかしいかに哀れぞとばかりにやすくもおける袖の露哉

○冬歌の中に　　永福門院右衛門督

のこりなく今年も早く呉竹のあらしにまじる雪もすさまじ

○世をそむきて後、あやめを見てよめる　　從三位容子

今とても黒白（あやめ）分くべき身ならぬに何にかけてかねのなかるらん

○釋敎歌の中に　　從三位親子

心をばかねて西にぞ送りぬる我身をむかへ山の端の月

十三、新後拾遺和歌集

○題しらず　　從二位業子

あかず見る心をしらば櫻花なれよ幾世の春もかはらで

○題しらず　　安喜門院大貳

物思ふ誰が涙にかそめつらむ色よりかはれ衣手の森

○旅の歌とて　　藤原基世の女

都思ふ涙のうつる旅衣野山の露をかさねてぞしく

○夜更けて月の入るを見てよめる　　成尋法師母

山の端に出で入る月もめぐりては心の内にすむとこそきけ

十四、新續古今和歌集

○九條内大臣家歌合に　土御門小宰相

眞葛はふ同じまがきの花すゝきうらみぬ袖もしげき露哉

○題しらず　平胤行女

戀死ぬと云ひてもへぬる年月の命や人にうたがはるらん

○康暦二年三月内裏にて人々藤花久薰と云ふことをつかうまつりける序に　通陽門院

神ふれて幾春なれん咲く藤の松よりあまる千世の匂ひに

○武人妻妾の和歌

○清盛の寵衰へしかば　祇王御前

もえ出づるも枯るゝも同じ野邊の草いづれか秋にあはではつべき

○　佛御前

よしさらば心の儘につらかれよさなきは人の忘れかたきに

○後朝の別れに　熊野御前

東路のはにふの小屋のいぶせさに故鄕いかに戀しかるらん

○坐ろに故鄕を思ひて　同

いかにせむ都の春も惜しけれどなれし東の花や散るらん

○　靜御前

つらからば我れ諸共にさはあらでなど憂人の戀しかるらん

○形見の鏡を　同

見るとても嬉しくもなします鏡戀しき人の影をとめねば

○祐成が菩提をとむらひて　虎御前

浮世ぞと思ひそめにし墨衣今また露の何とおくらん

○裙野にてよめる　同

露とのみ消えにし跡を來て見れば尾花が末に秋風ぞ吹く

○五郎の後を慕ひ出家して　少將

數ならぬ心の山の高ければ奧の深さを尋ねこそすれ

○甞て大磯にて　同

捨てる身に猶思出となるものはとふにとはれぬ情なりけり

○辭世　袈裟御前

露深き淺茅が原に迷ふ身のいとゞ闇路に入るぞかなしき

〇夫の形見の袖に　　佐介貞俊妻

誰見よと形見を人のとゞめけむたえてあるべき命ならぬに

〇　　菊池武時妻

古里も今宵ばかりの命ぞと知りてや君が我を待つらむ

〇夫の最後に　　山名氏清夫人

とりえずば消えぬと思へ梓弓引きてかへらぬ道芝の露

〇同　　同

しつむとも同じく越えて待てしばし苦しき海の夢の浮橋

〇　　武田勝賴夫人

現には思ほへ難き此ところ仇にさめぬる春の夜の月

〇三月三日城を出るとて　　同

春霞たち出れども幾度かあとをかへして三日月の空

〇佛の御前に通夜して　　同

西を出で東へ行きて後の世に宿かしばをと賴む御ほとけ

○同　同

行先の賴みぞうすきいとゞしく心よわみが宿ときくから

○母に送るとて　同

殘りなく散るべき春の暮なれど梢の花の先立つぞうき

○髪を切て自殺しける時　同

黑髪の亂れたる世ぞはてしなき思ひに消ゆる露の玉の緖

○　大内義隆夫人

身をつみて人の痛さぞ知られける戀しかりけり戀しかるらん

○辭世　柴田勝家夫人

さらぬだに打ちぬる程も夏の夜の別れをさそふ郭公かな

○今。樣。歌。

○清盛の御前にて　祇王御前

蓬萊山には千とせふる　万歲千秋かさなれり

松の枝には鶴すくひ　巖の上には龜あそぶ

○清盛の寵衰へしかば　　同

君が上げこし手枕の　たゝて久しくなりにけり
何しにひまなく睦れけむ　ながらへもせぬ物からに

○佛御前の爲め己れの寵衰へしかは　　同

佛もむかしは凡夫なり　我れ等も遂には佛なり
三身佛性具しながら　隔つる心のうたてさよ

○清盛に初見の折　　佛御前

君を初て見る時は　千代も經ぬべし姫小松
御前の池の龜岡に　鶴こそ群れて遊ぶなれ

○同　　同

君万歳にましませよ　我等も御影にさむらはん
鶴と龜との齡には　幸ひ心にまかせたり

○老ひはてゝ後　　神崎遊女かね

我等は何にしに老にけん　思へばいとこそ哀れなれ
今は西方極樂の　彌陀のちかひを思ふべし

○歌占に　金峯山巫女

十万億土のくに〳〵は　海山へだて遠けれど
心の通だに直ければ　つとめて至るとこそきけ

○義經に別て後　静御前

ありのすさびのにくきさへ　ありきの跡は戀しきに
あかで別れし面かげは　何時の世にかは忘るべき

○同　同

別れの殊にかなしきは　親のわかれ子の別れ
勝れてげにも悲しきは　夫婦のわかれなりけり



第四期　（自紀元二千三百九十一年／至紀元二千五百三十年）

武家時代の下

總論

鎌倉足利の時代は過ぎて、德川時代來るや、文學上に一大變動起れり。抑足利の世は殺氣紛々として、武士の威風甚だしく吹き荒び、詞花言葉は恰かも冬枯の有樣となり、文學は厭世的にして隱遁學者の手に移り、僅に命脈を保ちつゝありしが、此時に至りて復大に勃興し、文人は朝野に現はれて、其昔青丹よし奈良の都の文華の如く、紛々香氣を放てり。春風一たび枯柳を渡れば忽ち烟霞を罩め、嫋々綠絲を垂るゝが如く、優艶とやいはむ婉麗とやいはむ。

抑德川時代の文學は、あらゆる方面より發達して、殆んど空前絶後の隆盛を極めたり、即前時代にありては、隨筆、軍記類、連歌、謠曲等に限られたりしが、當時代となりては、國文の本體とも認むべき、和學家の擬古文を始め、俳文、滑稽文、戯曲、小說等現はれ、韻文には、和歌の盛になると同時に、前時代の連歌は一變して、十七文字の俳句となり、謠曲の行はるゝにつれて、狂言記なるもの出づるに至れり。

今德川時代の文學を通觀するに、自から二期に分る。即ち第一期は、元祿時代にありて、京都大坂を中心として發生したる文學なり。第二期は、文化文政の頃、江戶を中心として勃興したる文學なり。前者は之を元祿時代の文學といひ、後者はこれを江戶時代の文學といふ。

元祿年中、難波の僧契沖、始めて古書を探りて言辭を研究し、また德川光圀の命によりて、萬葉代匠記を撰する事あり。荷田春滿又京都に在りて、頻に國史律令を究め、國學校を興し。門人加茂眞淵は師の志を繼ぎ、國語を研究するにあらざれば古史を明め難しと云ひて、生涯萬葉集の研究に力を盡し、古體の歌を復興し、歌風を一變せり。其門人本居宣長は伊勢より起りて古事記傳、其他數十部の書を著し、國史國語共に發明する所多く。爰に至りて、國學は愈隆盛の氣運に趣き、今は全く獨立して、專門の業となりぬ。其後、平田篤胤出でゝ、專ら神學の研究に力をつくし、古史傳以下の著述いと多し。世に荷田春滿、加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤を以て國學の四大人と稱す。

又當時代にありては、漢學隆盛の極度に達し、從て儒者は皆要路に當り威を振へり。これ他なし。家康は、大に儒敎主義なる人にして、國民に向ひて厚く學問を奬勵されたるが故なり。即藤原惺窩は京都にありて、林羅山は江戶に在りて、共に程朱の學を唱へ、中江藤樹は近江にありて、王陽明の學を修め、東西相對して現はれたり。其他荻生徂徠、其弟子に太宰春臺あり。木下順庵の門より、新井白石、室鳩巢など出でたり。何れも碩學鴻儒にして、よく世人の知る所なり。

又漢學者の創作にかゝる、和漢混淆文の現はれしも此時代なり。即ち今日の所謂、普通文の基にして、春臺の獨語、白石の讀史餘論、折焚柴の記、鳩巢の駿臺雜話等是なり。

江戸時代に至りては、戯曲小説など盛に行はれ、中にも猥褻なる文句を以て綴れる者出でたれば、大に世の風俗を害したり。西鶴の好色一代男、好色一代女、春水の梅暦等はその甚しきものなり。

德川時代に於て記憶すべきは、女訓の著書多く現はれし事なり。即假名列女傳、本朝女鑑等續々現はれたり、中にも假名列女傳は我國女訓の書にて最も古きものなり。次で著はれたるものに、壷のいしぶみ、婦人養草、女大學等あり、何れも儒敎主義を以て、婦女敎育の根本とせり。是によりて當時の婦女社會に於て、如何に儒敎の影響を蒙りしかを推測し得べし。

概して云へば、當時は女子の讀み物に乏しからざりき。女四書、女訓抄、鑑草、小兒育草等は、寶永の前後に於ける女子の讀本類にして、安永の頃に至りては、女學範といふ書出でたり。大江資衡の著にして、學問の大意、女官品階より雛祭、七夕祭等の事を圖を挿みて説明したるものなり。又七要袋には和歌の德を説き、女筆色錄には女子四季用の模範文を集め、女訓三才圖會、女花鳥餘情には、何れも女子の歌人の事を述べたり。文久の頃に至りては、女用文章指南車、女敎訓書操鑑、女中庸瑪瑙筥など續々出版せられたり。

德川氏の太平二百有餘年の間には、才女賢婦の現はれて、妙篇傑作の存するもの少なからざるが、大

概は民間より輩出して、彼の平安朝の如く名媛佳人の中には殆んどなかりき。女子にして歌文を能くするもの、江戸には縣居翁門下の三才女、即ち餘野子、倭文子、茂子等有名にして、京都には太田垣蓮月、東山の麓にありて爛熳たる詞花を咲かせたり。又俳諧に名を得たるものには、捨女、園女、秋色、千代等ありて、就中千代は俳諧家として最も世に知られたり。其他歴史家の麗女の如き、大に氣慨ある女子にして、一枝の筆を以てよく國家の爲めに憤を發する所、雄々しくして往々卓論あり。余輩は德川時代は平民的文學の興起時代なり、と云ふと共に、又一方には古文校訂解釋の時代なりと、云ふに躊躇せざるなり。而して暗きを明らめ、隱れたるを索むるまでに止まりて、未だ應用の時機には至らざりき。

貴族的文學が、此時に當りて平民的文學となりし所以は、全く和漢混淆文の盛なりしと、俳句の勃興したるとに外ならず。混淆文は極めて平易にして、俗人と雖も理解するに難からざれば、漸次民間に普及して、農童漁女といへども文學の味を知るに至れり。俳句は從來の嚴格なる規則ある和歌と異なり、自由自在に我が思想を發表することを得べければ、大に民間に流行したり、これ等をこそ、平民的文學勃興の原因とはいふべけれ。

第一章　散文學

既に總論に於て述べしが如く、德川時代に至りては、文學大に勃興しければ、從て散文上にも亦一影響を與へたり。奈良朝以來餘り進歩の跡を見ざりし、所謂純粹和文なるものは、この時に當りて再び光輝を發するに至れり、豈喜ばしきの窮みならずや。

かく文學の隆盛に伴ひて、散文上に種々なる文體を見るに至れり。即ち第一は、北村季吟、僧契沖などの主唱せし所謂中古の國文にして、第二は藤原惺窩林羅山等が首唱せし和漢混淆文なり。前者は多く學者間に弄ばれ、後者は當時社會一般の嗜好に適合して、普く朝野に歡迎されたり。其他、元祿享保の頃、近松門左衛門の創作にかゝる戲曲文あり、王朝の竹取物語或は源氏物語に倣ひて作れる小說文あり、俳諧の隆盛によりて起れる俳文あり、狂歌より來れる狂文あり、千態萬狀にして、恰かも千草花咲く秋の野面を見るが如し。

第一節　和漢混淆文

和漢混淆文は、當時の儒者藤原惺窩及林羅山等の首唱せし處にして、最も平易を旨とし俗人と雖も易く了解し得む事を力めたり。抑此文體は、鎌倉時代に專ら流行したる平家物語、源平盛衰記及太平記の類に倣ひたるものにして、巧みに假名文中に漢語を用ゐたるものなり。試に古代に遡りて當時の文學を觀察するに、その艶麗浮華なるは、多くの公卿が鬖々たる平安城裡の花に歌ひ月に嘯きて、世の何たるを知らざりける當時の風俗の表はれしものならむ。かくて世は移り變りて、平氏起り、源氏起

り玆に源平の大亂となり、遂に武斷政治の鎌倉時代となるや、文學上に一大變遷を來たして、人情と文學と一致し、以て世は悲愴殺伐の有樣となれり。されば奚ぞ、平安朝の女々しき文體を以て、雄健悲愴の情を描き得んや。和漢混淆文の起る又偶然にあらざるなり。

かくて德川時代となりては、此文體を以て書ける史論あり、隨筆あり、日記あり、紀行あり、始んど此文の全盛時代となりて、社會一般に歡迎されたるのみならず、之によりて平民的文學なるもの起り以て德川文學の一大氣運を見るに至りしなり。和漢混淆文が德川文學の發達に影響を及ぼせる効力、豈偉大なりと云はざるを得んや。今其著書の著しきものを列記せば、

多波禮草	雨森芳州
駿臺雜話	室鳩巢
獨語	太宰春臺
鳩巢小說	室鳩巢
蘐園談餘	荻生徂徠
雲萍雜誌	柳澤淇園
輶軒小說	伊藤東涯
常山紀談	湯淺常山

筆のすさび　菅茶山
とはず語り　中井梵庵
梧窓漫筆　太田錦城
常陸帶　藤田東湖

等重なるものなり。此他貝原益軒の敎訓書の如き又見るべきもの數多あれども、そは省きつ。

第二節　日記及び紀行

德川氏、江戸に府を開きてより、京都との往來しげき爲め、交通の便も大に開け、野に寐、山に伏し、川に溺るゝ恐れもなくなりし爲め、又一は俳諧者の行脚して見識を廣むる事など大に流行したる影響として、文人佳客追々白川の月を眺め、吉野の櫻を賞し、隅田川に都鳥を訪ふ人など出で來しかば、紀行文として、今日に傳はれるものいと多し、中にも。

菅笠日記　本居宣長
甲斐日記　淸水濱臣
中空日記　香川景樹
須磨日記　香川景恒
船路日記　八田知紀

霞の友	白河樂翁
改元紀行	太田南畝
椿詣の記	村田春海
相馬日記	小山田與清
木曾路記	貝原益軒

等は、尤も世人の愛讀するものなり。

又俳人の日記紀行に至ては其數枚擧するに遑あらず、今其尤も人口に膾炙せるもののみを列擧せん。

奥の細道	芭蕉
鹿島紀行	同上
野ざらし紀行	同上
笈の若葉	雲鈴
陸奥の記	二日坊
佐渡日記	且水
丙寅紀行	風瀑
筑波紀行	蓼太

以上は男子の手になりしものなるが、女子の手によりてあらはれしものも夥少なからず。その內尤も著しきをあげ、これが解題を記さん。

松影日記　正親町町子の著にして、貞享年間より筆を起し、寶永六年に終る。本書は、夫、柳澤吉保の經歷を榮花物語の文體にならひて作りしものなりと。其文體頗るしなやかにして、流暢なる、麗女の筆と雖も及ばざる節あり。

磯づたひ、奧州嘶　共に只野綾女の著にして、磯づたひは、名義の如く海邊の景を叙し、奧州嘶は仙臺に於ける奇事異聞を記載したるものなり。共に、行文自在にして、頗る妙味あり。曲亭馬琴は此兩書に評語を加へて出版したりと。

初午の記　本書は荒木田麗女の記にして、書中安永六年、遊行して京都に上り、浪華に下り、須磨明石に遊び、芳野に花を尋ね紀州に出で、粉河寺和歌の浦の勝を探り、再び大和に入り奈良を經て歸宅せし間の紀行をつゞりしものなり。文章の流暢なるはよく世人の知る所にして云ふまでもなし。

后午の記　同じく麗女の記にして、天明二年二月、后の午の日十五日に大和國へものし、再び京都へのぼり、播磨に至り、大和を經て歸りし迄の旅行日記なり。

庚子道の記　本書は、白拍子武女の記にして、享保五年二月の頃、尾張國名古屋より江戸に下りし折、津々浦々山々にて見聞せし事を記せり。其文章流麗にして、紀行文の模範として、充分價値あ

るものなり。嘗て清水濱臣之を見、十六夜日記、更科日記、に一歩を讓らずとなし、自ら標註を加へて出販せり。」今傳はれるは、此書なり。

旅の命毛　此記は外命婦土屋茅淵の女のしるしゝものにして、文化三年四月五日、武藏國江戶より和泉國へ赴く間、草枕露しげき事、見る事、きく事、漏らさず書きつけて一冊となしたるなり。

東海紀行　井上通女の紀行にして、十八歲の時丸龜侯の太夫某に從ひて江戶に出でし際、見聞せし事を記せるものなるが、筆にまかせて縱橫自在に風景を叙し、詩歌をさしはさみたる、まことに紀行文としては、めでたきものなり。通女の再び丸龜に歸る時の日記を歸宅日記と云ふ、これ又東海紀行につぎてめでたきものなり。

以上は女流の作として、尤も著名なるものなるが、尙ほ此他に、

木曾路記　鵜殿餘野子
伊香保紀行　弓屋倭文子
廣澤記　遊女大橋
和泉日記　土屋茅淵女

などは、共に見るべきものなり。

第三節　和文集

德川時代に至りて多くの和文集現はれたりしが、惜むらくは、女子の文集にして世に刊行されたるもの殆んどなく、僅に他人の文集中に加へたるが見當るのみなり。縣居翁の門下にて有名なる餘野子の文集、涼月遺草てふものもあれど、未だ世に出です、寫本の儘に傳はれり。
男子の和文集には、本居宣長の鈴屋文集、藤井高尙の松廼舍文集、村田春海の琴後集、伴蒿蹊の閑田耕筆、橘千蔭のうけらが花、清水濱臣の泊々舍文集、中島廣足の橿園文集、等ありて、この他にも猶少なからず。是等は何れも、後世和文を學ぶもの丶模範として、必讀すべき書どもなり。其他女子のものに至りては、前述の如く、一家の集はなく、只他人の文集中に加へれらて存するのみにして、一部をなせるもの實に稀なり。今其二三を記さば、

縣門遺稿　加茂眞淵翁の門下、餘野子、蒼生子、筑波子以下の文を、清水濱臣の集めたるものなり。

秋燈集　井上通子

文布　三卷　弓屋倭文子の遺稿を、父母の集めしものにして、中卷は卽ち文集なり。

涼月遺草　寫本　鵜殿餘野子

松のしづ枝　間宮八十子

尙此他に麗女の著書數十卷、共に見るべきものあれども、傳記の中に記したれば、此處には省きつ。

第二章　韻文

加茂眞淵翁は、德川文學上に一大貢獻を爲したる人にして、當時の有名なる歌人は多く此門より輩出せり。翁は好みて萬葉集を研究したる結果、大に萬葉調を貴び、從て此流の和歌を作れるもの門人中に少なからざりき。されど世は樣々にして、或は古今集の優美なるを學ぶあり、新古今の雅婉なるを模範とするありて區々一定せざりき。この時に際して香川景樹は、特得の才を以て頻りに和歌を研究し、舊來の歌風を忌みて、現今の活語を以て現今の思想を歌はむと勸めたる人にして、詞藻豐富嶄然一機軸を出せり。

女子の歌讀みには、眞淵翁の門下に有名なる三才女とて餘野子、茂子、倭文子あり。京都に太田垣蓮月あり、皆秀歌を以て世に名高し。

藤原定家卿以來、和歌は窮窟なる規則を守らざるべからずといふに對し、其反動として現はれたる俳諧も俳句も最初は滑稽なりしが、芭蕉の正風体現はれ、大に美的詩想を貴ぶに至りて、僅に十七文字なりとは云へ、趣致に於ては三十一文字の遠く及ばざるものあるに至りしかば、玆に於てか俳句に心を寄するもの多し。

女性にしてこれを能くせしものは、北村季吟の門に不徹庵捨女あり、芭蕉の詞友に園女あり。其角の

門に秋色、支考の門に千代女ありき。就中千代は最も有名なり。

第一節　歌體

當時の歌體は種々にして、或は萬葉風を學び專ら古言を以て歌ふものあり、或は中古體とて古今集を模倣するものあり、或は萬葉の淳朴なるを避け、古今の纖柔なるを捨てゝ、温雅優艶なる新古今を模範とするものあり、或は舊思想を忌みて新思想を弄ぶものあり、各自の好む處に任せて一樣ならざりき。

其萬葉風を尊びしは加茂眞淵にして、この門より出でしもの及其流派に習へり。優美なる歌風を好みたるは、伴蒿蹊、藤井高尙にして、稍奇拔に新思想を以て詠出せしは香川景樹なり。景樹は歌才を天性に得て、大に卓見を抱き居れり。當時加藤千蔭、村田春海を始めとして、天下の人多くは古今新古今を賴みて、古き歌風を學ぶ際に於て、獨其時代の新想を歌ひたるものにて、今日の恰新派歌人ともいふべき人なり。其著新學異見に於て、自己の本領を明かし、以て眞淵の歌意考を駁したるなど、其見識を知るべく、家集桂園一枝を繙きて、其歌風を悟るべし。

第二節　私撰集及び家集

一、私撰集

當時代は單に京都のみに限らず、天さかる鄙のはてくまで、歌道に志す人多く、各藩又競ひてこれ

を奬勵し、京都江戸などより師を招聘し、藩士をして是を學ばしむるに至りしかば、各藩共に名匠輩出せり。

されば、これ等の手によりてなりし撰集、又見るべきもの多し。今其一二を記さん。

林葉累塵集　十卷　五本　　下河邊長流撰

萍水和歌集　十卷　二本　　同上撰

鰒玉集　五篇　十冊　　加納諸平撰

類題鴨川集　五篇　十冊　　長澤伴雄撰

等其主なるものなり。此他各地方に於て、個人又は藩主の命によりて、撰集せしもの數多あれども、煩はしければ省きつ。

一、家。集。

當時和歌は、地下人の手に移り、天下一般の流行となり、藩主又好で、歌人を招聘せしかば、紀州因州などの如きに至ては、尤も多く歌人を出せり。

而してこれ等の歌人、各々家集を出すに至り、其數非常に多くして、一々列記するの暇なし。故に、今其有名なるもののみを摘記せん。

晩花和歌集　　下河邊長流

漫言集　釋契沖
春葉集　荷田春滿
加茂翁歌集　加茂眞淵
六帖詠草　小澤蘆庵
鈴屋集　本居宣長
琴後集　村田春海
稻葉集　本居大平
守部家集　橘守部
桂園一枝　香川景樹
柿園詠草　加納諸平
千々の舍集　千種有功
泊々舍集　清水濱臣

以上皆男子の手になりしものなるが、女子の手になりしものに至りては、

筑波子家集（續日本歌學全書に納む）　土岐筑波子
佐保川集　鵜殿餘野子

倭文子家集　弓屋倭文子
往事集　井上通子
梶の葉　祇園梶子
小百合葉　同百合子
紅子家集　紅子
芳樹和歌集　村田多瀬子
杉の下枝（續日本歌學全書に納む）　荷田蒼生子
詠人の刈藻　續日本歌學全書に納む）　大田垣蓮月
麥の舍（同）　高畠式部
玉石集　間宮八十子

等著しきものにして今に存せり。

第三節　俳諧の發達

德川氏初世に於て、山崎宗鑑、荒木田守武など出で、足利時代に流行せし連歌を本として、前者は犬筑波集を著はし、後者は守武千句を作り、以て俳諧なるものを創作せり。爰に於て松永貞德あらはれ、淀川、油粕、御傘、などの書を公にし、後水尾帝より花の下の號を賜はる、此門に北村季吟、松江重

類、安原貞室など出で漸く盛ならんとするや、季吟門下に於て松尾芭蕉あらはれ、從來の粗雜なるを避け、更に正風と稱する流派を立つ、而して其門に集るもの數百人に及べり。中にも嵐雪、其角等白眉なり。これとほゞ時を同じうして、平泉鬼貫、宗因の門より出で、伊丹風と云ふ一派を起したれども、勢ひ正風派の比にあらず。

元祿以降俳句は平民文學として、上下共にもてはやすに至りしかば、之が宗匠數多芭蕉の流をくみて輩出せり。即ち其角、嵐雪の外に、去來、許六、支考、丈草、凉菟等あり、不角、蕪村、蓼太、凉岱也有等出で其隆盛遠く和歌の及ぶ處にあらず。

從て其影響女流社會に及び、季吟の門より捨女出で、芭蕉門下には園女、智月尼、梢風尼あり。其角の門には秋色あり、支考の門に千代尼あり、中にも園女、千代尼は、其巨魁にして、平安の清紫二女に准じ、今日に至る迄斯界に喧傳せらるゝ處なり。

元來女子の性質たる、頗る緻密にして感情深きものなれば、其詠出せる句、自から優柔艶麗にして、一種の情趣あり、讀者をして同情を表せしむる點に至りては、遙に男子の句に勝れるものあり。彼の千代女が、最愛の兒を失ひし折の。

とんぼつり今はどこまで行たやら

などの句に至ては、實に眞情を穿てりといふべし。

これ等の傳及び作例は、下に記せば今は只其句集をのみ紹介せむ。

千代尼句集　花讃女句集
智月尼句集　秋色句集
園女句集　多代女句集

など其主なるものなり。而してこれ等は皆俳諧文庫中に納めたれば、就て見るに便なり。

尚當時代の文學として尤も價値あるは、近松流の戯曲文、馬琴流の小説文なり。是等は實に德川文學の代表者とも云ふべきものなれども、女流文學としては直接の關係を有せざれば、省畧せり。

又これに次であらはれしは、俳諧家の俳文にして横井也有の鶉衣など名高く、一九、三馬などの滑稽文、太田南畝、石川雅望の狂歌、狂文など尤も當時に歡迎せられたり。

又此他に國學者の事業としては、北村季吟など盛に古書を註釋し、眞淵、宣長などの士、又國學復興に身を委ね、契沖一派の士は語學研究を創始し、伊勢貞丈は有職古實に、伴信友は考證に、平田篤胤は神學に、各自皆專門に研究し、著書從て多く、當時文學界に貢献せるもの實に少なからず。かく當時代文學は種々の方面より發達しけるが、これによりてまた研究材料の極めて豐富なりし事知るべきなり。

以上の如く諸學術隆興の頂點に達したる結果、維新の際、大打撃にあひたれども、如何でか滅却せん、

只一時潜伏したるのみにして、明治に至り、再び其頭角をあらはし、泰西文學と相俟て愈隆盛ならんとす。實に當時の文學は、所謂我邦黄金時代と稱するも敢て不當ならざるべし。

第三章　作者傳及び作例

一、捨女

捨女は丹波國氷上郡柏原といふ山里に住ひし人なり。性質聰敏、幼き時より風流の志ありて、まだうら若草の芽ざし、六歳の時にしも、すでに俳諧をよくし、「雪の朝」の句を詠めりとぞ。これぞげに天賦の才なりけらし。されば、いつとなく、其名都鄙にあまねく知られて、この女の生先きやいかにとまつ人は多かりけり、捨女長じて、近江國野洲郡北村の人にて、北村季吟と云ふ國學者あるを聞き、尋ね行きてその門に入り、敷島の道をたどりけるが、後宮川松堅といふ人に就て、專ら俳諧を究めたり。

ある年大守某侯、江戸に參上せらるゝ道すがら、かねて捨女の名をきゝけるが、尋ね語はんとて、殊更に、駕をその家に枉げられぬ。侯はいたく捨女の才藻あるに打おどろき、やがて

柏原に惜しや捨れく露の玉

といふ句を賜ひて、いたく賞讃せられたりとかや。

二十歳の時、宗族某に嫁ぎて男子三人を生めり。三十歳に滿たずして、不幸にも夫を失ひたれば、己は剃髮して貞閑と號せり。(野史には尼となりて、妙融と號すとあり)。

この時詠みし歌に、

秋風の吹きくるからに糸柳
こゝろ細くも散る夕かな

年老いて後は、播磨國網干の里なる、龍門寺の僧、盤桂禪師の弟子となり、その寺の傍近く、草の庵を結びて、自ら不徹庵と名づけ、こゝに一生を送りきとぞ。

あはれ、龍門寺の鐘の音に暮れゆく夕まぐれ、雨肅々と降り出でしを、庭の枯木に鳩の鳴きわぶるなどを眺めやりては、いかにものしたりけむ。こと問ふよすがはあらねども、流石に當時の忍ばるゝことにこそ。

捨女は寛永十一年甲戌に生れ、元祿十一年戊寅八月十日に身まかりぬ、時に年六十五。

○俳。諧。

○
ざうに煮や千代の數かく花がつを
○
花をやる櫻や夢のうきよもの
○
日ぐらしや捨てゝたきても暮るゝ日を
○
拜みたし涙くもらでねはん像
○
粟の穗や身は數ならぬをみなへし
○
吹きなれて皆にもならぬ尾花哉
○
思ふこともなき顏しても秋のくれ
○

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

○

うき事になれて雪間のよめ菜かな

○

來る秋の霧きは見する一葉哉

二、梶子

梶子は寛永年中の人にして、京都祇園南林茶店の女なり、日々參詣の人々に茶を鬻ぎ、以て一生を風流に送りたり。年十四の時咏める、歲暮戀といふ歌、

こひ〳〵て又一年もくれにけり
　　涙の氷あすやとけなん

此歌は當時大に賞讚せられて、有名なるものなり。梶子は天性詩人の想を具したりけむ、誰を師とするといふ事もなくして、秀歌を多く咏み出で、遂には其詠歌雲の上にまで聞え上げ、常に堂上方の訪れ絶えざりきとかや。嘗て冷泉爲村卿大に其歌才をめで和歌を賜はりける、其歌は、

摘む若菜折りたる梅の色も香も

春のこゝろの花がたみかも

家集を梶の葉といふ、これは江戸の人某、梶子を訪ひ詠草を無理に乞ひ、歸りて出版せしなりとぞ。其序に曰く、

祇園の邊に茶店の營をなせる、梶といへる女あり。其心ばへやはらかにして賤しからず、幼より父母によく孝をなしていとなみ暇なきすさびに、草子、歌、物語などに心をよせて、立やすらへる人の心ありげなるには、古き歌の意ばへをひそかに問ひ聞きて、いつしか三十一文字のなさけを知りて、花に月に口ずさめる事になりぬるとぞ、かゝれば、心のたくみに隨ひて、やさしき姿も少なからぬにや、往來の人の耳とゞむる事となりにしかば、これなん賤しき身と云へども、和歌の德にて侍るならし、あるはあだ〳〵しきものは、たはれたる歌よみて其返しを物せよと、いひさわぐも多く、あるは心ある田舍人は其言の葉一つ二つうつしもて、都のつとゝいひ廣めけるほどに、うべなるかな、東のはて西の海の邊まで、芳しき名は流れすぞいふことなし。

など見にたり。養女百合子また和歌をよくせり。

○和。歌。（梶の葉）

○立春の心をよめる

のどけしな豊蘆原の今朝の春かぜの姿も水のこゝろも

○人の許へ梅の花を折りつかはすとて

わが袖の匂ひもゆかし君が爲め折りつる梅のなごり思へば

○やよひのつごもりに

今日はまたさらにもかすめ夕日かげいる山の端の春のわかれに

○春戀と云ふことを人のよめと云ひければ

しのばれぬ心の色をそれと見よ雪間にもゆる野邊の若草

○河原の夕涼を見侍りて

こゝに來てみたらし川の水上を思へば涼し波の夕風

○夕落葉

くまてなる秋の木がげのうらみをも落葉にはるゝ夕暮の月

○東より上りたる人、下るとて「忘れじな、神のみろのゝ秋の月

我は東のはてに住むとも」とありし〃返し、

よひ〱は面かげながら待ちいでむ東の果の山の端の月

○木の葉の道を埋めたるに

雪ならば訪ひこし人のあともも見む木の葉に埋む庭のかよひ路

○冬月

小夜あらし萩のかれ葉の音ふけて霜に色ある月ぞさむけき

○寄露戀

れほかたのうき夕ぐれの月を見む秋の外なる袖の涙を

○依戀祈身と云ふ事を

つれなさも思ひかへしてさらに又命あらばと身を祈る哉

二、京極少將女

京極忠高公の女にして、家臣多賀宮內が妻なり、文才を以て天下に名を知らる、嫡子、賴母は高和公の養子となり高房と號す、高豐公の御代分知三千石を以て旗本に召出され、延寶五年五月廿一日卒す、行年三十五歲、此後男子なくして遂に家は絕たり。

少將女は萬治三年四月二十七日卒す、法號は壽昌院殿茂林宗繁大姉といふ。

慶安三年の頃長月末つ方、暮はつる頃、來し方行末の事など思ひつゞけ、

我此君を生み落してこの方、心を盡くしておひたて、剩さへはて〳〵は雲井のように別奉りて、明

暮涙に沈み、年を重ぬる心の中をも、父の果なく成り給ひし有様より始めて、あやしき筆の跡につゞり書きて、我なからむ跡の形見に見せ奉らばや、人の形見には、はかなき筆の跡にましたるものなしとて、書きつゞりしものは、即涙草の一篇なり。

○涙。草。

それ人の親の子を悲しむ道は、思ふにも餘り、云ふにも詞たらざるべし。山のけだもの、かうがのうろくづ、空をかけるつばさ、土に生ふる類迄、凡て生とし生けるもの、形は異なりと雖も、志はかはる可らず。況んや人として、かみが上まで、しもが下まで、子を思ふ心の闇はひとしかるべし。こゝにやう〳〵齡かたぶく身に、一人の男子をまうけぬ。めづらかにらうたきものから、よるひる金玉の心地して、袖より外にははなし難く、朝夕膝の上にのみ、あづかひまほり暮しける。なまさがしき女はらのさ集りて申しけるは、あまりゆゝかしきまでうつくしう、御智惠もほどより過ぎて、恐ろしく見え給ふに、かゝる御ちごれひは、卑しき民の子にしたてまつりて、名をつけたるはなん御命も長く、れはします物なりと申しければ、人のきこゆるまゝに、わくむらと云ふ里より、二郎右衛門と云へるかたわを呼びて、名をつけさす。おのが心にまかせて樣々の悅事どもさへづり給ひつゝ、頼母の助と名づけぬ。やう〳〵いかもゝか過ぎぬれば、日々に物を引のぶる樣に、およすげまさりて、いとしき

樣にうつくしく、つぶ〳〵とこゝて、笑ひがちに物語などし給へば、父のいとほしみ、中々云ふばかりなく、夜晝いだきいつくしみ給ふ程に、年も暮れ春にもなりぬ。いとうつくしうおとなび給うて、愛ぎやうづきたる物まね、らうがはしくはひまつはれ給ふを、父もろともにこの君をかしづき草にていつしかありき給はむ事を待ち、日にして明しくらしけるに、其夏の中頃より、父君の心地わづらひ給ふ。おどろ〳〵しき病にもあらず、そこはかとなく、なやみ給ふ。年月もかやうにあつしくのみおはしけれども、度々さはやぎ給へば、さにもこそはと、しばし心みるに、怠たるけしきもなく、日にそへていと苦しげに見え給へば、いかなる事にかと、驚きさわぎても、元より藥の力はこかれもてあつかひければども、かはるけぢめもなければ、京よりさるべき醫師よびくだし。修法讀經まつりはらへど、心のいたらぬくまなく、さま〳〵の事をしつくしけれども、いささかの驗もなく、まさるさまにのみ重りて、佛神の祈もかなはず、かげとめんかたなきにかなしかりける。文月中の八日遂に空しく消えはて給ふ、年三十七にぞなり給ひし。さりともかゝる事あらんや、夢かと思ひて、うつ〳〵心もとなく思ひのどめん方なきまゝに、しばしも後るまじう、同じ道にとまどはしけれども、世にとまるべき程は、限りあるわざにや、死なれぬも淺ましう、やう〳〵人心地もいできて思ひしづまるにしもぞ、うき事のためしなりける。臥しても起きても淚のいとまなく、きりふたがりて、はかなく過ぐる日かづにつけても、かなしさのつきせず。いかで樂しくながらへける月かなからむと、心おさめん方

なし。

絶えはてぬ命につゝき後れじと
　　涙のふちに身はしづめども
有し世は枕のちりもいとひしに
　　ひとりや苔の下にくちなん
なげきわび見しは夢ぞと思へども
　　さむるうつしのなきぞかなしき
よそに見し尾花が露もこの秋は
　　我が袖よりぞこぼれ初めける
殘りぬる身はうきながら明暮て
　　日數ふるにもなきぞかなしき
夕ぐれの空にたゞよふ浮雲や
　　はかなき人の行くゑなるらん
袖の露もはらひにかぬる思ひ草
　　しげれる宿の秋のゆふべは

夕月夜の出づると見れば、程もなく山の端に入りはつる名殘も、人の別れめきて。

惜しめども月は空しく入りはてゝ
　やみに殘れる身はいかにせん

三十あまり七年すぎし秋ごとに
　ながめし月もあだし世のゆめ

さらでだに秋の夕べはかなしきに
　なき人こふる淺茅生のやど

四、智月尼

智月尼は近江國大津の人なり、其子に乙州といふあり、母子共に芭蕉翁を師として俳諧を學べり。一日、尼は芭蕉翁の許に行きて、靜かに語りいでゝ、後の紀念となるべき句を書きて取らせ給はらんことを請ひけるに、翁はうち頷きながら、六十にあまる老尼に、紀念の句を望まれて、いとも心細き事なりと戲れつゝ、やがてかきて與へられしとぞ、然るに、豈はからんや、浪華あたりより、凶報を得たるは、さても其年の事なりき。今日をもしらぬ飛鳥川、浮べるうたかたの、風に消ゆる習ひこそ、げに宿世ははかなけれ。あはれ尼

は、豫め翁の死期を知りて請ひたるものにや、
尼は翁の失せし後は、義仲寺に詣でゝ追善供養に心を用ゐ、絶へず香花を供へしとぞ。
寛永十癸酉年に生れ、寳永三年丙戌に寂す、享年七十四。

○俳。諧。

○春。の。部。

○
鶯や手元やすめんながしもと
○
春待やこぼりにまじるちり芥
○
それでこそ命惜しけれさくら花
○
我が年のよるともしらず花盛り
○

山櫻散るや小川の水くるま

○

御火燒のもり物となる村からす

○

逢坂や花のこずゑの車うし

○

溜池にかわず生るゝぬるみかな

○

大和路の望の春もくれにけり

○夏の部

○

稲の花これも佛のみやげかな

○

廣庭にゆたかにひらく牡丹かな

○

雲の間の星見て居るにほとゝぎす

○

朝顔や雨ふりたらぬ花のかほ

○

山つゝじ海に見よとや夕日かげ

○

逢坂やいとゞせき合ふせみの聲

○秋の部

○

二つあらばいさかひやせん今日の月

○

初たけの香にふり出す小雨かな

○

手をついて月さしのぞく松の間

○

居待月起て守らん枕びき

○

手枕や月は布目のかやの内

○悼嵐蘭

なき出して米こぼしけり稲雀

○冬の部

○

木枯やいろにも見えず散りもせず

○

我がなりもあはれに見ゆる枯野哉

○

わざとさへ見に行く旅や富士の雪

○

年よれば聲もかるゝきりぎりす

○

昔こそ今はかゞへず年の暮

○

幽靈に水のましたか鉢たゝき

○

冬の日や老も半のかくれ笠

五、百合女

寳永の頃京都祇園社の鳥居の南側に茶店を構へ、日々參詣の人に茶菓を賣りて生活を營み居たる梶子といふ嫗ありけり。素より已が子あらざりければ百合子といふを江戸の方より貰ひ受けて朝夕撫育に餘念なかりき。

百合子は能く母につかへ、妨き時より和歌の道をいたく好みて、隙ある時は筆を取り物習ひ、鳥の聲虫の音、すべてあはれに詠み出でければ、其才名高く雲井にまで聞えぬ。中にも冷泉中納言の君の厚き恩遇を被り、花の宴、月の席に屢召し出されて無上の面目を得たり、百合子は其性穎悟にして容顏は姫百合の色も香も優美に、貴人の子弟等これに意を屬したるものも少なからざりき。されど百合子はその業こそ賤しけれ、心は飽くまで高潔に保ち露も浮きたる行を爲さず、實に氣高き女なりき、さ

て百合子には古き情人あり、德山某と云ひて幕府旗本の二男に當れり、容姿美はしく凜々しき男なるが、故ありて浮浪の身となり今は身を寄すべき所もなく獨糊口に窮したりけるが、其身こそ落ぶれたれ、素より德もあり才もある武士なりければ、百合子の慧眼敏くもその燕雀の徒にあらざるを知りて、遂に之に心を傾け、衣食等皆德山が用ゐるまゝに骨を碎きて之を仕送りしかば、德山は大に百合子の厚情に感じ、互に親密なりけるがやがて妹脊の契りを結び、町子と云ふ一女まで設け情好いよく濃やかなる事十年に及びぬ。さる程に德山某の本家跡絕えたれば、族人等相議してこの某を入れて後を嗣がしめんといふより、使者を遣して歸らんことを勸む、依て德山は百合子を連れて行かんとせしを百合子は固く辭して云へるやう、妾、郎君の厚情を受けて暮せること既に十年にもなれば今にして互に袂を別ち、西に東に離れむことを如何ばかりか切なからむ、されど妾は素より賤しき身分のものなれば、御身の綾錦を纏ひて故鄕に趣かるゝに召連れ給はむは、人より譏りを受給ふ事申すまでもなく、御身の爲にはよろづ都合よろしからずといへば、德山はこれに答へて曰く、我先きに此地に來り流浪の身として衣食に窮しけるを、幸に御身が篤き志によりて今日まで存命する事を得たるなり、今其恩人を捨てゝおのれ一人榮華を貪らむは我の好まざる所なり、とて强て伴ひ立たんとすれば百合子またいへるやう、妾もし徒らに君が年頃の厚情に引かされて付き纏ひ參らせばたゞに君が名を汚すのみならず、また祖先の名をも辱かしむる事なれば、縱令君が憐みを受け侍るとも、妾が身はいかでか心安か

るべきとて固く辭しけるに、德山さればせめて町子なりとも從へ行かんと云ひければ、百合子重ねて辭するやう、君は尙ほふさはしき御緣を結びてよき子を給ふべし、妾は君と別れ侍りて他に夫を重ねんとも思ひ侍らねば、町子なくては何を樂しみに世をや渡らむ、德山今は言葉もあらず潔白なる心に感じて淚ながらに別れ去りぬ。之を見送る百合子が心の中思ひやられて哀なり、これより百合子は、夫が形見なる町子を朝夕心をこめて敎へ育てけるが、生ひ立つまゝにやさしく賢き心は母にも讓らずなりぬ。

茲に池野大雅堂と云へる一人の畫工あり。その繪世に賣れず爲めに赤貧洗ふが如くなれども更に意とせず頻に斯道を硏め居れり。里人等は大雅堂を貧乏畫師などと稱したりけるが、百合子ひそかに思へるやう、これ必ず世の常の人に非らざるべしとて遂に媒介を以て其人を迎へ、娘町子にめあはしめたり、かくて大雅堂は衣食の煩いもなく專ら畫に工風を凝らしけるが、町子は能く夫の心を慰めて傍ら其筆法を習ひ餘念なく同じ道に力を盡せり、然るに又家貧しく米櫃屢空しくなるも兩人は敢て意とせず勉め勵めり、百合子は之を見て我事畢りぬ今は死するも遺感なしとて喜ぶこと限なかりき。後幾許もなくして身まかりぬ、あはれ百合子は、一茶店の賤しき身なれど、其心ばへに至りては實に世に稀なる賢女なり。

家集をさゆり葉と云ふ。此內より今二三首を示せば、

○
見るもうし涙にくもるます鏡物思ふ身のあらぬ姿を
○
たへかねて書きやる文を見ても知れ硯の海の深き思を
○
うきながら月日經にけり契りてし其言の葉の末を頼みて
○
ながしとは誰か云ひけむ見れどあかぬ花に暮れ行春の夕暮

六、正親町町子

町子は柳澤吉保の侍女なり。吉保姓は源氏、父安忠は徳川幕府に仕へたる人にて甲府を領し、後和州郡山の城主たり。

町子は幼き時より優美の志深く、つとめて文を綴ることを好めり。かの「むさし野」、「月花」など題して、文体いとしなやかに、事實頗るつばらかなり。しかも榮花物語の体裁に倣ひて、吉保の履歴を記せしものあり、その流暢なる所は麗女の文才といへども、遠く及ばざるべし。貞享年中に筆を起して、

寶永六年の頃までに終りぬ、松蔭日記とて有名なる著なり。

○昔の月（松影日記）

君はれほやけ方に、にさらぬことありて、參らせ給はず。祭文をぞ書きて奉り給ふ。年頃に、またなにくれと、めいぼくありける事どもなど、いとつぶ〳〵と、あはれに書き給へり。今の御寺ぬしは、秀長老ぞかし。碩學の聞に高く、やんごとなき聖なりけり。垂（たれ）給など云ふ事綴りて、大衆を集めて、示し給へり。いたう老いたる人の後付、いと〳〵うつむきたるが、さすがに口ゆがみ、ほれ〳〵しげなどは、露なく、聲高く、あざやかにてあなたふとや、と思ひしみぬべきけはひ志給へり。こゝらの僧どもの、かはる〳〵すゝみて、高らかに問答志たるなど、ふと、何事とは聞きわかねど、いみじう、にごりなき心地す、咄嘱など唱へ出で給へるさま、誠にふみとゞろかすなる、神の聲して、誰か無明の眠を醒さゞらんとぞおぼゆるかし。みたちにては、其日、他の人々召して、御追悼の歌ども有り。月によせて古きを思ふ、と云ふことを、兼題にて、皆よみたり。れまへ、

月やしるあとゝふ秋のけふの空
　　みるよならぬとしのぶ心を

其外はもらしつ。御當座さま〳〵にてなんありける。懷紙短冊、皆取認めて、やがて、御寺にぞ納め

させ給ふ。又唐詩も博士どもに仰せて、數多めしたり。御自らの造らせ給ふ題は歌と同じさまや。

明德淸輝尙在ㇾ人　時遷跡遠意逾親　依然十七年前月　氷鑒高懸秋一輪

若君など始めて、とり〳〵に面白く、あはれなる絕句ありけり。悉く記るさんも、例のわづらはしければ、かゝず。是も皆卷物に書かせて、いみじう裝へてをさめ給ふ。さるは今しものどかに、御いとまなどおはしますとはなけれど、かゝるかたの心ばへ、ふかくたてゝ好ませ給へれば、まづかうやうのをり、くちをしからず、ものし給ふ。今の世の御おきてのすぢなども、さるべきつかさ〳〵の、いとかしこきも、おぼかる頃ほひにて、大小の事、おぼつかなからず。只君を堯舜になしきこえ奉らんと思ひいりて、身をかへり見ず、つかうまつるに、若し聊も、自らの心に、さだめかねたる時々は、先こなたの御心むけをうけきこえてのちぞ、やすらかに、もの定めしける。さるは、倚きはことにいたらぬことなく、御ざえはさらにて、御心持は明におはして、大かたのありさまをも、先づ人をいつくしみ、すてさせ給はぬ、御本性を元とし給へれば、おのづから、人もそむき閧えず、うれしきものになづききこゆ。

七、秋色

秋色は江戶の俳人なり、姓は大目氏、名は阿秋と呼べり。堀江町（一に照降町といふ）の菓子商某の

妻なり。
十三歳の春の頃、鶯の聲に誘はれ、招く青柳の糸に心ひかれて、家を出立ち、名にし負ふ上野公園の花見にものしぬ。
觀音堂の後、巽の方にあたりて、井戸端に咲ける、垂絲櫻を見て、

　井戸端の櫻あぶなし酒の醉

といふ句を詠み、低き小枝に結びつけて歸りぬ。
時の法親王殿下には、深く文雅風流を好ませたまひ、日々上野山内の櫻に結び付くる多くの詩歌俳諧を取りあつめて、彼これと評を下さるゝ事ありたりしに、寛永寺の門主、多くの内より此句を擢でゝ最も秀逸とは極まりぬ。これよりこの櫻を、秋色櫻と呼べりとぞ。
秋色ある時、某侯の別邸に召されしが、その庭園は、竹樹泉石の美を以て都の中に聞えあり。一日、秋色の父は、程よき機會に臨みて、身を奴僕に裝ひ、したがひ行きて、意のまゝに觀てありけるが、いつしか空かき曇り、黄昏時より雨烈しく降りいでしかば、侯家にては籃輿を以て、秋色をその家に送らせらる、然るに、秋色は、わが身はとまれかくまれ、父の辛苦せるを見るに忍びず、舁夫に事を命じてその間に父に代りて、おのれは雨衣を纏ひ、簦笠を戴き、以て父の後に從ひ歸りしを、誰一人として知るものとてはなかりしとぞ。その孝順の心深く、親をいたはることかくの如し。

俳諧は、當時の名家なる、其角に就て學びしとか。其角は堀江町に住ひけるが、家貧しくして、老後身を寄する所なく、秋色の家に起臥せしかば、その歿後しばらくは、其角の印を用ゐ後にこれを深川湖十に傳へしとぞ。

享保十年乙巳四月十九日といふに身まかりぬ。時に年五十七、辭世の句に、

見し夢の覺めても色のかきつばた

○俳諧

○春の部

○

けさ見れば若菜に揃ふ地黑好

○

親も子も同じふとんや別れ霜

○

雉の尾のやさしくさはる菫哉

○

蜆取さなへに用なきこゝろ哉

○

花の色は乳母にはなれよ櫻町

○

指折れて涅槃の月の焙爐物

○夏の部

○

雨だれに袖もあやめの匂ひ哉

○

五月雨や人伺候してかいつぶり

○

みすさげて誰が妻ならん涼み舟

○其角を惜む

日々に諸手合せて百合の花

○
佛めきて心おかるゝ蓮哉

○秋の部

○
初つゆに風さへしめる扇哉
○
萩に來し筑摩の人か五本松
○
箱王を指す雁やくれのかね
○
揚貴妃のむつ言もなし今日の月
○
秋の蚊やしかも拂はで老の伽
○

白菊にうはの空なる銀化粧

○冠里公に召されて

武士の紅葉にこりす女とは

○冬の部

○京の人に逢ひて

白からじ京のお目から江戸の雪

○

しみ〳〵と子は肌につく霰かな

○

十德の袖は涙の氷かな

○歌の島

とも寢して鍼立さむし戀の丸

○

鮟鱇やくつのとなへも二葉より

○嵐雪三回忌題ニ拂子一

冬枯に畢竟おとる尾花哉

○

ひとり居やしがみ火鉢も夜半の伽

八、園女

伊勢國松坂に生る。祠官度會氏の女なり、備前の人、岡西惟中に嫁ぎて、難波に住へり、性質温雅柔順にして、才氣に富み、和歌をも善くせしが、わきて俳諧に於てその名高し。俳諧は、初めは伊勢國山田村の美津女に就て學びしが、元祿二年の冬より、芭蕉翁の門に入りぬ。

園女、よく貞操を守り、俳人ども集ひあへる席にても、いまだ男とならび坐したることはなかりしとぞ。夫の身まかりて後は、東の方江戸に來りて、深川に居りしが、次で西の方京都に遊び、既にして、復江戸に歸り住ひしとかや。

生玉琴風、園女の人となりを記していへるやう、この女、昔より世事に踈く、袖下の紅絹を切て下駄の鼻緒を調へ、文庫の葢を以て、厨の水ながしに用ゐるなど、その跡かたもなき事も、風雅の上の興なりけらし。近き頃、佛道に入りて、頭をまるめたれど、眞中を十筋ばかり殘せるも可笑し。これは

唯一の昔を恐るゝなるべし、斯の如き者ゆゑ、禪理も悟道せしにや云々。

深川八幡宮境内に、歌仙櫻といふあり。園女が手植のもの三十六株ありしとか。

雲居和尚に答ふる書に、

來書の趣拜見申候、不求心不求忘は大道の根元、誰も存ずる所なり、憚ながら珍しからず、一心源頭に上りての所作、柳は綠花は紅、唯その儘にて、常に句をいひ歌を綴りて遊申候事に候、無益の口業ならば、一切經も無益の口業に候、法臭き事は嫌ひにして、我が平日の行は、念佛と句と歌と也、極樂へ行くはよし、地獄へ落つるは目出度し、

和二玉韻一

自己念其不レ覓レ心、　清澄已燿一燈心、

市中黙々有二明鏡一、　全識人間清浄心、

誰か見ん誰か知るべき有にあらず

なきにもあらぬ法のともし火

とあり、これによりて、その志氣を見るべし。また辭世の歌に、

秋の月春の曙見し空は

夢か現か南無阿彌陀佛

承應二年癸巳に生れ、享保十一年丙午四月廿日に身まかりぬ、時に年七十四。江戸深川靈巖寺の中なる念佛堂の傍に葬る、法名、香林院詠譽妙園信女といふ。

○兄弟は他人の始りと云ふことの論

諺に、兄弟は他人の初めと、たれかれ常に申す事なるが、これに二色の意味おはしまし候、一色には、高祖父母、曾祖父母、祖父母、父母、己、子、孫、曾孫、玄孫と正統の血脈九代の間、己より上に四代、下に四代に定め、此上は、幾代も先祖、此下は幾代も後胤と稱し、百代も連綿たる血脈にて候。右九代各兄弟ありて、伯父、叔母、甥、姪、從弟等の親類となる、これを九族と申す。從弟の子は從弟違ひ、其は又從弟、其子は、名目もなく、他人にて血脉肉親の他人となる、初めは兄弟あるによりてなり。若し兄弟姉妹なければ、肉親他人なりと行くことなし。さてこそ兄弟は、他人の始めにて候。又一色には、一腹一生の兄弟三人、四人有る時、何れも、晝は親の膝に遊び、夜は抱かれ、親の丹精に育つは、皆かはる事なく、漸く懷をはなれ、親の手元に遊ぶ内は、兄弟食物を別ち、起臥を共にし、睦しきこと、猫の子の四疋五疋、累り合うて、乳をのむと思へば、一時に狂ひ戲るゝに異ならず。餘念もなく惡念もなし。段々生長しては、惣領に嫁を迎へ、次よりは、或は分家し、或は他家を續ぎ、或は嫁に遣はす。此頃は各自、慾心の私出で來り、友愛の善心を掩ふ故、親の財寶は、面々我物にせ

ん、配分の物は我ゞ、餘分を得んと、慾心より、兄弟いつしか不和の思ひあり。各妻を持つ時は、他人雜つて、相談の相手となる故、いよ〳〵不和の心をまし、遂に内心互に仇敵の如きも、世間の誘りを恐れ、表に愛情をかざれども、全く僞りゆゑ、心と詞とは、表裏の差あり。毛詩と云ふ書に、兄弟墻を鬩げども外には、人の侮りを禦ぐと有り。斯く成り行けば、後には育て立てられたる親の高恩も忘れ、親の子を愛するに、依姑有つて、一ならずと怨む。最初の親の意には兄弟多ければ、亡き後迄も互に扶助け有り、と末賴もしく思ひの外、兄弟他人には遙に劣り、恃みにもなる可からず。第一親の心を安ぜず、不孝此上もなく、天罪遁る可らず。親子はとこしなへに親しく、兄弟となれば、情愛倚ほうとくなり易きを、他人の始めとは申すなり。生長より腰の屈む迄、父母の膝下に遊び合ひし、意を忘れず、親のなき後は、肉緣に兄弟ほど近きものなき故、萬事互に相談を遂げ、他人なく、力を添へ合ふこと、兄弟の道に叶ひ、親へも歿き後までの孝行、面々子孫繁榮の基にれはしまし候。穴かしこ。

○俳諧

○春の部

○新春

ゆづり葉のくきも紅さす朝哉

〇

難波女や何からとはん事初め

〇春風春水一時來

梅を折る隣もあさき釣瓶哉

〇同

氣のはらぬ入相きゝて梅見哉

〇貫文の梅に

梅が香や慮外ながらも旅勞れ

〇菫

鼻紙の間にしぼむすみれかな

〇伊賀越

松山のおひだ〱や花の雲

〇芭蕉の訪れし時

時雨てや花まで殘る檜笠

○同
花の前に顔はづかしや旅衣
○同
ふとんまで朝の寒さや花の雪
○思夜櫻
夜櫻や太閤樣のさくらがり
○同
散つたその狀は屆きつさくら狩

○夏の部

○四月一日
更衣みづから織らぬ罪深し
○香久山にまかりて
あら美し卯の花は誰か更衣
○同

はや膝に酒こぼしけり更衣

○多田院にて

川中にとゞして見たし夏の月

○靜掃風軒散髮眠

卷々の中に吹かるゝ團扇哉

○

負うた子に髮なぶらるゝ暑さ哉

○住吉にて

今日來ても何の傳授か夏神樂

○

蟬の羽の輕きうつりや竹の皮

○秋の部

○

名月や琴柱にさはる栗の皮

○

思へたゞ硯洗の後の耻

○寄芭蕉雨

名月や雨にひらいて文字なき葉

○同

名月や筆や言葉の引きまはし

○法隆寺にて

小原女や野分に向ふ抱帶

○住吉奉納の內

けふの菊朗詠集を御家流

○海邊薄

はつれ〳〵栗にも似ざる薄哉

○冬の部

○

初時雨阿佛の旅やつゝら馬

○

近道を阿闍梨につるゝ時雨哉

○神祇

此猿はやしろ久しき時雨哉

○蘭子東行を送る

雪に思へ富士に向はゝ故郷の繪

○

年よれば鼠もひかず寒さかな

○

木枯やこぼれて晝の牛の聲

○閑居

葉の音に犬吼えかゝる嵐哉

○

行く年や老をほめたる小町の繪

九、井上通女

京極氏の家臣、井上儀左衞門本固の女なり。萬治三年庚子六月十一日といふに讃岐の丸龜に生る、幼き時より慧敏にして、讀書を好み詩書をよくし、老成の人にも超越すること多かりき。和歌の如きは、父これを京師に送りて、名家に添削を乞へりとか。

十七八歳の頃、京極氏の婦人に從ひて江府に趣き自ら東海道紀行を書けり、その始め舟に上るや、風荒れて浪たちさわぎければ、歌うて曰く、

しるべせよ浪間をわけてゆく船の
　こゝろしられぬ八重のしほ風

又十六夜の月、浪に映じて玉の如く風の爲めに碎け散るを見て、

風吹けば月に磨ける白玉も
　くだけて浪のたつにぞ有ける

詩を賦して曰く、

乘レ寒一葉浮　倏忽遇ニ他州一
風攪驚ニ鄕夢一　波聲動ニ旅愁一
蒼々天與レ水　浩々月如レ流

枕レ袖蓬窻裡　不レ能只自羞

後從へりし夫人身まかり、なほ幼なき者の兄弟たちの後見をなすこと九年、國にありける親に切に呼び迎へられて、久しく見ざりし故鄕にかへりけり、その折もまた紀行あり、歸家日記といふ。文章も歌も優にめでたし。

後三田茂左衛門宗壽に嫁ぎけり、曾つて僧の盤桂と儒佛を論ぜしことあり。その折戯れに歌を詠じて曰く、

常に行道ならばこそ世をうみの
　あまの乘りたる舟もたのまめ

こは人間は常に行ふ道あり。何ぞ人の人たる道を捨てゝ、佛菩薩の力をからんやといへる意にて、流石の盤桂和尙も大に感賞して、女丈夫と呼びしとかや。

子あり字を傳右衛門、名を義勝といふ。丸龜の城主につかへて侍讀儒となり、才志論、養子訓などの書を著はせり。

寶永七年、宗壽の歿するや、家事巨細となくこれを長子に委ね、自ら閑居して風月を友とし、あるは天外の孤雁に昔を忍び、世外の雪花に思を馳するの外、和漢の典籍を嗜み以て其志を娯しめぬ。

和歌の友數人あり、その最も懇篤に交りしは、江府に柳生松女、讃岐に岡松貞尼、鹽津可知女等あり。

通女が著書いと多し。今讃岐偉人傳に見えたるものを擧ぐれば、
紀行文、　東海紀行、歸家日記、
詩　集、　括囊集、
歌　集、　往事集、
和文集、　秋燈集、
其他、家訓 一卷、續往事集 二卷、和筆記 一卷、宗川子歌談 一卷、三鳥傳考 一卷、三草三木考 一卷あり。

通女常に讀む所の歌書、物語、即ち萬葉集、古今和歌集、源氏物語、枕草子、伊勢物語、土佐日記の類、皆批點を加へ且つ所見を附記せりとぞ。

元文二年六月二十三日といふに、浮世の外の風に散りて、落つる木の葉の身となりぬ、時に年七十九歲。

○東海紀行（一節）

明石を過ぐる頃、風すこし和らぎぬ。今宵の月かげ、いかにをかしからむと、思ひながら、漕ぎ行く船の率く波なれば、

所からさぞなこよひは明石潟

月にぞをしむ舟の傘波を

かれは淡路と、人の云ふをきゝて、

時しあればけふ見てすぐる淡路島

あはれかけても思はざりしに

申の刻ばかりに、兵庫につきぬ。まだ日も高しと云へば、唯今行かば、しほもひむとて、碇をおろしけ泊りぬ。きゝなれぬ浪の音も、恐ろしくあはれにて、

乘レ寒一葉浮　倏忽過二他州一　颪響驚二鄉夢一　波聲動二旅愁一

蒼々天與レ水　浩々月如レ流　枕レ袖篷窻裡　不レ能只自羞

十八日、兵庫を出で、午の時過ぐる頃、難波津を、けふこそみつの浦につきぬと、悅びあがりぬ。爰にかれ殘りたるよしなんめりと、人の云ふをきゝて、

冬がれのけしきもよしや津の國の

なにはあたりは春ならねども

と、戲れにひとりごちて、乘物して、やどりに入りぬ、君の御宿もあづかりて、父の友なる人、こゝにものしたるなど、出できて、何くれと父にものきこゆ。かれこれ聞きつけて、多く來れば、暇なく

暮らしつ。關所の御しるし給はらんとて。爰に二日ありて、二十日の末過ぐるほど、河舟にて上り、さしひく棹もひく波も、いとまなしと見ゆるものから、のぼりかねたるならひなれば、二十一日の晝頃、淀まで、辛うじて至りぬ。

夜もすがら棹さす船にさへられて
まくらの下にむせぶ川波

伏見へまでと期しけれど、あまりに舟に詫びて、淀より上りぬ。それより、鳥羽にかゝる、秋の山を過ぐとて

いたづらに過ぎぬる秋の山おろし
音もはげしくなりにけるかな

鳥羽の戀塚にて

停レ駕猶憐戀塚前　貞名勒レ石草芊々
若人自是再難得　天命如何使二渠然

夕へかゝりて、都に入る。木草の色まで、心からにや、めづらかに見渡さる。東寺より、いかなれば、雁塔のけはひ、ひとりさやかにて、名に高きも、げにことわりと見ゆ。つれ〴〵しく、出て入る人も、れのれ〳〵と、ほこりがに賑はしきは、をさまれる御代のさま、云ふもさらなり。三條河原町と云ふ

所に宿りぬ。こゝにもまた、御家のあづかりいできて、何やかやとねぎらふ。かなたの人の、ものとづて、馬、人、などのことをいひて、まぎれくらしつ。知れる人、かれこれ來て、かゝる序に、物見など、いとよきことなりなど、ろらの風ど、ゆくさき多く、心は、思ふ方にのみ先き立ちぬれば、かゝる旅路にて、さることいと心ものどかならむ。先づ此度はなど云ひて、赴かず。それもことわりなれど、かゝる序も、いとかたきことなれば、ほいなしなど、かしがましきまでに云ふめり。

二十三日、朝ぼらけに京都を立ちて、粟田口に出で、瀨田の橋を渡りて、行く〳〵見る、草津を過ぎて、石部とかや、里の名さへ、むつかしからぬ旅寐ぞ、いとわびしきや。けふは逢坂の關もすぎぬと云ふ。

　へだて來しふる里人をこふる夜の

　　夢路はゆるせあふ坂の關

二十四日、五更に出で行く。殘りける月、いとさやかに、乘物のすだれに映りたるも、目なれぬことなれば、いとあはれなり。

　鷄鳴旅店役ニ行裝　殘月含レ寒映ニ曉霜一

　長路漫々何日盡　朝々暮々是他鄉

水口より、土山をすぎて、鈴鹿の坂をこゆ。雪氷に道なめらかにて、馬も人も、わびしげなり。

あらし吹く谷の岩間にむせびつゝ

音もすゞかの山川の水

○歸家日記一節

日頃おなじみやづかへにてなれむつましかりつる人々の、おのがちり〴〵行きわかれぬるなど、俄にかくと聞きておどろき思ひて出できたるが、そこらつどひてとり〴〵にうしろみ、ものしたゝめ、なにくれといとなみ出でたまひたる、いと嬉しくたのもし。今宵はかなたこなたと書置く文どもおほく、御歌の御返しなどつかうまつる、かしこければこゝにはもらしつ、夜ひとよしたゝめて、あかつきがたなごりぞとて一ところによりふす、程もなくあけぬれば、いそぎおきいでてたび衣さうぞきかふるほど、かたみの袖の栗はかきつゞも玉しひの消ゆる心ちすれば、其ほどの事ども皆とゞめつ。わらはをゐてのぼるは、おとうとの益本なればよろづにうしろやすく、たのもしき事かぎりなし。是も君のめぐみによらずはいかでかは。まだ明けはてぬほどにきて、あないしてとくたち玉ひねといそがすれど、かみしものある人々、むまのはなむけすとてさかづき出して、とり〴〵に名殘つきせず慕ひ玉ふめれば、すが〳〵しく出でもやられず、馬のたかくいばいたるなど、はなやかに聞ゆる物からいとかなし、

たび衣わかるゝ袖に雲のなみ

けぶりの涙をたちやかさねん

女のたびうといましめたまふなる、箱根今切二ところの關とほすべきよしの御しるし、きのふ益本に下し給はりぬ、元祿二年己巳夏六月十一日出たちて、遠きふるさとにとて歸る。御門出るほどなど物もおぼえず、みなすだれのもとによりていとま乞し給ふ。芝のさとしな川とかいふ驛に出づ、しれる人々みづから送り給ふもあり、人おこせたるもあり、うちつれていづ、あき人家どもたてわたし、作りならべたるあたりを行過ぎゆけば、海のおもてはるばると見やらるゝいとめづらかなり、おくりの人々にも是より歸り給ひねといふも、又逢見る事も有まじくやといと名殘をし、ますもとに物きこえかはしてこれよりみなかへりたまひぬ。ひるつかたかつがつうちねぶりたるに、なほ有しかたがたの御ことの葉もわすれがたく思ひやりまゐらせて、こなたをおぼしめしおこせ玉へるにやと、

したひくる君がこゝろかとゞめこし

わがたましひか通ふまぼろし

晝つかた立よりたるやどりいとすゞしげなり、おくなるおましに居て、とのかたを見やれば、雲につらなりたる海原むかふざまにたかくみえて、げにすゑの松山もこえつべく、涙のたちかへるなどおもしろくて、爰にすむ人さへうらやましき、それよりいでゆけば、ちかき頃早苗とりつらんと見ゆる田

面に、みどりのいな葉いとうるはしく、くさぎる者の笠のみ見えて、田うたいとをかしくうたふ、げになりはひのたやすからぬいとなみも、見るからに一しほおもひしられて素餐のとがおそろし。山際には田うつ者の、身の色はすみのごとくにて、汗おしのごひたる、あつさたへかたげなるは、夏畦よりもやめりとくるしきたとへに曾子ののたまひし、げにもとおぼゆ。今夜はとつかといふ所にやどる海づらちかくならはぬ旅ねなり、まして女ぐしたればますもともいと心ことにいましめありきて、戸さしよくかためよなどいふ、されど今正しき道の末とほりて、むさし野の草ふく風枝をならさずよつの海静にをさまれるをりなれば、しら浪のたちよるべきおそれもなし。

十、大橋

大橋は實の名を律と呼びて京都島原の名妓なりけり。幼より風流なるかざしあり、好みて歌をよみ文をかけり、或る時心に思ふ事ありて尼にならんとしたりけるが、老母のあるにためらひて、面白からぬ月日を暮し居たり。かくて粟原一素といふを夫にしたりけるが、家甚だ貧しく手づから雜事を取りまかなふまに〳〵、歌、物語などを見つゝ飯を炊き物縫ひなどしたりとなむ。老いて後島原のあたりを過ぎて、

よそに見て思ふもつらし身の昔

うきかは竹の里のゆふべは

又海邊の雪を、

和田の原波もひとつに笘しろき

雪をのせたる海士の釣舟

又自畫讃の歌に

忘るなと契りし春は夢なれや

ねざめとひくる初雁のこゑ

畫は巧みなりといふにはあらねど、風流にして韻致あるは、歌心より來れる故なるべし、落款は多く洛西喬木女と記せりとぞ。

花紅葉の折々夫は東山に遊べば己は西山に趣きて互に歌才を戰はしけり、或時夫と共に有馬の湯に浴し、玆にて遂に髮を剃り尼となれり。さて白隱禪師が京都逗留の間は常に詣でしに、折々冷泉寂靜入道にも面談したりしかば、入道いへるやう、汝はもと島原の名妓なりしと聞く、昔の投節とかやいへるものを覺えつらむ聞かまほしといはるゝに、それは節いと難く今は久しくなりぬれば打忘れ侍りぬ。其頃流行したる小唄といふものも今の風にはあらず、いで聞召さむやとて謠出でしも折にふれていと興ありきとなむ。

廣澤の記及び遊女の畫讃てふ二篇の文あり、共に文詞優雅にして輕妙、見るに足るべきものなり。その畫讃に、

西に流れ東に流るゝ同じ川竹の身にしある中にも、八重垣つくると詠じ給ひし神垣のほとりはいともやさしく、繪に書けるを見てさへ、誠懐しう覺ゆ、志かはあれど、此二人の姿、繪に書きあらはさゞる先はありやなしや。

○廣澤の記（全文）

今年延享五戊辰の夏卯月、はじめの七日、長康ぬしの廣澤の莊へ、招かせ給ふまゝに、ちよの古道たどる〳〵、彼の林につく、分け入る野もせ、千町ばかり歩み行く、夏來ても春の名殘の草の香、のどやかに、日影てりそふ、かなたおもてには、主の出で向はせ給ひて、待ち兼させ給ふなど、のたまひつゝ、しりへに從てまかる、西の方の編戸を開き入る、若緑枝さしかはす常磐木も、やゝ繁り合ひたるに、つゝじ、山吹の花も、咲き殘りて、さながら錦をわくる樣なり、池のこなたには、釣臺を据ゑさせ給ふ、南の方により亭ひきく造り、軒口かはほりの樣に窓をつく、これより眺めやれば、小倉山、龜の尾の山、花の名におふ嵐山、松尾も峯つゞきにて、夏山の緑はにたゝる野邊青み渡れる、廣澤の池の水鳥の群居て遊ぶ、おのが樣々にほやかなる、音を聞て行かふも、只繪にかいたらんやうなり、

新樹の梢には蟬の吟をきく、まだしき比なれば、打しきるともなく、しづけさをそふ、かしこには、懸樋を漏り聞ゆる、そほづの音なひ、山に響き來るも、いや珍らしく、凡て耳なれぬ事のみ、我が爲にやといとかしこく、まことの知らぬ國に、來らん心地す。

暫しが程此處に休らひて、かれいひやうの物をたうべ、みきなどもてなさせ給はりて、釣臺の許へ行き、ながめ殘して、中垣しをり戸に入る、東の方泉の水、心こまやかに、名もなづかしき、杜若のさかり、にもいはず、西の方には、宮城野の萩すゝき、まばらに植させ給ふ、今より秋の千草を思ひやられていみじ、こゝにぞなのめにかけたる橋ゆゑ、なづかしう唐めきて、つくり渡せり、詩を得ざれば過し給はじと書き記し給ふ、古今の世の譽ある誰々も、渡り給ひしと聞き傳ふ、いかでかと、つと胸つぶるゝ、はかなきすさびもなくては、許し給はじとて、

　　さればこそながめ渡らん言の葉も
　　　など及ぶべき庭のかけはし

と打誦して行けば、前栽の懸樋、いといたうすゞしくて、水際には紫の雲かとたな引、はふきあまたにかゝれる藤波盛りなり、左の方に泰龍とある額をかけさせ給ふ、岩井の水清らなり、めぐりはおのづから、苔むせる石のたゝずまひも、なべてならず、庭の上は、色くさをつくして、よしばみたるませを結ひませ、櫻、若楓、木々のもえぎうすく、こき緑はえたり、東北にそひて、西南おもてに、高

く低く作れる槇の屋、山ことにしつらひ給ふ、このもかのも見渡す景色、なか〳〵筆に及ばず、世々の賢き人々の詠じ給ひし唐の文、心ばへありてをかしかりぬべきを、書きとゞめ、此ろうの床の內、長押の上にかけつらね給ふ。南の門を出て東に向ひて、田面に出づ、山手に行、木立ものふりて、世ばなれたる山は、淺き樣なれど深きに似て、口にはうとき鳥どもの囀るも、ことさびて、所がらあはれに面白き事限りなし、さかひに登れば五知の山の流れ、鳴瀧の山、其外峯あまた見渡さる、其れより松、杉、竹の林にまかり下れる道、しげゝれば、あふさきるさに行來る處も、忘ぬべう、やう〳〵彼の樓に上り、終日打語らひ、酒肴海山の珍らしき品々を調へさせ、唐倭の美しき調度どもゝ、數しらず拜べもてなしたまはりぬ、誠にかゝる愚なる身の折を得て此莊に語らひ、おふげなき此情をいかゞ云けん、言の葉も思ひたゆたふ程に、主人歌をよみて、聞えさせ給ふ、

廣澤や月見ん秋を契りおかん
　　池の心のへだてあらずば

春過て花は散れども柴の戶を
　　とふ人からの山のしたかげ

とみに、さしいらへもし侍らで、おこたり侍りぬ、げにかうやうのたへなる處にわたりては、言の葉も及ばじ、と聞侍しも、今ひしと思合されて、いかになどか、まねびいでん樣なく、辛うじてつたな

き口ずさびに、心憂けれど、え恥あへぬ片はしをもらし侍る。

そこひなくすむべき影も廣澤や
　月見ん秋をなほしたふなり
よそながら思ひしよりも淺からぬ
　すむ人からの山の下いほ

長かりつる日も、いつしか入相の聲、名殘切なる夕月、細くも重なる青葉を分てもり來る光、秋の木の間の心づくしにもまさりて、庭も籬もことなうあはれ深かし、あかず暮れ行くたそがれの空の、おほ〳〵しきに、まいて池の面は打煙り、にんをかし〳〵月さしうつりたる、云はん方なし、名だゝる春秋は、倚いかならんと思ふも、一方ならず兎角やすらう内に、夜も早や子の刻ばかりになりぬれば、立歸らんとす、名殘も例のさらに與じみたれ、たど〳〵しき道の程も、送らせ給はりければ、うれしくて、たゞゆめの浮橋さむればたもなく、我家につく。

十一、千代尼

千代女は、加賀國松任といふ里の人、父は福増屋六兵衛とて、表具の業を以て渡世をなしぬ。千代は天性風雅を好み、まだ振分髮の頃よりぞ頻に俳諧の道に志深かりける。ひそかに思ふやう、常

にさるべき名家につきて、斯の道の奧を究めんと。されど、都に程遠き僻邑の事とて、さるよすがもなく、思ひ煩ひける折しも、たまく、有名なる美濃國の俳家盧元坊、やがて行脚して、松任の里に來りたると聞きて、千代の喜び一方ならず、直ちにその旅宿に訪づれけるに、盧元坊は、旅の疲れにて、宵より衣ひきかつぎていねたり。千代はその側にかしこまりて、おのが俳諧の道に多年苦しめる事を語り、ひたすらに敎を乞ふ、折しも初夏の事なれば、時鳥の題やよからむとて出さる。千代はいたく喜び、やがて一句を詠み出てけるに盧元すてゝ顧みず、又一句よみ出でしかど、盧元耳をも傾けず、更に一句を詠みて、今度はといふに、盧元はいつしか打眠りて、高いびきの聲のみぞ答ふる。あまりの事かなとは思へども、千代はなほ苦慮煩悶、一心に考へ居りたるほどに、曉雞鳴きて、山寺の鐘聲幽かに窓に響きぬ　盧元初めて目さめたり、見れば枕邊去らず、千代の筆とりてあるに打驚き、未だそこに居りしか。夜は明けにけるかと問はるゝに、千代は思はずも一句、

ほとゝぎす時鳥とて明けにけり

と答へけるに、盧元、さなりくと枕を叩きて、嘆感措かず、此女誠に敎ふべしとて、遂に子弟の契りを結びたりしは、彼の漢の子房が、圯上老人に靴を捧げたる心にも似て、上を敬ひ學に熱心なる智者の心、恰かも符契を合するが如し。

千代はもと一人娘なりしかば、夫を迎へて家を繼ぎけるが、廿五歳の時、夫は二人の子を殘して身ま

かりぬ、起きて見つねてみつの言葉の如く、げになぐさむ方もなかりけむ。

やがて、子に家を繼がしめ、おのれは落髪して尼となり、素園と號して、別にさゝやかなる庵をむすびて、ひとへに、花鳥風月、天外の孤雁、世外の霜雪を友として、世を渡りぬる心の底に咲ける、花こそめでたけれ。

越後の國呉俊明といふ人に就て、畫をも學びけるが、素より才氣に富めば、その描く所自ら風致あり今の世に傳はれる中にて、百合の花の畫が多かりとか。

ある時、「なほ七度の別なるらむ」といふを題にて、上の句をつける事ありしに、流石の千代も考へつかざりけり。いと口惜しく明暮思ひめぐらしけるが、ふとまどろみける折、八重櫻の花の一片、ひら〳〵と風に吹かれ來たるを見て、千代は思はず、

一重つゝ風の吹きしく八重櫻

といふ句を得て、いたく嬉しくて、飛び上ると共に夢はさめたり。あれは夢にかく秀句を得たるも、げに一心こりしほど知られて、いとめでたし。

○四民の論

四民の世に立つ、それ〳〵の務めあり。男に四民あれば、女にも亦然り。士は乱れたる世に、逆を伐

ちて、靜謐となし、治る世には暴を禁じ、賊を誅し、萬民を安堵なさしめ、文武を以て治乱に處し給ふ君に近侍し、共に其事にあづかる故、三民の上にあり。されば士の妻たり、女たるものは、風俗、髮貌、立居振舞、言葉をたしなみ、人柄よくあるべし。形態の婀娜たるを好む可らず。恪氣の心は、其身の愧なるを辨へ、夫に心得違ひあらば、詞愼かに、よく〳〵諫め、萬一不幸にして、危難ある時は、身命を惜まず、舅、姑、夫、に先ち、貞烈の操正しく、いかにも、士の妻ぞ、女子と云はるゝ程にありぬべし。

農は、其業いやしと雖も、上御一人より、下諸萬人の食を、作り出す故に、次序、工商の上にあり。其妻たり女たるものは、養蠶、織機の事は、云ふも更なり、晝は野前の餉を持ち運び、夜は月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業盛なる時は、夫と共に朝の風に梳り、夕の雨に浴し、霧を犯し、霜をふみつゝ、粒々の辛苦を手傳ふなれば、丈夫も及ばず、疲勞すれども、毎々打開きたる曠野、山水の絕景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば、心も悠に、自ら長壽を保つべし。農家には、先祖やんごとなき人の裔、代々連綿として、筋目正しきも多し、質素を本とし、奢侈なく、如法の風俗うつり變らぬやうに、子孫遠長の相續を、心とすべし。

工は、食と衣と住との、三なくて叶はぬ最第一、其住を職とし、神佛の宮殿樓閣、帝王の御座、貴人高位の居所を、造りなすもの故、商の上にあり。商は金錢の利を積みて、產業をなす故、下にあり。工

商の妻となり、女たるは、稼は、夫に任せ、內を治むること、肝要なり。物かき縫ひ針の心がけは、定りたること、間ある時は、算數も覺ゆべし。內を治むるとは、家事の取締、弟子奉公人の取扱、師弟、主從の間、武士と違ひ、嚴密に過ぎなば、渡世の妨も出來るべく、忽に過ては、不慮の損失もあるべし。上下其家業を出精し、共々利潤を得て、家名長久に傳ふることを思ふべし。豪富の家たりとも、奢侈こえ過る時は、衰微す。況んや、其下には、分外の美食、美服せず、雜費失墜を厭ひ、町家相應の形態を旨とし、妓女傾城の風俗を禁ずべく、朝寢すべからず、毎日の掃除に、念入れ、火の元は、別して大切に、自ら見廻るべし、下々を憐み、他人への挨拶、愛相能からんは、繁昌の元たるべし。

○俳句

○春の部

○
松竹や世にほめらるゝ日の初め

○
若水や藻にさく花も此しづく

○

鶯や吉野の沙汰に氣もつかず

○

たんぽゝや折々さます蝶の夢

○

足あとは男なりけり初櫻

○

むすぼれて蝶も晝寢や糸櫻

○

かくれ家も色にいでけり桃の花

○

なく雲雀よびもどしたる蛙哉

○

のどかさは何の心や春の空

○

○夏の部

○

蝶々の夫婦ねあまるぼたん哉

○

あすの夜は寢さしてくれよ時鳥

○

鍋墨の行末はつかし杜若

○

しのゝめやとりし螢を置忘れ

○

田植歌あしたもあるに道すがら

○

早乙女や若菜つみたる連もあり

○

來て見れば森には森の暑さ哉

○
初蟬や風にも用のある日から

○
夕立や卒爾な雲の一通り

○
松風を植ゑてきゝたし雲の峯

○
むすぶ手にあつさをほどく清水哉

○
釣棹の糸にさはるや夏の月

○秋の部

○
これころと何も見とめず今朝の秋

○

星合や心して行く雲の脚

○

朝顔につるべとられて貰ひ水

○

稲妻の裾をぬらすや水の上

○

秋風や云ふまゝになる尾花哉

○

行く水におのが影追ふとんぼ哉

○

名月や行つても行つてもよその空

○

縫物に針のこぼるゝ鶉かな

○

菊咲いて今日までの世話忘れけり

○
菊の香や茶にれし合ふも此日から
○
行く秋やひとり身をもむ松の聲

○冬の部

○
まだ鹿の迷ふ道なり初しぐれ
○
春の夜の夢見て咲くやかへり花
○
水の上に置霜ながす落葉かな
○
髪を結ぶ手の隙明けてこたつ哉
○

花にとは願はず雪のみそさゞい
○
聲なくば鷺うしなはん今朝の雪
○
初雪やほむる詞も昨日けふ
○
花となり栗となるや今朝の雪
○
山彦をつれてありくや鉢たゝき
○
行く年やつれだつものは何と何
○
春めかぬ詞づかひや年の内

○雜の部

○始めて夫にあひし時

澁かろかしらねど柿の初ちぎり

○夫に別れし時

起て見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな

○子を失ひし時

蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら

十二、歌。川。

歌川はもと越前國三國の花街（出村と云）荒町屋某がもとの遊女にて、長谷川といひけり。姿色艶美、心ばへ優しくして、絲竹の道を始め、點茶、挿花等にも志深かれども、殊に俳諧を好めり。後薙髮して歌川といふ。未だ若かりしとき、東都某の士太夫、三國に來りて長谷川と睦ひ合へり。その時長谷川いへるやう、妾、吾妻（あづま）を一見せんと願ふこと年久し、時を得て遊びなば、君が第に止め給はんやといふに、士太夫快くうけひきぬ。其後心に思ふ所やありけん、東國の人とだに聞くときは、必ず町名、姓名等を詳しく聞き取りて、東遊することを約し置けり。一日亭のあるじに對ひ、此事を語りて、こゝかしこ今はしるべも出來ぬれば、百日のいとまを給ひてむ、といふに、あるじもその心ばへをめでゝ

これを許しぬ、さて誰れかれを送らせんといふに、否とくより心がまへせしとて、昔の小笠に竹の杖、その外旅の調度などを見するに、家こぞりて感じ共に涙に咽びしとかや。かくてあるじは、日を撰びて出立たしむ。是を聞きつぎて人々破子などもたしつゝ、或は三里或は五里見送りするもありき、それより道すがらしるべを尋ね、幾許の日數を重ねて、やがて江戸につきぬ。まづ心あての第に尋ねゆき、しか〳〵といふ、主人きゝて大に喜び、これをその妻に語りて厚くもてなし、旅の疲れをやすめて後對面せばやとて、浴などせさせて、まづいかなればかゝる樣にて來りしかと問ふに、俳諧修行の由を語れり。かくて道の記など取りいでゝ見するに、主人且驚き、且喜びて長く家に止まらんことを勸む、かくて日を經るまゝに、同列の人々を始め、其の國守、これの北の方など聞きつぎて召さるゝに、或は發句し、或を茶を點じ、また琴、香、花なども樣よく手すさびければ、日夜の區別なく召し寄せられきとぞ。

一日、主人の前にていひける樣、こたび君の御蔭によりて、年比の本意もとげ、且思ひもかけぬ御惠を蒙りぬ、國にて約せし日數も今は充ちなんとする程に、歸國致さむ、暇たまひてむといふに、主に切にとゞめられてまた多くの月日を過して後、再び請ふに、こたびはとて遂に許さる、こなたかなたよりも、餞すとて、黃金衣服何くれと調度など給はりし物なども、歸りて後樓主にとらせて、おのれかくて三年を經なば、一の庵を結びて生涯をはごくみ給へかしといひて、またもとの遊女の職をつと

めぬ。かくしつゝやがて三年にもなりしかば、出村の街はづれに草庵を結びてこれに住ひ、風月を友として一世を畢りしとぞ。安永六年丁酉七月、遂に身まかりぬ。彼のよみし俳諧の二つ三つ。

○俳。句。

○題しらず

目さまして琴しらべけり春の雨

○

さそふ水あらば／＼とほたるかな

○

爪紅のしづくに咲くや秋海棠

○客に贈る

たゝいても心のしれぬ水瓜かな

○常に通ふ男の曉歸るを怨みて

行く水の一夜とまりやうす氷

○辭世

おくそこも知れぬ寒さや海の音

十三、倭文子

倭文子は、伊勢國の人なり、父を平右衛門といふ。幼より文雅を好み、和文を學ばんと欲して父に請ひ、遂に縣居翁（加茂眞淵）の門に入る。人となり穎悟にして、能く敎を守り、其技能は門人の推稱する所となれり。且性質温和にして、善く兩親に仕へ、朋友と交るの情厚く、其家の奴婢を見ること甚だ親切なり。故に人々これをめでたゝへざるものなく、其父母に愛せらるゝこと、掌中の金玉の如し花顏、柳眉類ひまれなる容貌なりしとぞ。

十五歳の時某侯の主人に仕へ、十八歳にして家に歸り、母と共に上野國伊香保の温泉にものしたり、伊香保紀行といへるはこの時の作なり。文体淸絕、男子も及ばざる風致をうつし得て妙なり。當時の人の倭文子を、上東門院の女房に比べたるも敢へて過譽にあらず。惜いかな寶曆二年七月十八日、二十歳にして身まかれり。

倭文子が身まかれりと聞きて、遠近の文人大に嘆き、歌文を寄せて追悼の意を表せり。師翁は墓碑の銘文を撰み、且長歌二首を作りてこれを悲しまれたり。

父母その平生作りたりし歌文の遺稿を集め、文布と名つけて世に公にせり。

墓は江戸深川本誓寺にありとか。

清水濱臣の泊々筆話に、

しづ子は廿にて身まかれゝば、まだかたなりなることもまじれりけむ。されど、かどある少女なりしことは、家集文布を見ても知らる、かのあやぬのゝ中なる道行ぶりなどは、多く翁の筆加へられしものなり、されどかいなでの女にあらねば、命ながくて老に至るまでも、讀みいでたらむには、いかばかりめでたき歌どもいできけんかし。いともをしかりし事なり、又板にゑりたるあやぬのの末に、碑文をあげて、しづ子、身まかれる折の歌とて、

桐の葉のことなど人は云ふめれど
しばしばかりやいそぐなるらむ

とてあり、桐の葉の、諸木に先だちて散る故、こと〳〵こよなき早世かなと、世人はいふならむ、なれど、末の露、もとの雫、只しばしのたがひのみなりとよめる心は、二句のいさゝか云ひ仰せぬ心地せらる、後におのれ、この碑文（倭文子か墓、深川本誓寺にあり）をみづから摺して藏せるには、

人の世に先だつ事のなかりせば
桐の一葉も散らずやあらまし

とあり、板本とは大きにたがへり、これも碑にゑるをりに翁のひき直されしものなるべし。

○餘野子の許へ返し

今日こん人をとか山里ならねど、冬ごもりせる折は、物ゆかしうてあるを、白雪のふりはへさせ給ふ御消息は、垣ほのかた枝の、おもほにかをりたらんよりも、珍らしうなむ、ざにまさる程も殊に覺に給へらるゝを、たひらかにおはしまする、委しう御使ののべ聞え給へるをも承りて、忝じけなうなん、げに年ふかうなるまで、冬草のかれ〳〵に過ぬるは、雪の積るにつけても、覺束なさはまさりぬれど、世の中のならひとて、かけぬ苦しき事どもあなるに、大方何方へもこと絶えてある程にてなむ、されどさる事もよろしうなりつれば、こゝよりも聞えまゐらんとする折なめり、さるは名高き南の海のかぐの木の實とて、みの樣もつけ給へる、うつ木の枝よ、時ならぬにつけて、やどり忘れざる時鳥の、もとの心も思ひやられて、まめに面白きに、且つ大方ならんだにあるを、やんごとなきたまへゝまゐり傳へたる御ものと承るには、まことの常世の國より今渡れらんも何かは、老にたるも幼きも齡のぶべく喜びて、手をつくりていたゞきあひ侍り、老人は殊にかず〳〵いや申し奉りつる、みづからのにとりそへて、中々云ひつくし侍らずなん、ひと日はたゞひなの道の心やりにいひて、みぐるしきわざなめるを、引なほし敎へ給はらんと例のなれ〳〵しく奉りつるを、磯のなみ〳〵ならん沖にだに、いでぬらんよ、汗あゆる心地のみし侍るを、今更に奉らんもしたり顏にやなど、母も笑へば、へだてきこえぬありさまは、しる〳〵尙あまへてなん、よろづは春とゝもに御出て立ちおはせん折を待

ちまゐるのみ、かく申すほどに、山里より、ゆづる葉おしあゆを、齒固めのまうけにとて、おこせたれば、それがまゝに奉るなりと心つけたる山すげののこされたる形見などは、中々におかしうやあらんとてなり、尙ほ近き日にこゝよりもずさ奉らんとて、くはしからぬや、

かしこ、

十四、白拍子武女

我邦遊女白拍子にして、才學によりて世に名を知られたるもの少なからず、就中尤も雄健にして、美文に達したるは、當時武女を以て白眉となす。

武女は江戶淺草の醫、鈴木某の女にして、元錄の頃、淺草馬道に生る、幼にして常に讀書を好み、且英才ありしを以て、近隣の人賞讃せざるはなし。やゝ長ずるに及び、荷田在滿の門に遊び、專ら國學を修め、尤も文章をよくせり。後或る事情の爲め、新吉原の遊女となり、名を小式部と唱ふ、或る時、尾張藩主德川宗春江戶にありて、一度小式部に會してより、大に其才學あるを寵し、春の一字を賜ひて、名を春日野と改めしめられ、尙春日野に生る若菜のおいさきやいかにと、嘆賞深かりけるが、暫くにして落籍せしめ、更に妾となし、阿春と呼び、領地尾州名古屋に携へ歸らる。後武女の父鈴木某も亦召されて名古屋に至り、鈴木金左衛門と名乘りて當藩の士となる。

享保五年二月の頃、武女一度び江戸に下りけり、此時の紀行を庚子道の記と云ふ、名文を以て今に喧傳せらる。清水濱臣此記を見て大に感じ、こは更科日記、十六夜日記などの文章にも、をさ〳〵まさるべくも劣りはなし、かゝるものを空しく埋めて、世に出さゞるは、あたら惜しき事なりとて、自身註釋を加へて刊行し、以て世に流布せしむ。これより武女の名、普く天下に知らるゝに至りぬ。翌年名古屋に歸り、いと懇に仕へ奉ること久しく、侯の先途をも弔ひ、天明二年五月十八日歿す、年八十餘、墓は名古屋建中寺にありといふ。

○三河遠江路（庚子道の記）

女は境をこえじとこそ、古き書にも見ゆ。されどそは美はしき人のうへなめり。あまの子の寄邊なき身は、誘ふ水にまかせて、西へ流れ東へさすらひて、つひの終り定め兼ねぬるぞ哀にあさましきわざなる。然りとて如何はせん。此春は故郷の東の花に催されぬ。七年あまり、なれし人々の名殘も大方ならねど、尙親のればさん方に心せかるゝを、彼の打とけて忍び顏なる心になんある。とく人の思ひくださんも、さすがにやさしう、はたわづらはしきすぢなり。斯く云ふまでは尙尾張國名古屋なりき。

如月二十日あまり七日の、曉深く旅立ちしに、細うかすかなる月の、霞のそこに見えたる、例よりも

殊に哀れなり。

あすも又見つゝ行かなん月ながら
この曉はなみだおちけり

熱田の鳥居濱に出るほど、夜あけにけり。井戸田と云ふ處は、古やごとなき人の、暫し住み給ひし跡なり。琵琶の音にめで給ひけむなどいとおかし、鳴海をすぐとて、

憂きにさへ慣て鳴海の數多たび
浦のはま路を行き通ひぬる

とは云へど、今は浦傳ふ道はおきて、上野の道の倘上をぞ行きかうことになんなりぬる。………尾張と三河との境、志賀須香と云ふわたりせし由、古き道の記にもかけれど、今はさる渡りありとも見えず。境川とて細き流れのあるに、土橋一つかけたり。これ迄送りにとて來し人の歸るに、尾張に其人の許にとて、文書きてつく。

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに
住みこし里をいでぬと思へば

年比尾張を住み憂くのみ思ひしに、三河にかゝる程は、さすがに名殘も惜しかりけり。宮路山は此あたりなるべけれども、矢矧の里すぐる程より、名さへなづかしからぬ、ひぢ笠雨とか降

り出て、みのつけし馬いつらなど、從者ども立騷ぐ程、いぶせきこの內にありければ、物も覺えず、藤川と云ふ程よりは日も暮れしなるべし、御油の宿に宵さがりて着きぬ。

廿八日、つとめて御油を出づ。吉田と云ふ處の橋を渡れば、左におかしき山の見ゆるを、人に問へば石卷山とぞ云ふ、此あたりしり給ふ君の上に、もし不思議の事あらん時は、此山の鳴る事ありとぞ、草のかき葉も言やめし世にあることにかはと、あらがうて過ぐる人もあり。

高師山は女字に書けるがいみじう目だゝし、何れの山に何をか敎へて、さる名をば負にけん。又都さへまだしと云ふに、山の櫻咲きたるも怪し。

道いそぐをちかた人もとまりけり
　高師の山の花の下かげ

潮見と云へる坂の上よりは、遠江の海原はる〴〵と見はきたる、たかし山麓の濱とよめるはこゝらなるべし。……倘行き〳〵てひくまの宿にやどる

姫小松引馬の野邊のかり枕
　げにねのびする程ぞ多かる

道につかれて人々のいぎたなく臥したるを見て、みやびやかに斯くつぶやけば、例の口さがなさよとて今宵も制す、引馬野は早くより濱松とも云ふなり。げに濱邊に松どもの多く生たりしが、風に吹か

れて、さゝと鳴る音の、いみじうめでたく聞ゆ。

廿九日濱松を夜深かに出でぬ。雨降り出で、よこさま、しぶくめり、明けぬ程わびしさ云はん方なし。

天龍川渡るとて

　船さして雲のみをつく心地しぬ

　　名も恐ろしき天のなか川

圓位上人の耻しめられ給ひけん、昔の人はいかに、棹のしづくならでは袂はなれぬべし。見つけの宿、

　さらでだに毛を吹き疵を求む世に

　　見付と云へる里の名ぞうき

懸川葛布多し。

　懸川にさらす葛布數ならぬ

　　身のうはきにといざ求めてむ

承久の昔を思ひ出るに、菊川いと哀れなりや。袖しきかぬるとよめる歌のあるに、今日は雨さへ降りて、げに私の旅ならねば宿らましきなり。

　今もなほ萱か軒ばに雨もりて

　　むかしおぼゆる菊河の宿

小夜の中山は名高き處なれば、今云も更なり。………夕暮大井河の水増りぬれば駿河へ渡らで金谷に宿る。

十五、鵜殿よの子

加茂眞淵翁の門人いと多かりし中に、女の歌よみとして殊にすぐれたりしは、餘野子、茂子、倭文子の三女なり。

餘野子は紀伊殿に仕へて、瀨川と呼ばれしが、後に凉月院といへり。鵜殿孟一(マサカズ)といふ人の妹にして、漢學に通じてよく詩をも賦したり。兄弟の才をその身一つに集めたりと、孟一は常にいひきとぞ。

一日翁、あるやんごとなき方より、女房の手本ともすべき十二月の消息文かきてよと、おほせごと蒙りたる事ありて、よの子に書かせしが、いとめでたくつゞけたりければ、やがてそのまゝに奉りけりとかや。

さてその消息文の終尾に眞淵翁はいはれたり。

これは殿の姫君の御手本の料に、とてまゐらせよとおほせらるゝに、おのれはとしも事しげくて、とみにもかくべからぬを、紀伊の宮のおまへに侍るよの子は、はやくより文かくことになれたれば、かゝせて奉りけるなり。

芳宜園のあるじ、橘千蔭、この消息を自ら筆とりて書き淸め、出板したるもあれば、世の人れほかた知れるなるべし。歌もよきが多くあり。岐蘇路記といふ旅日記、またもめでたく讀みなさるゝや。よの子の文集を凉月遺草といひ、歌集を佐保川集といふ。

◎和。歌。（佐保川集）

○春の部

○川の邊の春てふことを

末遠き息長河を見はたせば霞をかつぐ春のにほどり

○花の歌とて

あひ思はでうつろう花をはかなくも身にかふばかりなど惜むらん

○春の初の歌

打つけに霞むと見しは春を淺みあまぎる雪のそらめなりけり

○落花

雪とのみことしも花のふりゆけば消かへりても御惜むかな

○山吹ある家に人來るかた

山吹の下行水もよどみなん立よる人の影やとまると

○夏の部

○音羽山を越ゆるに時鳥なく

あま彦の音羽の山の時鳥まだ忍び音のさだかにぞきく

○

橘の薫を袖にとめ置きて散りなばさらに今をしのばん

○涼みがてら船にて樂するを

河波の音にきほひて凉しきは秋の風てふしらべなるべし

○同

物の音もながるゝ水にたゝずみて夏の外行く船の中かな

○水無月十六日の夜なりけん萩の花折りて人の許に、

今はとてぬれつゝ手折る萩が枝に露のかごともかけつべき哉

○秋の部

○野の紅葉を
小鹿なく嵯峨野の眞萩散りにけりなべて草葉の色ぞかはれる
○名所擣衣
深草や野となる里の秋風をたれ身にしめて衣うつらん

○冬の部

○神無月ばかりに紅葉を見て
もみぢ葉は物思ふ人の袖なれや時雨〳〵て色かはりぬる
○神無月ばかり山里に宿る
木枯の吹く夜も月の曇れるや柴と云ふ物の煙なるらん
○同
しばしとて時雨をよきし椎が本やがて一夜の宿となりぬる
○禁中雪
世の中に見る物としも思はねず雲井の庭にふれる白雪

○雜 の 部

○社

杉たてる國つ社はねぎ言のしるしぞ世にも頼まれにける

○元服

ゆひ初むる初元結のあけまさり尙ぬひ行かん末ぞゆかしき

○七十賀

老の波さらにもよらじ水もなき池の若菜の千代をつむとも

○夏戀

長き日の戀に姿も亂るゝをあつけさ故と人は見るらし

○長　歌

もとの荷田の大人の御魂をわが縣主の祭らひたうべらるゝに人々と共に慕ひて詠みまゐる歌

紅葉はの
散りのまがひに　過ぎにけん　秋をばしらで　今更に
袂しぼるゝ　初しぐれ　ふりにし人は　我が爲めに

何ならなくに　難波津の　流れをくめば　淺香山
淺くはいかで　思ふべき　和歌の浦わの　芦たづの
たづ〳〵しかる　手習ひも　縣のうしを　たらちねの
親とたのみて　塵ひぢの　麓ばかりも　分けそめつ
げにおよびなき　久方の　月の桂の　枝までも
心をかけて　ますら男は　白雲かゝる　高嶺にも
生ひのぼるべき　數々の　文の林の　數しげみ
玉の言葉も　多かるを　落葉をだにも　手弱女の
たは易くしも　ひろひえぬ　身をば怨めど　よしえやし
知らぬ山路も　先に立つ　人の枝折を　しるべにて
たどる〳〵も　こえぬべき　事としきけば　慰めぬ
いでや萬に　いそのかみ　ふりにし世々の　みやびをば
忘れゆくめる　末の世に　吾がうしにしも　敷島の
やまと島根の　いや高き　學びの道を　明らけく
傳へ給へる　かしこさを　思へば君は　神にこそ

いましにけめと　皆人も　　仰き尊み　大人はまた
うけし敎を　日に月に　　磨きろへつゝ　あら玉の
年はふれども　空蟬の　　うつしき時に　まのあたり
仕へしがごと　啼見なす　　慕ひゐやまひ　神さりし
其日と云へば　竹球を　　しゝに貫きたれ　床の邊に
いはひべすゑて　祭らすを　　見るにも誰か　忍びざらめや

反歌

うつそみは誰かとまらん止まるれば名こそは人の形見なりけれ
數ふれば遠き月日をしづたまき繰返してや更に忍ばん

○送。別。

梅の花かざせる春にはあらで、菊の花さく秋の末つかた、かしこきおほやけの御つかひに津の國へなむ行玉ふ君あり。

おほやけ事はおもひはかるべうもあらねどおもたゞしうころはあらめ此ことのついでに、おしてる宮のむかしの事、ふりにし橋の跡をしもとひ聞えむずる、なにはわたりの事ぞたれもうらやましう、あ

ねはの松の人にもかもやとこそ、うちうちにはおもう玉へらるれ。さるは大かたの秋のわかれも心ぼそきをりしも、はるけき道にいたり立ち玉はむを、おほくまにしもあらねば、しばしともいふべからぬ駒のあゆみなるべし。これたまひゆかむずる山の端だに見ねば、たゞ月の入るかたとのみながめやりてもむなしき空はさらしなにもおとりなむかし。されどわたくしならぬ日數しあれば長ゐの浦もおぼつかなからず、住のえの岸の草をもつみ玉はじ、と思ふにぞかゝりける。

十六、荷田蒼生子

たみ子は、荷田東滿の女にて、國家八論を著して名だゝる在滿の妹に當れり。氏を羽倉といひ、伏見稻荷の祠官の家に生れしが、幼より兄在滿に從ひて江戶に趣き、長じて某氏に嫁きぬ。然るに、幾ばくもならずして夫を失ひしを以て、兄の家に歸り、再び醮かす、父兄の志を嗣ぎて專ら歌文を練修し、遂にその妙域に達せり。後紀伊侯に召されて其女公子に仕へ、歌文を始め其他の女藝を敎へたり。年四十九にして仕をやめて歸り、小廬を淺草に結び、風月を友として暮しけるが、諸侯の夫人女公子など、招きて敎を受くる者いと多く、中に就きて、土佐、姬路、岡山の諸侯特に禮を厚くして招待せりとかや。性質多病にして、常に病床にありと雖も、容を飾らざれば決して人を見ざるにより、平生親しみなるゝ人と雖も、遂にその病患あることを知らざりし程なりきといふ。

天明六年二月二日身かれり。年六十五、淺草金龍山に葬られぬ。
たみ子が古文を綴るに巧なりし事は、千蔭或は龜子に送りし消息文によりて知るべく、和歌の才に富めりし事は、千蔭が、

刀自の歌のさま、男山のをゝしきものなるは、常の心おきて、いさゝめにも手弱女のくね〱しきならはしなくて、加茂の御手洗(ミタラシ)底清く、淀の河水よどめる筋もあらぬ心から、自ら云ひいづることとも、しかなり。

といへるにても知らるべし。家集、杉の下枝といふあり。なべて心をゝしく調高くて、才氣のたゞならぬ筋も見えてめでたし。
左の文は、縫子に與へたるものなり、

のたまふ如く、時ならぬ大雪に、いとゞ風さえわたりて、埋火のもとさらず、引きかづきて侍るを、君ならでたれかは、いかにともとひたまはんやと、いと〱かたじけなさに、枕そばたてゝ、

中垣の隔てぬ君をへだつるは
時もこゝろもしらぬ雪かな

とかこたれ侍りぬ。よく風いとひ給へや、御あるじの君へも、よくことゝりて聞え給はれかし。道のへだても、消に行き侍らば、まちまゐらすぞや。かしこ。

○土佐の侍從の君の女君より賜はりたる紅梅をめづる記

雪ふりぬる年の、しはすの二十日餘り、女君のおん前にまゐで侍りしに、御庭のかめに植れかせ給ひける紅梅の、木立をかしきが、まだ匂ふけしきもあらぬを見せ給ひて、これは行直に預け置たりし也しのびもていで、心して生し立てよ、花咲きなば鶯まつつきにもと、御心こめて給はせければ、やがて、かたはらをもさけやらで、あかねさす晝は、あたゝかなる日影を賴み、ぬば玉のよる〳〵は、さゆる寒さをいとひなど、朝な夕な、手づからにうしろ見侍りける程に、睦月の半に成にければ、いと〳〵うつくしう含みわたりて、うす紅なる花の下ひも打とけ行くを、日毎に數へつゝ、今は盛になりにしかば、女子などをもたらん心地して、いかでか心あらん人に見せばや、ひとまにうつろひなば、いかにせましと、目もかれず、物くるはしきまで、めで侍るにも、かしのみのひとりのみは、花もはになしと笑ふらんかし。

　鶯にいかでか告げむ我が宿に君がめぐみの梅は咲ぬと

風の心ものどかになり行くまゝに、咲ものこらず、散もはじめず、盛に匂ひやかなるを、

　いかにして君に見せまし一枝もた折るは惜しき梅のさかりを

とはひとりごち侍りしぞ、色をも香をもとて、女君に文奉る序に、此花たゞ一つ二つ包みて參らせつ。心せはしと笑はせ給ひけんかし。

からうじて、或る朝、そこともなく鶯の聲、ほのきこえければ、

こゝに來てなけや鶯一聲も待得し花のおもて起しに

ど、くりごとすめれど、げに語らふ人しなければ、むなしうて、花よりも主のおもてよせつべきわざになん。去年より心地のなやましかりしも、此花のあつかひに、多くはまぎらはし侍る間に、はるの半も過ぎ行きぬ。

○杉のしづえの一節

尾形昌軒と云ふ醫師の女、恒子と云へるは、女のあらんさま殘るところなう、思ひたどりはたかどおりて、才も男子にもまさるばかりありても、いとゞこめきて、一文字をだに知らぬ樣になごやかにもてつけて、顔かたちも己から一きはまさりて見ゆるも、心しらひのよきにうつるなりけり。常に親しう云ひかはして、娘など云ふばかりに恒子も母代とのみ文にも上に書きなど親しかりしかど、さりがたきよすが定り給ひて、卯月の末つ方人に迎へられ給ふが、いとゞねたき上に惜まれ侍れど、人の幸なるをいかゞはせむ。只今よりうとくなり侍らむ事に、萬心にこめたる文まゐる序に、衣一むら贈るとて、包紙にかくぞ。

千重にとも思ふ心はおよばねど

うらなきをのみ見するばかりぞ

○

肥前の平戸しろしめす殿の仕へ人、いさゝかのけさう事のふるき罪にあらたにあたりて、御國の島に流し遣されしを悲しみ傷みて伊之と云人御赦の旨をうけむ爲めにとて、紫のゆかりにしもあらねど、友達の深き惠にて、其人の爲にとみに法華經八卷をみづから書きて、其よるべの寺に納めてむと、書き終りて見せ給ふ志を感じて、九つのうしの一の毛にも及ばざる事ながらに伊之のそゝのかしにて、其經の裏にかきつけぬ。

松浦潟なみならぬ罪もきゆぬべし
君のめぐみと法（のり）のめぐみに

○

諸鳥のいもせと、伊豆の熱海と云ふ所へ湯あみに行きけるに、日數ふれど、こゝには消息もせず、よろにのみよすがもまれ〳〵聞き侍る頃しも、悅子と云ふ人の許より、かう〳〵明日なむ又船のたより侍るを、文やり給はゞあつらへよなど、まめやかに聞ゆたびければ、返し文の奥にかく書きてやり給へりと。

吹く風のよその傳にもいかにぞと

とはぬつらさにとはじとぞ思ふ

○

神無月六日ばかり、思ひかけず、土佐のかうの殿の、此の近き大ひざへ詣で給ひしとていと忍びて、此伏屋に立寄らせ給ひける。かしこさも面たゝしさも夢の心地して、御顔拜み奉るも涙さへこぼるゝばかりに目はそらにのみにて、聞ゆあげむ言の葉も、いでやらず、ぬかをつきつゝ、うつし心も侍らぬに、歌をだに奉れと、山田の主か教へ給ふを、やゝためらひても何とかは、云はれん折にさしあへて、片へには横瀬の侍從の君を始め奉りて人々つどひ給ひて歌合催ほし給ふ日なりければ、只はひりの方に屏風ひきたてゝ、御まし所設けたるがなめげなるに、汗あゆるのみにて、辛うじて日もなかばたけゆく、夕かげになり侍りければ、御供の人々こわ作るも、にくき物から苦しさの心やりに何とか書きて奉りし。

した紅葉したにこがるゝ山かげを
かしこく照らす夕づく日かな

○

師走の八日ばかり思ふどち打ち集ひて、源氏物語の卷の心々に贈答の會し侍る時、さかきの卷、御息所のこゝろにて、三重かさねのにほひに、野の宮の榊葉をつゝみて、豐後國岡の殿の、巷姫君に奉る、

しめ外にかけはなれめや榊葉の
　かはらぬ君が心なりせば

同じ時に、箒木の巻の中、光源氏の心を、姫路侍從の君の女君より「打とけて夢だにも見ずつれなさを歎く涙にぬる夜なければ」とある返しに、空蟬の心にて、

さめやらであるかなきかの憂身をば
　夢にも今は見えじとぞ思ふ

同じ時蓬生の巻の心を槇子より「古への人をこそまて蓬生のもとの心を露わすれめや」とあるかへし

くれなゐの色を深かめて契りおきし
　よもぎがもとの露わすれめや

○

播磨の名たゝる明石なりける、人丸社に奉納し給ふとて、其國の殿の女君、夢によみ給ひし歌の文字を句の頭にすゑて三十餘り一くさの歌集め給ふ、奥に神祇と云ふ題に旋頭歌にて、もを始めに置く、

もしほ草　書き集めつゝ　君が手向を
　玉かしは　ちびきなすまで　神もみそなへ。

十七、土岐筑波子

筑波子は又茂子ともいへり、近藤正幹の養女にして、德川幕府の侍臣土岐賴房の室なり。幼時より文學に志深く、稍長じて加茂眞淵の門に入りて大に歌文を學べり。その名は彼の筑波山は山しげ山といへる古歌によりて加茂眞淵翁の付けられしなりといふ。歌は翁の流れを汲みて詞調高く且つ優しくして、容易に人のまねえ得べからざる所なりき。故に翁も大に其歌を賞讃して、天暦の女房の調なりと云はれきとか。縣居翁の門下中三才女の一人にして、よの子と肩を並べたり。

その筑波子家集は、後年淸水濱臣の撰集せし所にして、縣門遺稿の内に收めたり。

淸水濱臣の泊々舍筆話に、

しげ子（又の名はつくば子といへり、これは筑波山、は山しげ山といふ古歌によりて翁のつけられしなりけれ、）土岐賴房（通稱新左衛門柳營侍臣）の室なりしが、歌はよの子よりもたちまさるばかりなりき。

春の初の歌、

　　限なく來れども同じ春なれば
　　　　あかぬ心もかはらざりけり

この歌縣居翁の評に、天暦の比の女房の口つきなりと評せられき。又、

みつになりける幼子のなくなれる折、

いはけなく如何なる樣にたどりてか
　死出のやま路をひとりこゆらむ

たゞ言ながら、心の程思ひやられて、此歌見る每に覺えず淚ぐまるゝになむ。また商人を、

わたらひの心細くも知られけり
　いとうる賤の絕えずくるには

女の歌、誠にさこそおほけれ、みづからかきあつめおける歌どもに、縣居翁、點合をおかれたるを、故ありて、おのがもとにもたれば過ぎし享和の三年、淸く書き改めて、はし書などものしおきしを、文化十年の春、遂に板にゑらせたりき。

○和歌（筑波子家集）

○春の部

○むつき

限なく來れども同じ春なればあかぬ心もかはらざりけり

○

かつしかの野邊の霞に立まじり若菜つむべき春は來にけり

○

霞立ち梅のかをりも増りゆくむ月の空ぞうれしかりける

○殘雪を

花もやゝ匂はんと思ふ山里におぼつかなくも殘る雪哉

○若菜

春日野につむや若菜は一年の心すさびの初めなりけり

○鶯

世の中の憂きもつらきも鶯の聲をしきけば忘られにけり

○家の花さかりなる頃

とはれなばやさしかるべき宿なれど花し匂へば人ぞ待たるゝ

○藤を

立かへり見れどもゝ岸の藤浪はよせくるたびに袖ぞぬらさぬ

○夏の部

○郭公

五月雨のながめまされる夕暮にうたても鳴くか山郭公

○

郭公なくや五月の橘の花散る頃のあかずもある哉

○五月五日思にこもりて

墨染の闇にこもれる我宿はあやめも知らぬねぞなかれける

○夕貌

中垣のあらはなりしも夏來ればはひもてかくす夕顔の花

○螢

夏の夜の螢や何ぞ明け行かば露より先に消えんとすらむ

○

浦風に螢みだるゝ芦の屋の里はよるこそとふべかりけれ

○水無月

風をのみしたしき友と頼みつゝあやなく暮す水無月の空

○秋の部

○七日の夜

天の河渡り渡らずよもすがら覺束なくぞながめられける

○

天の河かはせ涼しき夕月もよそに見つゝやこぎ渡るらん

○秋風

我かせこがとき洗ひ衣も縫はなくに荻の葉そよぎ秋風ぞ吹く

○虫

秋の夜はねられざりけり哀れとも憂しとも虫の聲をきゝつゝ

○八月十五夜

秋毎に面なれにける月といへどいつもうひなる心地こそすれ

○秋の最中月、終夜くもりければ

見る人と月との中を隔てつゝ心なやます雲にもあるかな

○秋夜

此頃の夜はきぬたの音すなり雁の聲はた打そはりつゝ

○雁

ながめつゝすゝろに物を思ふかな雁鳴き渡る夕暮の空

○冬の部

○冬の初の歌とて

時雨つゝ淺ぢ色つく鴫鳥のかつしか野邊に冬は來にけり

○殘紅葉

もみぢ葉はともしくなれど神無月時雨るゝ頃ぞ見るべかりける

○あらし

筑波ねの木の葉みながら吹き亂りかしこきばかりたつ嵐哉

○時雨

今こそは降りきにけりと思ふ間にやがて時雨の音ぞ絶えぬる

○鴛鴦

難波潟芦間の床も霜かれてぬるよなげなるをしの聲かな

○埋火

とばかりも立離るれば堪へやらでやがて寄りたふ埋火のもと

○雪

散りみだるみ雪は冬の常ながら思ひふるさん物としもなし

○雜の部

○天

よと共に見つゝ暮せど樣々にあかぬは空の景色なりけり

○雲

風をいたみすぎに過ぎ行く浮雲のかさなる果や何處なるらん

○都

のどかなる都の程ぞしられぬる行きかふ人の袖のさまにも

○鄙

兎に角にいとなき業は多かれど心安きは鄙にぞありける

○旅

我袂うたて〻露にぬるゝ哉人やりならぬ草枕して

十八、菱田縫子

縫子は江戸の人にして、幼より和歌に志深く、當時縣居翁の門下にして三才女の名を得たる一人、荷田蒼生子に從ひて和歌を學びしが、いつとなく其名天下に知られて、或は大家の中に交り花月の樂みを求むるに至りたり。

かくて、師蒼生子は早世したりければ、後加藤千蔭の門に入りて、益研究に暇なかりしが、遂に女流社會の尤物とはなれり。寛政中年遂に身まかりぬ。

○宇治の川邊に郭公の初音をきく

ふるの山里は、いかならんと思ひしもしるく、いとあはれなる村雨に、川面には行きかふ船もまれ〳〵にて、今は網代の樋をによるべもなしや、波の聲にきほひて、ほのかに物の音きこゆるは、姫君達の御遊なるべし。暫し立休らふに、はしたもの見付て、よくこそ參り給ひつれ、辨の君に聞えむとて入りぬ。都人久しう物し給はぬかな、花の頃もいかでと聞えさせ給ひし宮は、例の御山でもりにて、いとさう〳〵しうながめわびさせ給ふるに、よき祈なれや、いざとてお前にまゐりぬ。二所ならび居させ給ふ御有樣、世にたぐひなし。時にあひたる姫君と云へど、かうはおはせぬものを、かゝる山ふところにと思ふも、あながちなるや。こゝにとめせば、はしの方にゐざり出る折しも、名殘なく空晴て

はなやかなる夕月夜に、はる〴〵と見渡さるゝ、宇治橋の景色いとをかし。よせくる浪に入日を洗ふと言し面影見えて、み園のさまも、都にになくつくしたるよりも、おのづから茂りあひたる梢をかしう、吹く風の、松にかゝれる藤浪の、さとかをりたれば、姫君の御袖の香さへ打あひて、いとえんなり、ろこはかとなき水鷄の聲、たが門さしてとあはれになん。

都物語おそしと人々すゝむれば、何をか聞こえ侍らむ、春の行ゑさへ知らで、埋もれてのみ侍るものを、そは早くより夏に心よせ給ふめれば、けふなん訪ひまゐらせしも、まことの志には侍らじかし。郭公の聲きゝがてらにや侍らむ。あらずたゞすの神にも誓ひ侍べらむ。されど花紅葉の比は、雨風につけても、しづ心なく、この比こそ、いとのどやかには侍べれ。又子規に増りてあはれなる物やは侍る。えんなる人は更なり、いかなるおこなひ人も、ずゞ引きやめて、初音きかぬは侍らじと云へば、さは此定めよ、いとわきがたきことになん。籍は年比河瀨の宿をよるべと賴み侍るにや、ねざめことゝふ小夜千鳥の、友まどはせる聲のみ、あはれになんと、中の君に目をくはせ奉れば、御顏打しめておはす、御かたの大輔の君、御前には古き軒ばの梅の香をとめて、ひとくと告る鶯のみ、あはれとおぼしためると云ふ。おほい君はいかにやとて、かしこけれどさしよりて聞ゑ奉れば、いかにぞや、住みはつべき世にもあらねば、旅の空なる雁が音ころはど、云ひけち給ふ御聲の、おてやかさは、此あたりにてはいみじく惡ませ給ふと、音せぬも中々になんと云へば、心の中には、耳驚かすばかりの一

聲もがなと、待ちわぶるに、いかにしりてか、橋の小島が崎のあたりを、鳴きわたる聲さやかなり。嬉しともうれしうて、いつも初音のと、つぶやけば、中の君。

鶯のかすみにむせぶ聲にしも
　おとらぬものか山ほとゝぎず

あはれになむとの給ふ、耕

あはれとていかで定めむ老らくの
　みゝにはうとき山ほとゝぎす

波の聲にまぎれて、おぼつかなしと、そらたぼれしたるもにくし。

待ちまたぬ人の心もさとはきて
　よそに過ぎ行く山ほとゝぎす

など云ひかはせば、ものぐるほしやと、ゑませ給ふ御有樣こよなし

十九、千枝子

千枝子は江戸本願寺境內、眞光院の住職多田賢珠の妻なり。幼にして文才あり、長ずるに及びて當時歌文に名高き橘千蔭の門に入り、大に斯道を勵みしかば、遂に天下に名を得るに至れり、千枝子とい

ふ名は、これ師千蔭の附する處なりとか。

晩年に至り剃髪して、香習院阿實尼と號して、日夜歌文を友とし、風月を親しみて、いと風雅に一生を送りしとかや。

○山水の繪を見てかける

夏引の手引とか云ふめる永き日をしも、何わざしてか暮らしてむ、ゐふたぎ貝おほひも、例の事にて珍らしげなければ、故殿の、になう興ぜさせ給ひて、自らも書かせ給ひ、名たゝる繪をしも撰びつどへ給ひ、ことさへぐ唐のも山跡のも、歌繪、物語繪、四季の花鳥など、おのがじゝ、いみじうかいとゝめたるを、みづしに一よろひ、こめ置かせ給ひき、かれをしも徒らに、しみの住かになしはてむもいかにぞや、かゝる時とうでゝ、おもと達に、其心ばへを文にも歌にもよみ出でたらむこそ、いと興ありて、心をやらむすさびには侍るめれ、右近はいうそくにして、心しらひ置きつるふる人なれば、彼をしも召しいで、をさ〳〵きこえよと、おまへにての給はせつるは、かしこきものゝ、まはならぬはいかでかはと思ふも、くしいたしかし、げにや、荒かねの土もさくてふ日の、いとたふまじければ夏によりたる殿のみ、格子揚げさせ、おまし引つくろひ、翠なる小簾なかばかゝげたるは、打ちつけにぞ涼しかる、まいて、さと吹く風に、玉かと見ゆる池の蓮の、露のまろび合たるもをかし、花の匂

ひ云ひしらずかをりみちたるは、佛の御國にや到りけむと、思う給へらるゝ事になん、とみの事なれば、ことさらび軸表紙のかざり、てうぜさせ給ふとにもあらで、枕の御机一つに、こぼるゝばかり卷き重なりたるが、少しかびたるものさへ空燒物にまがひぬるは、花橘にあらぬ物から今更めきて昔なづかし、馴がほなる人々、御机に額をつどへつゝ、一重かさね、しどけなく着なしたる袖口ども、時の色合、なづかしう重り合ひたるぞ今めかしき、是は誰、かれはくれへなど撰分ちつゝ、御かたへ近うもてあづかひぬるは、いかで斯くまでかしこきお前をしも、立ならすらんと、いと／＼浦山しうまもらるゝに、御めのとより始めて、一卷づゝたうべたるぞ、誰も／＼蝶よ花よと、ぬかにさゝげつゝ歡びあへりし、さるにても、昨日今日御前ゆり侍る程に、いとうひ／＼しう、萬かゞやかしう、しりへに侍りしかば、やをら御屏風のうしろに、はひ隱れて、かの賜はりつるを開き見れば、こくかき流したる山水のかたなりけり、高き山に松生ひ茂りて、瀧落したるは、白糸をはへたるやうなるに、かしこき山路を、賤の男が眞柴おひて下るもあはれになん、麓には千里の隈もなく見え渡るべき高殿有て、はるけき水の面に帆かけたる舟浮べるさまなど、えも言はんかたなく、此道に至り深かき人の筆をつくし、心をこめたるは、いづちいかなる名だゝる處々へ到れり共、かゝるけはひやはある、せめて、かたかどをだに學ばましかばと、目もあやに打守られ侍りぬ、さはれ、そがさまを、いかゞ書きつらね、いかゞよみいで侍らん、ひた道におほけなしと思ふに、いよゝ心おくれせられ口ごもり、い

といたう物思はしげなるを、じちに親めき、よろづ後まかせたる右近のおもとや、もどかしう思ひけむ、たゝう紙のはし、いさゝか引やりて、

岩が根をとめて落ち來る山水に

あかぬこゝろをうつしつるかな

と書きて、袖の下よりさし入たるは、うれしとはさらなり、涙さへさしぐまれしとぞ

○水無月ばかり墨田川に船を浮ぶる辭

涼みにも行くべきものを、夏引のいと手にかけたる暑かはしさをわぶめりしも、さそはるゝ風をよすがにて夕汐と共に棹さしのぼるに、さばかりはたはり廣き川もせに、涼舟のたてぬき行ちがふこそ、げにをかしけれ、こなたも舟やかたも、かゝげつくせしかば、遠近くまなく見渡さるゝに、川ろひ小田は名にしおふ勝鹿わせの色見えて、秋待ちがほに打なびき、霧打はらふ夕風の、なべてならず涼しきは、雲居に向ふ水上の、筑波ねよりや吹き通ふらんと、袂に入れつゝすさむるにぞ、扇忘れて、ふとおとしつるが、都鳥にまじりて、波にたゆたふも、中々に興ありてをかしきや、舟つなぐ堤の桃の、葉の廣がりて深きかげより、先くれ渡る黄昏時のあやなきを、芦間の螢飛び乱れて、天つ星の光に爭ひ、水くらからず、照らせるは言ひしらず心ありける哉、伊勢の海ならねど、此渚にも玉なむ寄す

めるよなど、かたみにあかず、あはれとめづる程もなく、そも、かいけちたるやうなるは、木の間にほのめきそむるなりけり、打つけに影まつ程、袖ひぢて水むすび、あるは硯にそゝぎなどするに、いと清うひやゝかに流れ行くおとなひも、こよなう心行くけはひしつれば、

水馴棹さすまみじかき月影の
　すみだ河原に波まくらせむ

百夜つきてもとか。

廿、荒木田麗女

月の行方に昔を忍び、池の藻屑に水莖の跡とめて、三鏡（水鏡、大鏡、増鏡）の缺けたるを補ひたる史才を以てまた連歌の堪能を以て、其名著き荒木田麗女は、伊勢の人にて、享保十七年三月に同國山里の里に生れぬ。父は大神宮の祠官にて、釜谷權之進といふ、麗女は後に、伯父荒木田武遇（タケアツ）の養女となれり、初の名は隆、後に麗と改めぬ、紫山又は清渚と號し、字を士寄といへり、幼き時より讀書を好み、女子のわざをなすことを好まず、父が無用の事なりとて制すれども、猶ひそかに何くれと書を讀めり、十三にして伯父武遇に養はれしが、武遇は讀書を好む人なるを以て、よろづたよりよくて、十四より詩文の類、文選などを敎へられ、十五にて和歌を學びそめたり、十六より連歌を習ひ、十七の年難波の

西山昌林の門に入りて勉め、次第に上達し、廿一にて京都の里村昌迪の門に入りぬ。かくて三年にもあまり、明和の初頃、故ありて都に上り、昌桂の門に入り連歌を學びけるが、年を追うて其名漸く高し、後又難波に下り住みしが、人々訪ひ來るを厭ひて、住吉に移りしに、十二月に故郷に火災ありしを以て急ぎ歸り、家を作ることに力を盡したり。同二年四月又難波にうつり住みて、讀書することゝせ志が、家に書の乏しきまゝに、宮崎の文庫より借りて繙き、通鑑綱目、或は詩歌の書など、何くれど心を配りて讀めり、眞人慶德藤太夫（麗子の嫁ぎしは何日頃なりしか詳ならず）も亦書を讀むことを好み、且つ書寫に巧みなりければ、麗女が學問著述の爲めに、便いとよかりきとぞ、又裁縫の暇には、阿蘭陀布を摸しけるを、人々興じて望めり、十種香も習ひ、心に入るやうになり、香包（かうづゝみ）も手づから縫ひならへり。其後明和五年、眞人が津國遊行のあと、徒然なるまゝ、曾て眞人が東行の時に求め來し、宇津保物語を讀み、反覆してその意を解し、誤を校正して目録系圖をも作れり、後、中院通茂公自筆の本を參照せしに、此校正と少しも違はざりしとかや。かくて眞人の勸誘により、詩歌及び和文を學び、また公事有職の書類を見、殊に好みて國史を繙けり。遂に眞人の勸めに從ひ、假名文を以て池の藻くづをかき、その他種々の物語をも書けり。是より其名漸く天下に聞え、當時高名の學者詞人と交通したるのみならず、またまた屢貴顯の交をも受けたり。

麗女の著書殆ど百餘種、今其主なるものを記せば

池の藻屑	十四卷	怜世語	十六卷	しの竹	八卷
月の行末	二卷	手枕	一局	若葉	二局
富士の岩屋	二卷	木曾路	一卷	花立枝	三局
野中の清水	二卷	二本杉	二卷	二本杉	二卷
奈良志波	二卷	梅宴	二卷	常盤	七局
桐の葉	五卷	喜多山	一卷	武藏鐙	二局
五葉	五卷	桃園生	二卷	桃の園生	二局
山の井	三十卷	春かざし	二卷	斧柄	二局
濱千鳥	三卷	小牛卷	二卷	槇の戸ざし	二局
奈良の葉	十六卷	狩馬鳥	三卷	須磨の寐覺	一卷
桂中將	三卷	花すゝき	二卷	假寐中納言	二卷
畝火山	三卷	笠舍	五十四卷	頁雨夜	二局

等を始めとして此他三十餘種あり。而して此他、和文集、發句集、自撰傳記、連歌集、時につくの辭、豐臣の辭、大江賦、等のものに至りては、殆ど數十集の多きに至る、實に驚くべきの至りならずや。我國古來女子にしてかく數多の著書をなしたるもの、麗女をおいて誰にか求めん。誠に清紫、赤染な

どの遠く及ばざる才學と謂ふべし。

文化三年正月、七十五歳にて身まかりぬ、墓は山田浦口町虚空藏谷にあり。辭世の句に。

松やむかし語らば夜はの夢の友

身や胡蝶花になれしも一むかし

○大江の賦（一云賦二陸奥羽林一）

寶とは玉をもいはずとか、國を治むる器なむ、世にありがたくすめり。中に元就の右馬頭といへるは大江の流にて、廣元の末葉なれば、いとあてなる人柄なれど、年月うつりかはり、さま〴〵みだれたる世を經ぬれば、今は鎌倉のむかしの榮に似ず、安藝の國にしるよしして住みつゝ、祖父などは、其名を世にしらるゝこともなくて過しつるに、この人の時に至りては、三尺の光もことさらにて、英でたる名の四方にあまねく、勢は百千の軍をも從へつべきに、心ざまはた三の徳をかね、五の常を守りて、萬の民は、草葉と共に、靡きしたがへり、子どもさへあまたあるに、いづれか劣りざまなるなく、とり〴〵におとなびて、才などもかしこく、家を讓るべきは更にも云はず、吉川の底深き謀、小早川の濁らぬ政は、左右の翼となりぬるより、四百年の基を起さしむべきなりや、初の程は、尼子に從ひて出雲に腰を折りつるに、義輿のぬしの、我さまの人にせまほしうして、二王の軍の勝負を一人にか

けつる齊王信にも劣らじとて、懇におとづれ聞にしより、おほちのかけによりぬ、かゝれば吉田の戰出來りつゝ、出雲のかたにも、世衡が間を用ひつれど、すべてたばかるゝ端となれり、さばかりの師どもの競ひ到れど、つゆ恐るゝ事もなく、よく馬將軍があとをれひて、百をもて五千を破りつゝ、たゞ飛將の龍城にあるが如く、この國にては、千劒破の昔にも通へり、程もなく、大内の家また霓裳の曲をおどろかして、一別四千里の思に惱めるあり、これはた、墻根のうちの禍なれば、從者みな反きて、怨を報いむ人だになし、さるに、唯一人心を發しつゝ、嚴島に赤壁の古きためしを思はせ、雪の夜に淮をわたりしよりも、功の速なりしかば、うちつゞき、多くの國たひらぎつゝ、昨日今日の敵なりし人も、やがて馬前の卒となりて追從しありき、いつしか山陰、山陽の二つの道ひらけて、關の鎖もかたからず、賤が杵歌も聲しづかになむ、なほ、あらたに筑紫の方をも治めむとて、軍を出しつれど、はかばかしきものもなくて日數を經にければ、さすがに、處々の護おこたるとはなけれど、隙をうかゞひつゝ大内は、ふたゝび漢室を興さむことを計り、尼子も越王の耻をすゝがむとて、とりどりに境を侵しつれば、又いかさまにかと、折かたぶく人々あるにぞ、さらば、まづ近き憂をたちてこそ、遠きおもひやりはせめとて、帥ゐて歸らむとて、道の程、まことに千里の目をいたましめ、九折の魂を驚すばかりなり、辛うじて國に來り着きつゝ、又亂れたる處々、そむく罪を問ひなどして、國々の掟正しくしつれば、幾程なくて、仇の風もしづまりつ、すべて遠近の海山は、波の立てるもな

く、雲の立居も、やすらかになりゆくにぞ、今はとふことなげなるに、唯あかぬことゝは、霞の衣さかさまに着たる歎なむ、すべての世のありさまとは云へど、いと口惜しうこそ、されど、二葉の松の生先き見えたるなむ、末たのもしく、又なき形見なめれ、終には、領すべき國十にも餘りぬれば、天が下に、その名いちじるしくあつく、肩をならべ轍を同じうする人もなし、さるは、弓矢の道のみにもあらず、君に仕ふる志もまた切なれば、絶えにしことをも繼ぎ、廢れたるを興さむの心づかひも、まめやかにて、御國讓の料をも調じて奉りしより、君の御覺もめでたくて、位山わけいりては椎柴を折り、また大宮人の心ざまにもかよひて、暇あるをりをりは、櫻をかざし紅葉をめでゝ、言葉の色をそへつゝ、和歌の浦路もたどるましげなり、かく六の國もたひらかになりぬれば、兩鬢の霜もかくれなく古より稀なりといふなる春秋も過ぎゆくに、のこりの齡ゆたかに保つべき菟裘の地をだに卜せず、たゞ明暮、攻城略地の謀れこたらで、露宿風餐の辛苦にたへつゝ、末葉の榮をのみ心にかけ、本意たがはで、正木のかづら永くつたはり、今の世までも、その勢異なるは、一人のいさをしによれり、むべしも、龍門原の土に骨を埋むといへども、殘れる名の芳はしさは、又たぐひあらむや、

うづもれぬ光ぞよゝに殘りける
剱は秋のしもとなれども

今は世の中、思ふ事なきにつけても、都の上は、三種の御寶の渡らせ給はぬ事のみ、御心苦しう思し召しなやませ給ひ、いかにもして、芳野殿とむつまじうならせ給ひて、神璽などをもとのまゝに、都に還し奉らまほしう、思召されて、仕うまつる人々にも、うち〳〵宣ひあはさせ給ふに、關白殿はことわりにも思召されぬ樣にて、いさめ奉り給へば、上も思召とめけるに、御夢のさとしなども有けるにぞ、ひたすら思召たゝせ給ひて、室町の大臣に仰言侍りしに、大臣も從ひ奉り給へば、內には大內義弘を召されて、四位の少將になさせられつゝ、こまやかなる仰言にて、芳野殿につかはさせ給へり。

○南北朝合一（池の藻屑）

義弘は駒打はやめて、芳野山に詣でつ、げに山重れる御住居にて、物さびしげなるに、行宮は何のいたりもなく、かりそめに黑木をもて作れるも、年月にこよなうふりわたる、いとあはれなり。又侍ふ人々の家居なども、ことの外に荒れ增りたるを見渡して、かやうの山里に、何心して年月を經させ給ひけんと思ひやるにもいと悲しう、淚もかきくらすばかりなるを、ためらひて行宮に參りつゝ、上人につきて、事の由を奏し奉る。さらばとて上は、北畠顯敎して、返り言仰せ下されしかば、義弘いといたうかしこまりて、かへす〳〵御山を出させ給はん事の定めをしつゝ、まかりて侍り。京にはいつしかと待おはしつるに、御使かへり上りて、しか〳〵と奏し奉りければ、內にも、御氣色よくて、博

士どもゝ召されて、日を定めさせ給ひ、御迎ひの人々をもくらせ給へり。基信の中將をば、幣使にて伊勢に遣はし給へり、神寶の事なくて、都に入らせ給はん事を、神に祈らせ給へるになん。

十月明徳三年廿五日、よき日なりとて、御迎の人奉り給ふ。關白殿御子の大納言參議兼宣、武家よりは、賴元、義則、義弘、なり。芳野の上は二十八日。御山を出させ給ふ。關白殿は、御よそひ麗はしく直衣にて、其他の公卿、殿上人、そものみやつこ、などは、皆ことごとくしうえびすの衣きて、前しりに從ひ奉れり。名和修理と云ふものは、帶劍の役にて、御輿にそひ奉る。義弘ゝ裝束の下に、腹巻と云ふ物を著て、引さかりてぞ、つかうまつりける。

先奈良の京におはしまし、立田などをも御らんず。昔後村上院は、世のみだりがはしきに催されて、已から處々の行幸ゝ侍りしに、近き世となりては、御山より外の行幸も、なかりければ、いと珍しう御覽じ渡すに、女御の御方、宮達などは、まして處々の逍遙に行もやらせ給はず。京の方なる人々は、はやはやといそがし聞ゆれど、こなたは、かやうな折も、又有がたう思召されば、とゝかしこに滯らせ給ふ。神無月も末つ方なれば、紅葉も散すぎて、野山もあいなき程なり。立田川にて上

立田川浮ぶ紅葉の行末は

ながれとゞまる事もあらじな

空晴て、日かげも暖かなれば、冬景春華に似たりなど、打誦し給ひて、閏十月にぞ、都に入らせ給ふ。

其日は殊に、引つくろはせ給ひて、内の行幸ばかりの御儀式にて、御引直衣なり。御輿仕丁などさへ、内より奉り給へば、いと花やかなる見ものにて、都人ども、立なみて拜み奉る。夜にいりてぞ、嵯峨に著かせ給ひ、大覺寺におはします。内より勅使あり。五日にぞ三種の御寶は、大覺寺殿より內裡に渡らせ給ひける。元曆の昔、西の海よりかへらせ給へる例を、ひかせ給へりとかや。日野の中納言を大納言になされて、事ともしたゝむべく定めさせ給ふ。關白殿も仕ふまつり給ひ、君達あまたおはします。道の程もいみじき御よそひにて、事なく內へいらせ給へば、此時ぞ誠に四の海、一つの御代となりぬるを、公私よろこびあひたり。大覺寺殿には、尊號奉らせ給ひ、後龜山院と申し奉る。

○后午日記一節

六日西の都なる菩提寺に詣づ、いみじう物さびしくて、古寺の趣。限なく哀なり。雨の後波の庭しめらはしきに、僅に詣でし人の跡付たる雪ならねどいとおかし、

心あれや古りぬる寺もとふ人の
　ふむ跡殘すにはの春雨

戒壇の御堂もあり、壇のしつらひ、いとめでたきを、近うさしよりて拜みぬるも嬉しくなむ。寺の門出ればやがて、尼ヶ辻と云ふ人里なり、暫く休らひて奈良に到り、興福寺、東大寺など拜み奉る、處

々の花は、かつ散るも今盛なるも、とり〴〵なり。

古へをのこす盛りや八重櫻

大佛の御堂の前は殊に花多かりければ

かつ散れば咲く櫻ある木かげ哉

いたく盛りすぎたるもあれば

木のもとの雪とは見れどふむ人の

あとなきにこそ花としらるれ

若草山は折にあひて殊にうるはしくなん

わか草の名に負ふ山やあさみどり

今日は空も晴れ渡りぬればげに草葉も春の日にまかせつべくて

打ちなびく霞のひまも若草の

みどりにつゞく春日野の原

春日の社にもしづかに麻奉りて、まかづる程、猿澤の池の邊にて。

水にかげのこす玉藻かたま柳

元興寺もよりて拜みつゝ、おひときと云處なる、地藏菩薩も引手にぬかづきたり。行先に朱の鳥居あ

る處を、柿本の聖の歌塚となんきゝて、殊更に立も寄らまほしけれど、はさらぬ事にて、尋ねがたければ、

古塚やはるかに仰ぐ初日影

在原寺にて

小薄はいつか一むら夕がすみ

石上布留などもはの鳥居のいちゞるしけれど、道遠しと人の云へば、はも立よらず

夕かすみいかに隔てゝ石上（いそのかみ）

布留の社をよろになしける

廿一、只野綾女

綾女は、仙臺の醫師工藤平の女なり。幼きときより、學問を好みて、常に物語文を讀み、また和歌に志深かりき、書にも巧みにして、當時の瀧本流を學びたりとかや。年また若き十六の頃、和文を作りしを、時の和學者、平春海見て、其才筆に驚けりといふ、尋いて藩侯の後閤に給事せしが、いくばくもなくして、仕を辭して家に歸り、かくてしばらく屛居したりけるが、やがて其藩士只野伊賀の後妻となれり。さり乍ら不幸にも良人を失ひ、又男女の兄弟七人の內、五人とも先ちて失せしかば、綾女

の悲みやる方なく、且大に志を興し、書を著はしてその名を世に知られ、尙ほ家名をも顯はさんと欲したり。

まづ獨考三卷を撰びて、人事の得失、世俗の可否を論ぜり。其說く所明晰にして自ら一見識あり。其他の著書は、

奥州ばなし　一卷
磯づたひ　一卷
昔ばなし　一卷
七くさ　一卷

獨考論といふものあり、これは綾女が自作のひとり考を、瀧澤馬琴に示して批評を書き加へられたるものなり。

七くさ、昔ばなし等は、おのが祖先のこと及び兄弟の上の事など、つばらかにおもしろく書き綴りたるものなり。中に說きても磯づたひは、筆づかひいとめでたきものなり。

按ずるに綾女は、女ながらも男魂ありけるものにて、その才學は井上通女、荒木田麗女などにしも劣らざりしならん。只惜むらくは、漢學に疎き方なりしかば、二女の如く漢詩漢文をよくせず、且其性少しく尊大の風ありしかば、馬琴の忠告もありきとか。されど春海、馬琴の常にその才學を稱せしを

見れば、實に德川時代の女傑なりし事は疑ひなし。

寶曆十三年に生れて文政七年に歿す、年六十二。

○磯づたひ

磯づたひの道に、かゝる港ばまのわたりは殊に淸し。眞砂の中に、黃金の箔を敷きたらんやうに見ゆるが、交りて、波の打ちよるにつれて、下り上りするが、うちあげられたるは、卷繪にて異なることなし。かゝるをめでつゝ、磯傳ひし行けば、港藥師のたゝせるわたりは、よろに過ぎ行きたる後、思ひ出で悔ゆるも甲斐なし。千鳥は冬ならでは居らじ、と思へりしを、十羽群れ居て、水際を去らず、あさるは、いとめぐし。人の近付けば遠く居つゝ、いつも同じ樣なり繪にかきたるを見しとは異なり。身はほそりて長く、をし鳥の形したり。飛たてば羽がちにて、燕に似たり。小波の寄する時は步みながらにげ行く。引く時は又したがひてあさり。大浪の打ちかゝれば、飛立ちて、即ち汀に居るさま、千鳥と云はまほし。

磯千鳥みぎははなれずあさりつゝ
　　きよきなぎさに世をやつくさん

日のなゝめになりぬれば、家路に歸らんこその、わづらはしく思はるゝを、所ねがほに、心おだしうて

あれば、うらやまし、世にちどりかけと云ふ事のあるは、なにの故ぞ、と思ひしを、打つ波引く浪につれて、歩むさまをもて、よそへしことぞ、と思ひあはせられし。此磯は御殿崎より、見し時だに程ある樣なりしを、をり立ちては、いとはかりなし。家つとに貝ひろふとて、時うつしつ、浦生の濱行く頃は、心あはたゞしくなりぬ。

歸り行く道も忘れて打寄する
まさごにまじる貝ひろひけり

いとあかねども、濱をはなれて、さきに遠く見し、松原を經て、家路へと赴きたり。

二十二、花讃女

女は氏を古川といひ、名を松といふ。横山万奮の妻なり、幼き時より風流の志深く、年十七八に至りては探茶庵万里に隨ひて、專ら俳諧を學べり。

その句集を栽陀綰尼といふ、夫万奮の編する所にして、文政十三年冬の刊行なり。

句集の序に曰く、

箕箒之暇、好作ニ片歌一、裁ニ蜀錦於春花一、磨ニ隨珠於秋月一、天趣高明、鏘然作ニ金玉之聲一、人皆稱レ之美レ之云々、

又曰く

父母の許してより、万蘭の家に嫁ぎ、これが家ざまを治めて、きり〲すつゞれさす夕までに、夜寒のともし火に向ひ、窓の竹のおきふしにつけ、庭の小栽の立居によせても、したかふの道もはらに、河柳のいともしつやかにそひなして、既になでしこのみもとまて生ひ出でぬる、其茂りさかゆくさき〲をさへわきて露も暇なきわざなりながら、なさけを花鳥にかよはし、心を草葉に砕きて、作り出せるは、二巻三巻になむ餘れりと云ふ云々。

右によりて、其の性質を知るべきなり。文政十三年七月二十四日、年僅に二十二にして身まかりぬ。

○俳句。

○春の部

○

萬歳の歯固めに夜は明けにけり

○

元日やゆづらぬものは年ばかり

○

聞ものは皆うぶ聲ぞ明けの春

○

鶯や法事すぎなる寺のには

○

山寺の馳走ぶりなる木の芽かな

○

早蕨の招き出したる原の富士

○

手折たる草にも蝶のたはれけり

○

叱られた昔なつかし雛の鼻

○

振袖の腰を見てやる汐干かな

○

とび〳〵にすみれ咲けりつゝ井筒

○夏の部

○
月の夜をこつろり散るや花卯木
○
さん橋はぬれて歸るぞほとゝぎす
○
山寺の僧みゝうとしほとゝぎす
○
片足は駕籠できゝけりほとゝぎす
○
麥秋や櫛さへもたぬ一在所
○
念佛の後に沸かす新茶かな
○
早乙女のにくげは見ぬ薦田かな

○
群れよ螢物云ふ顔の見ゆるまで
○
髪剃てみても浮世はあつき哉
○
子は寝ても手は休まらぬ扇哉
○
涼風も立つや御祓の禰宜が袖

○秋の部

○
野に露も置きそふる夜か星祭
○
負相撲ことに目立つや橋の上
○
蟬丸が菴や膝にも露のれく

○
稻妻に又見かへるや子の寢顏
○
名月や鯛も鰹もなまくさし
○
武藏野は空につかゆる薄哉
○
鴫立つや笠きて出たる夕月夜
○
掠鳥や夜も白河の關のうへ
○
笠とれば坊主頭のかゝし哉
○
ゆら／＼と夕日もて行く紅葉哉

○冬の部

○寒菊や障子こしなる釜のにゐ

○置霜や戀せし鹿のいかに寢る

○納豆賣の聲も寢耳や雪の朝

○雪うれし君の御目醒うるはしき

○酒のめと我を叱るか河豚の顏

○寒き夜や行燈にさす針の音

○鳴千鳥寢た子にかける夜着重し

夫婦別ありて炬燵のはしら哉

○

紙子着た人もうき世の大晦日

廿三　土屋茅淵女

茅淵女は、土屋紀伊守の妻なり、清少納言の文を好みて、常に之を讀むのみならず、又文章を作ることを好めり、文化四年の春の頃とかや、夫紀伊守の堺奉行に任ぜらるゝに及び、從ひ往て泉州堺に住せり。この時道すがら、憂き旅の慰みにとて、筆のすさびに書き綴りたるものありしが、やがて一冊子として世に出されぬ。旅の命毛といふ是なり。また堺に居住せる二年間の日記あり、和泉日記といふ。

○近江八景（旅の命毛）

まだ夜あけぬ程に、松火ともして出る。道遠からねど、大津にとく行て、物したゝめばやの心がまへ、泉岈にて夜明けはなれて、日さしいづ、まだしのゝめに横田川を渡る。先づ三上山遠く見ゆるうれしうなりぬ。これが左に打ちつゞきたる山々いと多かり、そが中に少し白き處あるを、何心もなくて行

くを、物になふ男の心有が、あれ御覽ぜよ、あの少し白き山こそ比良の峯なれと敎ふるに、心付て見るに、まだ消えやらぬ殘の雪、白布を二節三節引き上げたらん樣に見ゆが、かへりて白妙なるなり。見所多くなつかしき氣添ひて目かれせず。花は盛り月はくまなきを見るものかは、と云ひしも思ひやる、とばかりに景色うつりて、山もかくれぬ。あかぬ心地にかへり見がちなり。夏見と云ふ處に休む。こゝは、トコロテンと云ふ物をひさぐ

　けふはさてところ天氣もあつければ
　　夏見すゞしき人かこのかげ

照りまされば、暑さことにつよくて、とく湖見んと思へば、梅が木の賣藥家、姥が餅みも目つけず。矢倉と云ふ處より遙に湖は見ゆる嬉しさたぐひなし。

まことに、八つの眺めは一所ならねど、世に似たるものなくぞ見ゆる。これも琵琶の湖と名くるは、古きよりの名にあらず、好事の人の後々云ひそめしなるべし。附會の説とこそ思へ、先づ瀨田より貝津のあはひ二十里、堅田より北へ十七里とかや、これを琵琶の腹にたとへ、堅田より瀨田の間ことに狹くて一里に足らざる、これを鹿頭になづらふ、宇治に入らんとするに、いよ／＼細ければ、海老尾にたとふるを、竹生島は覆手にやあらん、

そは敦賀にとなり、更に賤ケ岳、比良の高根の殘雪、こゝより名殘なく見ゆる。鏡山ことにさし出で

たれど、知らぬ媼になりぬれば、立寄り見んもいと耻かしう。湖には小舟數多こぎ渡るは、釣するなめりとぞ見やらるゝ。所々竹にやあらんすを長く編て、水にひたし、そがなかに、又横さまに木竹をあまた渡せる見ゆるは、網代と云ふものにや。網代の氷魚とる業は歌にぞ聞及びたれ、見るは始にぞ。三上の山はさし向ひつゝ我につれて歩み行く。げに鹽尾とか云ひ習しけん形こそおかしけれ、石山は小暗くして見にやらず、唐崎の社はおぼろにて、万代のすがたいと目出たし。矢走は船あまたよせて、歸帆の趣なづかしからぬにはあらねど、人氣多きに却りて、愛なき心地せられて、今少しふりたる景色、沿ひたらんは故あらましとぞ思ふ、

山冷有二微雪一　波平來レ生レ濤　水心清如レ鏡　千里無二纖毛一

瀨田の長橋打ち渡る頃、夕日輝きて、湖上に照そふ景色、三千世界眼前に盡ぬべし、橋もとゝろに人多きを右にながめて、長閑なる流れに筏さし下すは、宇治に通ふかたと見ゆれば、人多きよりもゆかしうて諸共に行かましき心地ぞする。

浮きて世をわたるはおなじ水なれ棹
さしてともなへ宇治の川をさ

粟津の原いと長けれど、松の木の間より膳所の城、ほの〴〵と見にて、打出の濱いづこならんとおかし。兼平の塚も左にあり。げに睦月二十日あまりなりけりと、思ひいでゝ、心ばかり佛の御名をば唱

ふる。義仲寺などゆかしけれど、例の立よらず。此程目なれぬ手弱女どもも引つどひ、笠きつれて歩み來る姿、都人とはしるく、艶なるものから、何の故ありてかうは集ひ來るやと、あやしきを、宿に來て後ぞ三井寺に、御帳開きて拜まれます佛に、女人結緣の爲とて、參り集ふとぞきゝし、我も女なるを近きに參れど、佛の御影拜み奉らず、よそに過ぎまゐらするぞ、罪ふかういとかなしき、玉川の古き跡とて、濁り江かたばかり、いと白き木にあやしう書付たる、昔の人戀しけれど、餘り新にほりて、草一つだになきものから、興なきにや、過行く人見返りもせず。何にもかうあいなくなりくだりたるぞ口惜しき。急ぎいでたるしるしありて、未の時刻に大津に着きぬ。

廿四、多代女

多代女は市原氏、奥州岩瀬郡須賀川の人なり、三十一歳にして夫を失ふ、多代女悲みに堪へず日を暮しけるが、舍兄鼕巒亭主人其心やりに俳諧を進む、乃ち雨考と云ふものを介して、金令舍道彥に隨ひ、淺香市集を編す。

後松窗乙二の門に入り、熱心に俳諧を學ぶ、晴霞庵は其別號なり。文政六年江戶に出で、諸風子と交を結び、俳名愈世に知らるゝに至れり。三子ありて長女は他に嫁し、後歸りて家に沒す、二男總司家を繼ぎ、阿部侯に仕へて用人の席に列なり、三百石を賜はる。三男は名を元介をいひ、邑長撿斷たり

き。

多代女、慶應元年八月二十日、九十歳にして沒す。晩年に自ら句を集めて晴霞句集といふ、嘉永六年の刊行なり。

句集の序に、

我晴霞女史之於二俳諧一乎、天資也、以二風月一爲レ師、以二花鳥一爲レ友、遂窮二蕉翁之奥旨一、成二名家一、宜哉名馳二于海内一、人欣慕艶稱、因四方欵内者多矣、女史自以爲レ倘未レ足焉、老而益勤之、今茲年七十八矣、自知人之有限而吟詠之無限、乃著二一冊一、名曰二晴霞句集一云々。

○俳。句。

○春の部

○

花やかに年は寄りたしかざり蝦

○

折々は乳母もあしらふ手まり哉

○

遣羽子に憎き男の手だしかな

○

色に香に名も似合しや福壽草

○

七草や數を合せに隣から

○

雪とけや蝶も來さうな障子かげ

○

鶯の氣にも入たかつがね柴

○

惡くらしうなりけり猫の戀しりて

○

月に花どこからもれて膝の上

○夏の部

○
一つもうぬぎしか今日は更衣
○
御佛に風も引かさぬ産湯哉
○
一人居て證據なき夜ぞほとゝぎす
○
花は目に殘りて耳にほとゝぎす
○
枝ならす風ふみしめて雨がへる
○
油斷して裾ぬはるゝなはな茨
○
傘をしてよける道なし苗運び
○

追かけて開いてわたす日傘かな

○

夕立や海人はのかれに叉くゝる

○

涼風やしばしと枕引きよせて

○秋の部

○

秋立や親にまさりしことし竹

○

七夕の夜も一人なり別座敷

○

棚經や供にも別に一ひねり

○

霧ふかし今出る船の聲ばかり

○

見えはせで聲の行末や秋の雁

○

雲行に月いそがしき野分かな

○

花ほどは人を醉はさぬ紅葉哉

○

明日からは名のつく雨や秋の暮

○冬の部

○

よその犬までが寐に來る落葉哉

○

居た鴨は見えねど深き水輪かな

○

我わとを降り消せ雪の片折戸

○

起てまづ雪にしばしや物忘れ

○

寒菊やいつも主人とさしむかひ

○

炭ついで暫し手を組む一人かな

○

煤掃や雪の降りこむ油皿

○

いつはりのない鐘きくや大晦日

廿五、蓮月尼

蓮月を名に負ひて、容姿高潔なる烈女、京都東山のほとりに住ひ、氣節いと高く、まだ幼少の時より、いたく敷島の道に長ぜり。父を太田垣傳右衛門光古といふ。京師智恩院の廣間な侍り、その家もと山

名氏の家臣にして、世々因幡の國、鳥取に住みたりしが、如何なる故ありてか、父光古の代に至り、故郷をはなれて京都に出て、東山のあたりに日を暮しきとぞ。

蓮月、はじめの名は、誠子といひて、誠に若草の芽ざし床しく、緑濃き柳の眉すぐれ、花の面影つやゝかに、才藻ありて、水莖の跡美はしく、和歌をもよくしければ、東山の花よりも、誠子が色香を慕ひくるものいと多かりけれど、誠子は、絶えて萍の浮きたる心はなかりけり。

さる程に、母は誠子が生先きも見ず、はかなくも無常の風に誘はれて、一人旅立つ黄泉の路、有生有死は、浮世の習ひといひながら、誠子の悲みや、またいかなりけむ。之れより後は、父と二人にて、心細くも暮しけるが、年頃にもなれば、媒する人ありて、近江國彦根の人、近藤某といふを迎へて夫となし、やがて四人の子を設けしかども、悲しきや、その子は四人共に早世し、はては夫さへなき人の數にいりぬ。

かゝれば、誠子はいとゞ無常の嵐身にしみて、遂に緑の髮をたち、尼となりて名を蓮月と呼べり、時に年三十三歲。

林長孺が蓮月の事を記せし文に、

烈婦蓮月、未ㇾ詳二其姓氏一、京師賈人某妻也、美二姿儀一、性聰慧、習二文墨一、能二和歌一、又善ㇾ陶、家貧、夫病不ㇾ能二自給一、烈婦別開二小店一、煮ㇾ茶供ㇾ客、以養ㇾ夫、無ㇾ幾夫死、寡居自守云々、

といへるはその傳說少しく異なり。
かく母に去られ、子にさられ、はた夫に去られ、今はたゞ父のみを頼みに頼みて暮しけるが、蓮月四十歳ばかりの折、遂にこの父をも失ひぬれば、蓮月の悲みいはん方なく、その心細さたとへんものなし。

蓮月父を失ひし後は、手づから陶器を製して、これに自詠の歌をかき、市里に鬻ぎてもて、朝夕の煙をたてたり。そのものいたく世にもてはやされ、都邊の陶工之を摸造して、利を得るもの少なからざりき。さて陶器は摸造し得べけれども、筆跡はまねぶこと能はず、人々來り尼に謁して、その如何せば可ならんかを問ふ、尼は乃ち陶器を造らしめ、自らそれに歌を書きて與ふ。かくて蓮月の名、世に隱れなくなりけるまゝに、世を捨てんと思ふ身ながら、國々より上京する者、尼に詠歌を乞ふこと繁きを厭ひて、家居を定めず、遂に北山の奧、西加茂なる神光院の茶所に住へり。故に都人呼で、屋越の蓮月といひしとぞ。

宿かさぬ人の心を情にて
　　おぼろ月夜の花の下臥

この歌は、よく人口に膾炙せり。

明治十八年十二月十日といふに、八十五歳を以て、西加茂に身まかりぬ。(名人忌辰錄に明治八年二月

八十三にして歿すとあり)。いまだ世にある中に、詠みける和歌すくなからず、後の人、其詠歌をあつめて世に出せり、これを海人苅藻といふ。

○大佛のほとりに夏をむすびける折

嘉永四のとし卯月ばかり、夏を結ぶとか云ひて、世の尼たちのとりわきて行ひ給ふを、例の人まねせむとて、いと假初に思ひ立て、ねむずの具のみ、袋やうの物にとり入て、手づから負ひもて、東山なる律師の住み給ふ御寺のかたはらに物しぬ。こは阿彌陀が峯の麓にて、五十ぢあまり昔、かぐつちの神の荒びに、いみじかりし佛は燒け給ひぬれど、尙蓮華王院のみぞ殘れりける。其かたへに大きやかなる鐘などありて、今はいとふりぬるまゝに、いとゞ由ありげに見ゆ。後の白河の院の御墓も、此上にたはしまして、世に御影堂とぞ云ふめる、何となく廣々として、春秋の木だち草花など、れのがじゝ心たかで咲き亂れたる景色、いみじう哀れに見捨てがたき所のさまなりけり。明くれ佛の御前に念佛しなどして、いと靜かにうれしければ

此頃を訪ふ人あらば山寺に

うしろ安くて在と云はまし

若葉さしそふ夏山の景色いと涼しく、時鳥も暫々鳴ければ、

後の世をかけよ〳〵と聞ゆなり
阿彌陀が峯に鳴く郭公

○和　歌（海人の苅藻）

○春　の　部

○初春

万代の春の初とうたふなりこは敷島のやまと人かも

○早春

流れ來る氷にそひて鶯の聲もながるゝ谷のした水

○早春の月

川ろひの柳の糸にかゝりけり殘る氷の片われの月

○子日

松引きて今日は遊はむ人なみに千代を數ふる身にしあらねど

○若菜

こと足らぬ住家ながらも七草のかずはあまれる春の色哉

○若草

いつの間に若葉さすまでなりにけむ昨日の野邊の雪の下草

○水邊鶯

おり立て朝菜洗へば加茂川の岸の柳にうぐひすのなく

○南北梅

いり方の右り左にかをるなり梅やなごりの在明けの月

○春月

木のもとの花のみ雪を枕にて春の夜寒き月を見るかな

○暮春里

奥山の花の白雪流れ來て春のすゑくむ川づらの里

○夏の部

○首夏水

散る花にかけし心のしがらみも夏になるせの音の涼しさ

○新樹露

日をさへし葉がくれ庵のうれしきは少しもり來る夕月の影

○垣卯花

世のうさを隔つる垣の卯の花は嬉しき方のうの字ならまし

○山時鳥

日は暮ぬ宿かせ山の郭公明日は都へつれていでまし

○杜鵑數聲

待わびし恨も今日はなつ木立しげくも名乘る山郭公

○五月祝

菖蒲ふく五月の玉のをのこ子や長き根ざしの始ならまし

○野外螢

草の名の思ひはてゝは朽てだに野邊の螢ともえわたるらむ

○月前水鷄

夕月夜ほのかに見ゆる小板橋下ゆく水に水鷄なくなり

○湖邊納涼

涼み舟よする堅田の浦風に月もゆらるゝ波の上かな

○夏旅

里の子が機おる音もとだにして晝寐の比の暑き旅かな

○秋の部

○初秋

朝風に川そひ柳散りそめて水のしらべぞ秋になりゆく

○古郷薄

古の秋にかへれと招くらむ荒たる宿のしのゝ小薄

○川霧

さし昇る朝日の山も麓にはなほ夜をのこす宇治の川霧

○鈴虫

身をよする尾花が末の秋風にゆられて鳴くか鈴虫のこゑ

○海邊月

言の葉の玉ひろはゞや秋の夜の月に明石の浦づたひして

○月前虫

山里の壁の破間のきり〳〵す月もこゝよりさせよとぞ鳴く

○秋山里

軒近き萩が花妻したひ來て男鹿なくなり秋の山里

○故鄉秋風

つら杖をつく〳〵ひとり故鄉のよもぎが末になるゝ秋風

○秋涙

空は厂草には虫のなく聲に涙の露のむすぼゝれつゝ

○暮秋

身にしみて秋の別を小塩山紅葉かつ散る木枯しの風

○冬の部

○初冬

山里のかけひの水に流れ來てきのふの秋を見するもみぢ葉

○初冬霜

置ていにし秋の形見の露もけさ霜になり行く淺茅生の宿

○初時雨
染あへぬ紅葉のかげにまちつけて今日は嬉しき初時雨哉
○湖氷
函根山あけなば富士のかげ見んと思ひしうみは氷らゐにけり
○水上霰
舟端に風の礫とうちつけて水には輕き玉あられかな
○海邊雪
たちかへり難波菅笠きても見ん雪面白き淡路しまやま
○冬夢
埋火に寒さ忘れて寐たる夜は菫つむ野ぞ夢に見えける
○里神樂
鈴の音の身にしみ渡るさと神樂衛士のすさびぞ羨まれける
○煤拂
うつばりの煤も心のちりひぢも拂ひて清き年の暮かな
○歳暮雪

めせ〳〵と炭賣る翁聲かれて袖に雪散る年の暮方

○雜の部

○山

いちじるき神のみいつの雄德山しらべも高き峯の松風

○川

世の中の塵も濁も流れては淸きにかへる加茂の川浪

○心

うつり行く初もはてもしら雪の怪しきものは心なりけり

○市

しかま人おのが手染をおながちに聲ふり立てゝ賣らんとすらん

○酒

味酒のみわのすぎずはこれぞこの老す死なずの藥ならまし

○古戰場

戰の昔の場に緖をしめてかぶとは草の名に殘りけり

○幽靈

おき暗き浮世の外が濱風にきえぬ鬼火や夜たゝもゆらん

○長歌十三首

○春の歌（近葉菅根集）

清瀬子

春すぎて
卯の花垣の　夕月夜
やゝ待たれつゝ　ほとゝぎす
訪つれわたる　立花の
香をなつかしみ　みじか夜の
ほとなく過ぎて　天の川
たなはたつめは　神代より
かはらぬ逢瀬　有と云へど
世はふゆかぬ　なげきして
時雨もよほす　閨の中
つれ〳〵すぐす　埋火に
睦まじどちの　語らひて
明け行く朝の　雪の中に
梅の初花　かをり初め
年ぞくれぬる　折々の
哀はあれど　ほの〳〵と
にほひて明る　朝日かげ
いたふ至らぬ　里もなく
青み渡れる　わかくさを

野にみちふみ　花ぐはし　櫻の花の　咲きをゝる
山分けくらし　岩根には　つゝじのこぞめ　山邊には
柳のみどり　山吹や　松の藤波　いろ〳〵を
つくして匂ふ　長き春月

反歌

うら〳〵と霞みそめたる朝より
　春に心のたなびかれける

○六月ばかり縣居大人の高殿に上りて　同　女

をちこちの
青葉が上に　めもあやに　みどりの深き　小夜衣の
を筑波山の　山のべに　行きかふ雲の　いと早も
このもかのもに　風立て　雨のすぐれば　夕日かげ
かげろひわたる　葛飾や　まゝの浦回の　蜑小舟
おのがさま〳〵　漕ぎ渡る　袖さへ見えて　さやかにも

涼き折に　たづさひて　此の高きやに　登りけるかも

反　歌

筑波ねの峰より落つる夕風に
　まかせてかへるまゝの浦ふね

○同じ折に　　葛子

あはれ〳〵
物思はしき　時にしも　あらぬものから　水無月の
てる日になれば　あきつ羽の　袖さへ重み　かはほりの
扇も絶えす　ならせども　かひしなければ　橋立の
さかしきながら　高き屋に　たづさひ登り　小簾も皆
巻きて向へば　あらはなる　心地はすれど　何がしの
海山見つゝ　思ふどち　問み語りみ　長き日を
あかず過して　かげろふの　夕になれば　思ほえず
初秋風の　通ふとし　袂にしれば　とぶほたる

雲の上まで　知れつゝ　涼しき事を　誰につぐらん

反　歌

かくばかり涼しき風のあかねばや
　ほたるは雲の上もとふらん

○同じ折に　　　路子

足引の
山ならねども　のぼり立ち　四方をし見つゝ　御空吹く
風をもいれて　日ぐらしに　思ふことなく　思ふどち
物の音あそび、おばしまに　より居て謡ふ　こゑ〳〵も
空にぞ通ふ　空とほき　富士の高嶺の　しら雪を
さやかに見れば　さながらに　我さへ夏の　時もしられず

反　歌

忘れては夏てふことをなか〳〵に
　覺束なくもおもほゆるかな

○同じ折に

薫梅子

都大路を　見わたせば
限りも知らす　をちこちの
賑ひたちて　たちつゞく
風のまに〳〵　行きかふも
向ひしをれば　いつしかに
袂涼しく　吹く風に
あかてよるなる　おばしまの
このもかのもゝ　あらはれて
夏山の
くまだにもなき　武藏野の
いく千萬の　との家の
けぢめもわかず　夕煙に
入江の波の　千々のふね
只こゝもとの　臺より
秋や立ぬと　なつごろも
螢亂れて　夕やみに
しばしばかりを　筑波山
有明の月の　いでにけるかも

反歌

夕涼のすゞしき風にきこゆなり
網引するなる海人のよび聲

○同じ折に　　　　茂子

草の葉に
露もかはきて　木のもとの
小簾をも捲きて　そばりをも
事も覺えず　あつさには
心地はすれど　思ふどち
はしなきわざを　橋立の
うたげもすれば　富士の嶺の
波やかくらん　しらたへの
うすき覺にて　かぎろひの
月の霜おき　秋ならぬ
このまじとする　折よりも
かげ面白きものにしありける

風も吹かねば　殘りなく
かゝげて居れば　つゝましき
亂れてゐるを　はしたなき
いさなふまゝに　手弱女の
高きにのぼり　語らひも
雪の夜すがら　安房の海の
衣の袂　あきつ羽の
夕さり來れば　夏しらぬ
颪も音して　春秋の
はかなくふくる　夏の夜ぞ

反　歌

世の中のなにはの事の思をも
　すゞしき風やさそひ行くらむ

○同じ折に　　紅子

いそのかみ
ふるき古の　ことの葉は
多くもつまで　花がたみ
めならぶ人に　立まじり
面なきものゝ　うれしくも
數まへられて　とことはに
仰ぐも久し　久かたの
くもりなき日の　あつけさに
凉みとりける　出居には
いたり深くて　住む人の
家の風こそ　こよなけれ
いでや心を　やり水の
流をくめる　友どちと
かゝる圓居の　あかなくに
うひ琴さへも　かきならし
しらべ合する　糸竹に
秋は通へど　夏の日の
長くや今日を　かけて忍ばん

反歌

夏衣かゝる夕もあるものを
ひとへに誰かいとふなるらん

○同じ折に　　　　造酒女

ひぐらしの
はなやかになく　夕されば　風も涼しき　高きやに
たづさひのぼり　見渡せば　雲もはれつゝ　不士のねの
夏をもしらぬ　白雪の　知らぬ山をも　浦回をも
とひみ語りみ　心ゆく　限りなりけり　蜑小舟
こぎかくれ行く　夕波に　ほの〴〵見にて　月かげの
さし出る磯の　そなれつゝ　むら〳〵立て　松か枝も
只こゝもとの　庭の面に　うつし植ゑたる　心地こそすれ

反歌

夏しらぬ高嶺の雪を白妙の
そでにうつして今日もくらしつ

○同じ折に　　佐衣女

ひさ方の
空にあやしき　雲たちて　照る日のあつく　成行けば
手もたゆきまで　かはほりの　扇は常に　ならせども
かひしなければ　松かげの　岩間の清水　袖ひぢて
結ぶもすゞし　川舟の　小棹さしつゝ　吹く風を
とめこそわたれ　此宿の　高き臺に　手弱女の
たづさひのぼり　見渡せば　夏かげ深き　遠山の
まゆもほのかに　匂ひたち　下に流るゝ　大川の
川の上つ瀬　下つ瀬に　綱ひきわたり　くれゆけば
星よりげなる　かゞり火の　影をならぶる　遠近の
千舟もゝ舟　ゆきかふを　たゞこゝもとに　見るぞ樂しき

反歌

思ふどち明日もさねこむ此宿の
すゞしをあかぬ今日のなごりに

○同じ折に　　百合子

風吹けば
小波よする　にはの面の　池の心は　いつはあれど
夏によりつゝ　繁りあふ　梢よしある　ま近かさは
更にも云はず　海山を　はるかに見なす　ればしまに
思ふ友達　たづさはり　よりゐる時は　水無月の
照日忘れて　すゞしきに　世にも心の　行くものを
春と秋とを　己がしゝ　爭ふ人に　告てしもがな

反　歌
浦波をはるかに見れば衣手に
かゝるばかりも涼しかりけり

○倭文子をかなしむ歌　　路子

この秋や
いかなる秋ぞ　吹く風の　何ぞのつての　おとづれか
音なふならん　人の家に　おほしたてつゝ　まだきより

匂ひし小萩　うつくしと
うら若かれど　床夏の
いはひにけらし　賴めつゝ
榮ゆる色の　移ろふも
悲しかりける　花も實も
うたてある世や　あたらしの世や

きゝし床夏　萩が花
とこしへにもと　父母は
すぎけん物を　いとまだき
早きならひの　うつしみぞ
ありけん人の　中々に

反歌

ふきまよふ野風をいたみちる萩に
　人をよそふる秋ぞかなしき

○同じく　繁子

遠方の
野邊の草木の　言をだに
親しき友に　しかりとも
いづちいにけん　を絶せし
ことぞともなき　大空を

とはすなりにし　うつしみの
告もあへずや　ひとりのみ
玉の行末と　きくからに
ながめてふれば　雲まよひ

落ち來る風の　打そよぎ　うたて萩の葉　みだれつゝ
露のくだくる　庭の面に　誰をまつ虫　かひなしと
思ふものから　なにしかも　我もきほひて　なかるらん
花の朝も　月の夜も　嬉しき折も　うき時も
ことにつけつゝ　打そはし　女の友の　うらもなく
語らひかはし　事もなく　見にし手ぶりも　玉かつら
面かげにのみ　朝夕に　見てや忍ばん　今よりの
我世に見なん　月花も　いかにさびしき　思ひしてまし

反歌

ある世にもありのすさびはおもほえぬ
人に別れん物とやは見し

○同じく　紅子

思へども
なほも悲しき　秋の來て　草葉にかゝる　露の身は

誰み頼まぬ　ものながら　わきてはかなく　彼の岸に
よせてかへらぬ　白波の　音にきゝつゝ　うしろ手も
まだしらねども　うつくしみ　通へる文を　よすがにて
大方ならぬ　戀しさも　今はあとなき　雲路をや
天かけりつゝ　其魂の　見るらんものと　ふりさけて
空を仰げば　厂金も　なきこそ渡れ　かくしもや
思ほす友の　行きまとひ　數足らすとか　呼び渡るらし

反歌

見ぬ人のいやはかなゝる世をきけば
　ねられぬものゝ夢心地する

女流文學史下卷終

明治三十四年九月十一日印刷
明治三十四年九月廿三日發行

女流文學史與附
定價 金七拾錢

不許複製

編纂者 小森甚作
編纂者 上地信成
發行者 石川正作
東京市神田區鎌倉町三番地
印刷者 白土幸力
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所 三光堂
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所 東洋社
東京市神田區鎌倉町三番地

代金七十錢

東洋社發行圖書標本大賣捌所

東京日本橋區 水野慶次郎
同 林平次郎
同 杉本七百丸
同 丸善書店
同 小林喜右衛門
同 小林新兵衛
同 青野友三郎
同 大草大章
同 榊原友吉
同 長島恭三郎
同 東京機械製造會社
京橋區 目黒勘七
同 東海合資會社
同 信文館
同 北隆館
同 吉川半七
同 松村三松堂
同 田沼支店
同 貝明堂
同 服部國太郎
神田區 東京堂
同 勢陽堂
同 上田屋支店
同 有斐閣
同 岡崎屋
同 中西屋
同 教育品用達會社
本郷區 上原書店
同 田中屋
同 盛春堂
同 美満津商店
麻布區 旭堂
淺草區 教育品製造會社
大阪市 吉岡平助
同 尚文館
同 盛文館
同 松村九兵衛
京都市 村上勘兵衛
同 松田庄助
尾張國名古屋 川瀬代助
同 片野東四郎

肥後國熊本 長崎次郎
薩摩國鹿兒島 吉田幸兵衞
肥前國長崎 安中半三郎
同佐賀 河内壯事
豐後國大分 甲斐治平
筑前國福岡 積善館支店
同同 博文社
筑後國久留米 菊竹儀平
同同 田中幸次郎
日向國宮崎 津野融貫堂
土佐國高知 澤本駒吉
阿波國德島 黑崎情二
伊豫國松山 土肥與平
讃岐國高松 宮勝仲久郎
安藝國廣島 積善[illegible]支店
美作國津山 武内彌三郎
周防國山口 仁科照文堂
出雲國松江 桂梅吉
因幡國鳥取 園山文會堂
紀伊國和歌山 藤谷旭日堂
攝津國神戸 三宅小次郎
同同 熊谷幸助
丹波國柏原 吉岡支店
近江國大津 中井正吉
同彦根 古川伊助
美濃國岐阜 廣田七次郎
伊勢國津 都文堂
同同 翠西圖書會社
駿河國靜岡 豐住謹次郎
遠江國濱松 吉見義次
三河國豐橋 谷島屋源之助
同岡崎 豐川堂
甲斐國甲府 伊藤小文司
同同 大塚源太郎
武藏國横濱 徽古堂
下總國千葉 田沼書店
同八日市場 多田屋支店
常陸國水戸 多田屋支店
武藏國浦和 川又銀造
信濃國長野 高野幸吉
同 西澤喜太郎

同松本 松田松風堂
同同 櫻井書店
同上田 高橋書店
同上諏訪 漸進堂
同飯山 清水屋
同[illegible] 五十嵐太右衛門
同稻荷山 盛文堂
上野國前橋 白崎善號
下野國宇都宮 鈴木高店
越後國長岡 日向源吉
陸前國仙臺 成見清兵衛
同同 東海林書店
陸中國盛岡 大澤鮮進堂
加賀國金澤 東海林支店
越前國福井 今泉道次郎
越中國富山 [illegible]文舍
同高岡 萱間左右太
越後國長岡 [illegible]書院
同新潟 學海堂
同高田 中田書店
岩代國福島 品川太右衛門
磐城國平町 宇都宮平
羽前國山形 佐藤庄兵衛
同米澤 藤崎結之助
同酒田 高嶋書店
同同 目黑十郎
同鶴岡 内田濱吉
羽後國秋田 横平堂
同増田 小出善作
同横手 高見澤和市
同同 今村竹青
陸奥國弘前 宮片日吉堂
渡島國函館 [illegible]
石狩國札幌 [illegible]
同旭川 [illegible]

十

東洋社雜誌圖書目錄

（郵券代用は壹割增◉詳細目錄御望の方は郵券貳錢封入御照會を乞ふ）

女子のとも 毎月二回發刊
定價 一册十錢◉前金六册五十七錢（臨時發刊共）六十七錢◉十二册（臨時發刊共）一圓廿錢◉二十四册（臨時發刊共）二圓三十錢◉無遞送料

女子之友臨時發刊
玉くしげ 六版 定價金貳拾錢 無遞送料
才媛詞藻 三版 定價金貳拾錢 無遞送料
第二**才媛詞藻** 再版 定價金貳拾錢 無遞送料
第三**才媛詞藻** 再版 定價金貳拾錢 無遞送料
第四**才媛詞藻** 再版 定價金貳拾錢 無遞送料

女子之友主筆石川正作著
歷史兒談 各編 定價金八錢 郵税一册金二錢
第一編 大久保彥左衞門四版 第二編 塚原卜傳三版
第三編 曾呂利新左衞門三版 第四編 大岡越前守二版
第五編 加藤淸正近刊 第六編 山田長政近刊

高等小學 **作文教科書** 第四版 全四册
定價 卷一金十四錢 卷二金十五錢 卷三金十六錢 卷四金十七錢（郵税一册金二錢）

高等小學 **書簡文** 第三版 定價金二十錢 郵税金四錢
高等小學 **女子書簡文** 第五版 定價金二十錢 郵税金四錢

女子之友記者勁林園主人著
西洋傑婦傳第一編 **ジャンヌ、ダーク** 再版 定價金二十錢 郵税金四錢
西洋傑婦傳第二編 **ナイチンゲール** 再版 定價金二十錢 郵税金四錢

女子之友記者編纂
東洋女訓叢書 全十册（第四編既刊 以下近刊）
◉第一編本朝女鑑其他◉第二編假名列女傳其他◉第三編女四書其他◉第四編つぼのいしぶみ十三卷
定價各編共金四十五錢◉郵税各編共金六錢宛

はなかたみ 第二版 定價金三十五錢 郵税金四錢
明治才媛文集 第三版 定價金二十五錢 郵税金四錢
明治才媛歌集 第二版 定價金二十五錢 郵税金四錢
小兒の行爲 第二版 定價金二十五錢 郵税金四錢
家庭の小說 第二版 定價金二十錢 郵税金四錢
家庭の樂 近刊

速水不染君編
閨秀畫家經歷談 全一册 定價金二十五錢 郵税金四錢

東京府第一高等女學校教諭濵口鹿二郎先生編纂
女學校用 **算術教科書** 第五版 上卷金五十五錢 下卷金五十錢

文學士芳賀矢一先生校閲山根勇藏先生著
女子普通文典 全一册 定價金五十五錢 郵税金六錢

黑川本居木村井上小杉五大人顧問
古事類苑編修廣池山本和田村尾四先生校訂標註
女流文學叢書 韻文ノ部第一編 定價金八十五錢 郵税金十錢

本居豐穎先生序
井上頼國先生校閲
小森甚作先生 上地信成先生 合著
女流文學史 定價金七十錢 郵税金十錢

東洋社標本器械目錄（郵券代用は壹割增●詳細目錄御望の方は郵券貳錢封入御照會を乞ふ）

● 地理教授用標本　各部說明書附

● 女子高等師範學校教授野口保與先生撰集

工藝品第一種 織物之部　骨牌製百種百枚●定價大八圓●中五圓●小三圓半

工藝品第二種 陶器之部　定價甲三十五種八圓●乙三十種六圓●丙廿五種四圓

工藝品第三種 漆器之部　定價甲二十種八圓●乙十七種六圓●丙十五種四圓

外國產食品之部　定價甲三十五種八圓●乙三十種六圓●丙廿五種四圓

● 歷史教授用標本

● 理學博士坪井正五郎先生說明

● 考古學會々員野中完一先生說明

● 考古學會々員野中完一先生撰集

一、太古遺物之部　說明書　定價金三十錢

定價甲、廿三種六圓半●乙、十六種五圓●丙十一種三圓半

● 理學博士坪井正五郎先生說明

二、埴輪土偶土馬模型　五個一組　金六圓五十錢
埴輪考　金二十錢

● 塗物製作順序標本

● 高等師範學校助教授手工擔任岡山秀吉先生撰定

第一種 ワニス ペンキ之部　塗板十五枚額裝入外箱附　定價 上製六圓半 並製五圓

第二種 漆器普通塗之部　全上　定價 上製八圓 並製六圓

第三種 漆器蠟色塗之部　全上　定價 上製十圓半 並製七圓半

附屬品　原料各種共十五品壜入第一種一圓七十五錢第二種一圓七十五錢 器具四種一圓七十五錢說明書七十五錢 第三種二圓

● 果菜標本模型　甲六十種上製十一圓並製九圓 乙四十種上製七圓半並製五圓半

● 東洋社標本部撰定

● 蟲類標本模型　一組四十五種　金四圓五十錢

● 獸類標本模型　卅種　大四十二圓五十錢 小十三圓五十錢

● 紙製人體解剖模型

● 人體模型之部（符號解說書附）

●男軀大形（五尺七寸）甲三百圓乙二百五十圓●全中形（四尺五寸）甲二百圓乙百八十圓●全小形（三尺七寸）甲百圓乙八十圓●女軀大形（五尺七寸）二百八十圓●全中形（四尺五寸）二百圓以上總て鑄物臺附

●局部模型之部（符號解說書附）

●眼球大形三十五圓小形二十五圓●心臟大形三十圓小形二十二圓●大腦大形三十五圓小形二十三圓●耳大形三十八圓●喉頭大形四十圓●半截面筋肉四十圓●姙娠子宮發育順序九個一組百圓●骨骼模型之部

●人骨全軀四十圓●產科用骨盤甲十一圓乙十圓●ヘンケー氏婦人骨盤八個一組百圓

● 花實解剖模型（花實の生理を說明するに必要なる標本なり）

ナヅナ花	（臺付）	一個	金五圓六十錢
ナヅナ實	（臺付）	一個	金二圓
エンドウ花	（臺付）	一個	金五圓六十錢
エンドウ實	（臺付）	一個	金四圓
シュンギク花	（臺付）	一個	金六圓
シュンギク實	（臺付）	一個	金二圓五十錢
キンギョサウ花	（臺付）	一個	金六圓
キンギョサウ實	（臺付）	一個	金四圓
キンポウゲ花	（臺付）	一個	金五圓
キンポウゲ實	（臺付）	一個	金二圓五十錢
オランダイチゴ實	（臺付）	一個	金四圓五十錢
インゲンマメ發芽	（臺付）	一個	金二圓五十錢
インゲンマメ稍成長	（臺付）	一個	金二圓五十錢
クハ實	（臺付）	一個	金四圓五十錢
マツ實	（臺付）	一個	金四圓五十錢

● 紙製地形面模型　大形金十五圓　小形金十圓

東洋社標本器械目録

●昆蟲標本 （二百種）拾五圓（百五十種）拾壹圓（百種）六圓半（五十種）四圓

●浮塵子標本 定價 十五種金貳圓 三十種金三圓半

●貝殼標本 桑、茶、櫻、林檎、梅、竹、蜜柑、にんの木（以上八種）一組定價金壹圓

●益蟲標本 硝子蓋附箱入定價（二十五種）金四圓

●害蟲標本 硝子蓋附箱入定價（五十種）金五圓

●昆蟲發生順序標本 硝子蓋附箱入
蛹のつきむし、野蠶、梅の毛蟲、ぶらんこ毛蟲、梅の尺とり、枝尺とり、あげは、黄あげは、茶の葉の蝶、しらが太郎、以上各壹圓宛●蠶壹圓三十錢

●動物標本 甲（百廿種）四十五圓 乙（九十種）三十五圓 丙（七十五種）廿圓 丁（五十五種）二十圓

●鳥類標本 甲（二百種）四十圓 乙（百五十種）三十圓 丙（百種）二十圓

●植物標本 甲（百四十五種）十四圓 乙（百〇八種）九圓半 丙（七十二種）五圓半

●鑛物標本 甲（百廿五種）三十五圓 乙（九十種）十一圓 丙（七十二種）九圓 丁（四十八種）五圓

●岩石標本 甲（七十二種）十圓 乙（六十四種）八圓 丙（四十八種）五圓

●庶物標本 二百四十種 定價金七圓五十錢

●體操器械

●鐵啞鈴 各一對の重量及定價

一磅形（二百四十目）	定價金三拾錢
二磅形（四百八十目）	定價金三拾五錢
三磅形（七百廿目）	定價金四拾錢
四磅形（九百六十目）	定價金五拾錢
五磅形（一貫二百目）	定價金六拾錢
六磅形（一貫四百四十目）	定價金七拾錢
七磅形（一貫六百八十目）	定價金八拾五錢
八磅形（一貫九百廿目）	定價金九拾五錢
九磅形（二貫百六十目）	定價金壹圓五錢
十磅形（二貫四百目）	定價金壹圓拾五錢

以下廿磅形（四貫八百目）迄あり

●棍棒 一斤半形一組定價六拾錢 二斤半形一組定價七拾五錢 三斤半形一組定價九拾五錢 五斤形一組定價壹圓廿五錢
各一對の定價 二斤形一組定價六拾五錢 三斤形一組定價八拾五錢 四斤形一組定價壹圓五錢 六斤形一組定價壹圓廿五錢

●ベースボール用球 各一個定價
一等定價九拾錢 二等定價七十五錢 三等定價五拾錢 四等定價四拾錢 五等定價三十五錢 六等定價三拾錢 七等定價貳拾五錢 八等定價貳十錢 九等定價拾五錢 十等定價拾壹錢

●ベースボール用バット 各一本の定價
一號定價五十錢 二號定價五十錢 三號定價五十錢 四號定價五十錢
但一號ヨリ四號迄四種各輕重二種宛アリ
號外大形定價廿三錢 小形廿二錢
右記載ノ外ベースボール用キャチャーミット、ベースメンスミット、フヒルダースグローブ、ベースボール用面、全網、全ベース、フートボール、ローンテニス用ボール、ラッケット、全壓搾木、全網等
體操用具一式

●幻燈器械

●電光瓦斯幻燈器械第一號（映寫直徑三丈餘）金百二十圓〇第二號（映寫直徑二丈餘）金八拾五圓●寫眞兼用幻燈器械第一號（映寫直徑二丈五尺餘）金六拾圓他にズック製携帶箱金五圓●改良白光幻燈器械第一號（映寫直徑一丈五尺餘）金三十七圓〇第三號（映寫直徑一丈三尺餘）金三十五圓〇第四號（映寫直徑一丈三尺餘）金二十五圓〇第六號（和製箱入映寫直徑七尺餘）金十五圓●輕便幻燈器械第一號（映寫直徑四尺餘）金七圓〇第二號（映寫直徑四尺餘）金六圓〇第三號（映寫直徑四尺）金四圓〇第四號（映寫直徑四尺）金二圓五十錢●其他

●幻燈映畫

●天文十六枚●物理十二枚●動物、植物、人身解剖、幼學綱要、各廿枚●赤穗義士傳十二枚●神代歷史廿枚●福島中佐遠征談十六枚●郡司大尉短艇談七枚●磐梯山噴火十六枚●三陸大海嘯三十六枚●濃尾震災卅五枚●修身談、教育大家史傳各十二枚●元寇の役廿八枚●教育勅語廿二枚●通俗衞生廿五枚●胎內教育十枚●蠶桑一斑廿八枚●女子教育十五枚●農業之教育十枚●農作物害蟲五十枚●征清談補々（修身談以下說明書附）●此外數十種あり